

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(83)

— 農業開発総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ —

農業開発総合センター遺跡群Ⅰ（第2分冊）

FUKIAGEKONAKABARU

吹上小中原遺跡

UMAMEGURI

馬廻遺跡

SANTANMUTA

三反牟田遺跡

第1分冊

KUBOMINOUE

窪見ノ上遺跡

TATEISIGAHARA

建石ヶ原遺跡

KUSATO

古里遺跡

NISHIHARA

西原遺跡

第3分冊

図版編

2005年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

目 次

第Ⅶ章 吹上小中原遺跡

第1節 調査概要	1
1 遺跡の立地及び調査概要	1
2 遺跡の層序	1
第2節 発掘調査の成果	6
1 旧石器時代の調査	6
(1) 遺構	6
(2) 遺物	6
2 縄文時代草創期の調査	8
3 縄文時代早期の調査	14
4 縄文時代前期の調査	40
5 縄文時代後期の調査	52
6 縄文時代晩期の調査	55
7 弥生時代の調査	77
(1) 遺構	77
(2) 遺物	77
8 古墳時代の調査	82
(1) 遺構	82
(2) 遺物	123
9 古代の調査	138
(1) 遺構	138
(2) 遺物	138
10 中世の調査	139
(1) 遺構	139
第3節 小結	150

第Ⅷ章 馬廻遺跡

第1節 調査概要	152
1 遺跡の立地及び調査概要	152
2 遺構	152
3 遺物	152
4 小結	158

第Ⅸ章 三反牟田遺跡

第1節 調査概要	159
1 遺跡の立地及び調査概要	159
2 遺構	159
3 遺物	159
4 小結	159

挿図目次

吹上小中原遺跡

第1図 吹上小中原遺跡位置図 (1/25000)	1
第2図 周辺地形図及びグリッド図	2
第3図 土層図1	3
第4図 土層図2	4
第5図 土層図3	5
第6図 旧石器実測図	6
第7図 Ⅶ・Ⅷ層遺構配置・遺物出土状況 及び落とし穴1・2	7
第8図 縄文時代草創期検出礫群	8
第9図 縄文時代草創期出土石器1	9
第10図 縄文時代草創期出土石器2	10
第11図 石鏃の分類図	11
第12図 縄文時代草創期出土石器3	13
第13図 縄文時代早期遺物出土状況1	14
第14図 縄文時代早期遺物出土状況2	15
第15図 縄文時代早期検出集石遺構	16
第16図 縄文時代早期検出石槍集積遺構	17
第17図 I類土器出土状況・I類土器1	18
第18図 I類土器2	20
第19図 I類土器3	21
第20図 I類土器4	22
第21図 I類土器5	23
第22図 I類土器6	24
第23図 I類土器7	25
第24図 I類土器8	26
第25図 I類土器9・II類土器	27
第26図 I類土器10	28
第27図 I類土器11	29
第28図 I類土器12	30
第29図 I類土器13	31
第30図 I類土器14	32
第31図 I類土器15	33
第32図 III類土器	34
第33図 IV類土器1	35
第34図 IV類土器2	36
第35図 IV類土器3	37
第36図 IV類土器4	38
第37図 V・VI類土器	39
第38図 Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ類土器	40
第39図 縄文時代早期出土石器1	43
第40図 縄文時代早期出土石器2	44
第41図 縄文時代早期出土石器3	45
第42図 縄文時代早期出土石器4	46
第43図 縄文時代早期出土石器5	47
第44図 縄文時代早期出土石器6	48
第45図 縄文時代早期出土石器7	49
第46図 縄文時代早期出土石器8	50
第47図 縄文時代早期出土石器9	51
第48図 XII類土器	53

第49図	XII・XIII類土器	54
第50図	XIV類土器（深鉢形土器）1	56
第51図	XIV類土器（深鉢形土器）2	57
第52図	XIV類土器（深鉢形土器）3	58
第53図	XIV類土器（深鉢形土器）4	59
第54図	XIV類土器（深鉢形土器）5	60
第55図	XIV類土器（浅鉢形土器）1	61
第56図	XIV類土器（浅鉢形土器）2	62
第57図	縄文時代晩期出土石器1	65
第58図	縄文時代晩期出土石器2	66
第59図	縄文時代晩期出土石器3	67
第60図	縄文時代晩期出土石器4	68
第61図	縄文時代晩期出土石器5	70
第62図	縄文時代晩期出土石器6	71
第63図	縄文時代晩期出土石器7	72
第64図	縄文時代晩期出土石器8	73
第65図	縄文時代晩期出土石器9	74
第66図	縄文時代晩期出土石器10	75
第67図	縄文時代晩期出土石器11	76
第68図	弥生時代出土土器1	79
第69図	弥生時代出土土器2	80
第70図	弥生時代出土土器1	81
第71図	古墳時代遺構配置図	82
第72図	土器溜り	83
第73図	土器溜り出土土器1	85
第74図	土器溜り出土土器2	86
第75図	土器溜り出土土器3	87
第76図	土器溜り出土土器4	88
第77図	土器溜り出土土器5	89
第78図	土器溜り出土土器6	90
第79図	1号住居跡及び1号住居跡出土遺物1	92
第80図	1号住居跡出土遺物2	93
第81図	2号住居跡	94
第82図	2号住居跡出土遺物	95
第83図	3号住居跡遺物出土状況	96
第84図	3号住居跡	97
第85図	3号住居跡出土遺物1	98
第86図	3号住居跡出土遺物2	99
第87図	3号住居跡出土遺物3	100
第88図	3号住居跡出土遺物4	101
第89図	4号住居跡遺物出土状況	102
第90図	4号住居跡	103
第91図	4号住居跡出土遺物1	104
第92図	4号住居跡出土遺物2	105
第93図	4号住居跡出土遺物3	106
第94図	4号住居跡出土遺物4	107
第95図	4号住居跡出土遺物5	108
第96図	4号住居跡出土遺物6	109
第97図	4号住居跡出土遺物7	110
第98図	4号住居跡出土遺物8	111
第99図	5号住居跡	113
第100図	5号住居跡出土遺物	114
第101図	6号住居跡	115

第102図	6号住居跡出土遺物1	116
第103図	6号住居跡出土遺物2	117
第104図	7号住居跡	117
第105図	1～8号・10号土坑	119
第106図	土坑内出土遺物	120
第107図	9号土坑・9号土坑内出土遺物	121
第108図	11号土坑・土坑内出土遺物	122
第109図	古墳時代出土土器1	125
第110図	古墳時代出土土器2	126
第111図	古墳時代出土土器3	127
第112図	古墳時代出土土器4	128
第113図	古墳時代出土土器5	129
第114図	古墳時代出土土器6	130
第115図	古墳時代出土土器7	131
第116図	古墳時代出土土器8	132
第117図	古墳時代出土土器9	133
第118図	古墳時代出土土器10	134
第119図	古墳時代出土土器11	135
第120図	古墳時代出土土器	135
第121図	古代出土遺物1	138
第122図	中世遺構配置図	140
第123図	1号掘立柱建物跡	141
第124図	2号掘立柱建物跡	142
第125図	3号掘立柱建物跡	143
第126図	4号掘立柱建物跡	144
第127図	5号掘立柱建物跡	145
第128図	6号掘立柱建物跡	146
第129図	7号掘立柱建物跡	147
第130図	8号掘立柱建物跡	148
第131図	9号掘立柱建物跡	149
第132図	中世溝状遺構配置図	150
付図	吹上小中原遺跡Ⅱ層・Ⅲ層遺物出土状況	

馬廻遺跡

第1図	馬廻遺跡位置図（1/25000）	153
第2図	土層図	153
第3図	周辺地形図及びグリッド図	154
第4図	遺物出土状況（1）	155
第5図	遺物出土状況	155
第6図	出土遺物1	156
第7図	出土遺物2	157
第8図	出土遺物3	158

三反牟田遺跡

第1図	三反牟田遺跡位置図（1/25000）	160
第2図	周辺地形図及びトレンチ配置図	160
第3図	遺物出土状況・土層図及び出土遺物1	161
第4図	出土遺物2（石鏃）	162

凡例

1. 弥生時代・古墳時代の土器の実測図に網かけした部分は、煤の付着している範囲を示す。

第Ⅶ章 吹上小中原遺跡

第1節 調査概要

1 遺跡の立地及び調査概要

吹上小中原遺跡は吹上町湯之浦に所在する。農業大学の果樹試験場が予定されている地域である。平成9年度に確認調査、平成11・12年に本調査を実施した。

遺跡は金峰山から続く標高約55mのシラス台地上に位置し、北側には笠岡と呼ばれる小高い丘陵がある。東側・西側と南側は湧水地を含む小河川によって開析された谷があり、いわゆる舌状台地状を呈する。南側の谷を隔てて対岸には建石ヶ原遺跡・古里遺跡・西原遺跡が存在し、西側の谷を隔てて尾ヶ原遺跡が存在する。

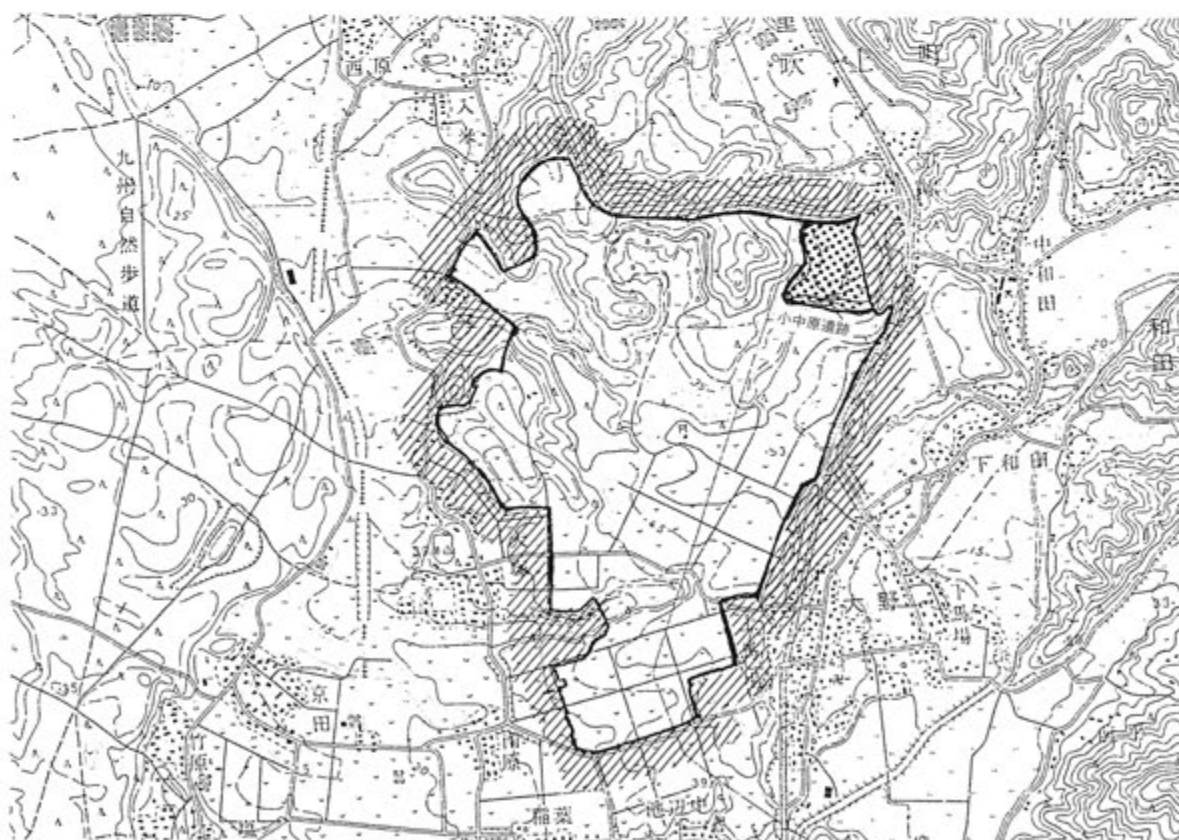
吹上小中原遺跡では、農業大学の果樹試験場のための圃場整備が行なわれるため、削平される部分の調査を実施することとした。ただ、南端部については大規模な削平が計画されているため、シラス直上までの調査を実施した。

遺物包含層はⅡ層、Ⅲ層上部、Ⅳ・Ⅴ層、Ⅶ・Ⅷ層の各層で、Ⅱ層からは弥生時代・古墳時代・中世の遺物、Ⅲ層上部からは縄文時代晩期の遺物、Ⅳ・Ⅴ層からは縄文時代早期の遺物、Ⅶ・Ⅷ層からは縄文時代草創期と旧石器時代の遺物が出土している。

遺構は、旧石器時代の落し穴2基、縄文時代草創期の礫群1基、縄文時代早期の石槍が3本まとまって出土した集積遺構と集石遺構1基、古墳時代の土器溜り、竪穴住居跡7基、土坑10基、中世の掘立柱建物跡9棟と豊富である。

2 遺跡の層序

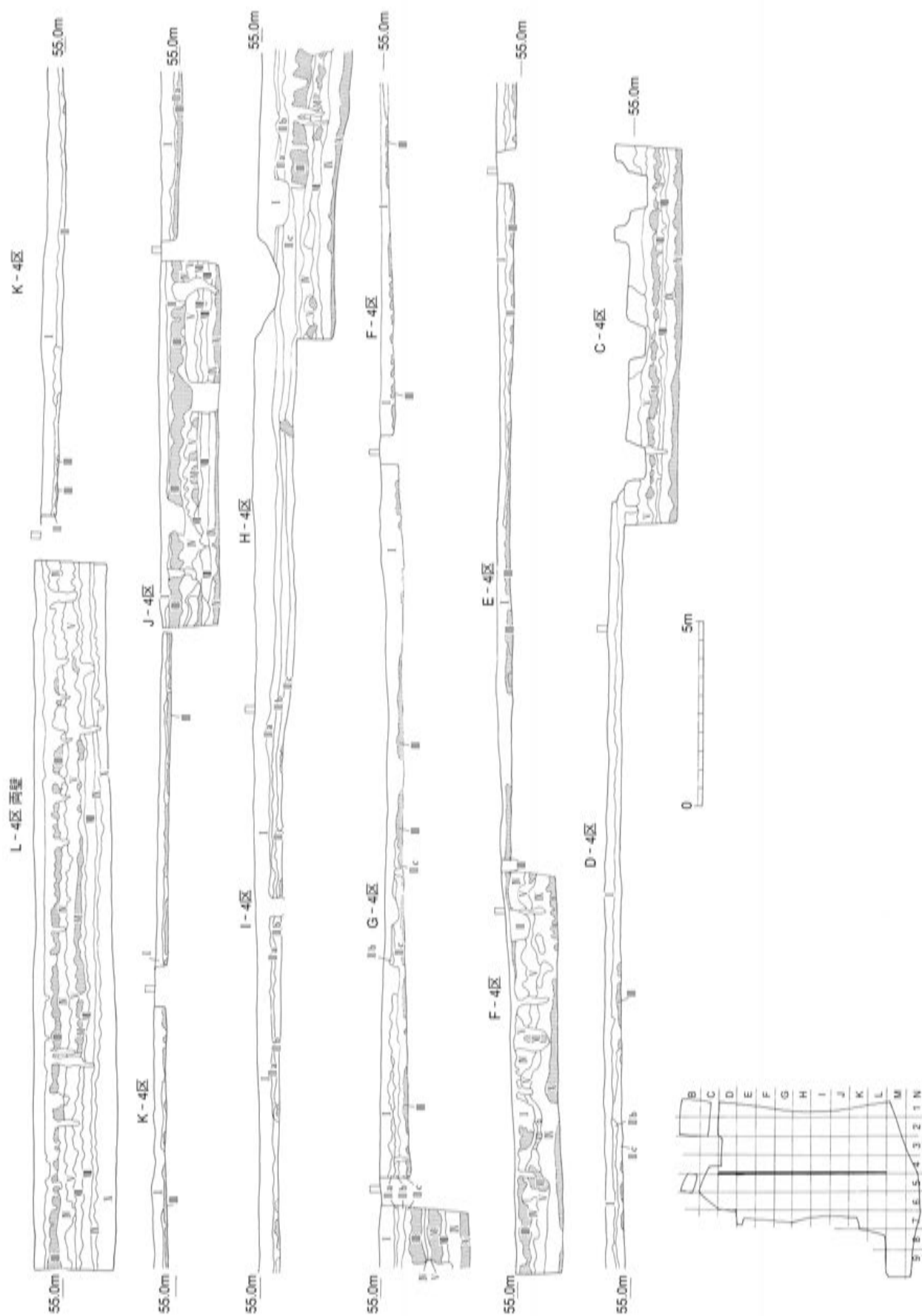
吹上小中原遺跡における地層は、農業センター遺跡群における標準的な層序と同じである。圃場整備が行なわれているため、北側を中心にⅡ層が削除されている部分もあるが、地層の残存は良好である。地勢としては北側の小丘陵から南側へ緩やかに傾斜しているが、急な地形変化は見られない。



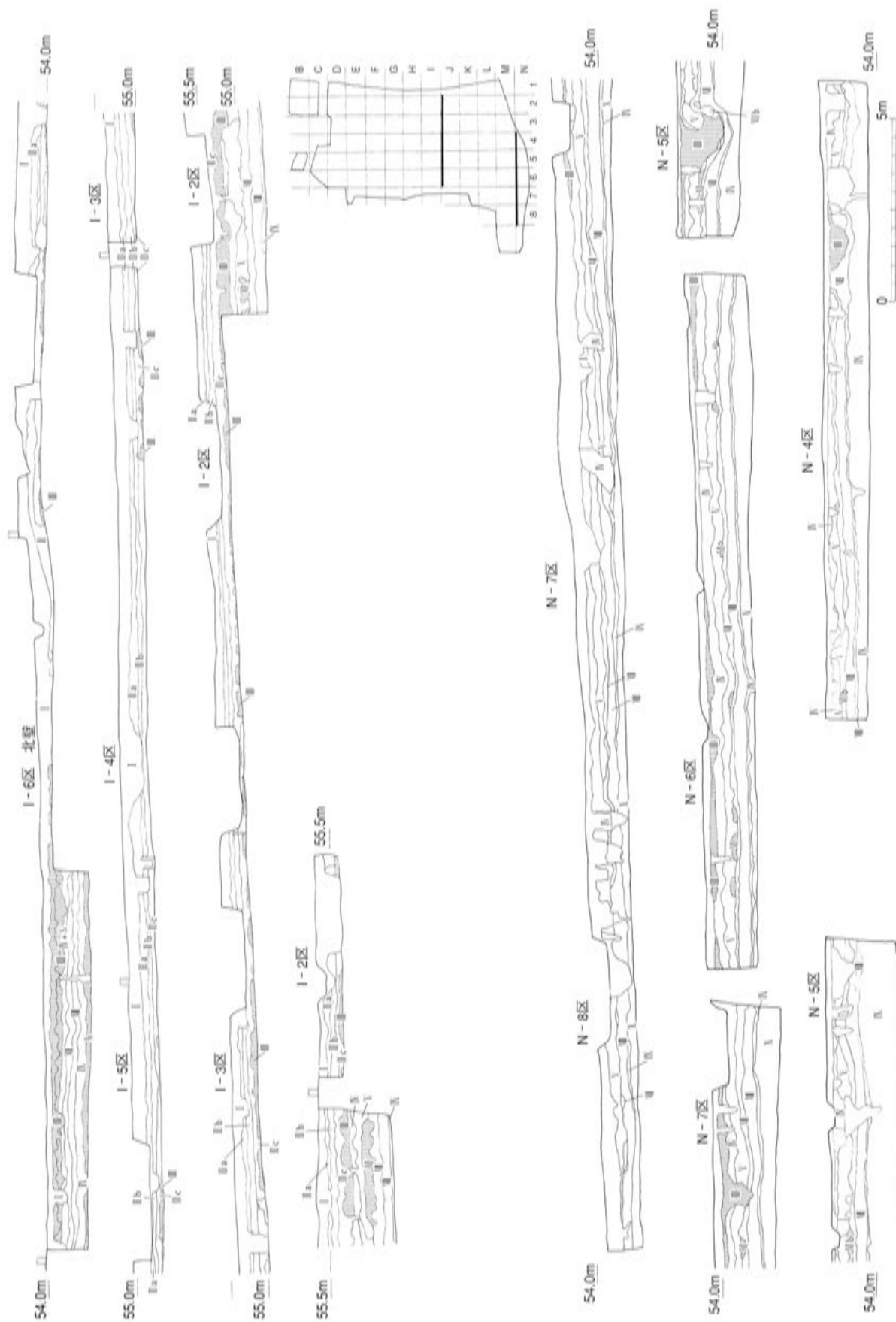
第1図 吹上小中原遺跡位置図（1/25,000）



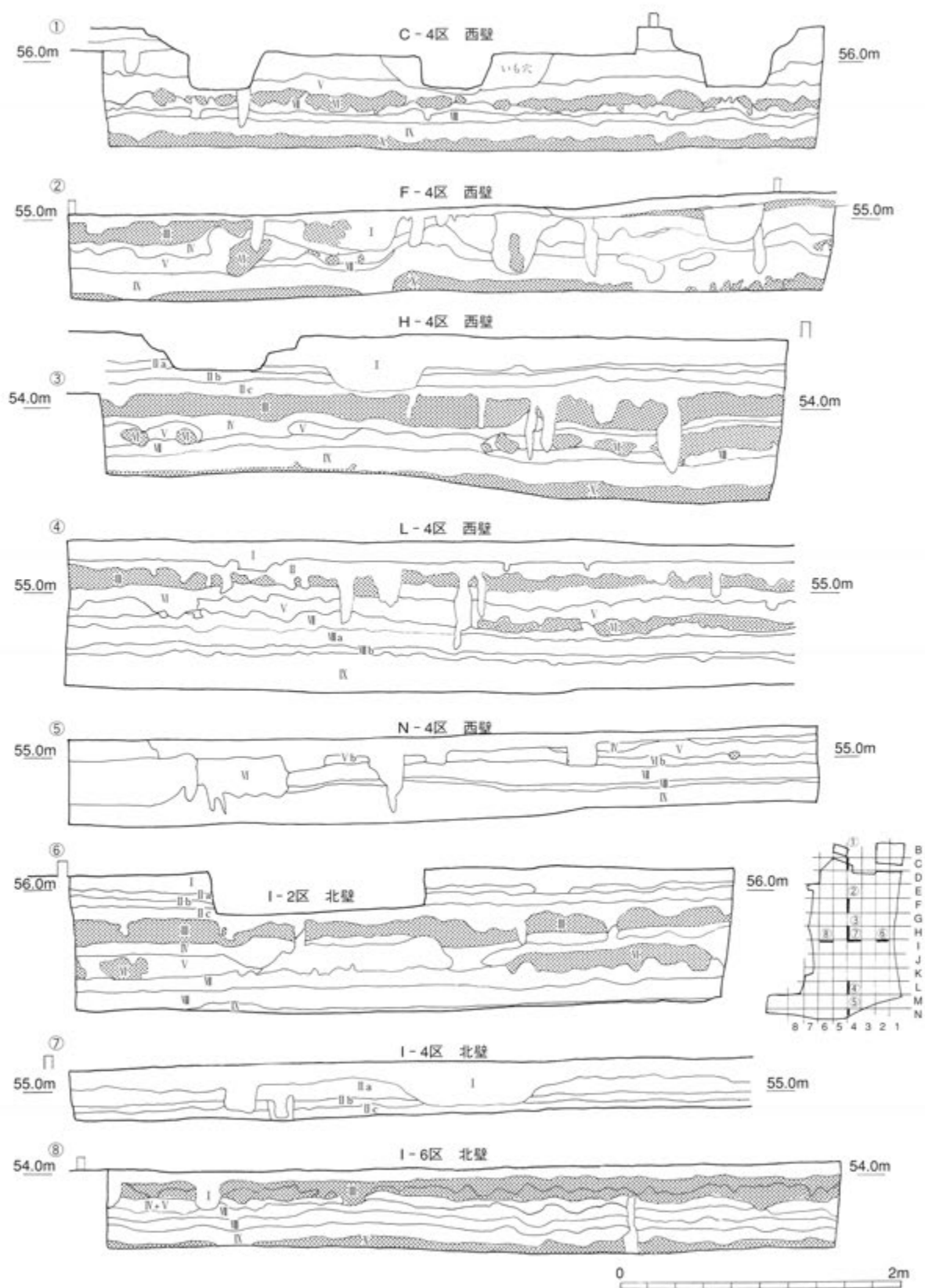
第2図 周辺地形図及びグリッド図



第3図 土層図1



第4図 土層図2



第5図 土層図3

第2節 発掘調査の成果

1 旧石器時代の調査

旧石器時代は大きく削平されるM・N—4～8区においてのみ調査を実施した。遺構・遺物はⅦ・Ⅷ層において検出されている。遺構は落とし穴と思われる土坑2基が検出された。遺物は頁岩・チャート・黒曜石のフレイクが多く製品は少ない。

(1) 遺構

遺構はN—6区において落とし穴と思われる土坑2基が検出された。

1号土坑

1号土坑は長軸95cm、短軸43cm、深さ30cmを測る長方形プランで、断面はU字状を呈する。長軸は等高線に平行でほぼ東西である。埋土はⅧ層土が主で、Ⅸ層の黄褐色に近い面で検出される。

2号土坑

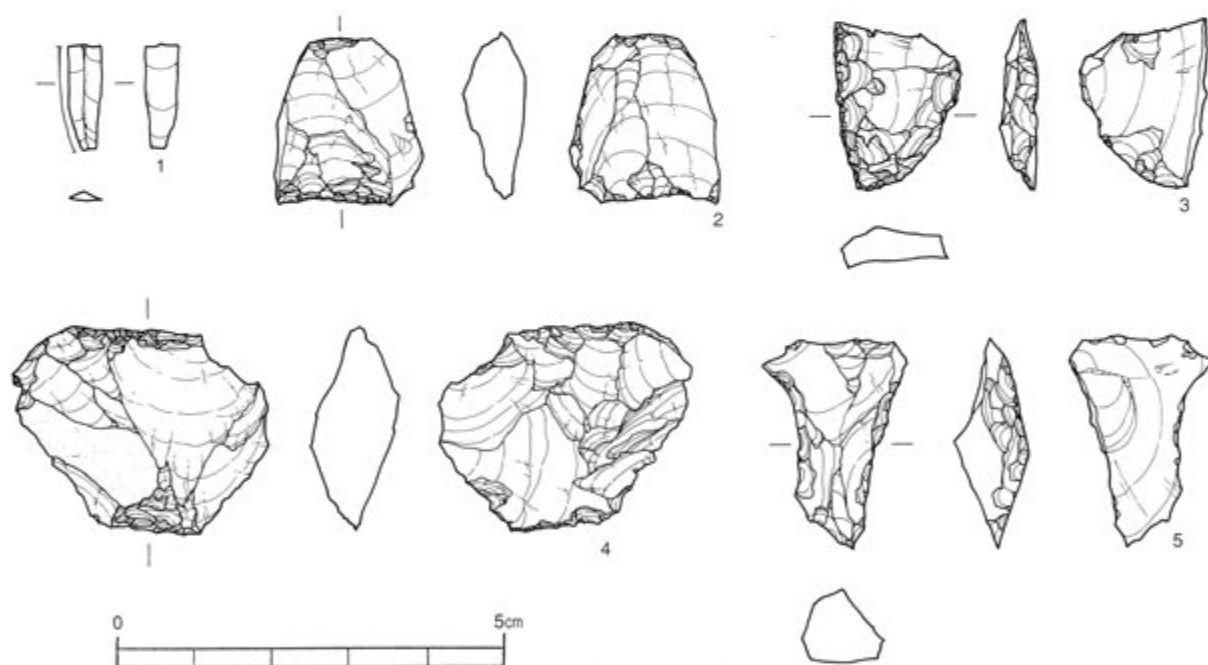
2号土坑は長軸105cm、短軸40cm、深さ30cmを測る略長方形で断面は逆台形状を呈する。2号も1号と同

様に等高線に平行で長軸が東西である。埋土も1号と同様である。

(2) 遺物 (第6図)

遺物は頁岩・チャート・黒曜石のフレイクが多く製品が少なく図化できたものは5点である。

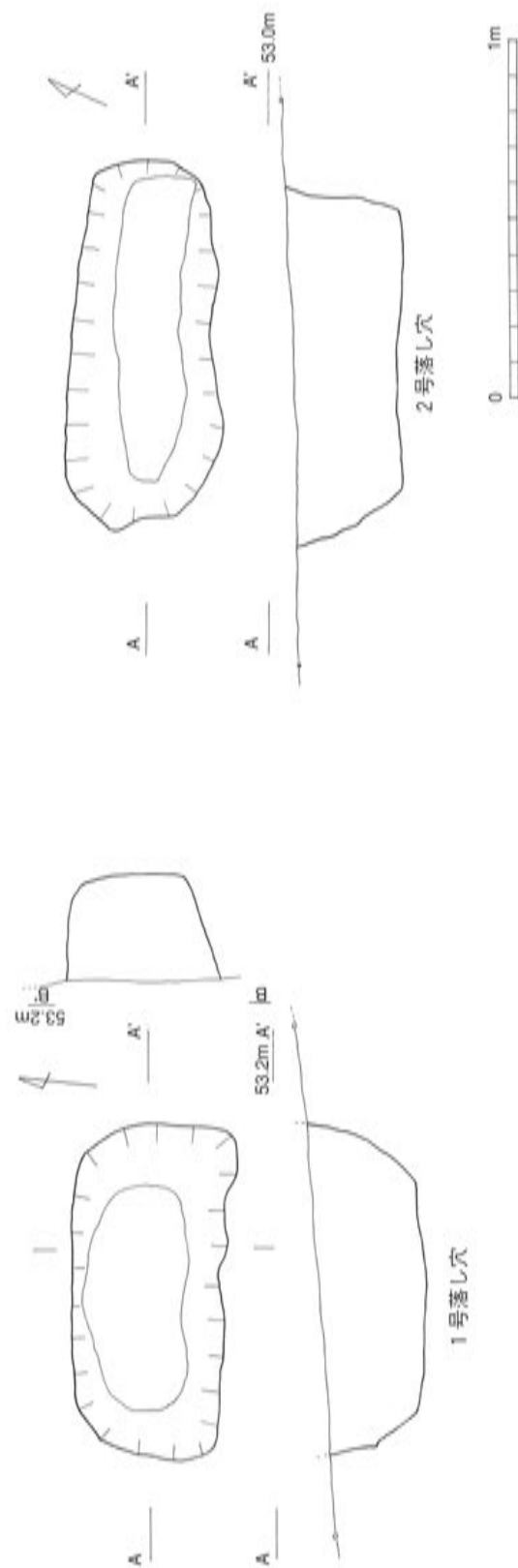
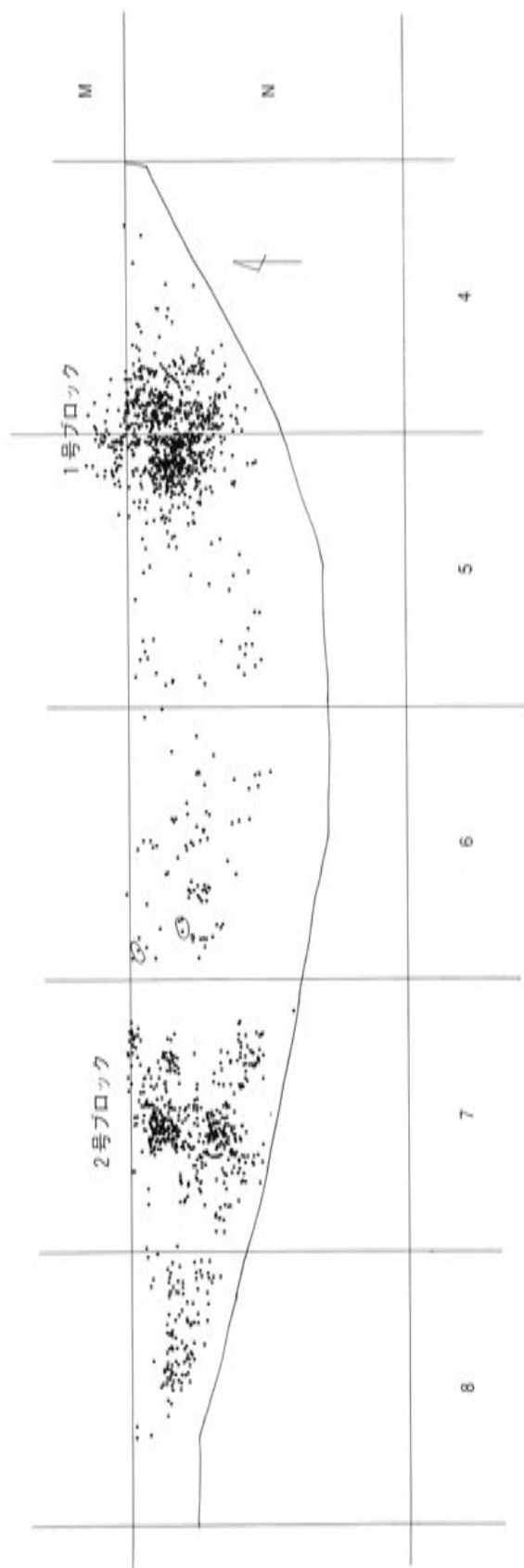
1は針尾島産の黒曜石を素材とした細石刃である。頭部を欠損し中間部から尾部が残存する。断面は三角形を呈する。2は上牛鼻産の黒曜石、3は頁岩を素材とする楔形石器である。2は裁断面から剥離調整を施し、下端に打痕が観察される。3は一部に自然面を残す剥片を利用したもので下端に打痕が観察される。4・5は上牛鼻産の黒曜石を素材とした台形石器である。4は不定形剥片を用い、左側縁は打面に相当する。刃潰し加工は主に腹面から行い、左側縁は素材の特性をそのまま生かしている。5は剥片を横位に利用したもので両側縁を切断した後、背面の厚みを減じるためスライス調整を行なっているものである。



第6図 旧石器実測図

旧石器 遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器 種	出土区	層位	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考
						cm	cm	cm	g	
第6図	1	細 石 刃	L—4	Ⅶ	黒 曜 石	1.35	0.45	0.12	0.07	
	2	楔形石器	N—4	Ⅶ	黒 曜 石	2.25	1.9	0.8	3.86	
	3	台形石器	L—1	Ⅶ	頁 岩	2.2	1.65	0.4	1.73	
	4	楔形石器	M—4	Ⅶ	黒 曜 石	3.4	2.7	1.1	9.06	
	5	台形石器	N—5	Ⅶ	黒 曜 石	2.8	1.8	0.8	2.59	



第7図 VI・Ⅶ層遺構配置・遺物出土状況及び落とし穴1・2

2 縄文時代草創期の調査

縄文時代草創期の調査は、M・N—4～8区までの削平が深くまでおよぶ範囲について実施した。その結果、石鏃の製作に係るものと思われるブロックが検出された。また、礫群1基も検出された。遺物は土器片・石鏃・スクレイパー・叩石・凹石等が出土している。

(1) 遺構 (第7・8図)

遺構は石鏃製作跡2基、礫群1基である。

1号石鏃製作跡

M・N—4・5区において検出されたもので、径約10mの円形状にチップ・フレイクが集中している。

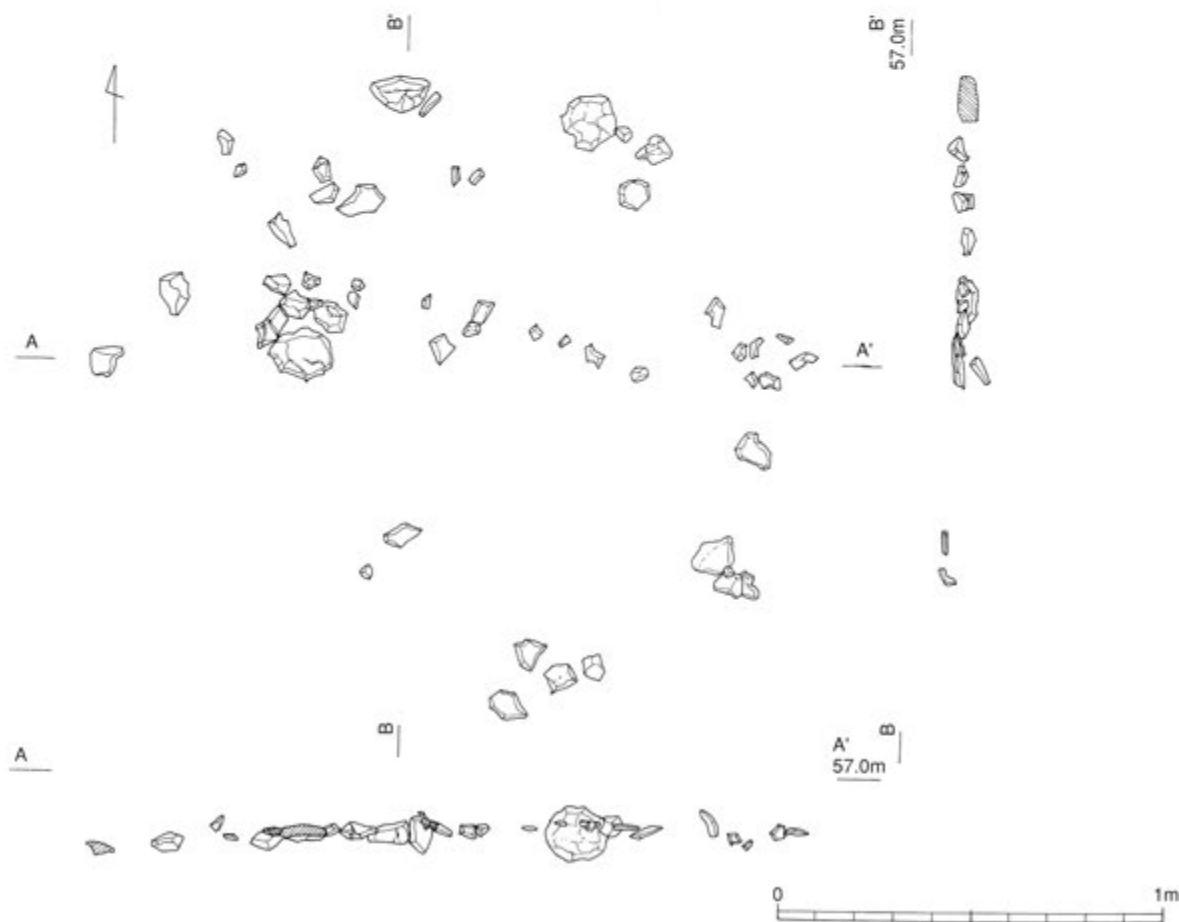
製品は石鏃・スクレイパー・叩石・凹石等が見られる。

2号石鏃製作跡

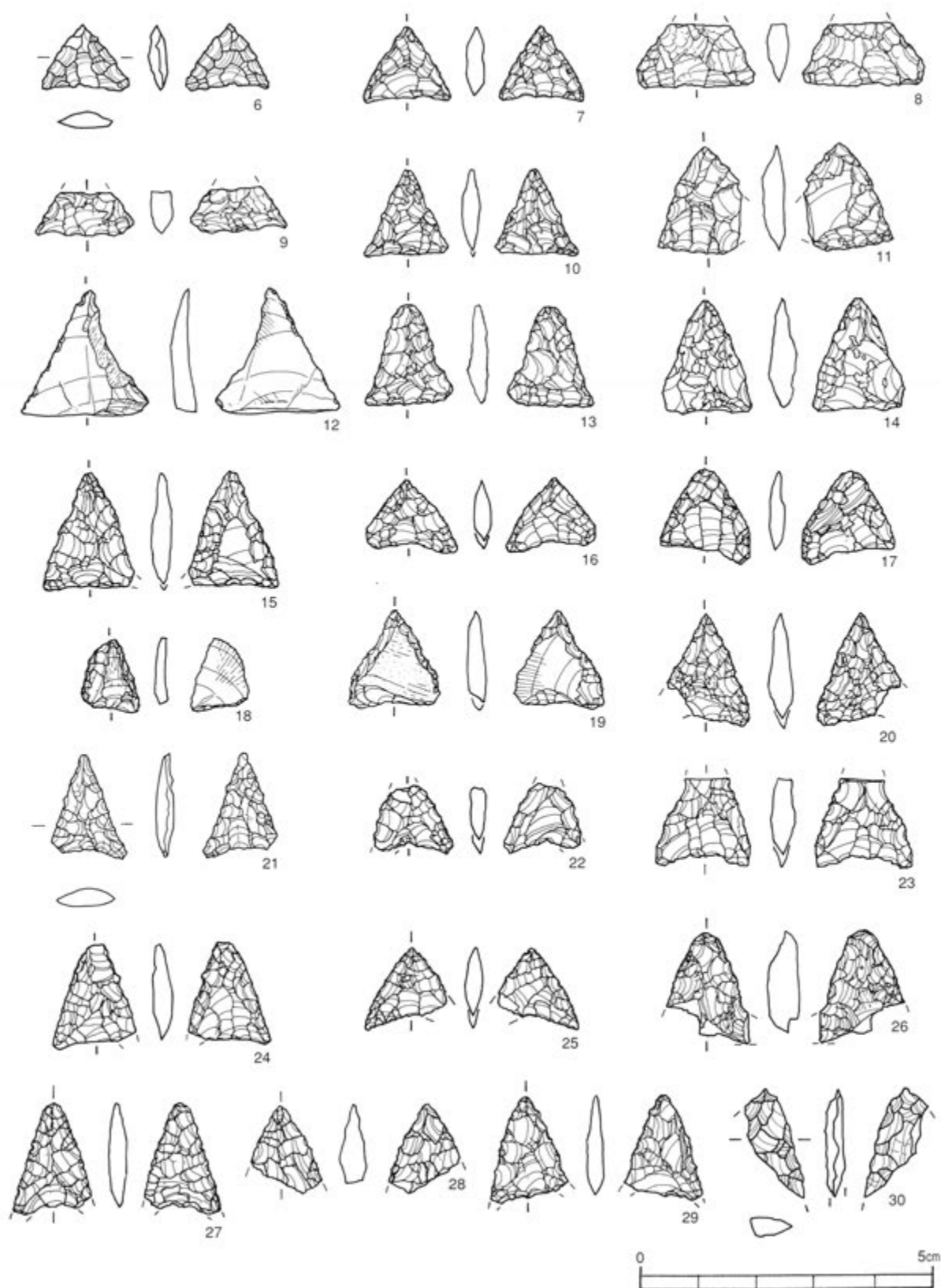
N—7区において検出されたもので、10mの不整形な範囲にチップ・フレイクが集中している。製品は石鏃がほとんどである。

礫群 (第8図)

礫群はN—5区Ⅷ層において検出されたものである。径約2mの円形状に4cm～15cm大の安山岩角礫等が散在している。掘込みは認められず同じ高さで検出される。



第8図 縄文時代草創期検出礫群



第9図 縄文時代草創期出土石器1

(2) 遺物 (第9・10・12図)

遺物は土器、石鏃等の石器が出土している。

土器

土器は小破片で損耗が激しいもので図化できるものはなかったが、薩摩層より下層から出土し、胎土・焼成は他遺跡の草創期土器と同じようなものである。

石器 (第9・10・12図)

石器は石鏃・スクレイパー・叩石・凹石が出土している。

石鏃 (第9・10図)

石鏃は30点が出土している。素材は玉髓・頁岩・黒曜石・チャートと豊富である。石鏃は形状・長さ・幅の比率(長幅比)・基部の形態において分類を行なった。形状は三角形(A)・五角形(B)・円形(C)、長幅比は1~1.5(ほぼ正三角形a)・1.5~2未満(ほぼ二等辺三角形b)・2以上(縦長c)、基部は平坦(a)・浅い(b)、深くV字形(c)・深くU字形(d)とした。(第11図参照)

石鏃は打製で、ほとんどのものが入念な交互剥離により調整されている。中には主要剥離面を残し、簡単な調整を加えたものも見られる。石鏃30点を観察すると14点は破損しており、尖頭部先端が破損しているもの(8・9・23)、基部の片側が破損しているもの

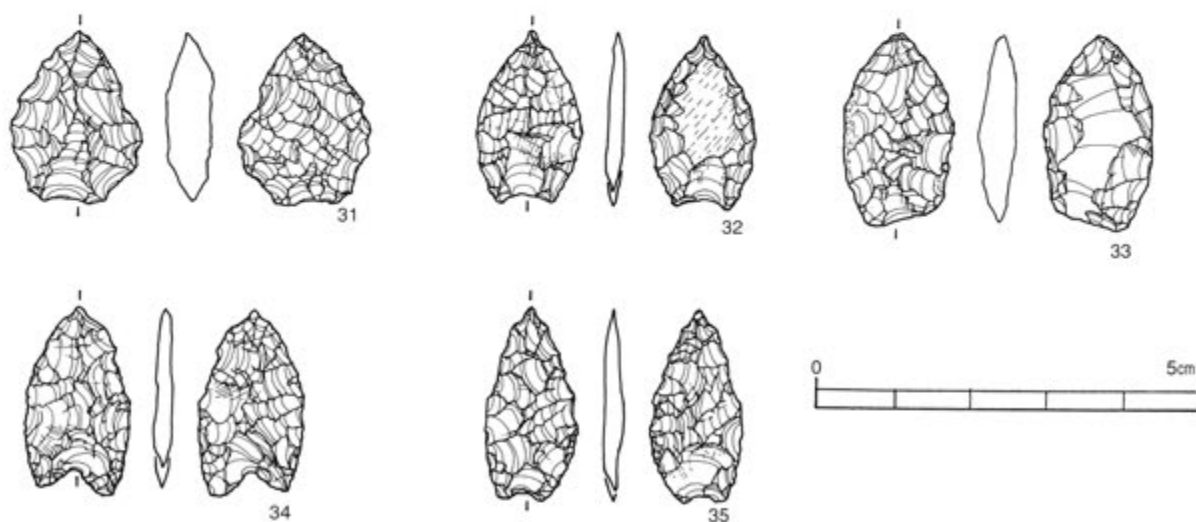
(20・21・24・25・30)、基部両方を破損しているもの(26~29)、尖頭部先端と基部の片側が破損しているもの(22)が認められる。石鏃を分類に合わせてみると、6~12はA-a-a類であるが、12については製作途中の剥片の可能性が高い。13~15はA-b-b類。16~26はA-a-b類。27~29はA-b-b類。30はA-b-c類。31~33はC-b-a類。34・35はC-b-b類に分類できる。

スクレイパー・礫器等 (第12図)

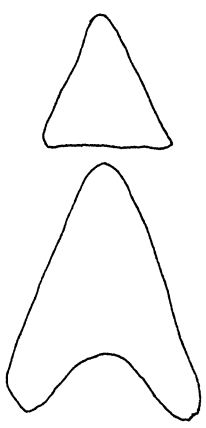
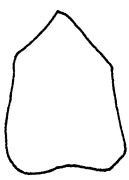
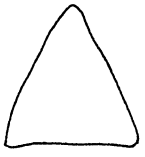
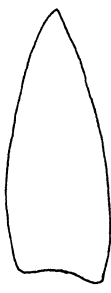
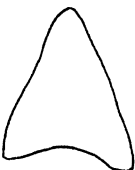
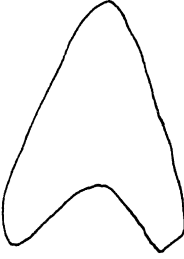
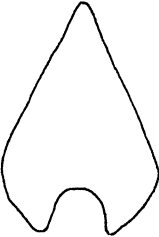
36~41はスクレイパー・調整剥片等である。36・37はチャートを素材にしたもので、周縁部に加工を施したものである。やや厚みを持つ小型の素材で木の葉形または菱形状の形態で、先端部を丁寧な押圧剥離により調整しているもので用途については不明である。38~41は頁岩の大きな剥片を利用した礫器である。38・39は一面に自然面を残した剥片の周縁部の一部に大小の剥離を施したものである。40は側縁に剥離を施したスクレイパーである。41は剥片石器である。

叩石・凹石 (第12図)

42は砂岩を素材とした棒状の叩石。一部に敲打痕が認められる。43は凹石。両面及び側面に敲打による凹面が認められる。



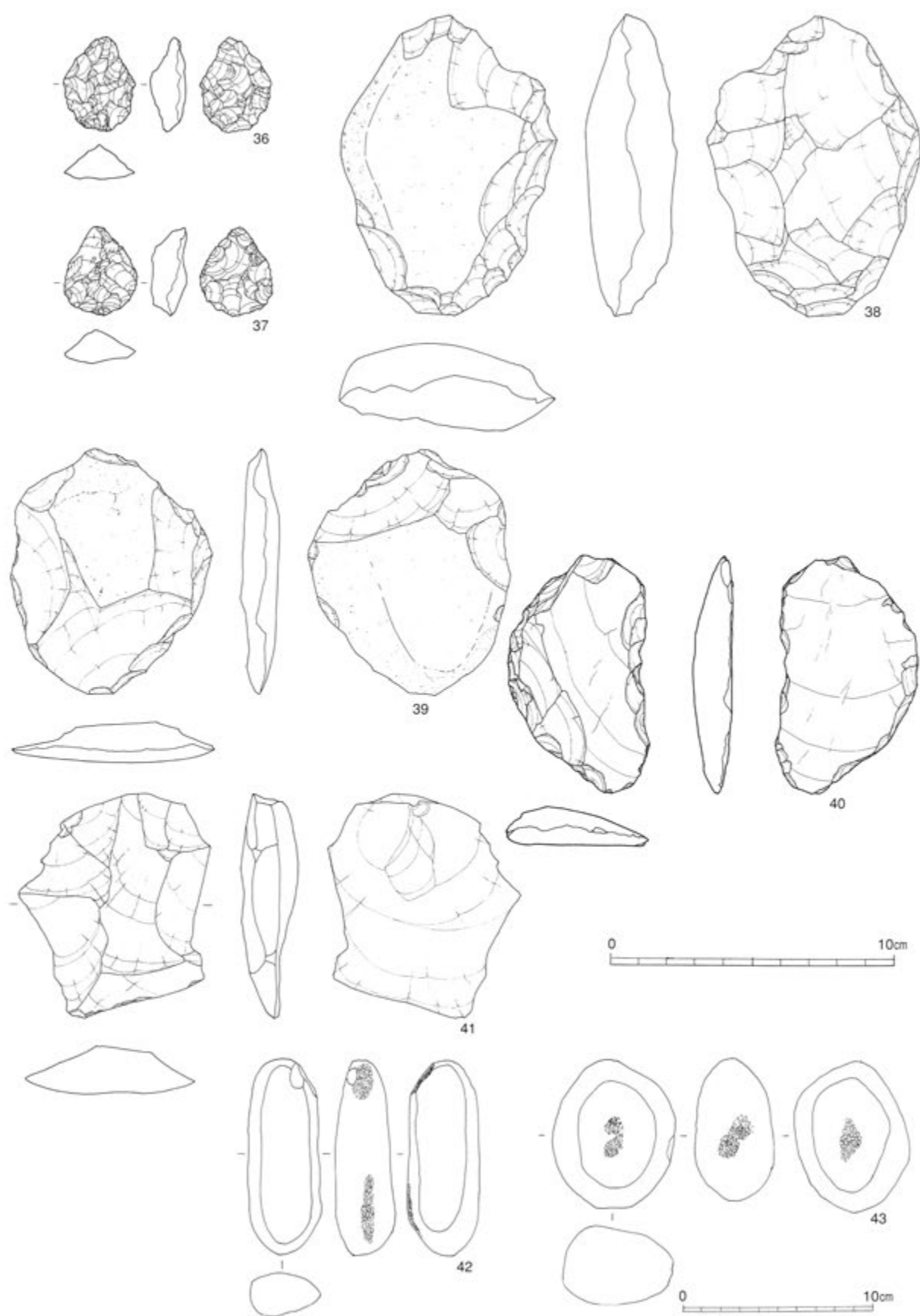
第10図 縄文時代草創期出土石器 2

	A (ほぼ三角形)	B (ほぼ五角形)	C (ほぼ丸形)	
形 状				
	a (1 ~ 1.5 : ほぼ正三角形)	b (1.5 ~ 2 : ほぼ二等辺三角形)	c (2 以上 : 縦長)	
長幅比 (長さ÷幅)				
	a (平坦)	b (浅い)	c (深い)	d (U字状)
基 部				

第11図 石鏃の分類図

旧石器草創期観察表

挿図 番号	遺物 番号	器 種	出土区	層位 遺構	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考
						cm	cm	cm	g	
第 9 図	6	石鏃	N-5	Ⅶ	頁 岩	1.2	1.5	0.3	0.4	
	7	石鏃	N-5	Ⅶ	安 山 岩	1.3	1.5	0.3	0.4	
	8	石鏃	N-4	Ⅶ	玉 ズ イ	1.15	2	0.35	0.81	
	9	石鏃	N-7	Ⅶ	黒 曜 石	0.8	1.65	0.35	0.46	
	10	石鏃	N-7	Ⅶ	頁 岩	1.5	1.4	0.3	0.46	
	11	石鏃	N-4	Ⅶ	頁 岩	1.9	1.4	0.35	0.91	
	12	石鏃	N-7	Ⅶ	頁 岩	2.2	2.2	0.35	1.33	
	13	石鏃	N-4	Ⅶ	頁 岩	1.8	1.4	0.3	0.64	
	14	石鏃	N-4	Ⅶ	安 山 岩	2	1.5	0.4	1.09	
	15	石鏃	N-5	Ⅶ	頁 岩	2	1.5	0.35	0.91	
	16	石鏃	N-5	Ⅶ	安 山 岩	1.35	1.5	0.3	0.43	
	17	石鏃	N-4	Ⅶ	玉 ズ イ	1.7	1.6	0.25	0.44	
	18	石鏃	N-6	Ⅶ	頁 岩	1.3	0.95	0.2	0.25	
	19	石鏃	N-7	Ⅶ	頁 岩	1.75	1.55	0.3	0.76	
	20	石鏃	N-7	Ⅶ	黒 曜 石	2	1.2	0.45	0.73	
	21	石鏃	N-5	Ⅶ	頁 岩	1.8	1.2	0.3	0.43	
	22	石鏃	N-5	Ⅶ	玉 ズ イ	1.25	1.35	0.2	0.29	
	23	石鏃	N-5	Ⅶ	玉 ズ イ	1.6	1.65	0.4	0.55	
	24	石鏃	N-5	Ⅶ	玉 ズ イ	1.85	1.4	0.3	0.54	
	25	石鏃	N-4	Ⅶ	玉 ズ イ	1.2	1.3	0.3	0.3	
	26	石鏃	N-7	Ⅶ	黒 曜 石	2	1.4	0.55	1.19	
	27	石鏃	N-5	Ⅶ	玉 ズ イ	1.95	1.3	0.3	0.35	
	28	石鏃	N-5	Ⅶ	玉 ズ イ	1.5	1.1	0.45	0.37	
	29	石鏃	N-4	Ⅶ	玉 ズ イ	1.7	1.35	0.3	0.62	
	30	石鏃	N-4	Ⅶ	玉 ズ イ	1.9	0.8	0.3	0.4	
第 10 図	31	石鏃	N-7	Ⅶ	チャート	2.25	1.7	0.6	2.23	
	32	石鏃	N-5	Ⅶ	安 山 岩	2.3	1.45	0.25	0.77	
	33	石鏃	N-7	Ⅶ	頁 岩	2.5	1.6	0.4	1.61	
	34	石鏃	N-7	Ⅶ	玉 ズ イ	2.5	1.35	0.25	0.94	
	35	石鏃	N-7	Ⅶ	玉 ズ イ	2.6	1.15	0.25	0.75	
第 12 図	36	石槍	N-8	Ⅶ	チャート	3.4	2.6	1.2	9.1	
	37	石槍	N-6	Ⅶ	チャート	3.2	2.6	1.1	9.19	
	38	スクレイパー	N-5	Ⅶ	斧 状	10.8	6.5	3.2	280	
	39	スクレイパー	N-5	Ⅶ	斧 状	8.8	7	1.17	70.5	
	40	スクレイパー	M-6	V	斧 形	8.6	5	1.35	60	
	41	スクレイパー	N-5	Ⅶ	利 片	7.3	7.1	2.05	100	
	42	叩き石	N-5	Ⅶ	砂 岩	10.5	3.8	3.05	180.2	
	43	凹石	N-4	Ⅶ	安 山 岩	8	5.9	4.25	259	



第12図 縄文時代草創期出土石器3

3 縄文時代早期の調査

縄文時代早期はⅣ層・Ⅴ層より出土するものであるが、掘削の深さ及び上層が削除されている部分の調査になる。

(1) 遺構 (第15・16図)

遺構は石槍3本が並べてあった集積遺構と集石遺構が検出された。

① 石槍集積遺構 (第16図)

D—6区Ⅴ層上面で検出されたもので、石槍が3本重ねて並べてある。明瞭な掘込みは検出されなかった。44～46はハリ質安山岩を素材とした石槍で、Ⅰ類土器に伴うものと思われる。3点ともに体部中央部まで達する平坦で粗い加工調整を施している。ただ、44のみは側縁の調整剥離が一部施されている。46は基部を欠

損しているが3点ともほぼ同じ大きさである。

② 集石遺構 (第15図)

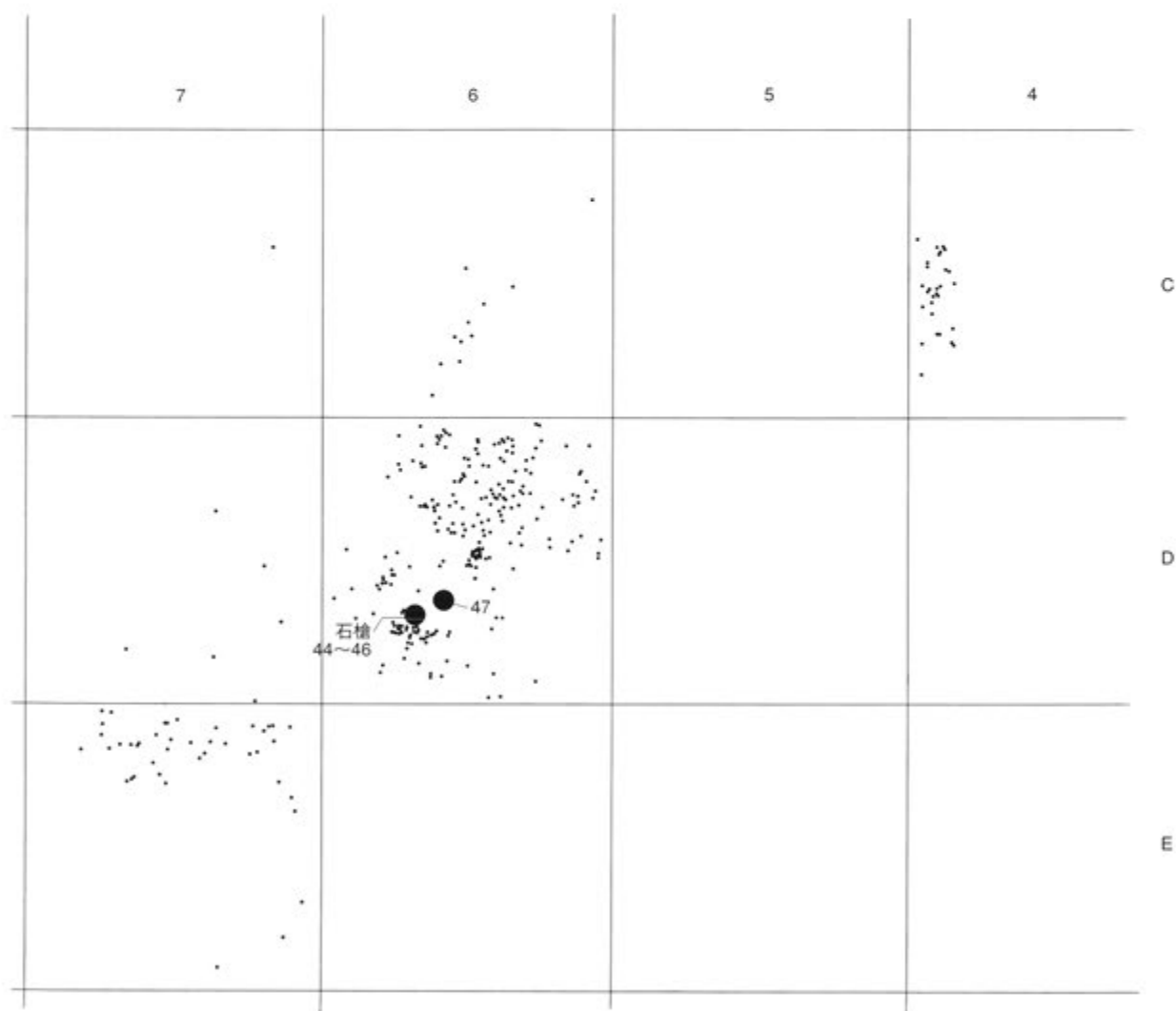
集石遺構はD—6区Ⅴ層において検出されたものである。3×3mの範囲に大小(5cm～20cm大)の礫170個がまとまりのない状況で検出された。掘込みは認められず、ほぼ同じ高さに存在するものである。

(2) 遺物 (第16～47図)

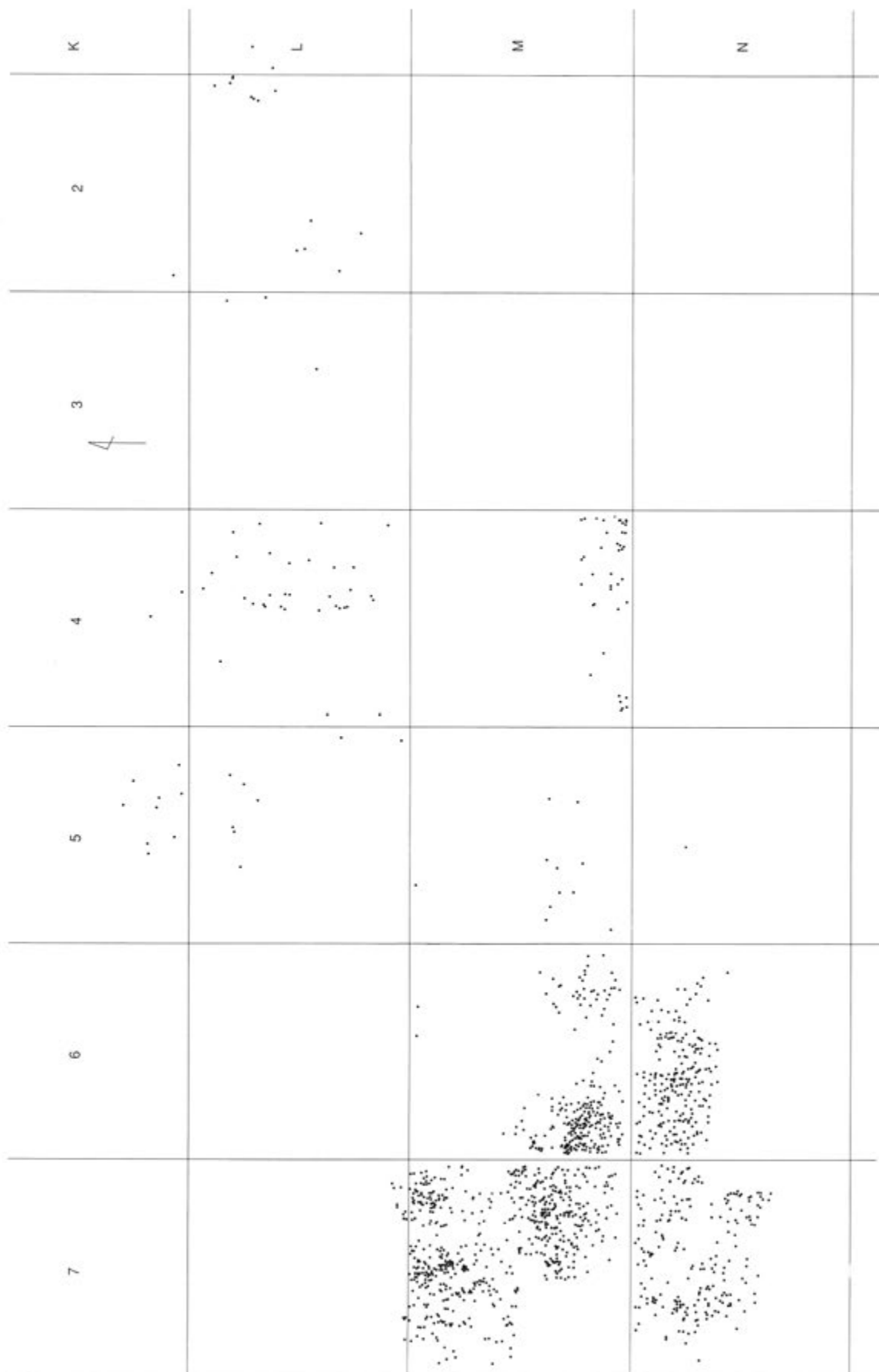
遺物は土器・石器とも多種にわたり出土量も多かった。土器は吹上小中原遺跡内で9類に分類される。

Ⅰ類土器 (第17～31図)

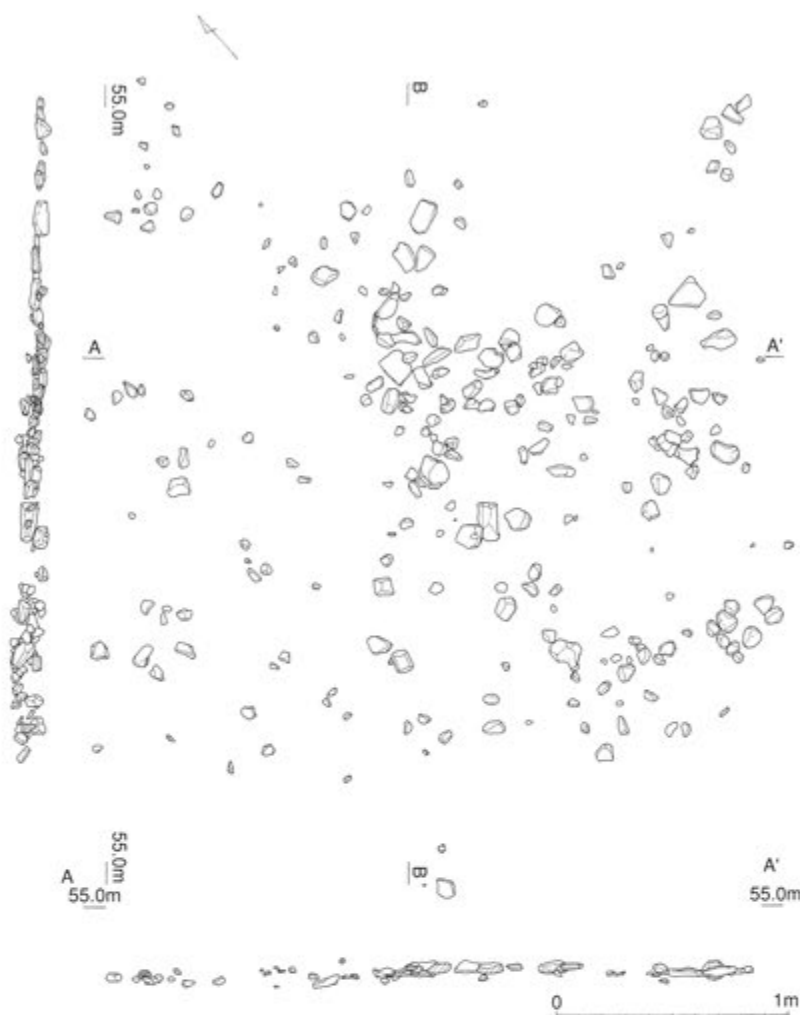
Ⅰ類土器は早期の遺物では最も多く出土したものである。円筒土器と角筒土器が見られ、Ⅰa類(47～94)とⅠb類(95～103)・Ⅰc類(104～109)に細分される。



第13図 縄文時代早期遺物出土状況 1



第14 図 縄文時代早期遺物出土状況 2



第15図 縄文時代早期検出集石遺構

I a 類は口縁部に貝殻等でキザミ目を有し、胴部にはやや粗い貝殻条痕を斜位に施すが、横位及び縦位のものもある。底部にはヘラ等による縦位の沈線文が施されるものが多い。47はD-6区で出土したもので、第17図に見られるように完形の土器がつぶれた状態で出土したものである。口縁部径16.8cm、底部径11.8cm、器高 23.8cmを測り、器壁の分厚いものである。口縁部にはヘラによるキザミ目が二段施され、胴部は斜行する粗い貝殻条痕である。底部は同様の貝殻による沈線状の条痕が縦位に施されたものである。48～55は口縁部で貝殻やヘラによるキザミ目が見られる。

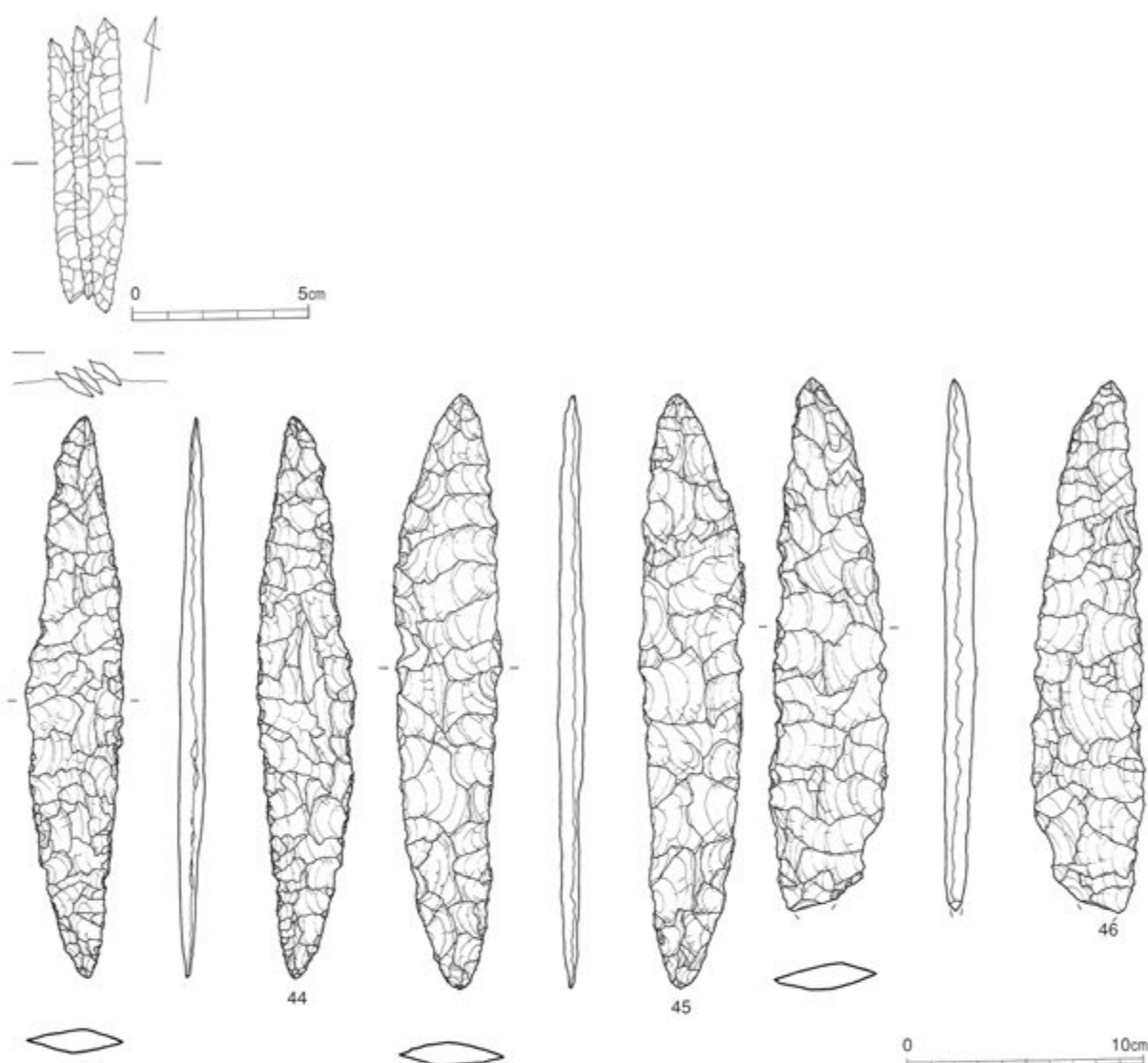
51・53には口唇部にもキザミ目が施される。58～94は胴部で貝殻条痕が斜位のもの、横位のもの、縦位のものがある。

I b 類は、I a 類とほぼ同様の器形・文様構成であるが、胴部の貝殻条痕の上に直線・波状の沈線文を施すものである。95は復元口縁部径16cmを測るものであ

る。口縁部に短い貝殻刺突によるキザミ目を三段施し、胴部には斜行する粗い貝殻条痕とその上にヘラによる沈線文を施すものである。また、底部外面にも貝殻条痕が認められる。96・97は口縁部、96は口唇部にキザミ目を有する。97は復元口縁部径15.2cmを測るもので、口縁部に貝殻復縁によるキザミ目を施し、胴部には貝殻条痕と沈線文が見られる。99と103は波状の沈線文を施すものである。

I c 類は胴部の貝殻条痕の上に沈線文（波状）と貝殻復縁による刺突文を施すものであるが、貝殻条痕がI a 類・I b 類に比べて端正である。沈線文と貝殻刺突文を施すもの、貝殻刺突文のみのものがある。

110～119は底部である。110～117はI a 類及びI b 類の底部、118・119はI c 類の底部と考えられる。貝殻条痕及びヘラによる沈線文を縦位に施すものが見られる。



第16図 縄文時代早期検出石槍集積遺構

角筒土器（第26～31図）

角筒土器は文様構成がⅠc類土器と同様で、その範疇に入るものと思われるものである。口縁部は四隅が突出する山形を呈するものがほとんどである。

地文は貝殻条痕文若しくは斜行する貝殻押引文で、口縁部には貝殻腹縁の刺突によるキザミ目文を施す。また、胴部貝殻条痕の上に貝殻刺突文を斜めに施し菱形状を呈するものや、2～3条の貝殻条痕（沈線文状）による波状の文様を施すものもある。角の部分にも貝殻刺突が見られる。121は1辺約12cmを測り、胴部に縦位の貝殻条痕文を施し、その上に斜位の貝殻刺突文・2条の貝殻条痕による波状文を施すものである。また、角の部分にも貝殻刺突文が見られる。122も文様構成は121と同様である。口縁部に貝殻刺突によるキザミ目文が施される。123～131は口縁部である。

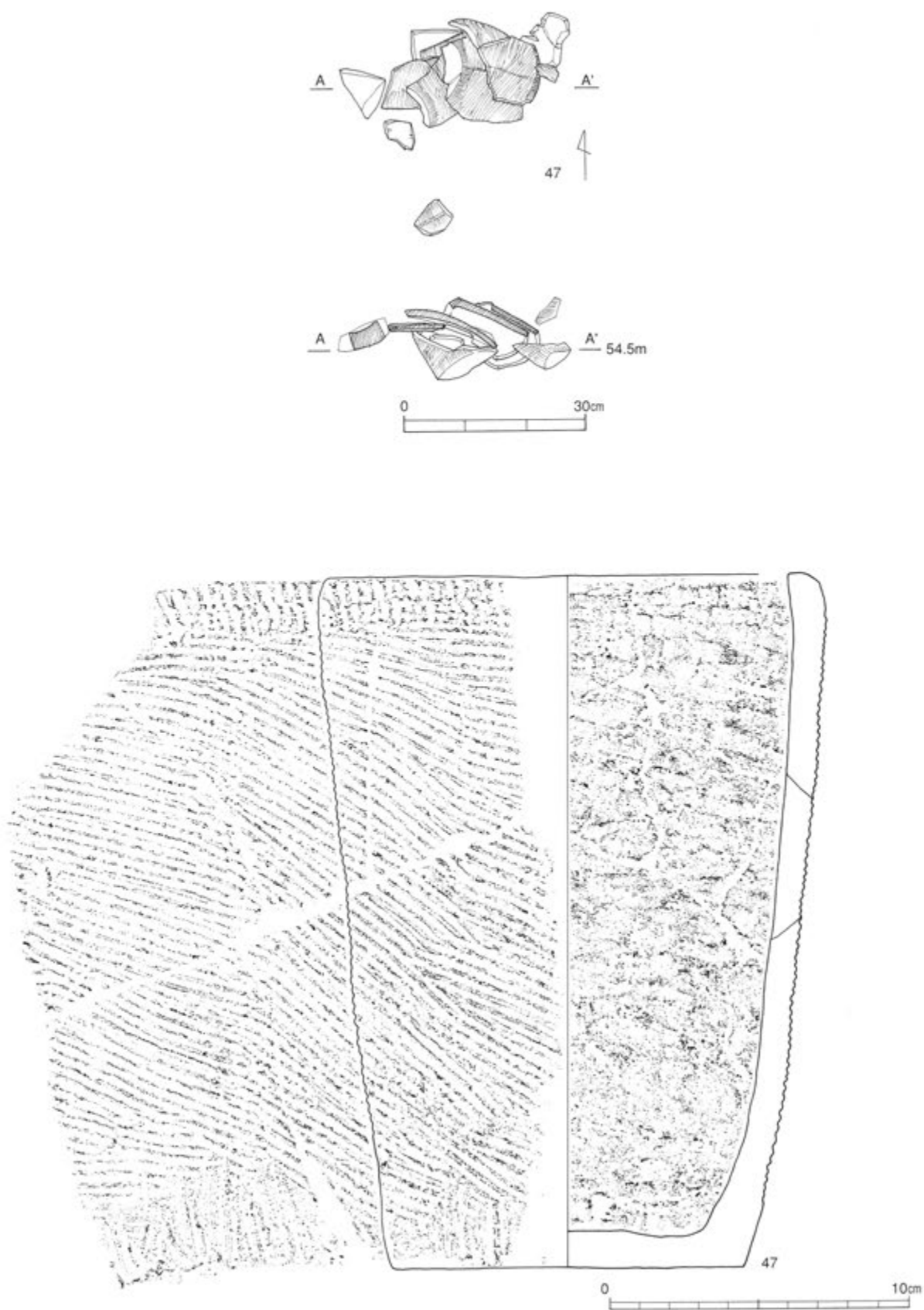
132～160は胴部。161～165は底部である。底部には貝殻による沈線状の条痕を縦に施すものである。

Ⅱ類土器（第25図）

わずかに1点だけ図示できた円筒土器の口縁部である。120は口唇部を平坦に仕上げ口縁部に貝殻腹縁による刺突文を横位に一条施し、その下位に鋸歯状の沈線文を施すものである。また、口唇部にはキザミ目が見られる。

Ⅲ類土器（第32図）

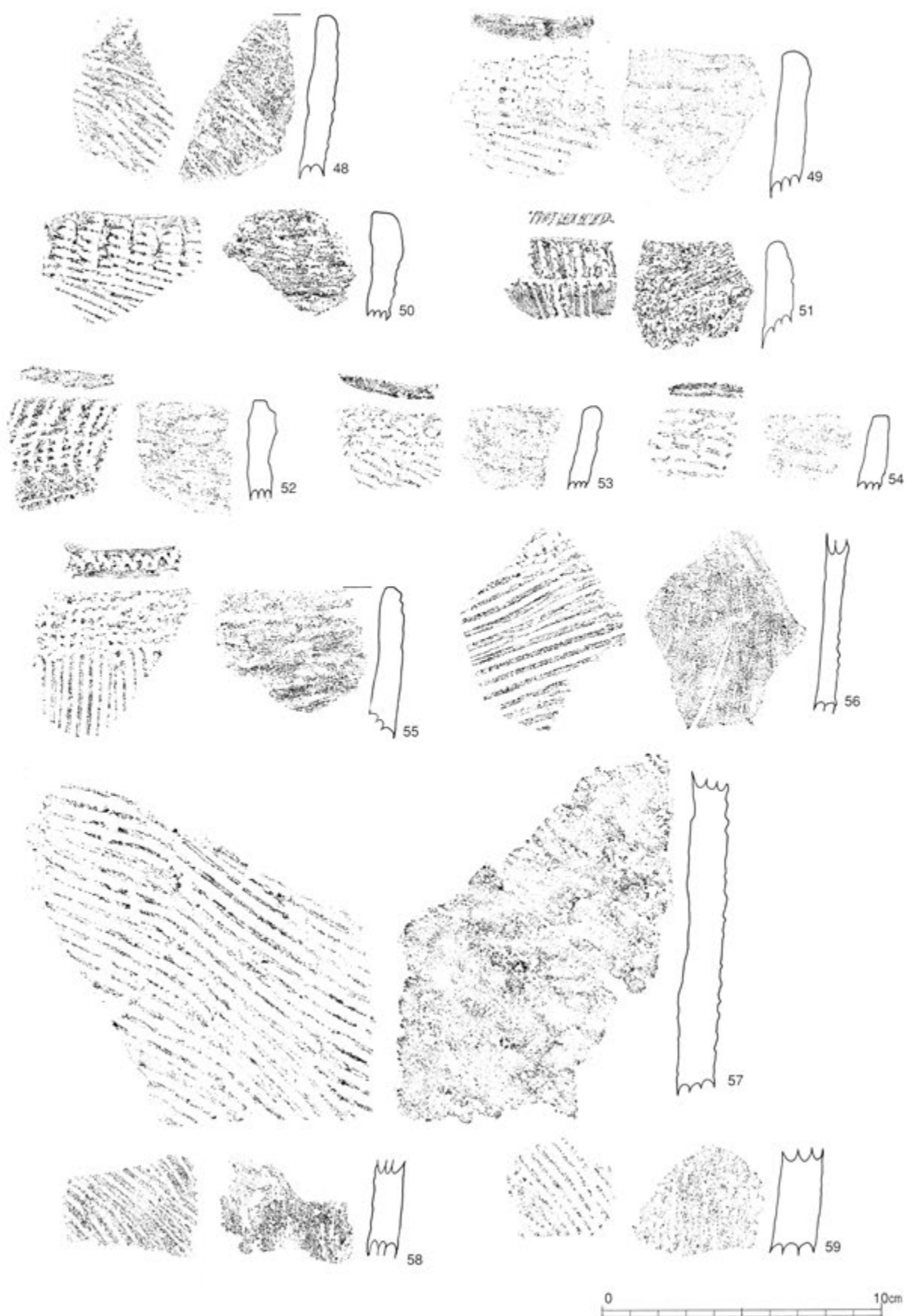
166～177の12点を図示できた。口縁部がやや外反する円筒土器で、口縁部に貝殻刺突文を斜位または横位に施し、胴部は綾杉状の貝殻条痕文である。166は24.9cm、167は19.4cmの復元口縁部径を測る。168は山形口縁を呈する。177は復元径12cmの底部である。



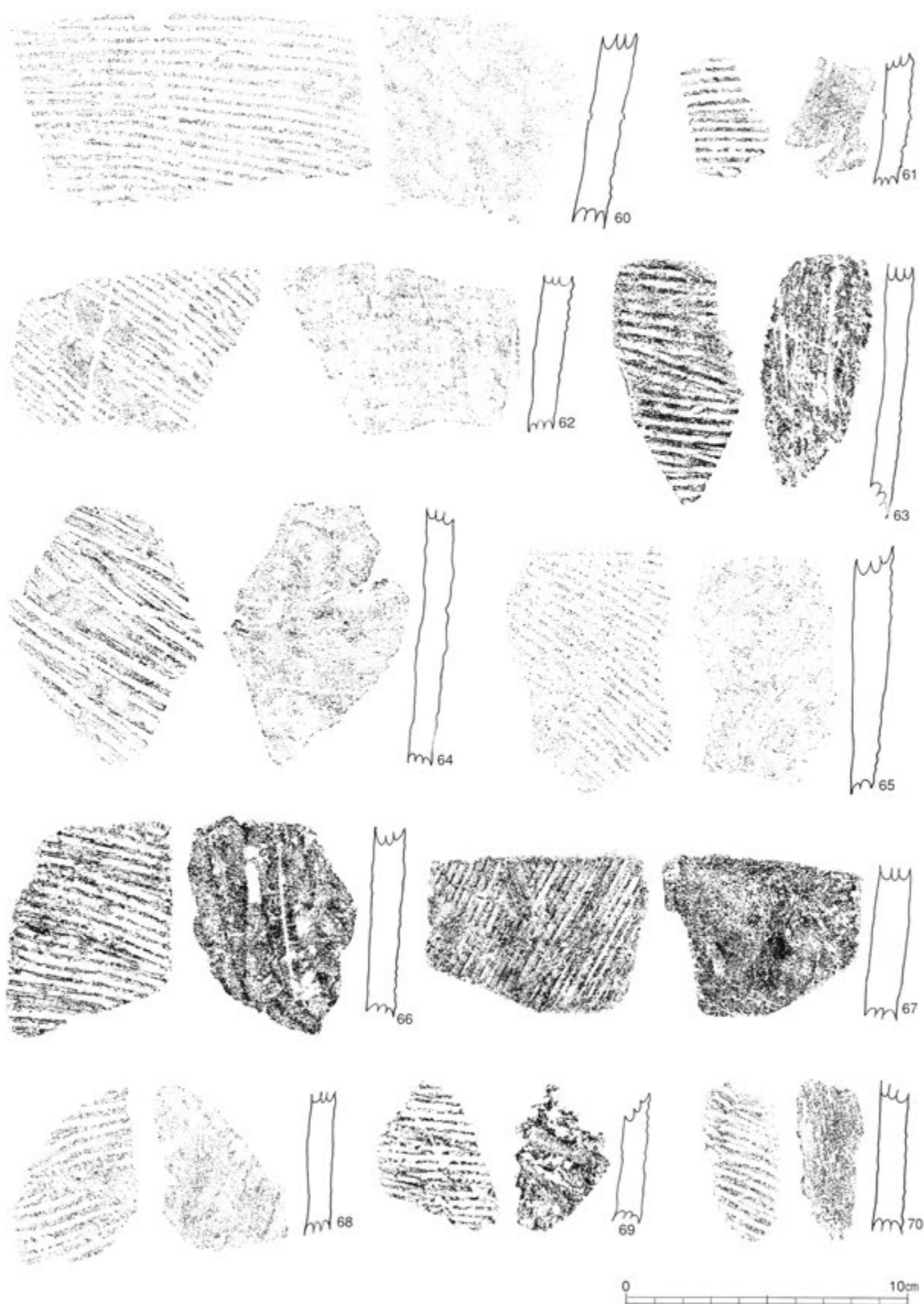
第17図 I類土器出土状況・I類土器1

I 類土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	色 調	胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
					石英	長石	角閃石	その他				
第17図	47				○	○			良	貝殻刻目文・貝殻条痕文	ケズリ	
第18図	48	D-6	IV	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	49	D-6	IV	黒茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	50	D-6	V	暗茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	51			黒茶褐色	○	○			〃	貝殻刺突文・貝殻条痕文	〃	
	52	E-7	IV	暗茶褐色	○	○			〃	貝殻刻目文・殻頂部押圧	〃	
	53	D-6	IV	茶褐色	○	○			〃	貝殻刻目文・貝殻条痕文	〃	
	54	C-6	IV	茶褐色	○	○			〃	刺突文	〃	
	55	E-7	IV	茶褐色	○	○			〃	貝殻刺突文・貝殻条痕文	〃	
	56	D-6	IV	茶褐色	○	○			〃	貝殻刻目文・貝殻条痕文	〃	
	57	D-6	V	暗茶褐色	○	○			〃	貝殻条痕文	〃	
	58	D-6	IV	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	59	E-7	IV	茶褐色	○	○	○		〃	〃	〃	
第19図	60	M-7	IV	茶褐色	○	○			〃	貝殻条痕文	〃	
	61	D-6	IV	暗茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	62	D-6	V	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	63	D-6	V	暗茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	64	D-6	V	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	65	E-7	IV	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	66	D-6	V	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	67	N-4	IV	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	68	D-6	IV	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	69	D-6	V	淡茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	70	D-6	IV	茶褐色	○	○	○		〃	〃	〃	
第20図	71	D-6	V	茶褐色	○	○			〃	貝殻条痕文	〃	
	72	C-4	V	茶褐色	○	○	○		〃	〃	〃	
	73	D-6	V	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	74	D-6	IV	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	75	E-7	IV	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	76		IV	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	77	D-6	IV	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	78	D-6	IV	茶褐色	○	○	○		〃	〃	〃	
	79	D-6	V	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	80	D-6	IV	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	81	E-7	IV	黒茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	82		II	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	83	M-7	IV	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	84	D-6	V	暗茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
第21図	85	E-7	IV	黒茶褐色	○	○			〃	貝殻条痕文	〃	
	86	E-7	IV	黒茶褐色	○	○	○		〃	〃	〃	
	87	D-6	IV	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	88	E-7	IV	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	89		IV	茶褐色	○	○	○		〃	〃	〃	
	90	D-6	IV	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	91	E-7	IV	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	92	E-7	IV	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	93	K-5	V	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	94	D-6	V	茶褐色		○			〃	〃	〃	
第22図	95	D-6	IV	淡茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
第23図	96	M-7	IV	茶褐色	○	○			〃	貝殻条痕文	〃	
	97	I-5	II	暗茶褐色	○				〃	貝殻条痕文・沈線文状条痕	〃	
	98	E-7	IV	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	99	L-9	II	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	100	H-5	II	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	101	H-5	II	茶褐色	○				〃	貝殻条痕文・沈線文状条痕	〃	
	102	D-6	V	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	103	N-5	IV	茶褐色	○	○			〃	貝殻条痕文・沈線文	〃	
第24図	104	K-7	III	茶褐色	○	○	○		〃	貝殻(条痕文・刺突文)沈線文	〃	
	105	M-6	V	暗茶褐色	○	○			〃	〃	〃	



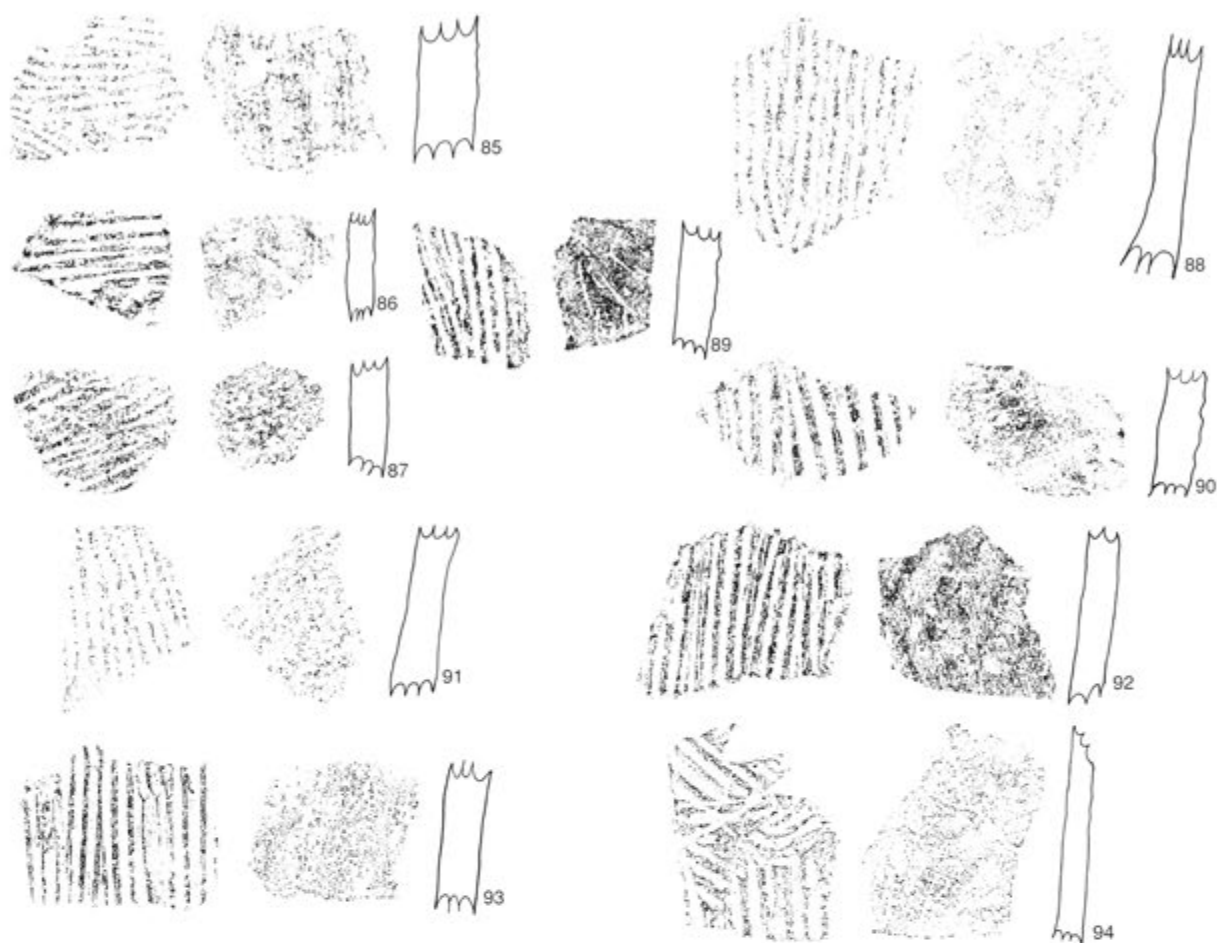
第18図 I 類土器 2



第19図 I類土器 3



第20図 I 類土器 4

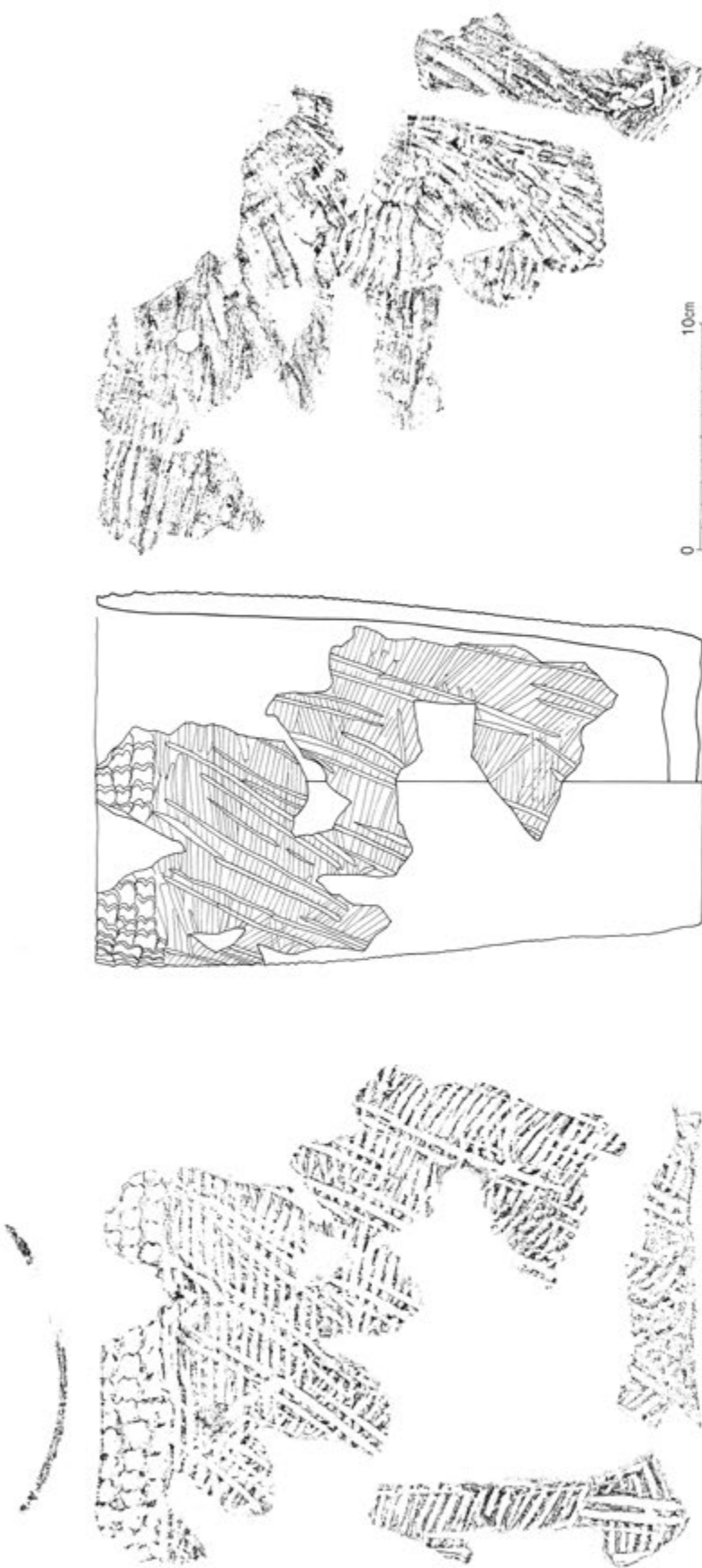


第21図 I 類土器 5

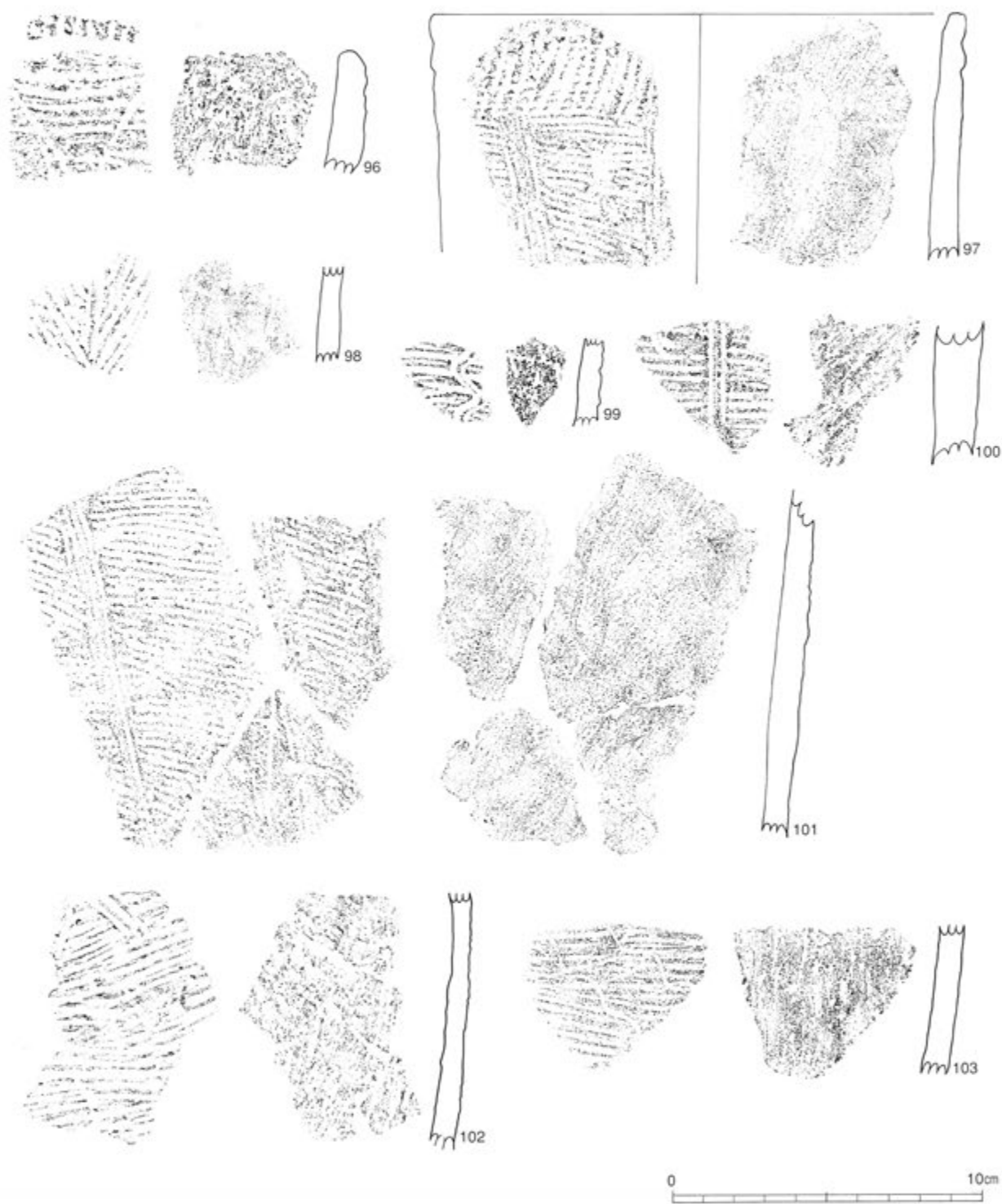
0 10cm

I 類土器観察表

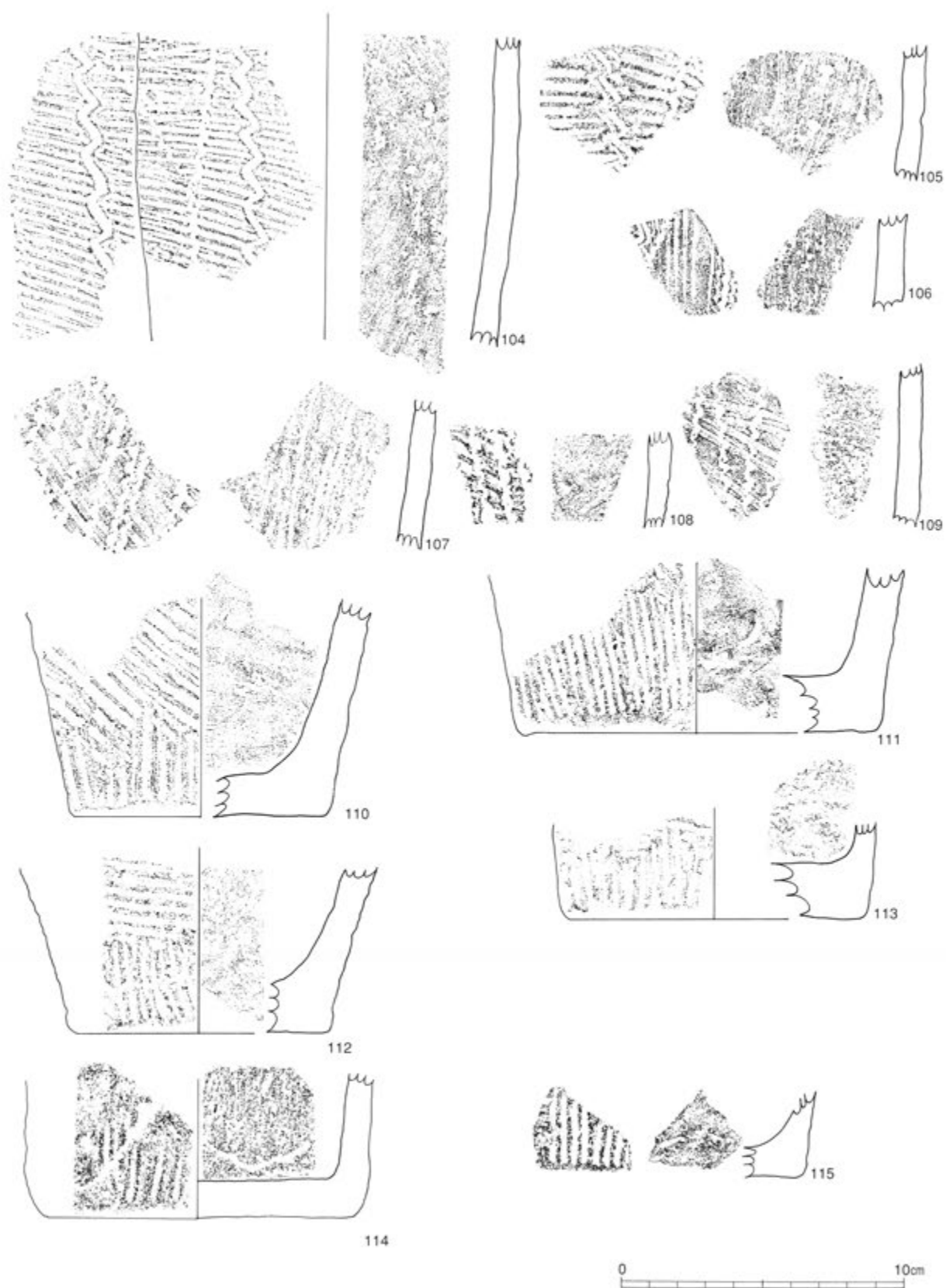
挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	色 調	胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
					石英	長石	角閃石	その他				
第24図	106	M-7	Ⅳ	茶褐色	○	○	○		良	貝殻(条痕文・刺突文)沈線文	ケズリ	
	107	C-4	Ⅳ	茶褐色	○	○			〃	斜野押引文	〃	
	108	C-4	Ⅲ	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	109	C-5	Ⅲ	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	110	D-6	V	茶褐色	○	○			〃	貝殻条痕文	〃	
	111	D-6	V	茶褐色	○	○	○		〃	〃	〃	
	112	D-6	Ⅳ	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	113	D-6	V	茶褐色	○	○	○		〃	〃	〃	
	114	M-7	Ⅳ	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
第25図	115		Ⅳ	茶褐色	○	○	○		〃	貝殻条痕文	〃	
	116	D-6	V	暗茶褐色	○	○			〃	貝殻刺突文・貝殻条痕文	〃	
	117	D-7	Ⅳ	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	118	C-4	Ⅳ	茶褐色	○	○	○		〃	貝殻(条痕文・刺突文)沈線文	〃	
	119	C-4	Ⅳ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	〃	
第26図	120	H-1	Ⅱ	暗茶褐色	○	○	○		〃	貝殻刺突文・へら押引文	〃	
	121	M-7	Ⅳ	黒茶褐色	○	○	○		〃	貝殻(条痕文・刻目文・刺突文)	〃	
第27図	122	K-5	V	茶褐色	○	○	○		〃	〃	〃	
	123	M-7	Ⅱ	淡茶褐色	○	○			〃	貝殻(条痕文・刺突文)刻目文	〃	
	124	M-5	Ⅲ	黒茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	125	M-7	Ⅳ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	〃	
	126	D-6	V	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	127	M-5	Ⅳ	淡茶褐色	○	○	○		〃	〃	〃	
	128	M-7	Ⅳ	黒茶褐色	○	○	○		〃	〃	〃	
	129	M-7	Ⅳ	茶褐色	○	○			〃	〃	〃	



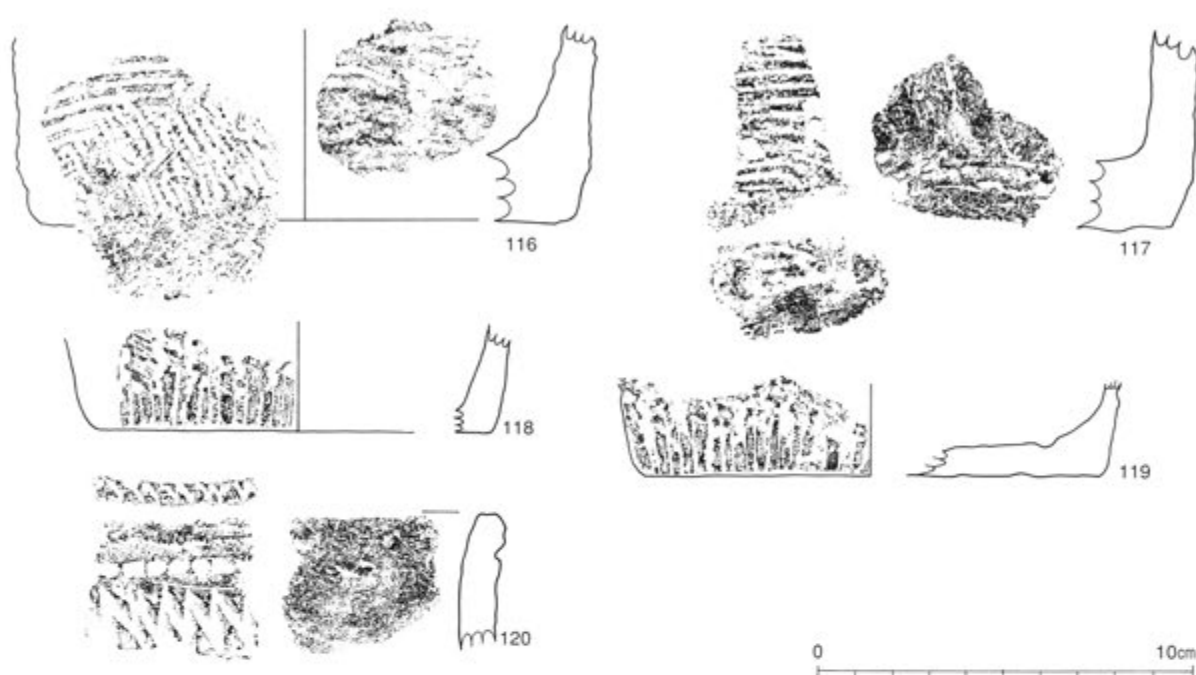
第22図 I 類土器 6



第23図 I 類土器 7



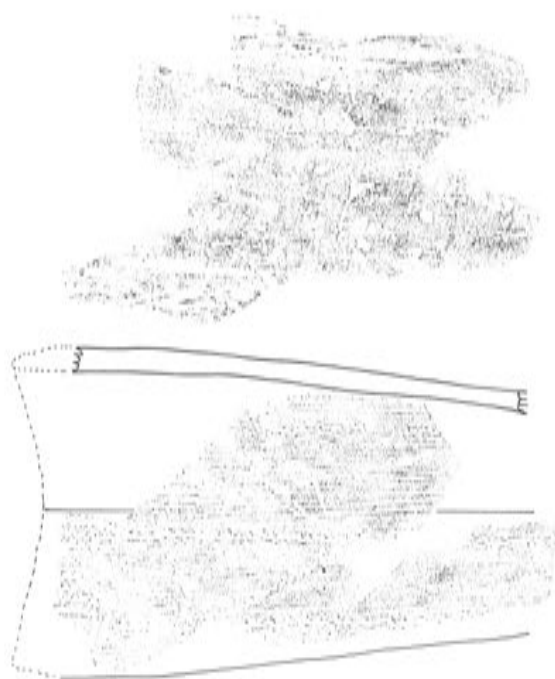
第24図 I 類土器 8



第25図 I 類土器 9・II 類土器

I 類土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	色 調	胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
					石英	長石	角閃石	その他				
第 28 図	130	M-7	IV	茶褐色	○	○			良	貝殻(条痕文・刺突文)刻目文	ケズリ	
	131	M-7	IV	茶褐色	○	○			"	"	"	
	132	N-6	IV	暗茶褐色	○	○			"	貝殻(条痕文・刺突文)沈線文	"	
	133	M-7	IV	黒茶褐色	○	○			"	貝殻刺突文・貝殻条痕文	"	
	134	M-5	IV	淡茶褐色	○	○			"	"	"	
	135		II	黒茶褐色	○	○			"	"	"	
	136	M-6	III	黒茶褐色	○	○			"	"	"	
第 29 図	137	M-7	IV	茶褐色	○	○			"	貝殻条痕文	"	
	138	N-8	Ⅶ下	暗茶褐色	○	○			"	貝殻刺突文・貝殻条痕文	"	
	139	L-4	III	黒茶褐色	○	○			"	"	"	
	140	M-7	III	茶褐色	○	○	○		"	貝殻条痕文	"	
	141	M-7	IV	茶褐色	○	○	○		"	"	"	
	142	L-4	II	茶褐色	○	○			"	"	"	
	143	M-7	IV	黒茶褐色	○	○	○		"	貝殻刺突文・貝殻条痕文	"	
	144			淡茶褐色	○	○	○		"	"	"	
	145	L-5	V	茶褐色	○	○	○		"	"	"	
第 30 図	146	L-6	II	茶褐色	○	○			"	貝殻刺突文・貝殻条痕文	"	
	147	L-1	V	茶褐色	○	○			"	"	"	
	148	L-5	V	黒茶褐色	○	○			"	貝殻条痕文	"	
	149	M-8	II	暗茶褐色	○	○			"	貝殻刺突文・貝殻条痕文	"	
	150			茶褐色	○	○	○		"	"	"	
	151	M-6	IV	茶褐色	○	○	○		"	貝殻条痕文	"	
	152	M-6	IV	黒茶褐色	○	○			"	貝殻刺突文・貝殻条痕文	"	
	153	K-5	V	暗茶褐色	○	○			"	"	"	
	154			茶褐色	○	○			"	"	"	
	155	L-4	V	茶褐色	○	○	○		"	"	"	
	156	M-7	IV	茶褐色	○	○			"	"	"	
	157	M-7	IV	茶褐色	○	○			"	"	"	
	158	N-6	IV	茶褐色	○	○			"	"	"	
	159	L-4	V	淡茶褐色	○	○	○		"	"	"	
	160	L-4	IV	茶褐色	○	○	○		"	"	"	
第 31 図	161	M-7	IV	茶褐色	○				"	貝殻刺突文・貝殻条痕文	"	
	162			茶褐色	○	○			"	"	"	
	163	L-5	V	茶褐色	○	○	○		"	"	"	
	164	K-5	V	茶褐色	○	○	○		"	"	"	
	165	N-6	IV	茶褐色	○	○	○		"	貝殻条痕文	"	

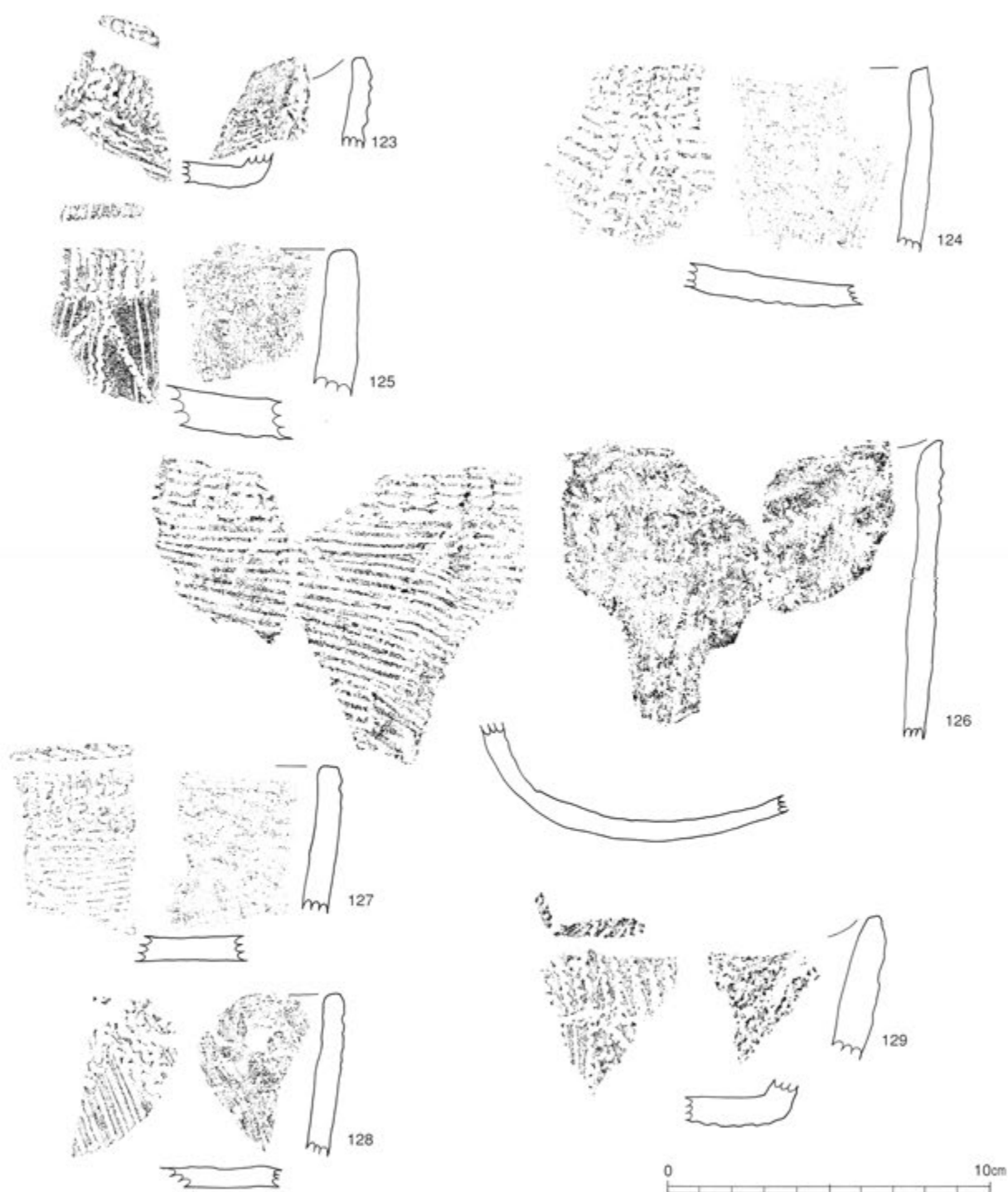


121

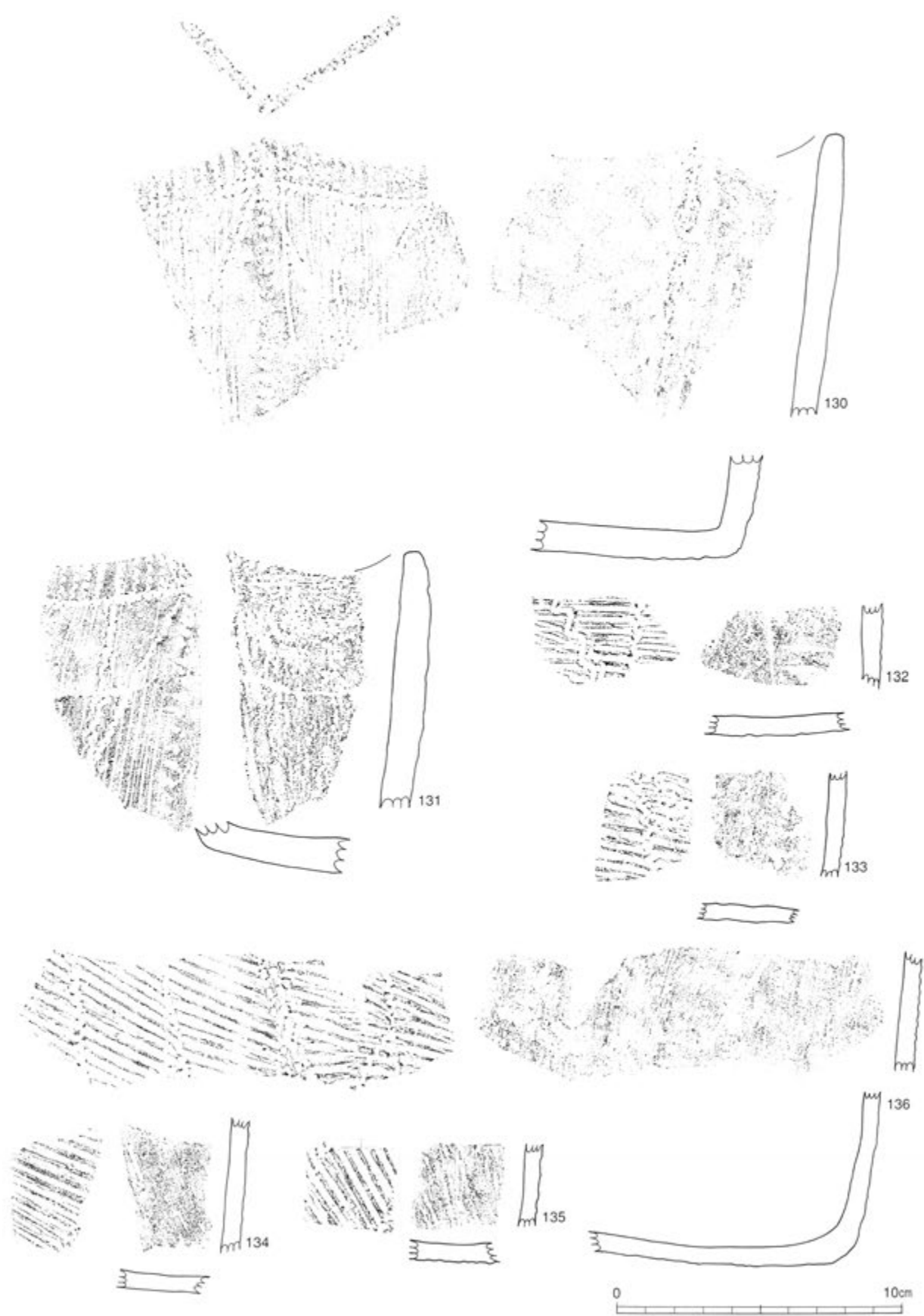


122

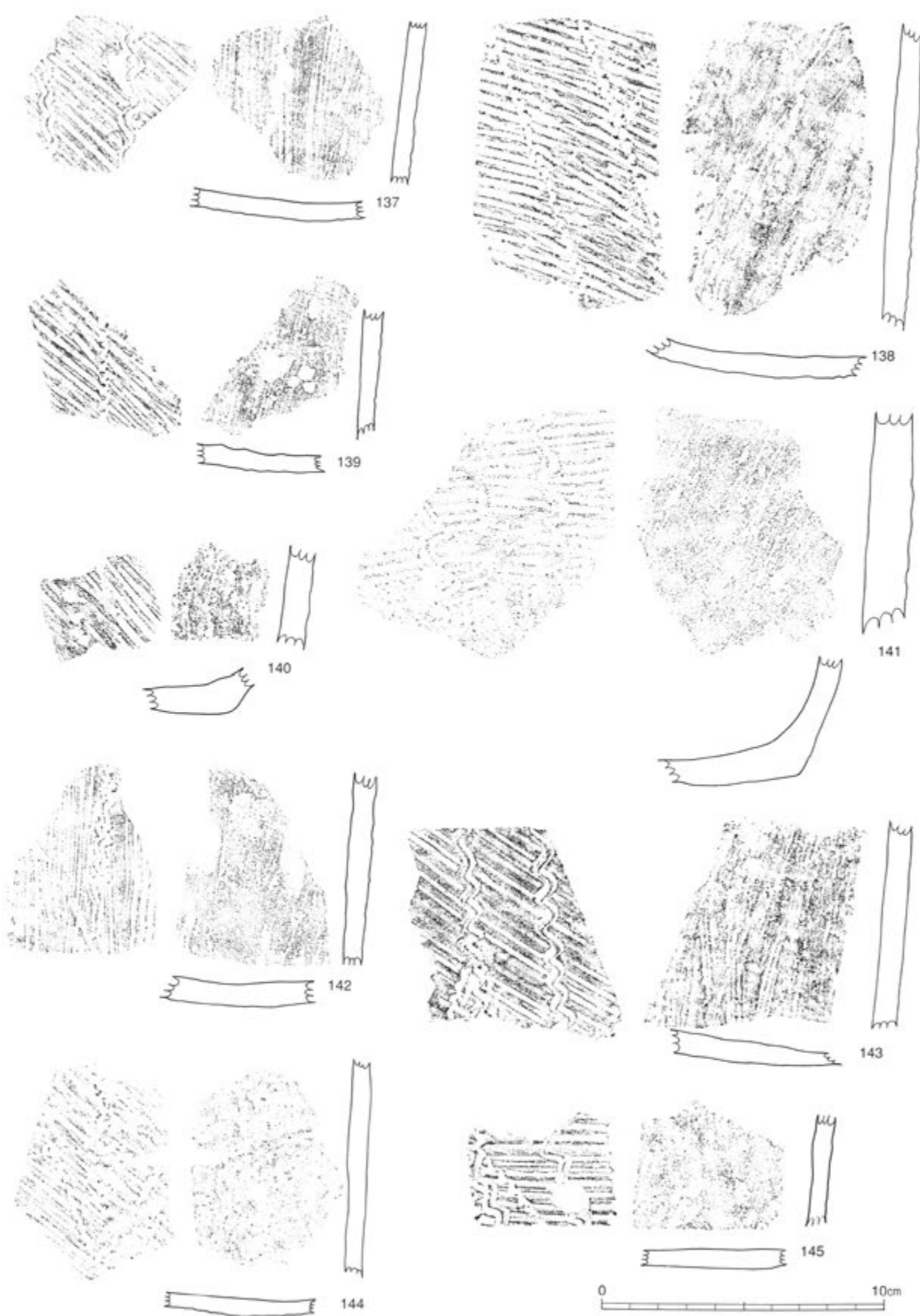
第26図 I 類土器10



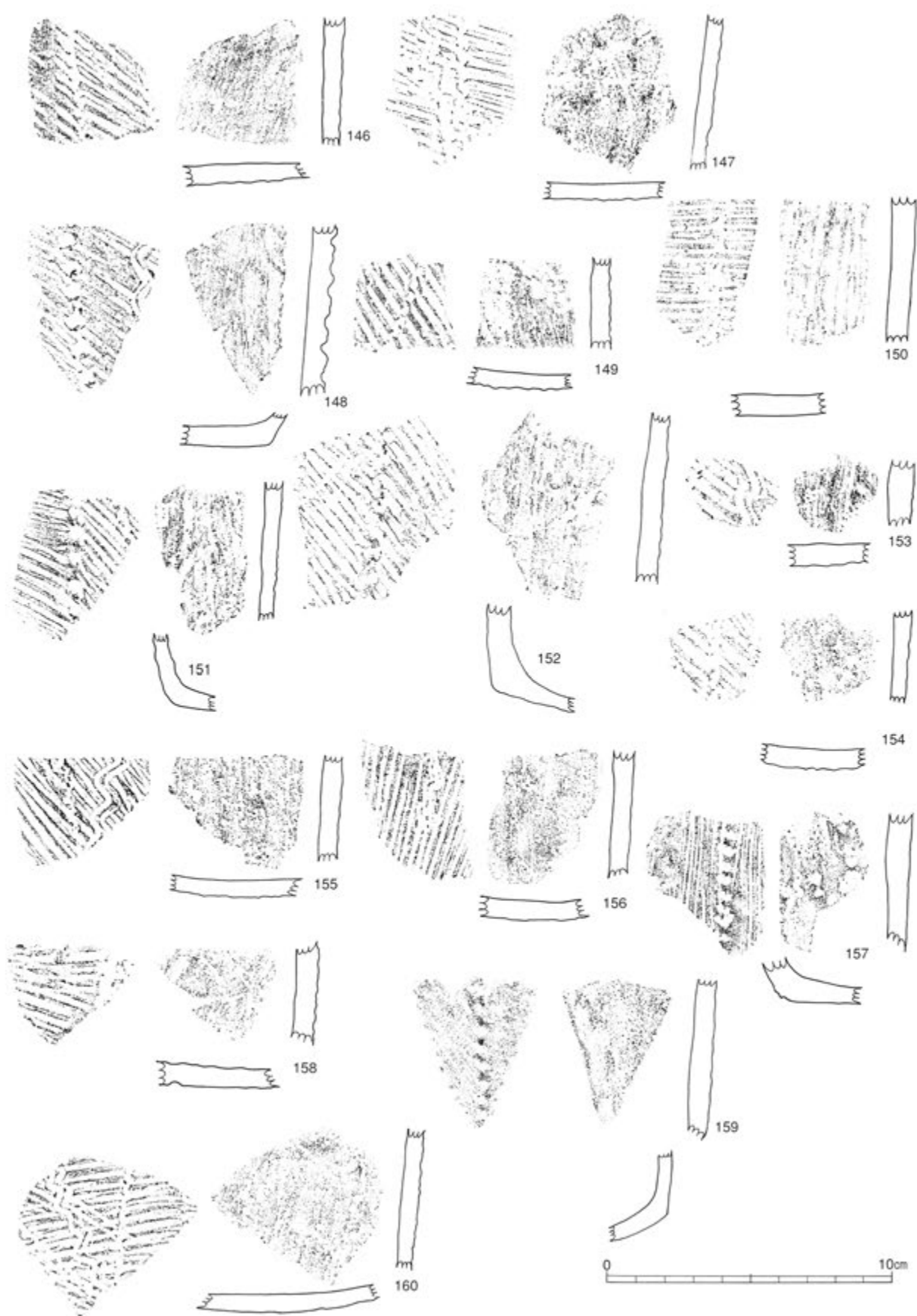
第27図 I 類土器11



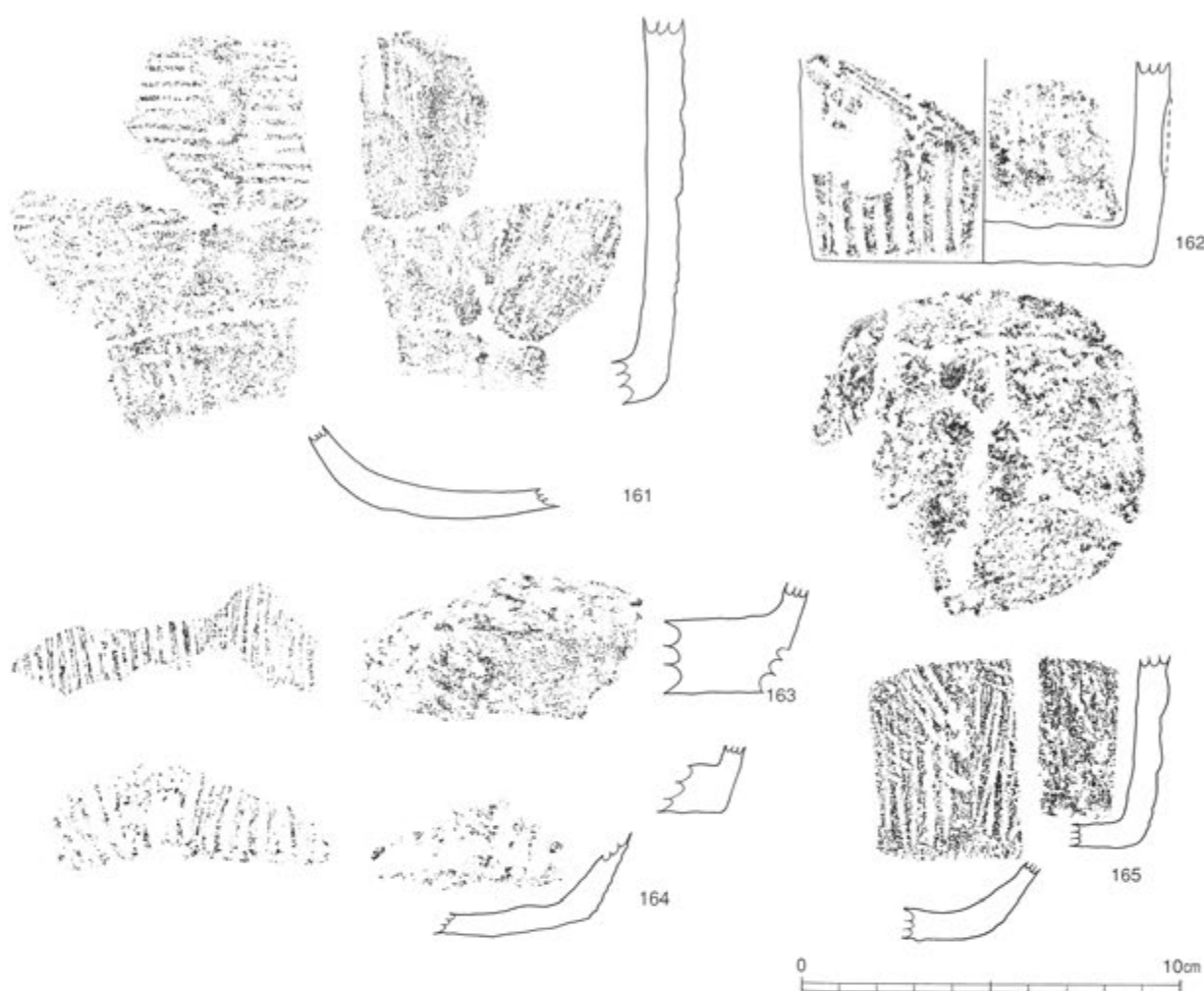
第28図 I 類土器12



第29図 I 類土器13



第30図 I類土器14



第31図 I 類土器15

IV類土器（第33～36図）

178～212の35点を図示できた。口縁部がやや内湾し口唇部は内傾するものであるが、丸みを帯びたものもある。胴部には3条から6条の肋を利用した短めの貝殻条痕を不規則に施すものであるが、綾杉状に施すものもある。また、器壁は分厚い。178は口縁部径35cmを測る大きなものである。口縁部が直行気味で、口縁部直下から短い貝殻条痕による綾杉状の文様を施すものである。179は口縁部径24.6cmを測る。口縁部は内湾し口唇部は丸味を帯びるものである。口縁部直下に貝殻条痕を沈線文状に施し、胴部には短い貝殻条痕を不規則に施すものである。

180は復元口縁部径12.4cmを測る。口縁部はわずかに内湾し口唇部は平坦におさめる。胴部には不規則な短い貝殻条痕を施す。209～212は底部である。

V類土器（第37図）

回転押型文を施すもので、4点が出土している。213は楕円押型文土器である。頸部でややくびれ、口

縁部は外反するものと思われる。214～216は同一個体と思われるもので、胴部に同心円押型文を施すものである。

VI類土器（第37図）

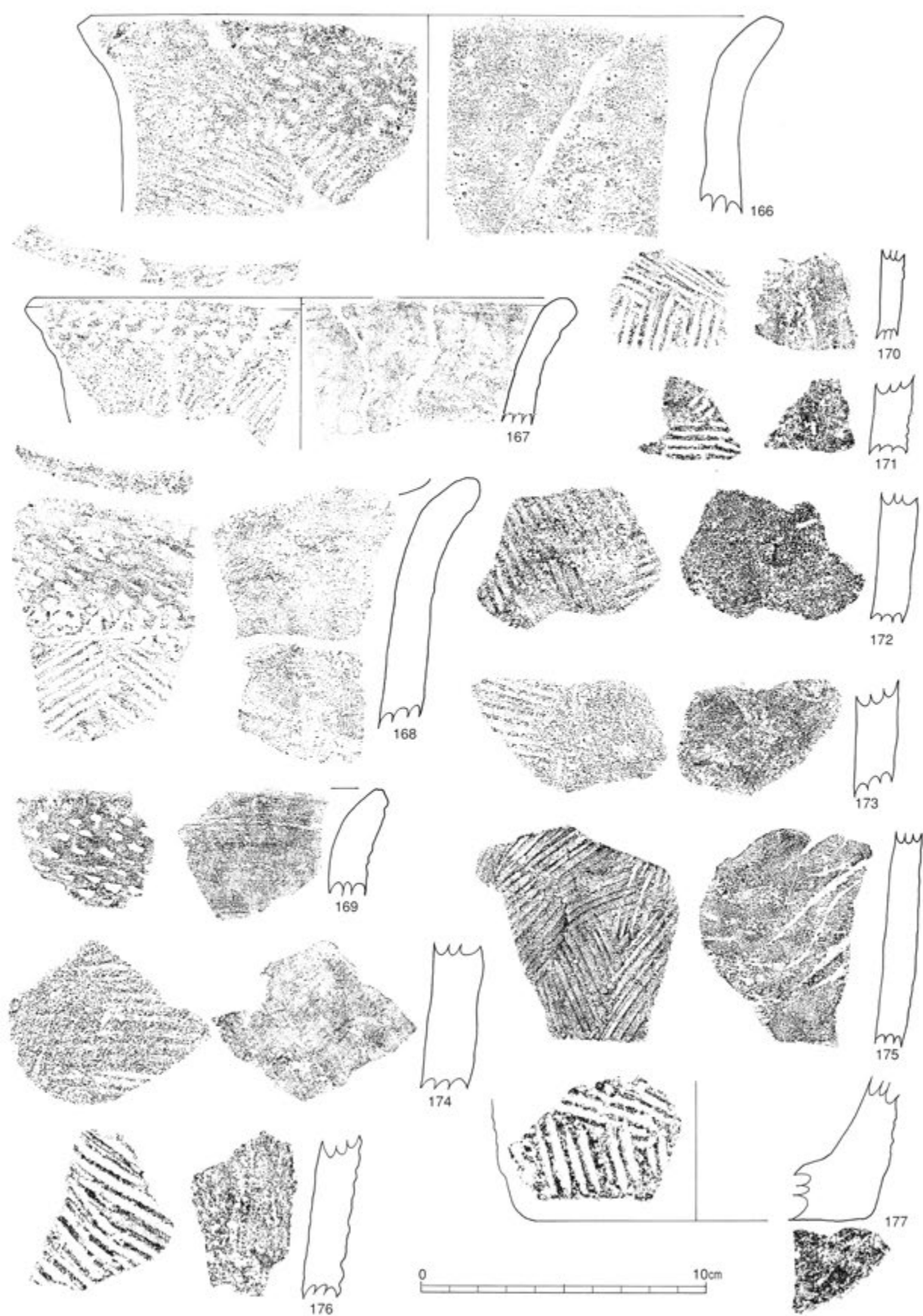
わずかに1点だけのものである。217は口縁部径27.4cmを測る。口縁部及び口唇部に刻目文を施し、胴部は縦位の貝殻条痕の後に横位・斜位の貝殻条痕を施すものである。

VII類土器（第38図）

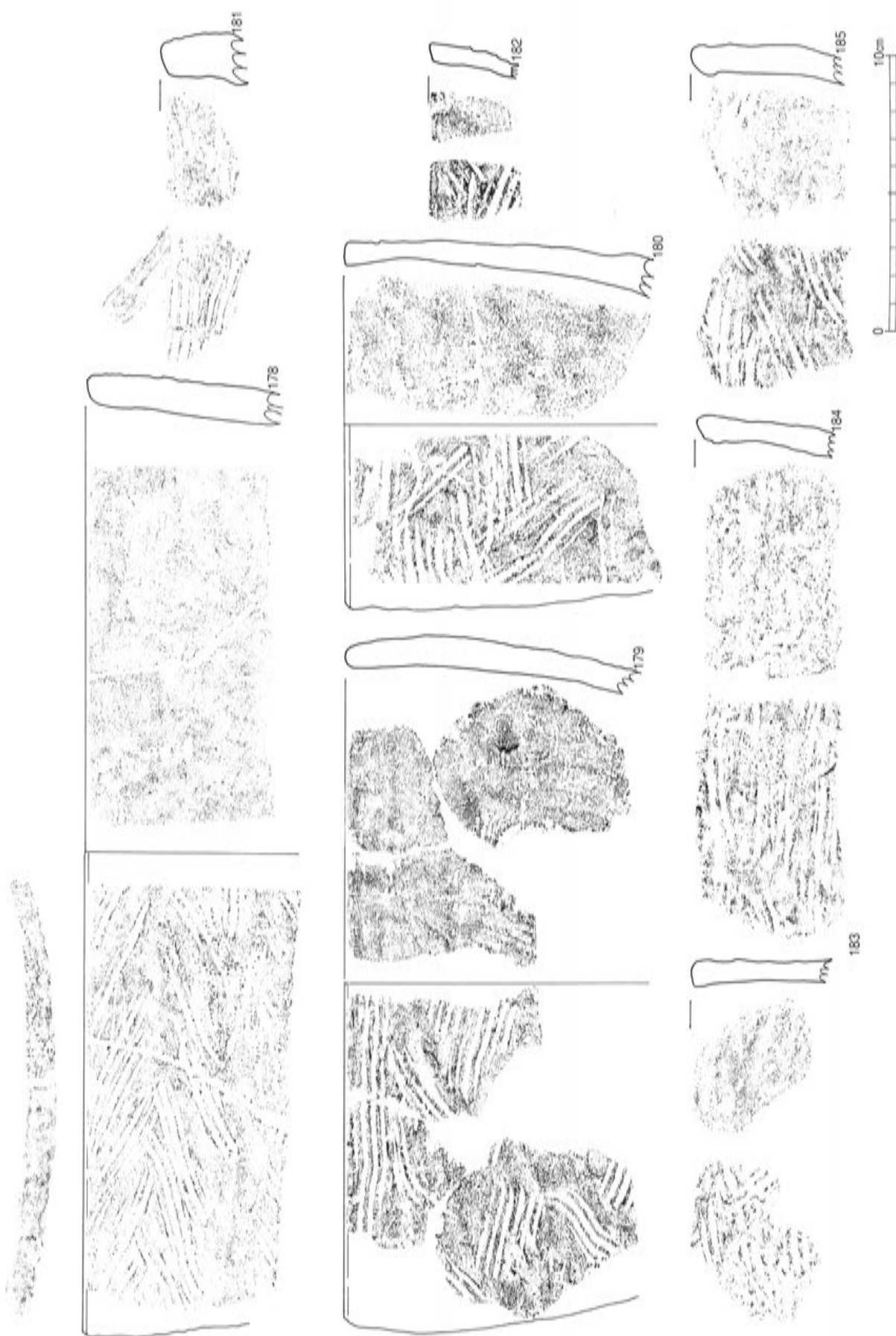
4点を図示できたものである。口縁部がラッパ状に外反する器形のもので、口縁部には沈線文と連続刺突文、胴部に縄文を施すものである。218と219は同一個体と思われる。220は胴部、221は底部である。

VIII類土器（第38図）

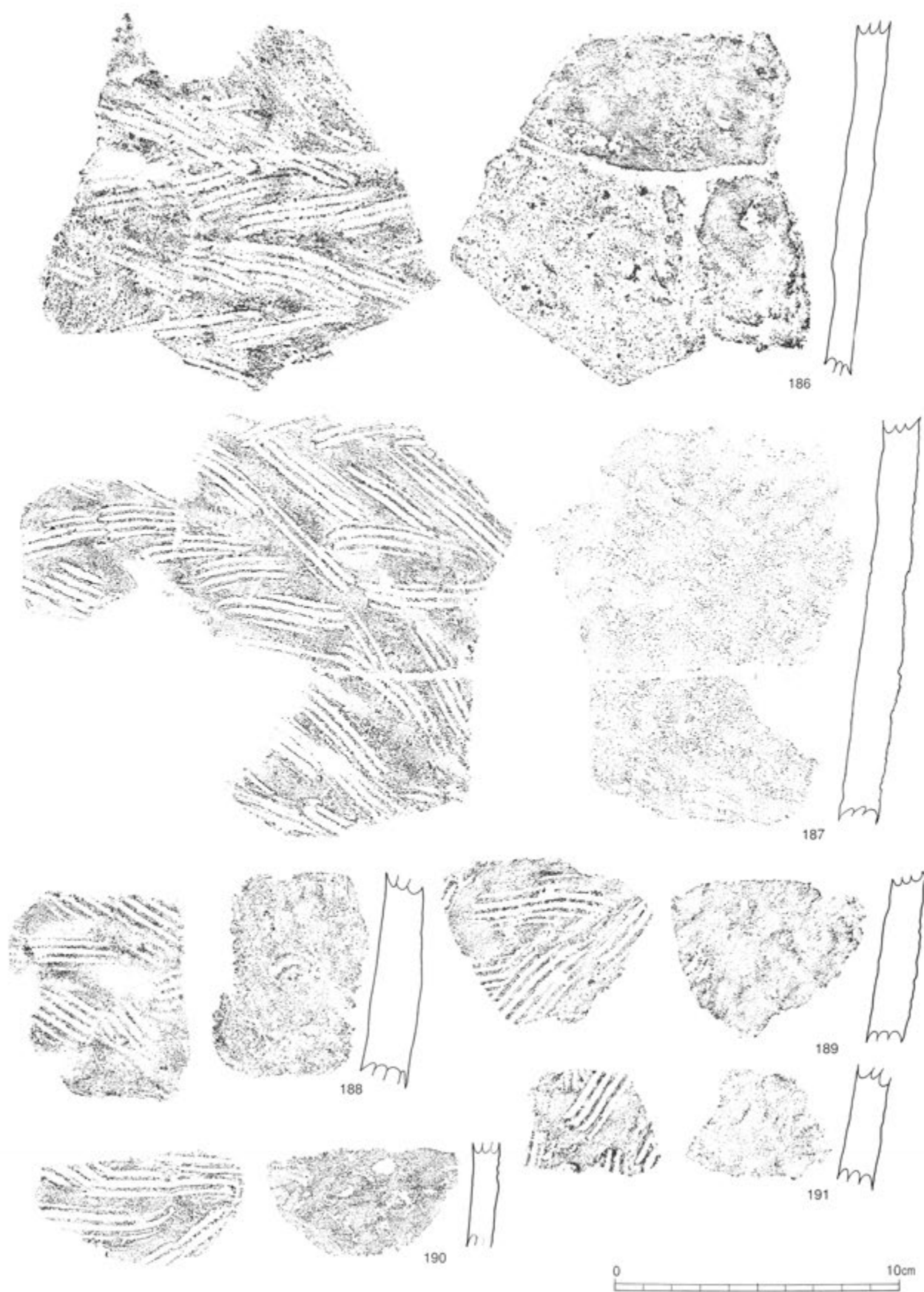
底部のみ3点（222～224）を図示できた。やや薄めの平坦な底から丸味を帯びて立ち上がるもので、横位の沈線文が施される。



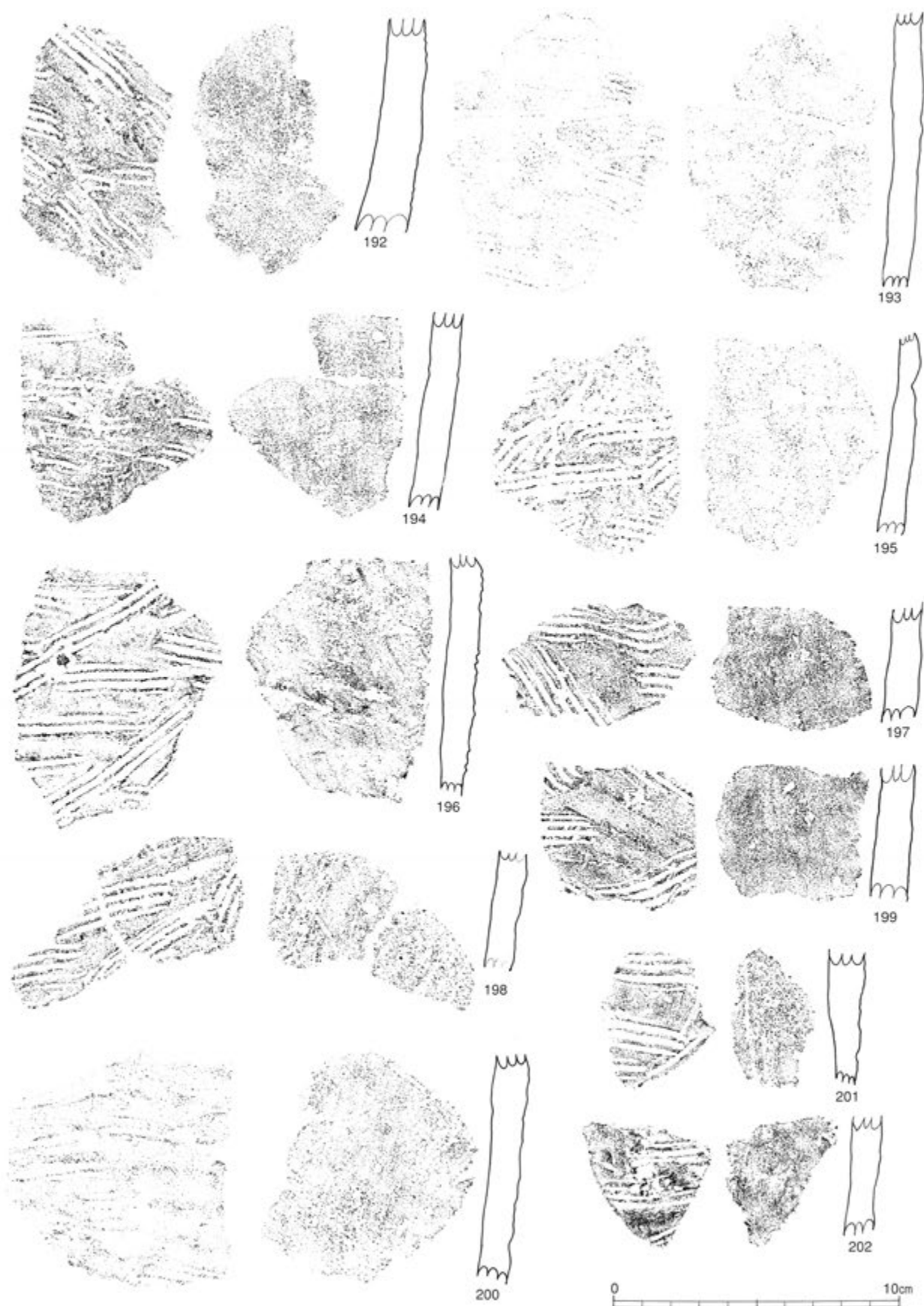
第32図 III類土器



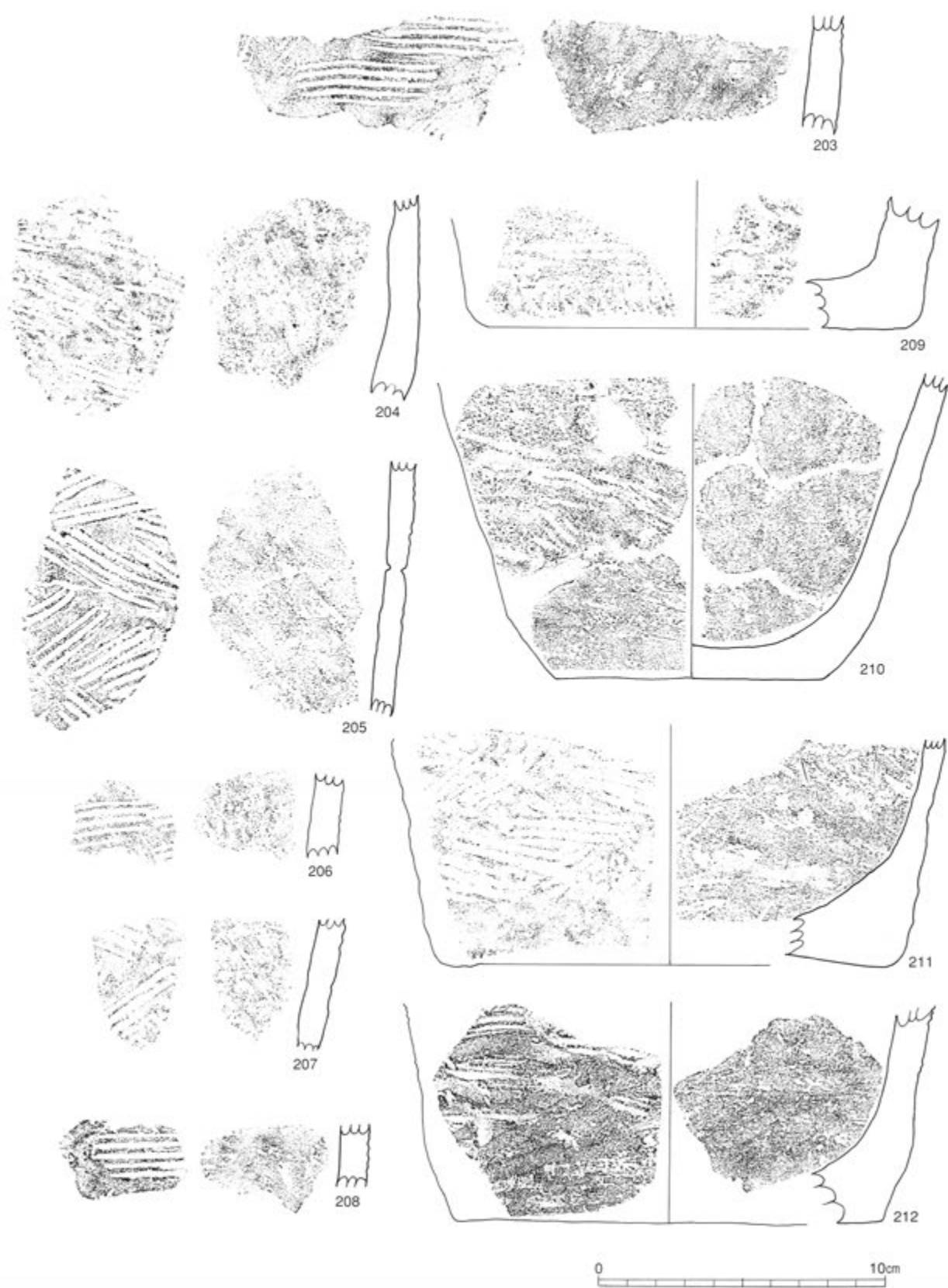
第33図 IV類土器 1



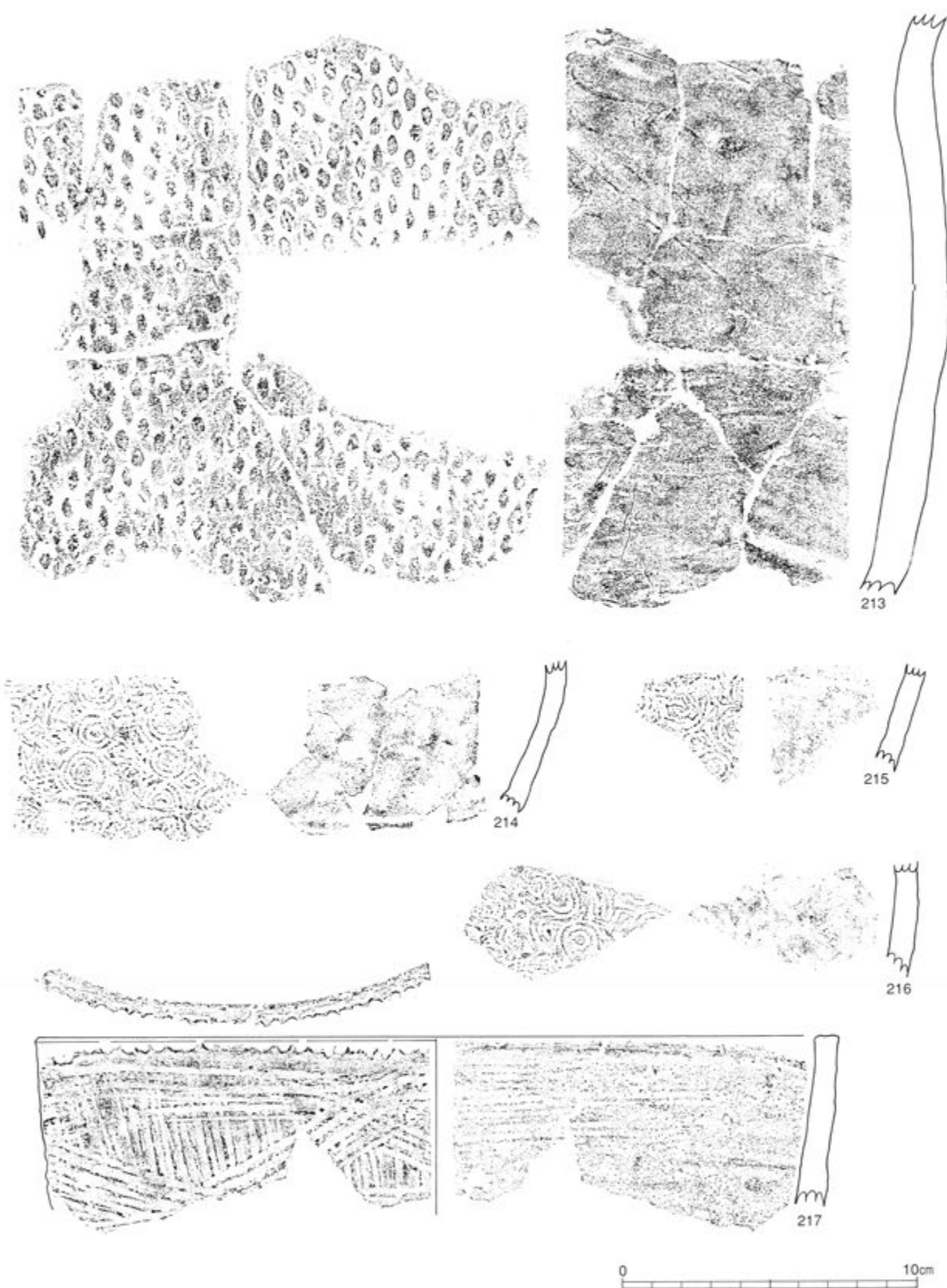
第34図 IV類土器 2



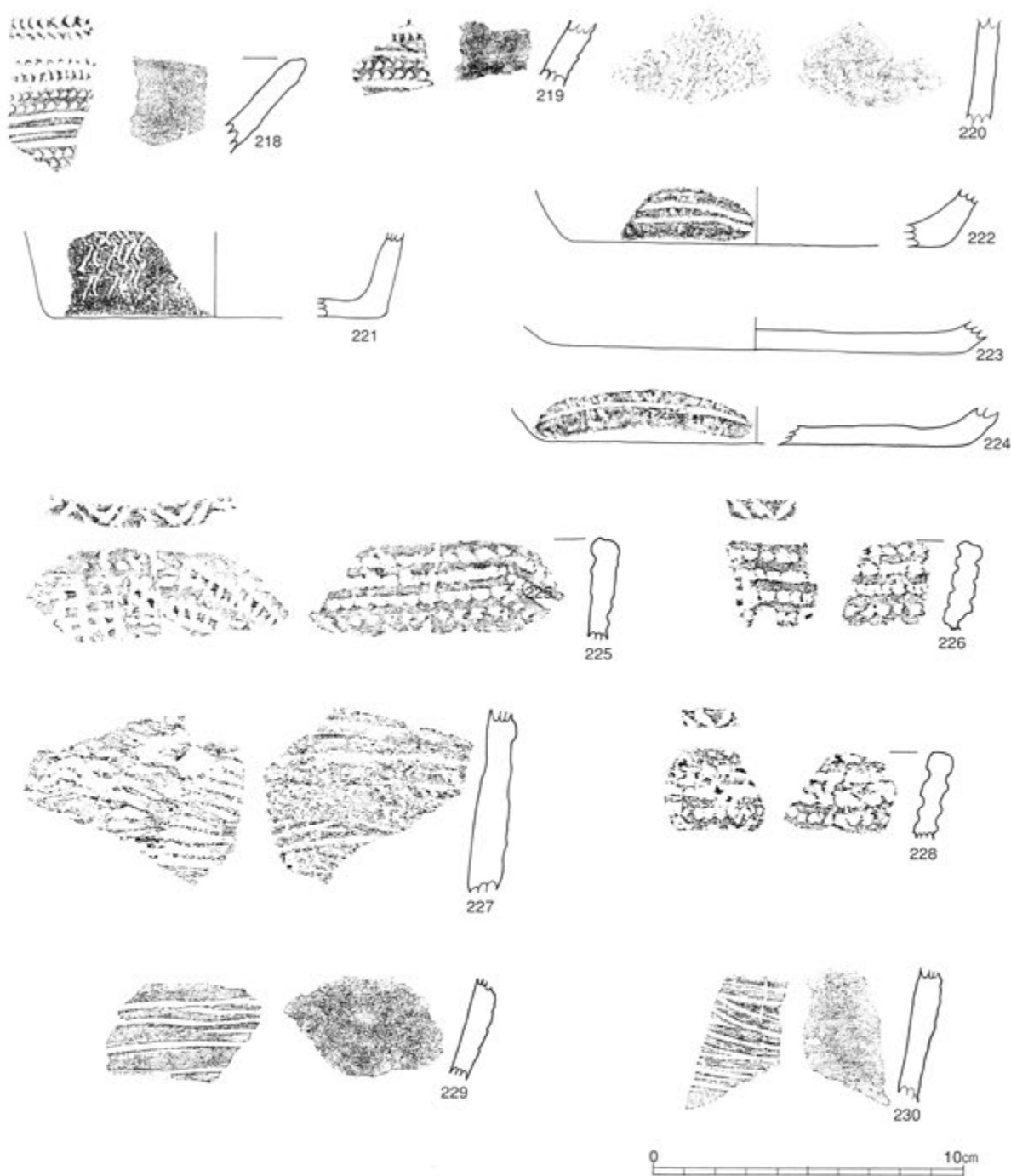
第35図 IV類土器 3



第36図 IV類土器 4



第37図 V・Ⅵ類土器



第38図 VII・VIII・IX・X・XI 類土器

4 縄文時代前期の調査

縄文時代前期の遺物はⅢ層中より出土している。

(1) 遺構

遺構は検出されなかった。

(2) 遺物

遺物は少なく、型式の判明しないものもある。

IX類土器 (第38図)

225～227の口縁部のみ3点を図示したが、同一個体

と思われる。口縁部の内外面に同じような連続刺突文を施し、口唇部には鋸歯状の沈線文を施すものである。

X類土器 (第38図)

1点だけのものである。胴部の内外面に粗い貝殻条痕を施すものである。

XI類土器 (第38図)

口縁部付近の2点であるが、同一個体と思われるものである。横位の沈線文を不規則に施すものである。

Ⅲ～Ⅺ 類土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	色 調	胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
					石英	長石	角閃石	その他				
第32図	166	N-6	Ⅳ	茶 褐 色	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ	
	167	N-4	Ⅳ	暗茶褐色	○	○	○		〃	〃	〃	
	168	N-6	Ⅳ	茶 褐 色	○	○			〃	〃	〃	
	169	N-6	Ⅳ	茶 褐 色	○	○	○		〃	貝殻刺突文 貝殻条痕文	〃	
	170	D-7	Ⅱ	茶 褐 色	○	○			〃	〃	〃	
	171	M-6	Ⅴ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
	172			茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
	173			茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
	174	N-6	Ⅳ	茶 褐 色	○	○			〃	〃	〃	
	175	N-4	Ⅳ	暗茶褐色	○	○	○		〃	〃	〃	
第33図	176	D-6	Ⅴ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
	177	D-7	Ⅳ	茶 褐 色	○	○			〃	〃	〃	
	178	M-6	Ⅳ	茶 褐 色	○	○	○		〃	短貝殻条痕文	〃	
	179	M-6	Ⅳ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
	180	M-6	Ⅴ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
	181	M-5	Ⅴ	茶 褐 色	○	○			〃	〃	〃	
	182	M-6	Ⅳ	茶 褐 色	○	○			〃	〃	〃	
	183	M-6	Ⅳ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
第34図	184	M-6	Ⅴ	茶 褐 色	○	○			〃	〃	〃	
	185	M-6	Ⅴ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
	186	M-7	Ⅱ	茶 褐 色	○	○	○		〃	短貝殻条痕文	〃	
	187	N-6	Ⅳ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
	188	N-6	Ⅳ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
	189	M-6	Ⅴ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
第35図	190	M-6	Ⅳ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
	191	M-6	Ⅴ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
	192	M-6	Ⅴ	茶 褐 色	○	○	○		〃	短貝殻条痕文	〃	
	193	N-7	Ⅶ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
	194	M-6	Ⅳ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
	195	N-6	Ⅳ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
	196	N-6	Ⅳ	暗茶褐色	○	○	○		〃	〃	〃	
	197	M-6	Ⅳ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
	198	M-6	Ⅴ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
	199	D-6	Ⅳ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
第36図	200	M-6	Ⅴ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
	201	M-6	Ⅲ	茶 褐 色	○	○			〃	〃	〃	
	202	M-6	Ⅳ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
	203	M-6	Ⅴ	茶 褐 色	○	○	○		〃	短貝殻条痕文	〃	
	204	N-7	Ⅶ	茶 褐 色	○	○			〃	〃	〃	
	205	M-6	Ⅳ	茶 褐 色	○	○			〃	〃	〃	
	206	M-7	Ⅳ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
	207	N-6	Ⅳ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
	208	M-6	Ⅴ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
	209	N-6	Ⅳ	茶 褐 色	○	○			〃	〃	〃	
第37図	210	M-6	Ⅴ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
	211	N-6	Ⅳ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
	212	M-6	Ⅳ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
	213	J-7	Ⅱ	茶 褐 色	○	○	○		〃	楕円押型文 同心円押型文	〃	
	214	L-1	Ⅳ	暗茶褐色	○				〃	〃	〃	
第38図	215	L-2	Ⅳ	暗茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	216	L-2	Ⅳ	茶 褐 色	○	○			〃	〃	〃	
	217	G-7	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	貝殻刻目文・貝殻条痕文	〃	
	218	E-7	Ⅱ	茶 褐 色	○	○	○		〃	刺突連点文・沈線文	〃	
	219	E-7	Ⅱ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
	220	E-7	Ⅱ	茶 褐 色	○	○	○		〃	縄文	〃	
	221	E-7	Ⅲ	茶 褐 色	○	○			〃	〃	〃	
	222	N-6	Ⅳ	淡茶褐色	○				〃	沈線文	〃	
	223	N-6	Ⅳ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	
	224	N-6	Ⅳ	茶 褐 色	○	○			〃	〃	〃	
	225	M-10	Ⅲ	茶 褐 色	○	○	○		〃	刺突連点文・刻目突帯	刺突連点文	
	226	M-10	Ⅲ	茶 褐 色	○	○			〃	〃	〃	
	227	D-5	Ⅱ	茶 褐 色	○	○			〃	貝殻条痕文	ケズリ	
	228	M-10	Ⅲ	茶 褐 色	○	○			〃	刺突連点文	刺突連点文	
	229	D-4	Ⅱ	黒茶褐色	○				〃	沈線文	ケズリ	
	230	G-5	Ⅱ	茶 褐 色	○	○	○		〃	〃	〃	

縄文時代早期の石器（第39～47図）

縄文時代早期に該当する石器は、Ⅳ層・Ⅴ層より出土している。石槍・打製石鏃・楔形石器・磨製石斧・局部磨製石斧・砥石・磨石・叩石・石皿等多くの石器が出土している。

石鏃（第39～41図）

231～273は石鏃で43点が出土している。素材としては玉髄・頁岩・安山岩・黒曜石・チャート・鉄石英・姫島産の黒曜石等が用いられている。石鏃の分類は草創期の分類と同様である（第11図参照）。

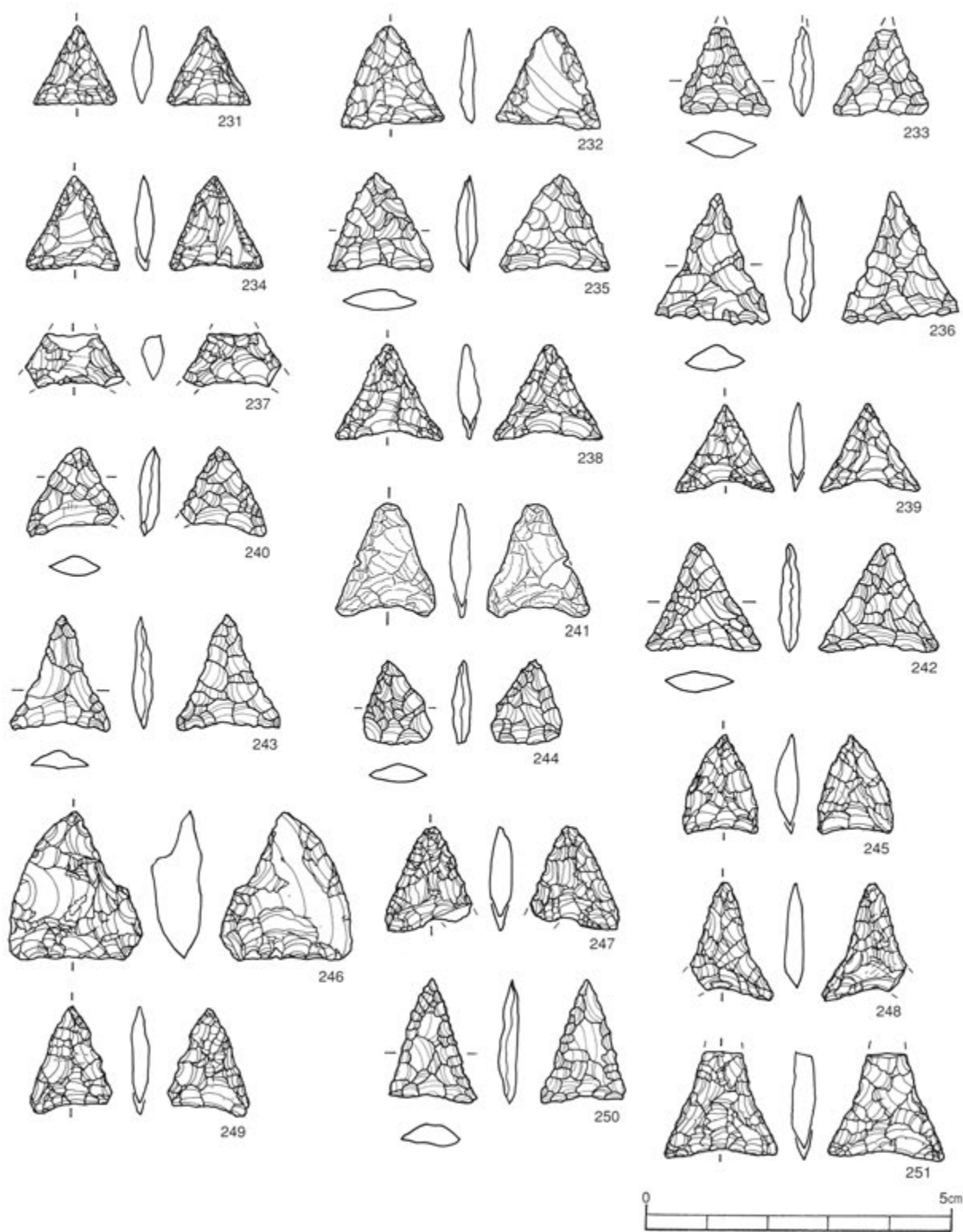
調整方法は入念な交互剥離により加工調整されている。また、主要剥離面を残し、簡単な調整を加えたものもある。

231～236は三角形のA— a — a 類、237～243はA— a — b 類、244～251はA— b — b 類、252～254は基部が欠損しているもののA— b — c 類と思われる。255は基部が斜めになるものの分類上はA— b — a 類に入る。256はA— b — d 類、257～267は基部が欠損するものはあるが、A— c 類に入るものである。A— c — a 類（261・263・265）とA— c — b 類（257・262・264・266・267）に分けられる。268～272はB類で、B— b — b 類（268～271）、B— c — b 類に分けられる。

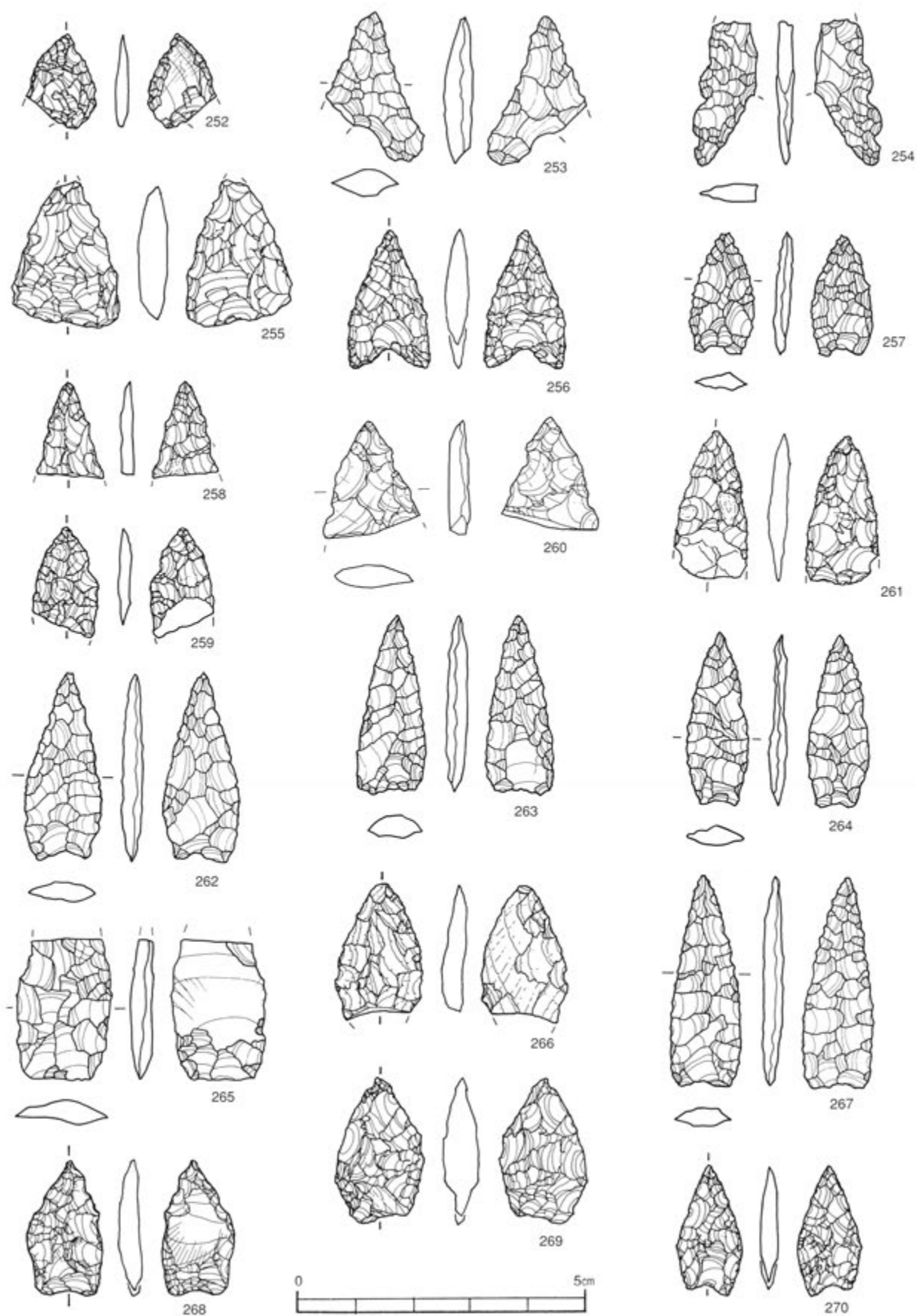
273は尖頭部が鋭くはないが、丸形のC— b — a 類に入る。

石鏃観察表

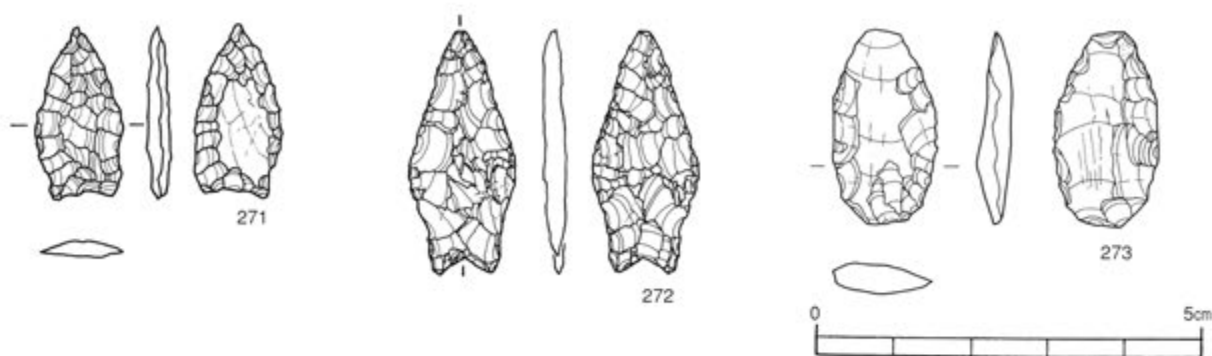
挿図 番号	遺物 番号	器 種	出土区	層位 遺構	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考
						cm	cm	cm	g	
第 16 図	44	石槍	D—6	Ⅶ	安 山 岩	16.2	1.4	0.74	28.66	
	45	石槍	D—6	Ⅶ	安 山 岩	15.4	1.7	0.85	43.27	
	46	石槍	D—6	Ⅶ	安 山 岩	17.25	2.75	0.8	37.58	
第 39 図	231	石鏃	N—6	Ⅴ	頁 岩	1.3	1.5	0.33	0.43	
	232	石鏃	M—6	Ⅳ	頁 岩	1.8	1.55	0.2	0.5	
	233	石鏃	M—7	Ⅳ	頁 岩	1.45	1.75	0.4	0.64	
	234	石鏃	N—6	Ⅳ	頁 岩	1.6	1.85	0.3	0.57	
	235	石鏃	M—6	Ⅴ	安 山 岩	1.65	1.7	0.35	0.61	
	236	石鏃		Ⅳ	頁 岩	2.15	1.8	0.5	1.23	
	237	石鏃	N—7	Ⅳ b	安 山 岩	0.8	1.65	0.32	0.47	
	238	石鏃	M—5	Ⅴ	チャート	1.6	1.5	0.4	0.66	
	239	石鏃	N—5	Ⅴ	頁 岩	1.5	1.9	0.23	0.34	
	240	石鏃	M—6	Ⅴ	頁 岩	1.5	1.7	0.3	0.6	
	241	石鏃	M—7	Ⅳ	頁 岩	1.8	1.7	0.3	0.75	
	242	石鏃	N—4	Ⅴ	チャート	1.9	1.1	0.77	0.3	
	243	石鏃	M—6	Ⅴ	頁 岩	1.9	1.3	0.35	0.6	
	244	石鏃	M—6	Ⅳ	黒 曜 石	1.3	2.2	0.3	0.36	
	245	石鏃	N—7	Ⅳ b	安 山 岩	1.7	1.4	0.4	0.65	
	246	石鏃	N—6	Ⅳ	安 山 岩	2.5	1.3	0.75	3.26	
	247	石鏃	N—7	Ⅳ	チャート	1.8	1.35	0.35	0.7	
	248	石鏃	N—7	Ⅳ	頁 岩	1.8	1.45	0.24	0.48	
	249	石鏃	N—6	Ⅳ	黒曜石(姫島)	1.8	1.9	0.3	0.48	
	250	石鏃	N—6	Ⅴ	チャート	2.1	1.2	0.35	0.72	
第 40 図	251	石鏃	N—5	Ⅴ	玉 ズ イ	1.8	2.6	0.37	0.99	
	252	石鏃	N—5	Ⅳ	チャート	1.6	1.1	0.3	0.42	
	253	石鏃	N—6	Ⅳ	赤 鉄 英	2.65	1.4	1.1	0.3	
	254	石鏃	M—7	Ⅳ	黒 曜 石	2.6	1.4	0.3	0.69	
	255	石鏃	N—5	Ⅳ b	安 山 岩	2.4	1.1	0.52	2.6	
	256	石鏃	M—7	Ⅳ	チャート	2.5	1.2	0.4	1.15	
	257	石鏃	N—6	Ⅴ	玉 ズ イ	2.15	1.1	0.3	0.61	
	258	石鏃	D—7	Ⅴ	頁 岩	1.7	1.6	0.2	0.36	
	259	石鏃	N—7	Ⅳ	玉 ズ イ	1.7	1.25	0.2	0.48	
	260	石鏃	N—7	Ⅳ	チャート	2	1.5	0.45	0.99	
	261	石鏃	N—6	Ⅳ	赤 鉄 英	2.6	3.85	0.3	0.88	
	262	石鏃	D—6	Ⅴ	安 山 岩	2.3	3.05	0.35	0.84	
	263	石鏃		Ⅴ	チャート	3.15	1.2	0.4	1.38	
	264	石鏃		Ⅴ	安 山 岩	3.05	1.1	0.3	0.85	
	265	石鏃	N—7	Ⅴ	頁 岩	2.5	1.6	0.4	2.01	
	266	石鏃	D—6	Ⅴ	安 山 岩	3.4	1.35	0.4	1.2	
	267	石鏃	D—6	Ⅴ	頁 岩	3.75	1.25	0.4	1.63	
	268	石鏃	N—7	Ⅳ	硅 質 頁 岩	2.4	1.2	0.35	1.14	
	269	石鏃		Ⅳ	チャート	2.7	1.5	0.64	2.29	
	270	石鏃	M—7	Ⅳ	チャート	2.2	1.15	0.3	0.67	
第 41 図	271	石鏃	D—6	Ⅴ	赤 鉄 英	2.3	1.15	0.3	0.76	
	272	石鏃		Ⅱ	頁 岩	3.25	1.4	0.3	1.16	
	273	石鏃	M—7	Ⅳ	頁 岩	2.6	1.35	0.4	1.63	



第39図 縄文時代早期出土石器 1



第40図 縄文時代早期出土石器 2



第41図 縄文時代早期出土石器 3

石槍（第16・42図）

274・275はハリ質安山岩を素材とした石槍である。44～47の石槍と同様に、Ⅰ類土器に伴うものと思われる。274は完形で、275は基部・尖頭部を欠損するがともに調整は体部中央部まで達する平坦で粗い加工調整を施した後に、両側面共に微細な調整剥離が行なわれる。断面形はいずれも凸レンズ状である。

不定形石器（第43図）

276～282は定型石器としての位置付けが明確に出来ないものである。276は小さくやや厚めの剥片に粗い調整剥離が加えられたもので、一辺には微細な調整を有するものである。277は縦長の剥片で、上辺につぶれが生じている。278は小さく厚みのある剥片を素材に用い、上面につぶれが認められるものである。279は一面に自然面を残し、一辺に微細剥離が認められる。280は折れか切断による不定型な剥片でやや厚みがある。一部に微細な剥離が見られる。

281・282は扁平な大形剥片を素材とする。281は縁辺に調整剥離の加えられない部分を残し、側辺の一部に調整が認められる。282は背面の一部に自然面を残した不定形な剥片で、比較的角度のある下辺部に微細な剥離が見られる。

石斧（第44図）

283～291は石斧である。283・284は局部磨製石斧。238は短冊形で刃部を欠損する。側縁には剥離調整が認められ、表面・裏面とも部分的に擦痕が見られる。284は側縁がやや張るものの形態的には短冊形である。裏面には縦方向の大きな剥離が残るものである。刃部に擦痕が認められる。285～291は打製石斧である。基本的には短冊形の石斧であるが、287は側縁が外弯し、290は内弯する。285は刃部を欠損する。286・289・290は両面共に自然面を残すもので、素材選択の意図が窺える。287は片面に自然面を残す。288は刃部を欠

損する。290はやや大型の石斧で厚くしあげたものである。291は一面に自然面を残す石斧の破損品である。

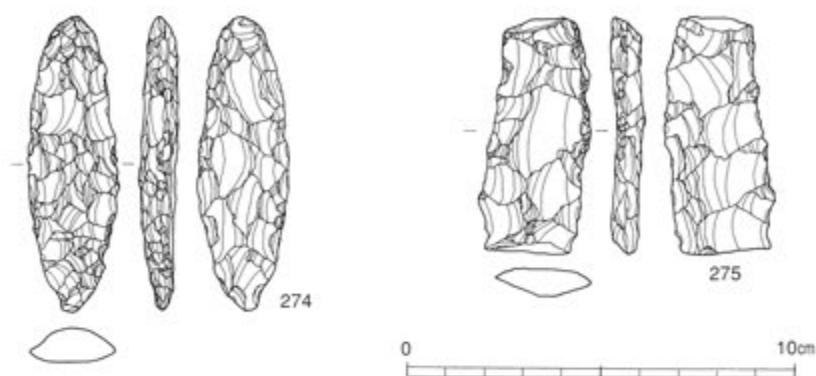
礫器（第45図）

292～298は礫器としたものである。292は横剥ぎの剥片を素材とし、両側縁に剥離調整が施されたものである。293は両面に自然面を残し、縁辺部に粗い剥離調整が施される。294は一部に自然面を残すもので側縁・下縁に剥離調整が見られる。295は片面に自然面を残す剥片で下縁には剥離調整が施される。

296は粗い剥離調整が施される。297は表面の下端に自然面を残すもので、下縁に微細な加工痕を認める。298は片面に自然面を残すもので、裏面の下縁に剥離調整が施される。299は小型のもので剥離調整が施される。

砥石（第45図）

300は扁平な砂岩を利用したもので砥石として取り扱ったものである。両面及び側面に擦痕が見られる。



第42図 縄文時代早期出土石器 4

磨石・叩石・凹石（第46・47図）

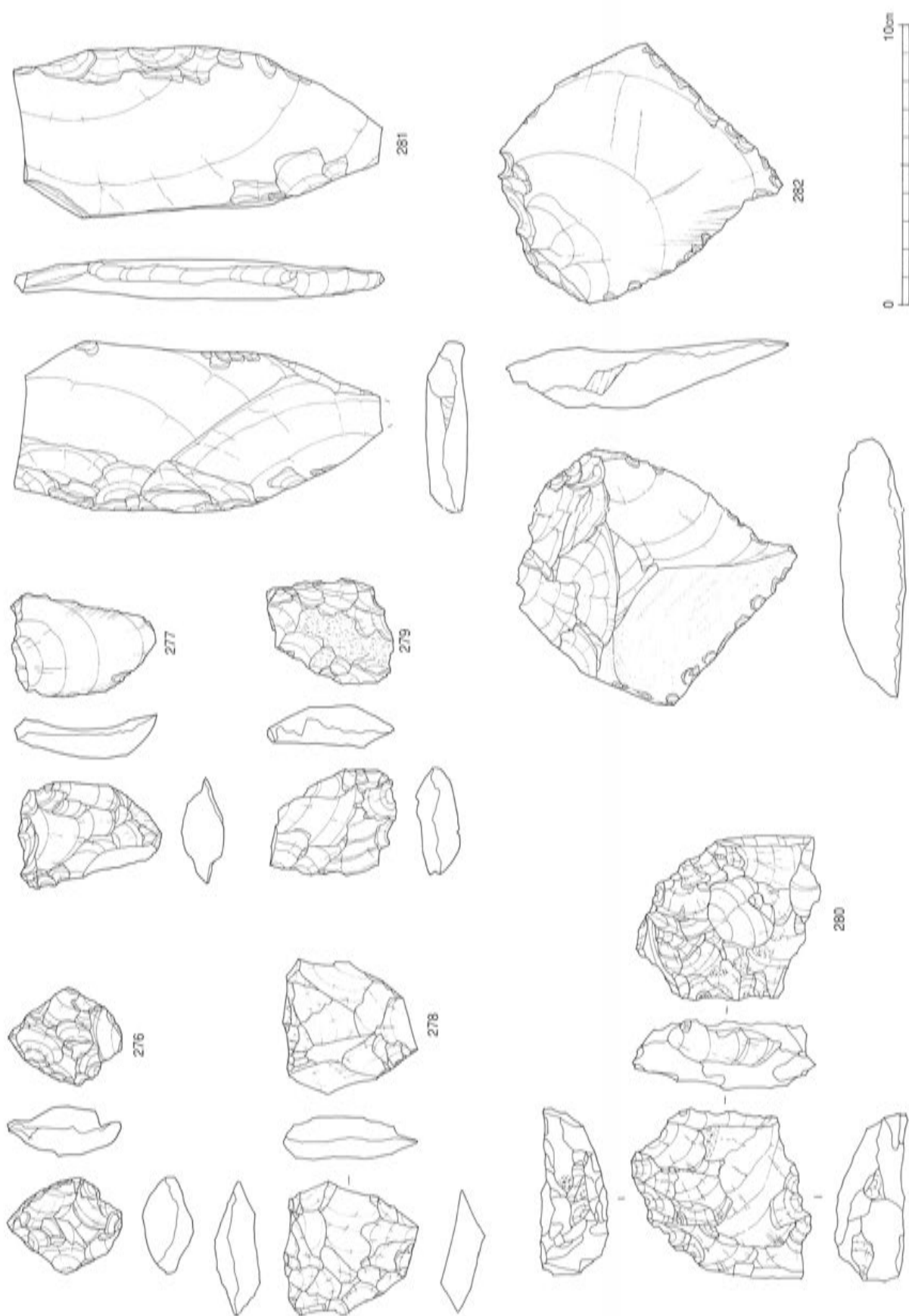
301～311は磨石・叩石・凹石の類である。素材には砂岩が多く使われ、安山岩・頁岩も若干見られる。これらの中には、磨っただけの磨石、表面及び側面等に敲打の見られる叩石、一部に堅果類等を砕いたためにできたのではないかと考えられる凹みを有する凹石、また、1個の石器のなかで2～3種の機能を有するものなど多岐にわたるものがある。

301～309は基本的に磨石であるが、301・302は磨面だけが見られる磨石。303～309は磨面・敲打痕及び凹

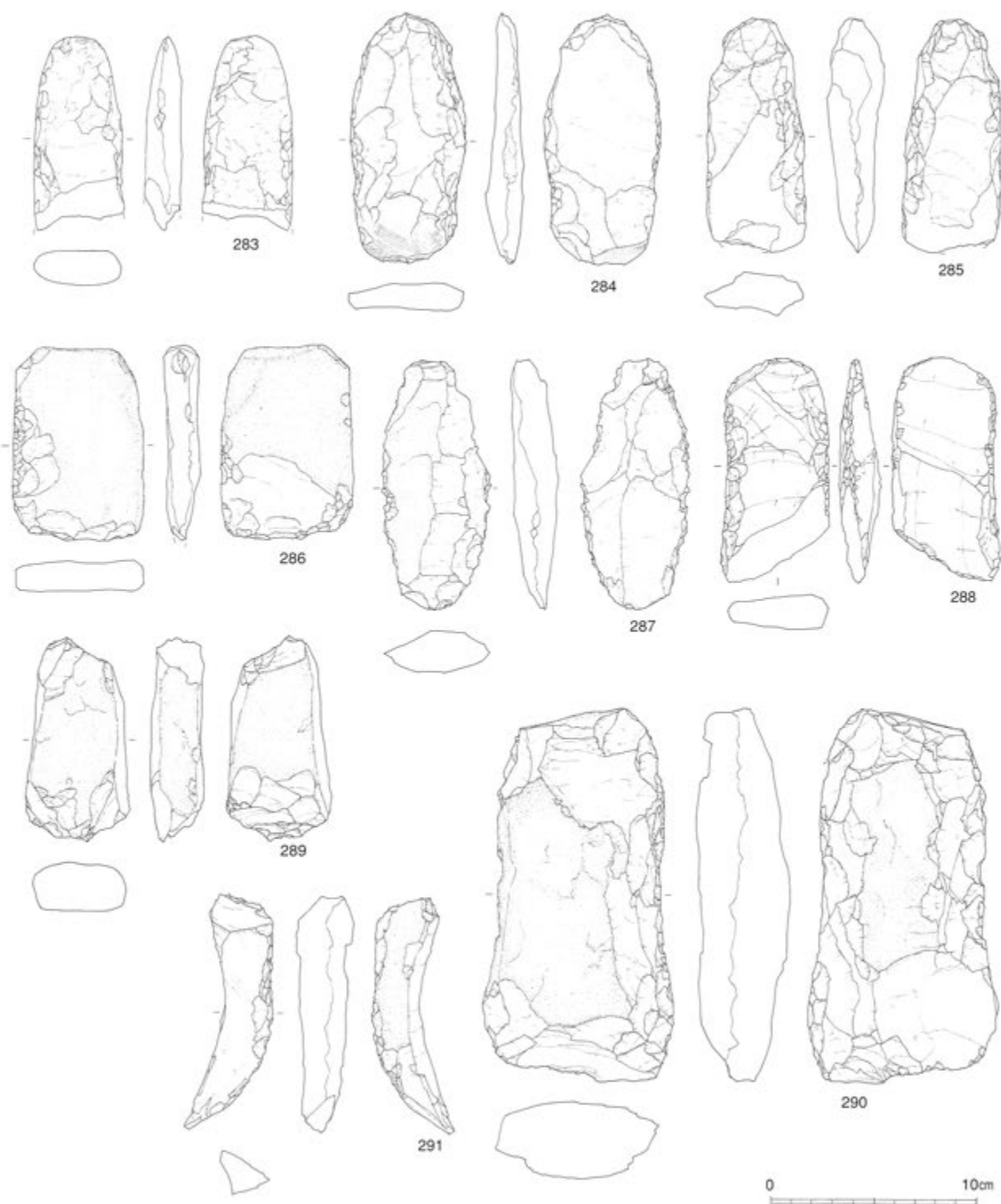
面を有するものである。303は側縁に著しい敲打痕が見られる。304～306及び309は両面・片面に凹みを有する凹石。307は側縁に敲打痕、両面に凹みを有するもの。308は側縁に敲打痕が認められるものである。310・311は棒状の自然礫を使用したもので、310は片面に凹みを有する。311は下端が敲打によると思われる欠落部分が見られる。

石皿（第47図）

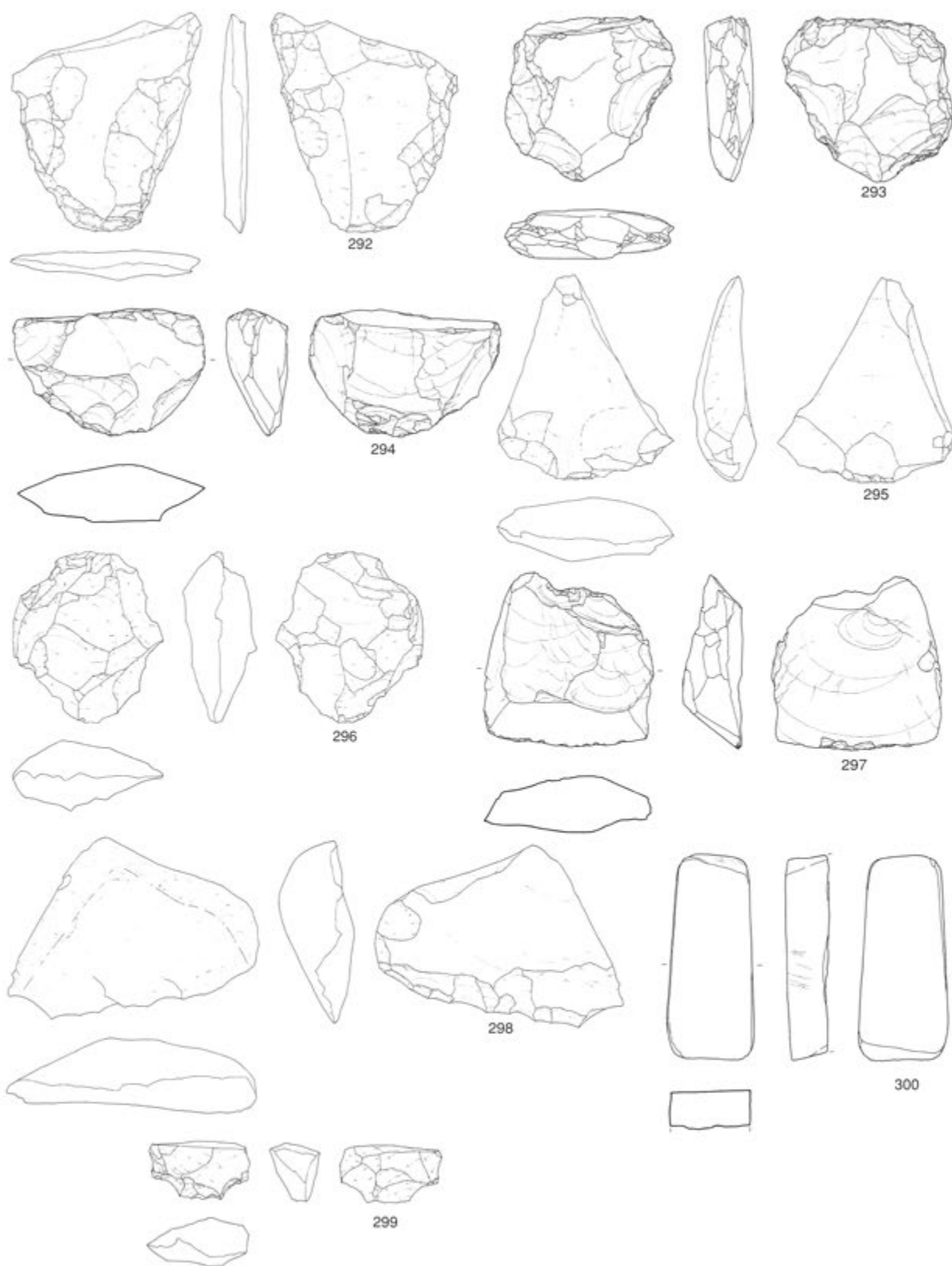
312は石皿であるが、大半が欠落しているもので、一面に作業面が認められるものである。



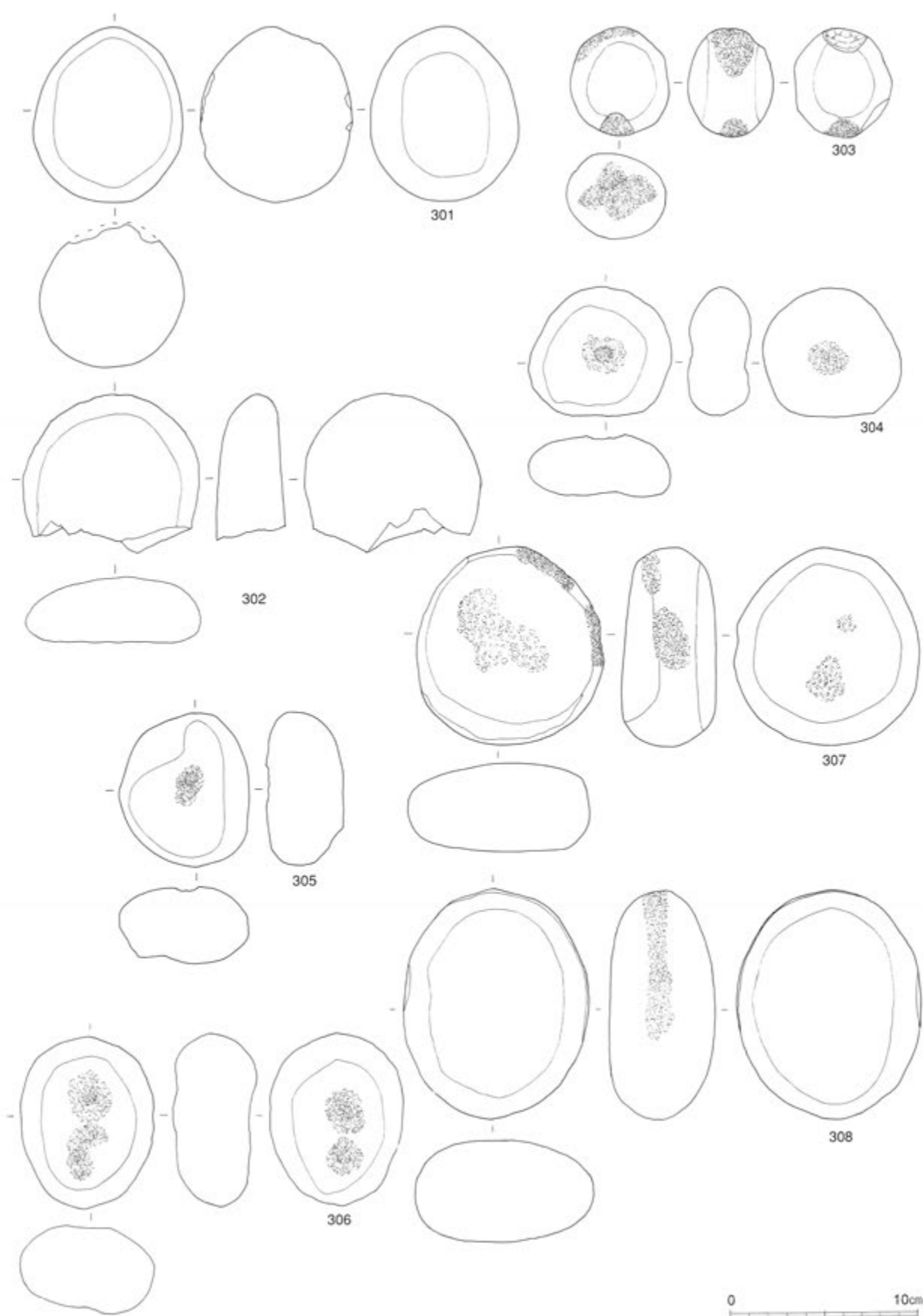
第43図 縄文時代早期出土石器 5



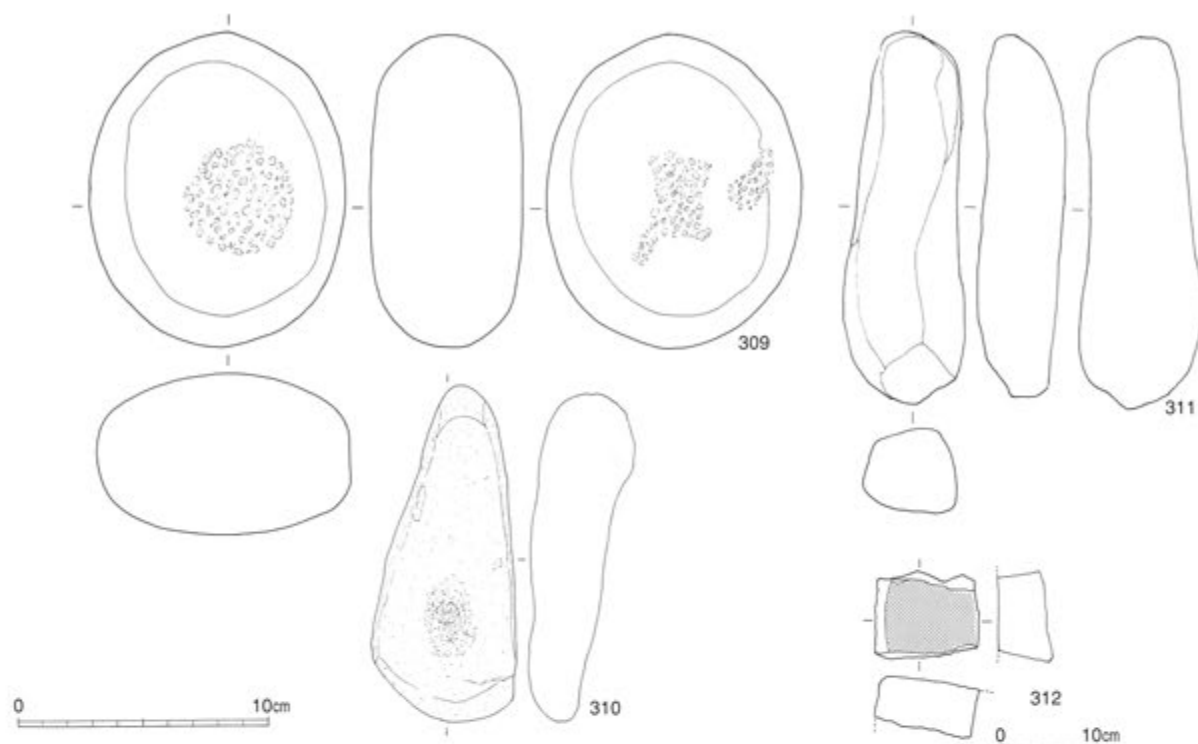
第44図 縄文時代早期出土石器 6



第45図 縄文時代早期出土石器 7



第46図 縄文時代早期出土石器 8



第47図 縄文時代早期出土石器 9

石器観察表石槍～石皿

挿図 番号	遺物 番号	器 種	出土区	層位 遺構	石 材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備 考
第42図	274	石槍	N-8	IV	ハリ質安山岩	7.8	2.55	0.94	18.47	
	275	石槍	D-5	IV	ハリ質安山岩	6.2	3.05	0.8	15.85	
第43図	276	スクレイパー	N-6	IV	頁 岩	2.6	2.35	1.1	5.71	
	277	スクレイパー		IV	頁 岩	3.3	2.4	0.75	6.66	
	278	スクレイパー	M-6	IV	頁 岩	3.25	3.8	1.05	9.61	
	279	スクレイパー	D-6	IV	玉 ズ イ	3.45	4	0.9	6.93	
	280	スクレイパー	N-7	V	玉 ズ イ	4.9	5.7	1.47	26.15	
	281	スクレイパー		IV	頁 岩	8.5	4.2	0.9	39.17	
第44図	282	スクレイパー	N-4	V	頁 岩	6.6	5.5	1.4	47.81	
	283	局部石斧	N-6	VI	頁 岩	(9.5)	4.7	1.7	101.18	
	284	局部石斧	D-6	V	頁 岩	12.15	6.3	1.7	138.92	
	285	打製石斧	H-4	IV	頁 岩	(11.5)	5	2.4	165.21	
	286	打製石斧	D-6	V	頁 岩	9.5	5.15	1.6	167.11	
	287	打製石斧	M-5	IV	頁 岩	12.3	4.9	2.2	143.79	
	288	打製石斧	M-5	IV	頁 岩	11	9.3	1.7	116.42	
	289	打製石斧		IV	頁 岩	(10)	(2.8)	2.45	194.2	
	290	打製石斧		I	頁 岩	18.3	10.1	4.25	930	
	291	石斧破片	D-6	IV	頁 岩	11.8	8.5	1.7	72.39	
第45図	292	スクレイパー	N-7	V	粘 板 岩	10.9	6.25	1.45	160.58	
	293	スクレイパー	L-6	IV	頁 岩	9.1	7.5	2.3	230.97	
	294	スクレイパー	M-7	III	頁 岩	9.75	7.2	3.25	224.93	
	295	スクレイパー	D-6	IV	頁 岩	10.7	8.7	2.9	262.1	
	296	スクレイパー	M-6	IV	頁 岩	8.8	9.8	3.2	206.76	
	297	スクレイパー	M-5	III	頁 岩	9.2	3	3.1	265.11	
	298	スクレイパー		IV	頁 岩	11.2	4.4	3.1	350.5	
	299	スクレイパー	N-2	IV	頁 岩	5	8.1	2.5	35.97	
	300	叩き石	N-7	IV	頁 岩	10.5	8.2	2.1	213.65	
第46図	301	磨石	M-6	IV	砂 岩	9.4	5.1	7.45	640.5	
	302	磨石	M-7	IV	砂 岩	9.1	6.9	3.52	390	
	303	磨石	N-6	IV	安 山 岩	5.8	6.9	4.5	178.35	
	304	磨石	N-7	IV	砂 岩	7.3	7	3.35	243.92	
	305	磨石	N-7	IV	砂 岩	8.4	10	4.1	315.88	
	306	磨石	M-7	IV	砂 岩	9.3	9.7	4.6	405	
	307	磨石	N-6	IV	砂 岩	10.75	2.7	4.9	790	
	308	磨石	D-6	IV	安 山 岩	12.15	2.3	5.4	1025	
第47図	309	磨石	N-6	IV	砂 岩	12.7	10.3	5.75	1135	
	310	叩石	N-6	V	頁 岩	14.85	4.75	3.25	330.44	
	311	窪み石	N-6	IV	砂 岩	13.4	5.85	3.8	324.74	
	312	石皿	N-6	V	砂 岩	10	8.9	5.35	820	

5 縄文時代後期の調査

縄文時代後期の遺物はⅢ層上部より出土している。

(1) 遺構

遺構は検出されなかった。

(2) 遺物

遺物はⅫ類土器が13点、ⅩⅢ類土器が1点、底部3点が出土している。

Ⅻ類土器（第48・49図）

内外面を貝殻条痕で調整し、胴部に沈線文を施すものである。313は口縁部がくの字状に外反し、口唇部に突起を有するものである。314・315はやや内弯気味の口縁部で口唇部には沈線が認められる。

316は復元口縁径23.6cmを測る。直行気味に立ち上がる口縁部である。口縁部下位に1条の沈線を巡らし、その下にコの字状の沈線文を施すものである。

317は復元口縁径27cmを測る。口縁部は短く外反し胴部はやや膨らむものである。口縁部は推定で4か所

の突起を有する山形を呈し、突起部には内面に施された短沈線によるキザミ目が見られる。くびれ部及びその下位に2条の沈線を巡らし、胴部には直線的な沈線で鋸歯状の文様が描かれる。この土器は胎土が堅緻で色調がピンク色を呈するもので、指宿方面で出土する同形式の特徴を備えている。318～323は口縁部である。323は口縁部が丸く肥厚する。324・325は沈線文が施される胴部である。

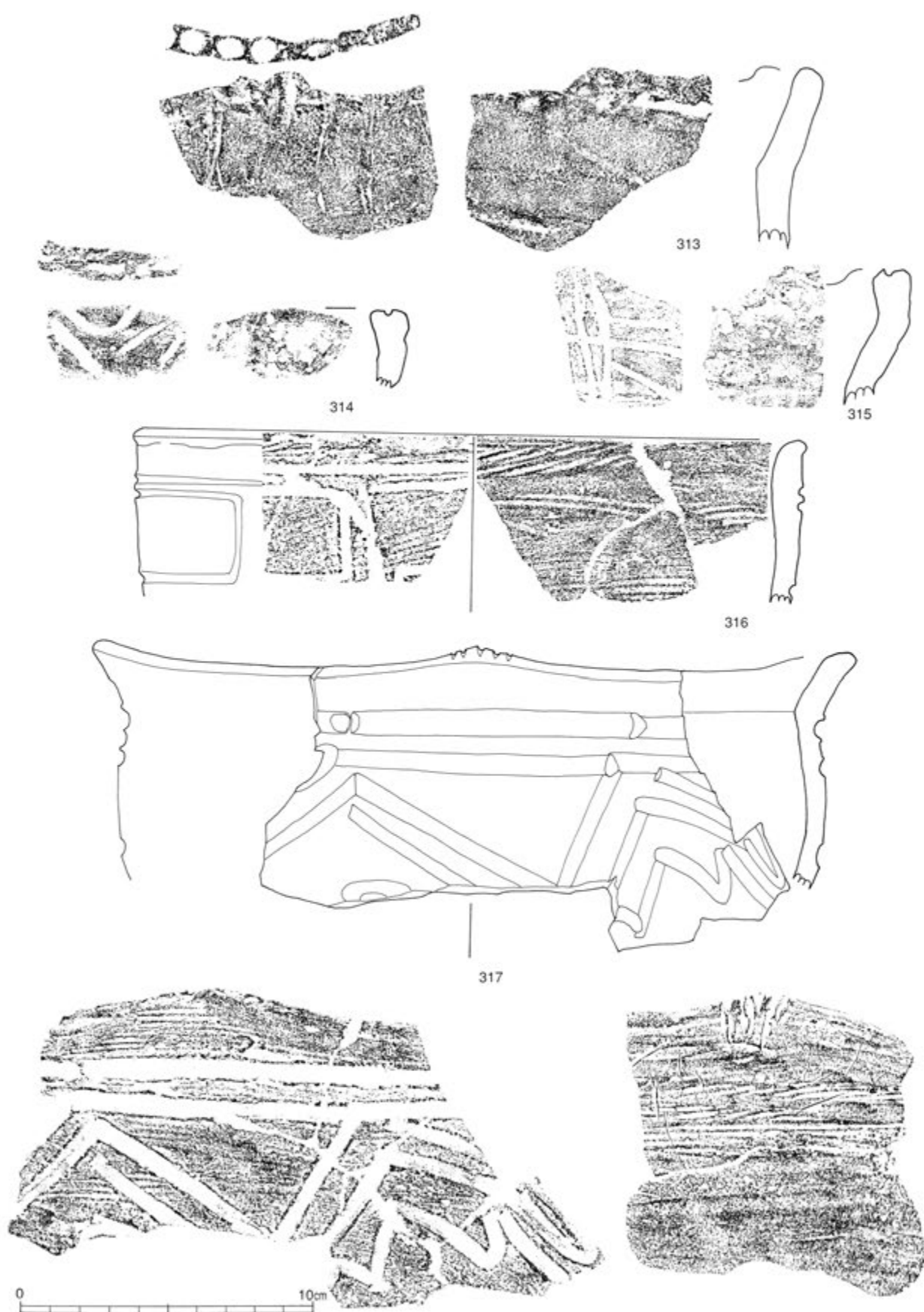
ⅩⅢ類土器（第49図）

1点のみの出土で復元口縁径37cmを測る。直線的に外反する胴部から口縁部は屈曲して直行気味に立ち上がるものである。この型式の特徴である口縁部の肥厚はあまり見られない。口縁部には斜行する貝殻復縁の刺突文が施される。

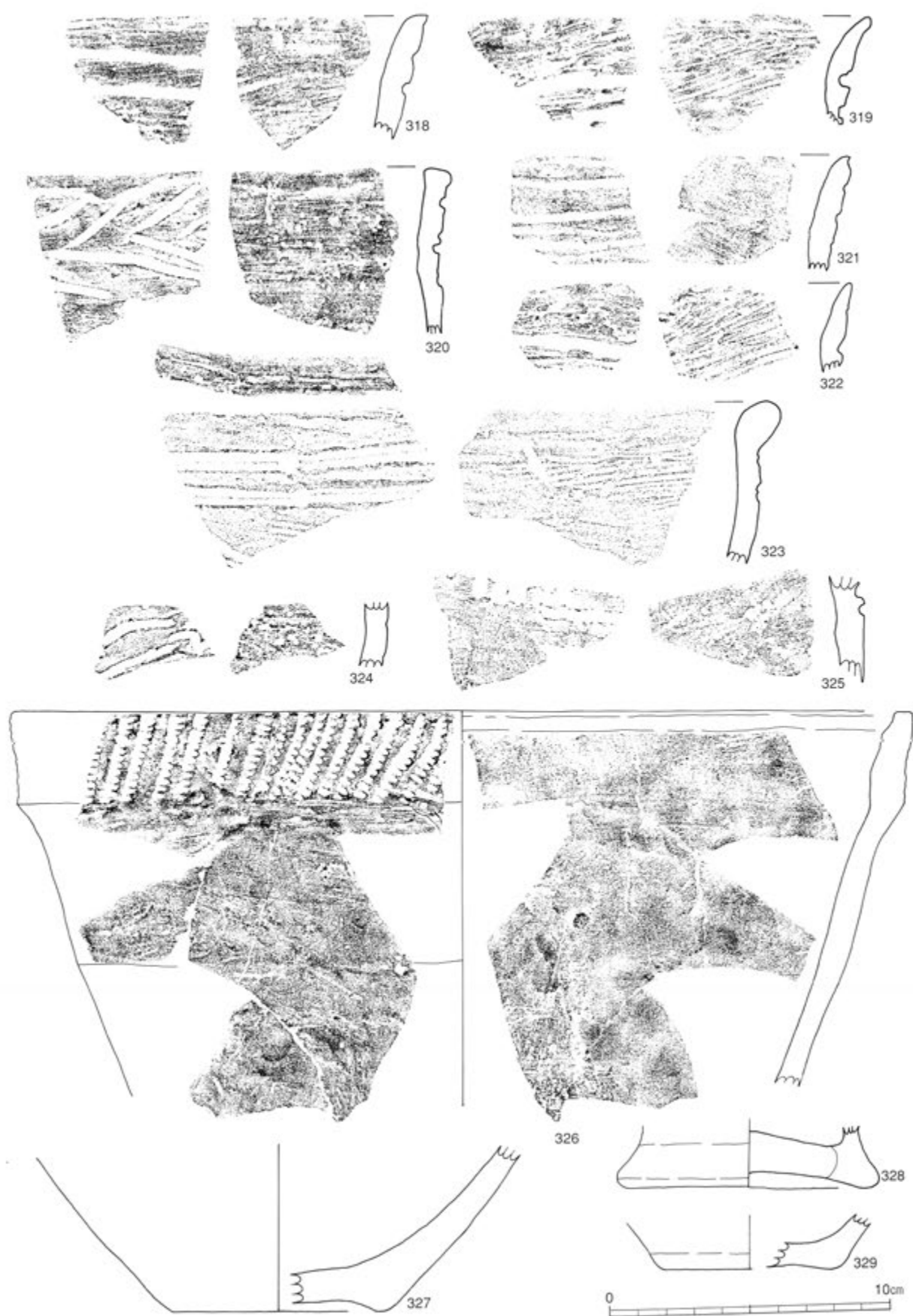
327～329は深鉢形土器の底部であるが、Ⅻ類土器・ⅩⅢ類土器のいずれに伴うか判別ができないものである。いずれもわずかに上げ底状を呈する。

縄文時代後期土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	色 調	胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
					石英	長石	角閃石	その他				
第 48 図	313	I-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			良	突起・刻目文	ケズリ	
	314	M-10	Ⅲ	茶褐色	○	○	○		〃	沈線文	ケズリ	
	315	M-10	Ⅲ	茶褐色	○	○	○		〃	沈線文・刺突文	ケズリ	
	316	M-5	Ⅲ	茶褐色	○	○			〃	沈線文	貝殻条痕	
	317	H-3	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	〃	貝殻条痕	
第 49 図	318	D-5	埋土	暗茶褐色	○	○			〃	沈線文	貝殻条痕	
	319	H-3	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	貝殻条痕	
	320	M-10	Ⅲ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	貝殻条痕	
	321	M-10	Ⅲ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	貝殻条痕	
	322	H-3	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	貝殻条痕	
	323	H-3	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	〃	貝殻条痕	
	324	L-5	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	貝殻条痕	
	325	L-8	Ⅲ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	貝殻条痕	
	326	L-8	Ⅲ	茶褐色	○	○	○		〃	貝殻刺突文	ケズリ	
	327	H-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ケズリ	
	328	E-4	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	ケズリ	
	329	L-7	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	ケズリ	



第48図 XII 類土器



第49図 XII・XIII類土器

6 縄文時代晩期の調査

縄文時代晩期は、Ⅲ層上部において出土するものである。遺物は土器・石器共に数多く出土している。

(1) 遺構

遺構は検出されなかった。

(2) 遺物

遺物は土器・石器が出土している。土器には組成深鉢形土器と精製浅鉢形土器が見られる。石器は石鏃・打製石斧を主として多く出土している。

XIV類土器（第50～56図）

XIV類土器は深鉢形土器と浅鉢形土器に形態分類できる。概して深鉢形土器は粗製土器で浅鉢形土器は黒色研磨の精製土器である。

深鉢形土器（第50～54図）

深鉢形土器は、口縁部の形状により a 類（330～337）と b 類（338～376）に細分される。

330～337は口縁部が肥厚し、口縁部に沈線を有するものである。330は口縁部径24.0cmを測る。胴部には屈曲部を有し口縁部はゆるやかに外反する。口縁部は短く肥厚し、1条の沈線を巡らす。331～336は肥厚する口縁部で、沈線を3～4条巡らすものである。334～336は頸部から口縁部への外反の度合いが強く、口縁部が三角形状を呈するものである。337は口縁部径25.0cmを測る。口縁部はくの字状に外反し肥厚するが沈線のないものである。

338～375は胴部で逆くの字状に屈曲し肩部は内傾し、頸部から口縁部へはくの字状に外反するものである。ほとんどが内外面とも条痕調整であるが、内面がナデ調整のものもある。また、口縁部が直線的に外反するものと、内湾気味に外反するものがある。375は胴部。胴部で逆くの字状に屈曲し、肩部は内傾する。頸部から口縁部へくの字状に外反するものである。376は胴部の屈曲部から底部へかけてのものである。内外面共にヘラミガキ調整である。

377は口縁部径14.3cmを測る小型の深鉢形土器である。胴部の屈曲及び口縁部の外反が弱くなだらかで口縁部も短いものである。

底部（深鉢形土器）

378～435は深鉢形土器の底部である。ほとんどが平底であるが、421・423・433は上げ底である。また、張り出しのあるものと無いものがある。

425～435は厚みのある底部である。

浅鉢形土器（第55・56図）

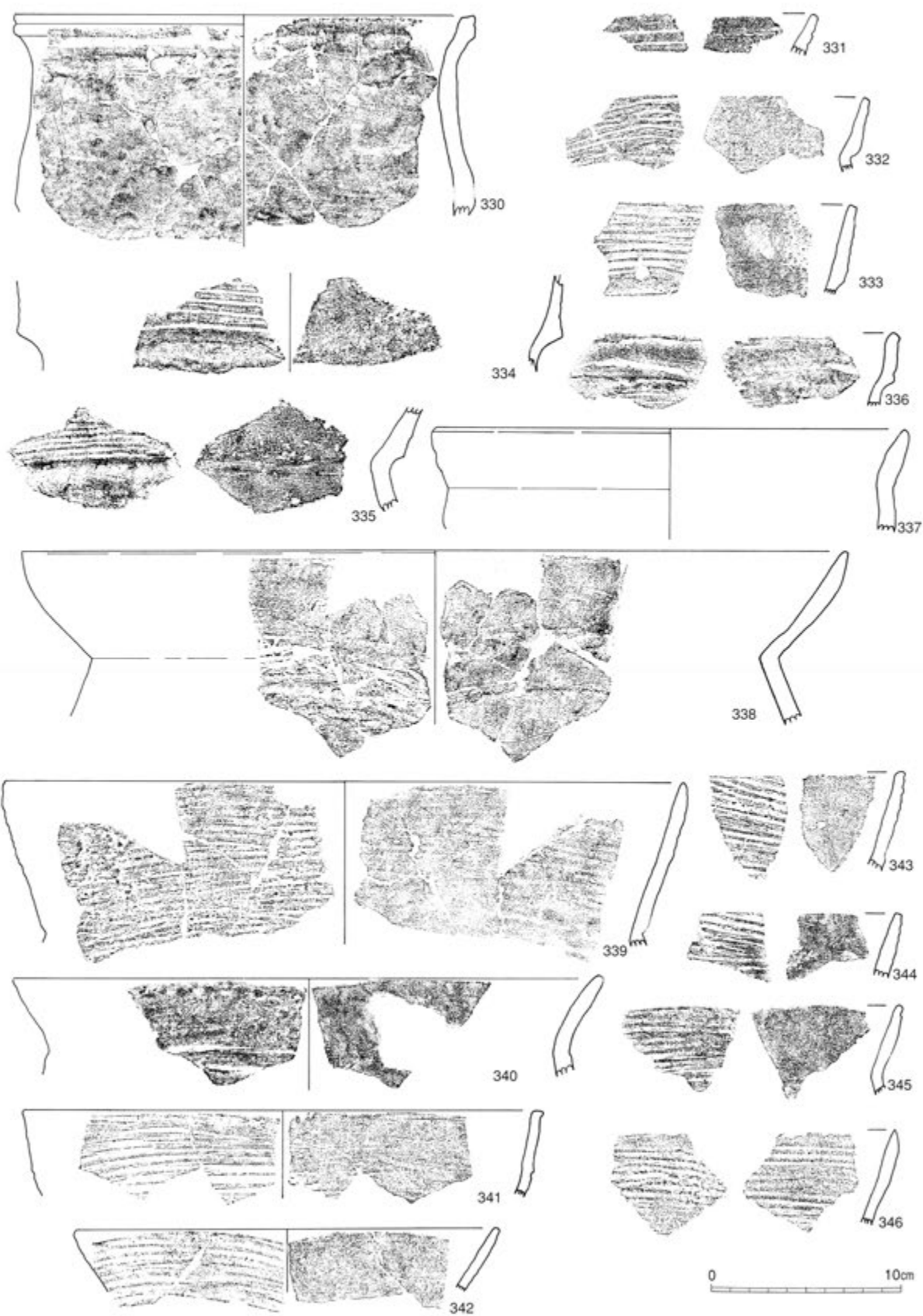
浅鉢形土器も形状により a 類（436～447）と b 類（448～452）に大別できる。

436～447は丸底の底部から外方へ立ち上がり、胴部で逆くの字状に屈曲して口縁部は反り気味に外反するもので、口縁部は概して長いものである。436は口縁部

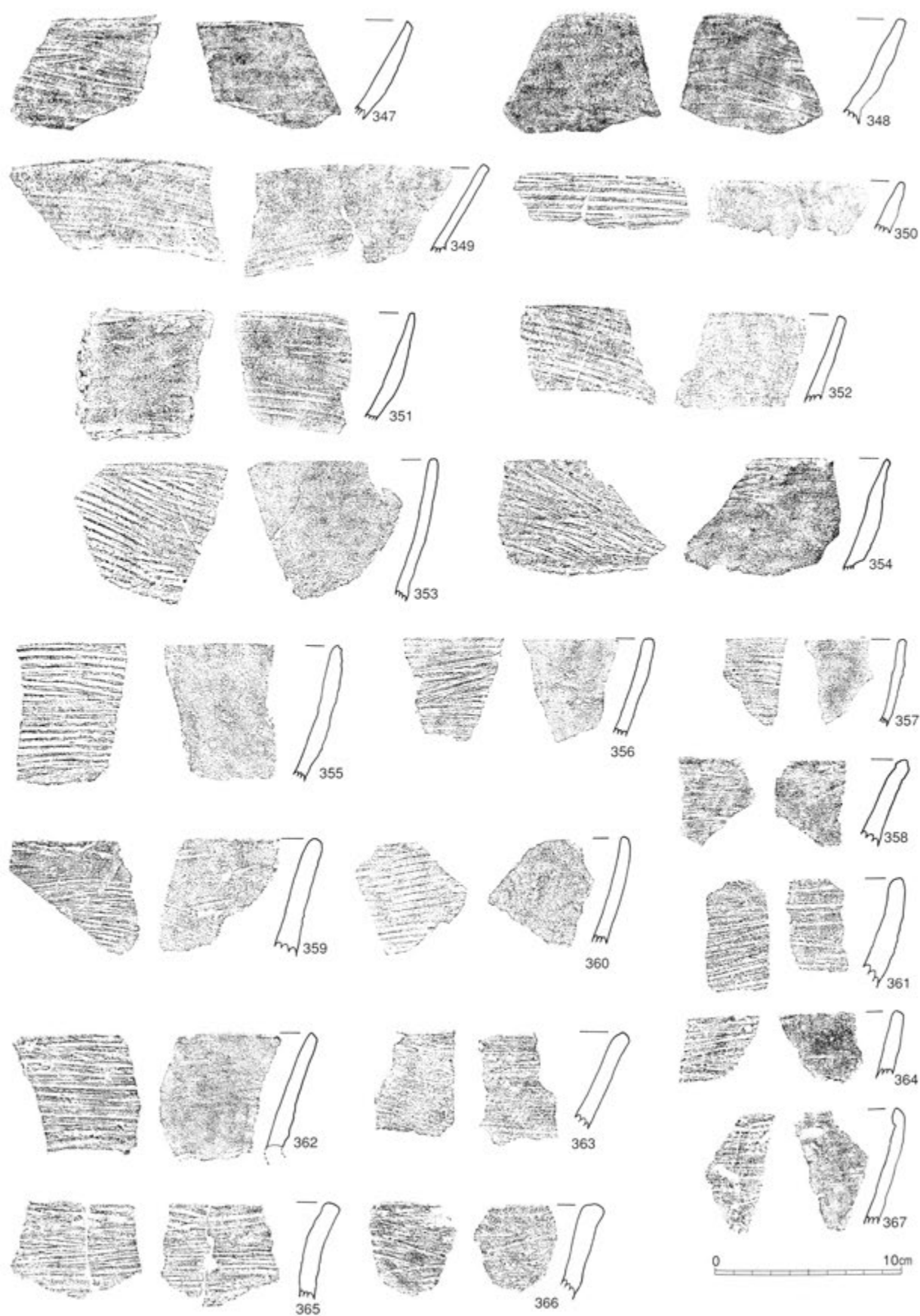
径29.2cmを測る。胴部の屈曲部から口縁部は反り気味に外反する。口縁端部はすぼまり、1条の沈線を巡らす。437～446は口縁部を欠損するものである。447は丸底の底部で1条の沈線を巡らす。

448～453は胴部の深いもので、屈曲部がなく丸みを帯びる。また、口縁部も短く外反するものである。448は口縁部径29.6cmを測る。丸みを帯びた胴部から肩部もなだらかに内傾し口縁部は短く外反する。449は口縁部径25.6cm。短く外反する口縁部で、外面に2条、内面に1条の沈線を巡らす。450は頸部および胴部に沈線を巡らす。451は胴部に屈曲部を有しないで口縁部へ至るもので、口縁部は短くくの字条に外反する。内面には稜線が認められるものである。452は頸部に刻目突帯を巡らすものである。

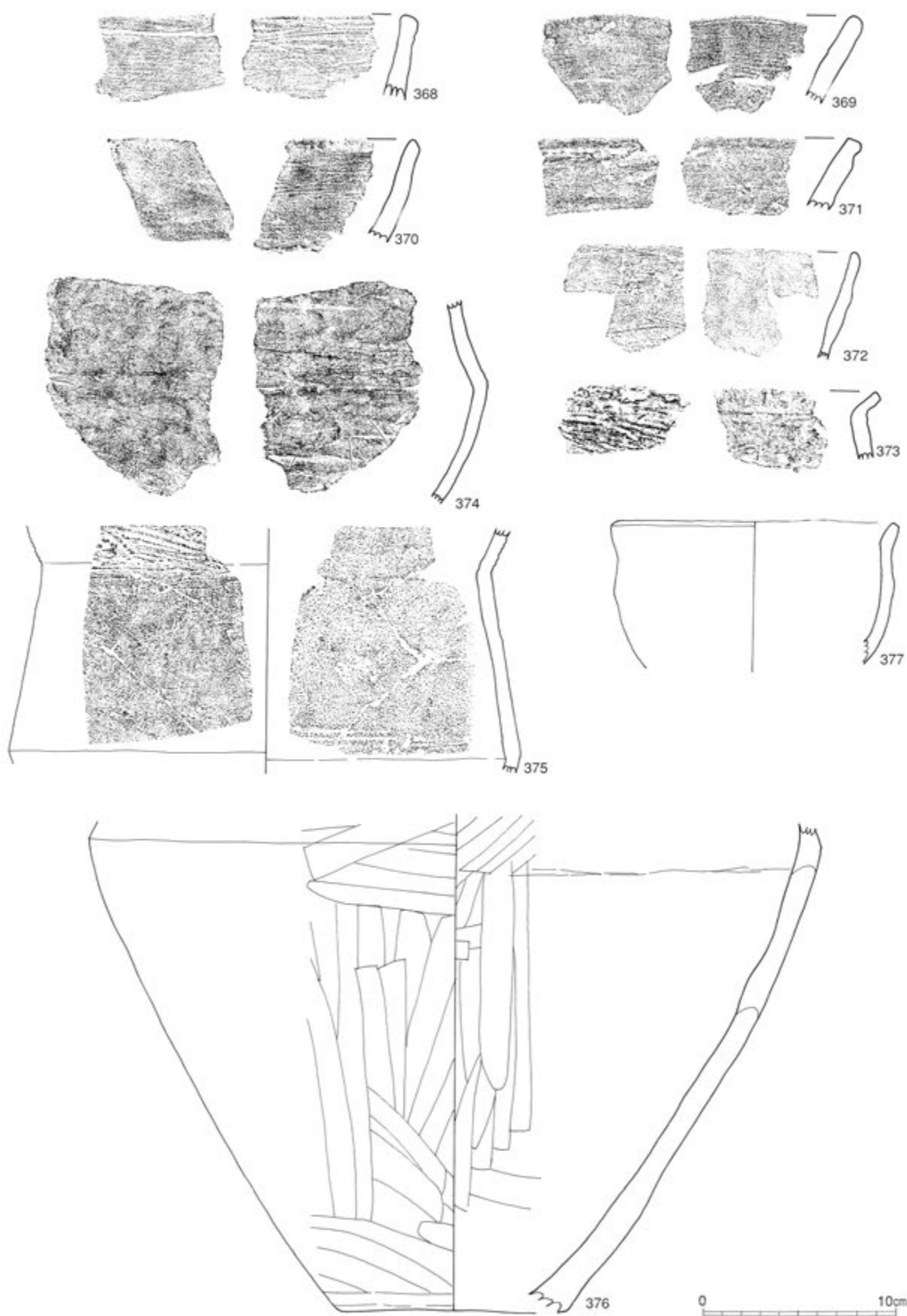
453は平底に近い底部から反り気味に立ち上げるもので、底部近くに2条の沈線を巡らす。



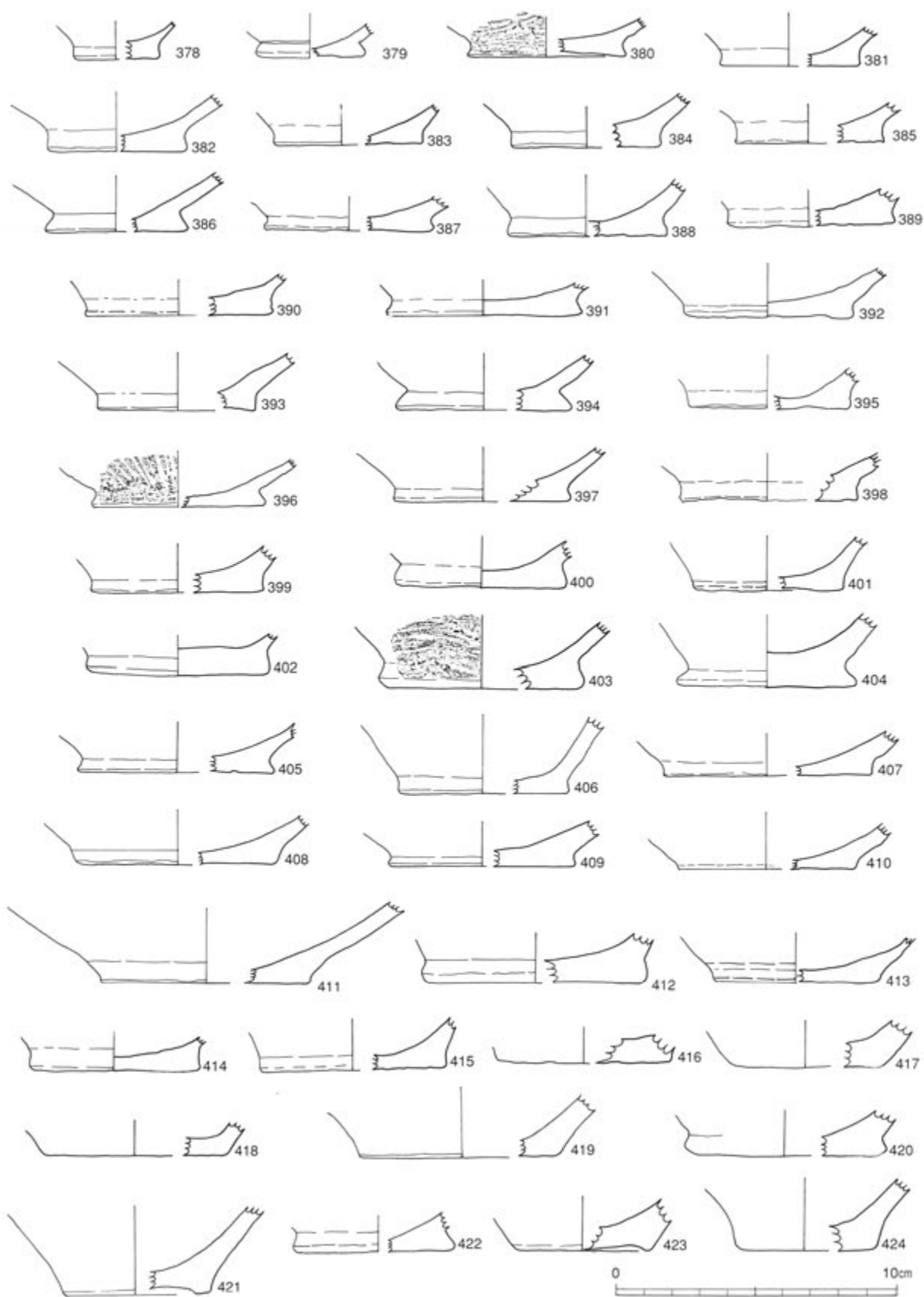
第50図 XIV類土器（深鉢形土器）1



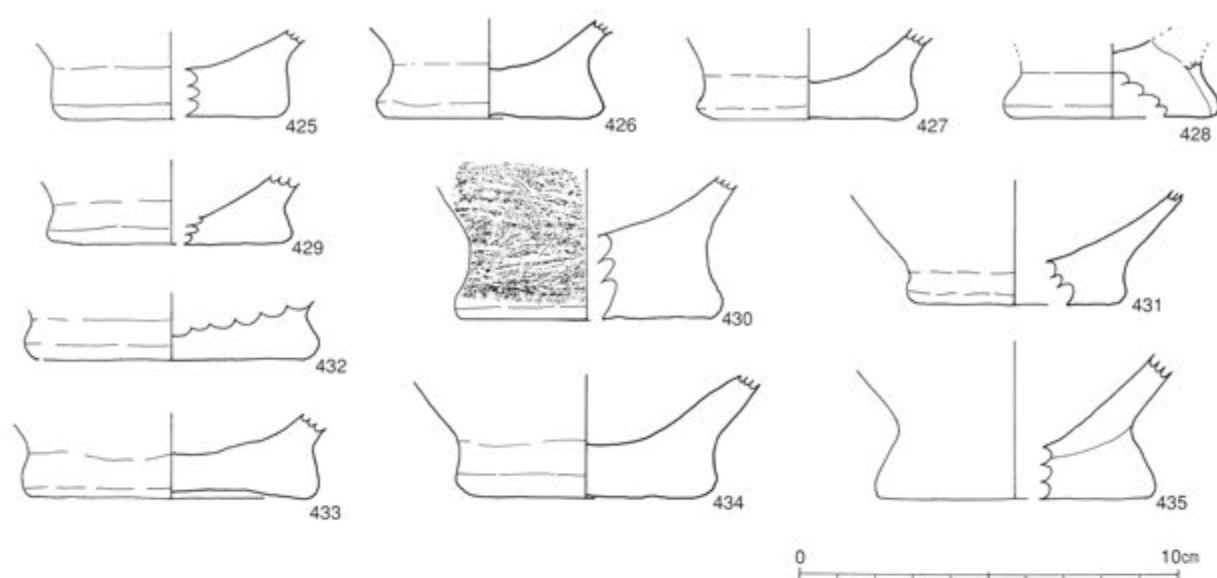
第51図 XIV類土器（深鉢形土器）2



第52図 XIV類土器（深鉢形土器）3



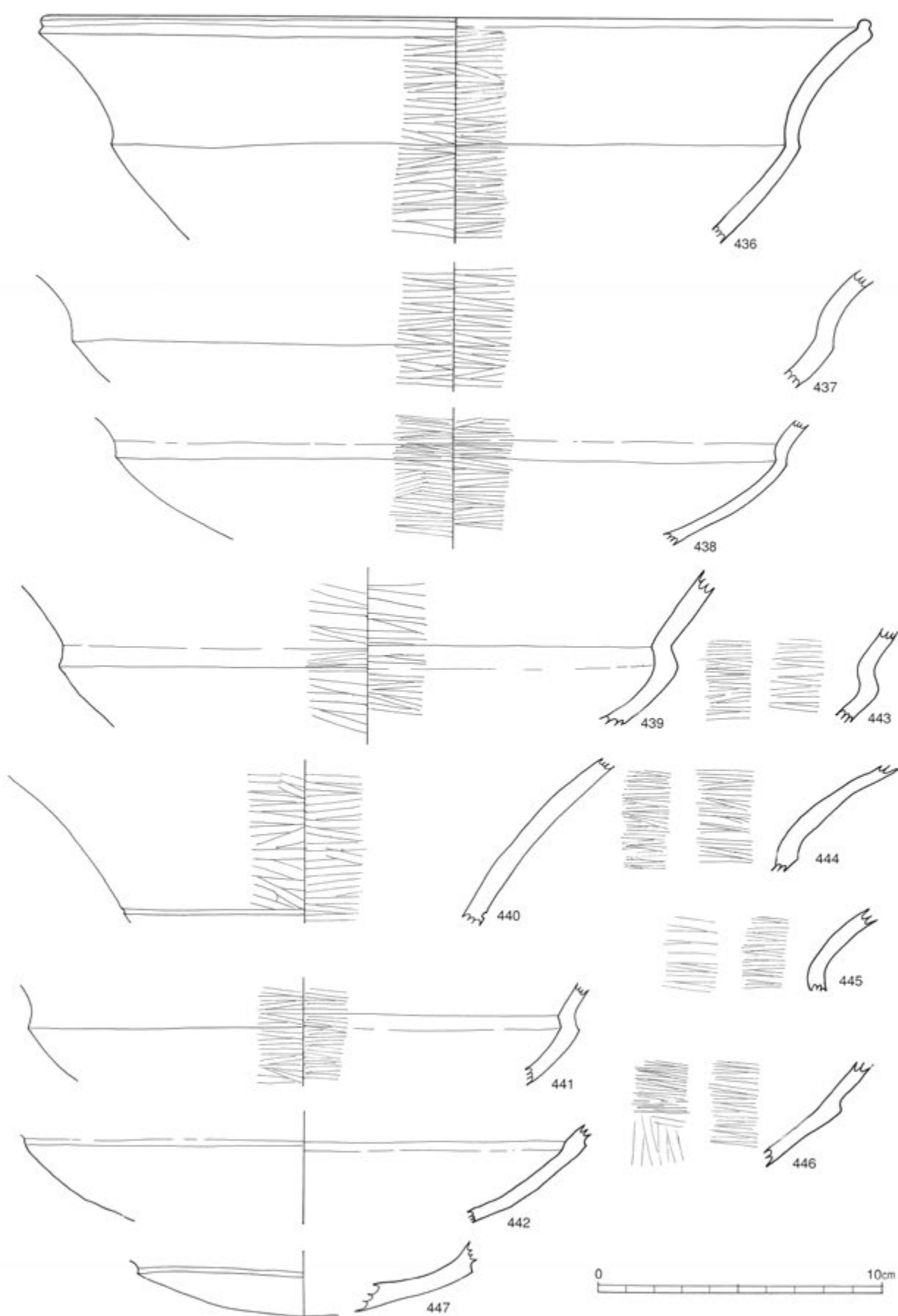
第53図 XIV類土器（深鉢形土器）4



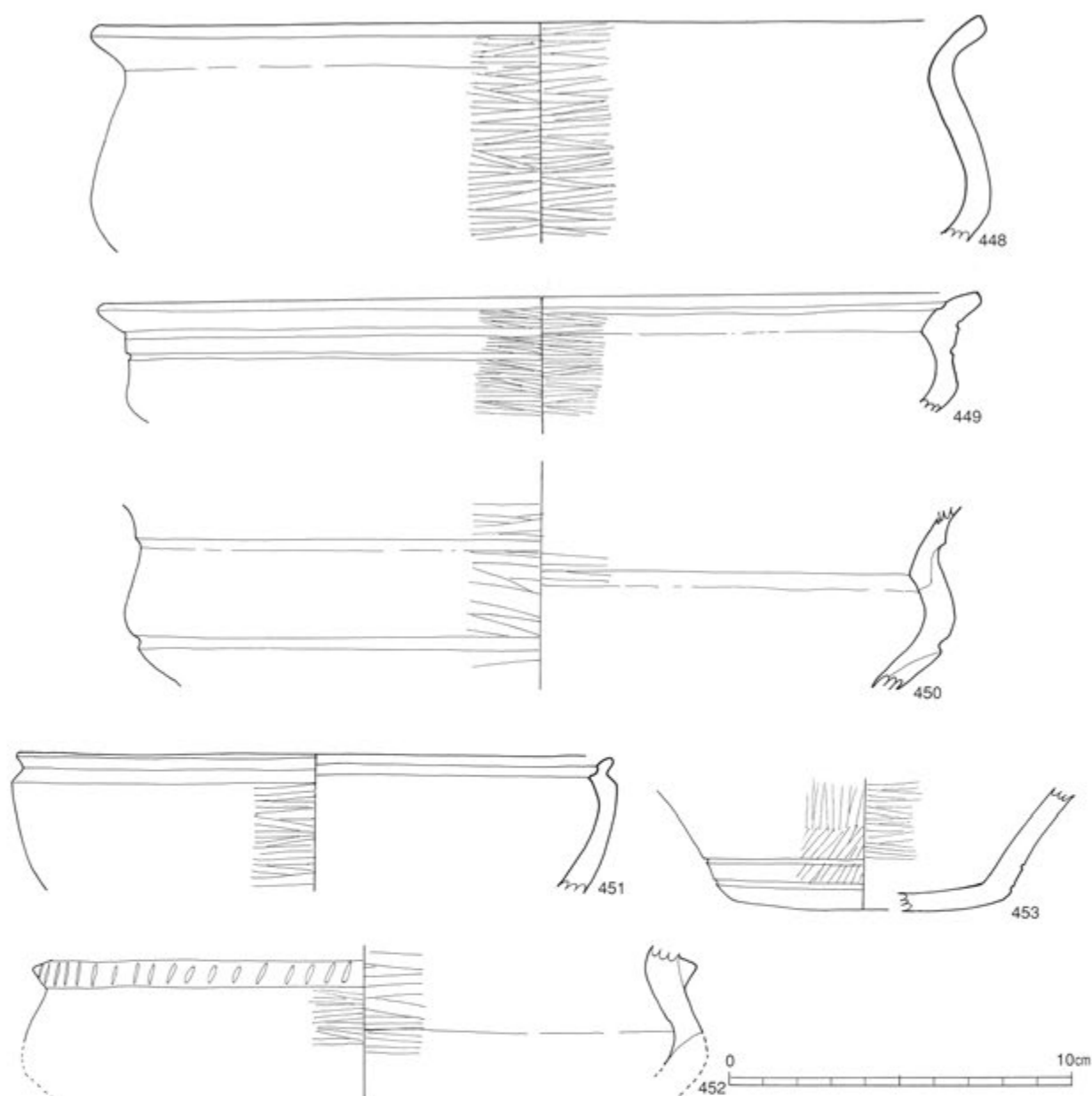
第54図 XⅣ類土器（深鉢形土器）5

縄文時代晩期土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	色 調	胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
					石英	長石	角閃石	その他				
第50図	330			茶褐色	○	○	○		良	沈線文・ミガキ	ミガキ・ケズリ	
	331	J-1	Ⅱ	暗茶褐色	○	○	○		〃	沈線文	ケズリ	
	332	D-4	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	333	M-8	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	334	D-7	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	沈線文・ナデ	ナデ・ケズリ	
	335	I-5	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	沈線文	ナデ・ケズリ	
	336			暗茶褐色	○	○	○		〃	ミガキ		
	337	D-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ナデ・ケズリ	ナデ・条痕	
	338			暗茶褐色	○	○			〃	ミガキ・ケズリ	ナデ・ケズリ	
	339	G-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	条痕文	条痕	
	340	H-7	Ⅱ	黒茶褐色	○				〃	ナデ	ナデ	
	341	J-3	Ⅱ	暗茶褐色	○		○		〃	条痕文	ナデ・ケズリ	
	342	M-7	Ⅲ	黒茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	343	J-3	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	344	J-3	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	345	M-7	Ⅲ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
第51図	346	G-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	条痕	
	347	H-2	Ⅱ	黒茶褐色	○	○	○		〃	条痕文	条痕	
	348		Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	ケズリ	条痕	
	349	G-5	Ⅱ	黒茶褐色	○	○	○		〃	条痕文	ナデ・条痕	
	350	H-4	Ⅱ	黒茶褐色	○	○	○		〃	条痕文	ナデ・条痕	
	351	H-2	Ⅱ	黒茶褐色	○				〃	ナデ	条痕	
	352	G-5	Ⅱ	黒茶褐色	○	○			〃	条痕文	ナデ・ケズリ	
	353	G-4	Ⅱ	黒茶褐色	○				〃	〃	ナデ・ケズリ	
	354	G-7	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ・条痕	
	355	I-4	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	356	G-7	Ⅱ	黒茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	357	G-5	Ⅱ	暗茶褐色	○				〃	〃	ナデ	
	358	H-5	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	〃	ケズリ	
	359	G-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ・条痕	
	360	D-5	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	361	E-7	Ⅱ	黒茶褐色	○	○			〃	〃	条痕	
	362	G-1	Ⅱ	茶褐色	○		○		〃	〃	条痕	
	363	H-4	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ	条痕・ケズリ	
	364	H-5	Ⅱ	黒茶褐色	○	○			〃	条痕文	ケズリ	
	365	H-7	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	条痕	
第52図	366	G-4	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	条痕	
	367	D-5	Ⅱ	茶褐色	○		○		〃	〃	条痕	
	368	I-5	Ⅱ	黒茶褐色	○	○			〃	条痕文・ケズリ	条痕	
	369	D-4	Ⅱ	黒茶褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ・条痕	
	370	G-7	Ⅱ	黒茶褐色	○				〃	〃	ナデ・条痕	
	371	H-7	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ・条痕	
	372	G-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ケズリ	ナデ・ケズリ	
	373	J-3	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	条痕文	ミガキ・ナデ	



第55図 XIV類土器（浅鉢形土器） 1



第56図 XIV類土器（浅鉢形土器）2

縄文時代晩期土器観察表

種図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	色 調	胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
					石英	長石	角閃石	その他				
第52図	374	I-5	II	黒茶褐色	○	○	○		良	ミガキ・ナデ	ミガキ・ケズリ	
	375	H-4	II	茶褐色	○	○	○		〃	条痕文・ナデ	ナデ・条痕	
	376	M-10	III	茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ	ケズリ	
	377	L-1	II	暗茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ・ケズリ	
第53図	378	L-4	V	茶褐色	○				〃	ケズリ	ケズリ	
	379	G-5	II	茶褐色	○	○			〃	〃	ケズリ	
	380	J-7	II	茶褐色	○	○			〃	条痕文	ナデ	
	381	G-7	II	茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ナデ	
	382	G-5	II	茶褐色	○	○			〃	条痕文	ナデ	
	383	H-5	II	淡茶褐色	○				〃	ミガキ	ミガキ	
	384	I-5	II	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	385	G-5	II	茶褐色	○	○			〃	ケズリ	ケズリ	
	386	E-2	II	淡茶褐色	○				〃	〃	ケズリ	
	387		II	淡茶褐色	○				〃	ミガキ	ナデ	
	388	J-3	II	茶褐色	○		○		〃	ケズリ	ナデ	
	389	G-5	II	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	390	D-5	II	茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	391		III	淡茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	392	H-7	II	茶褐色	○	○			〃	条痕文	ナデ	
	393	H-6	II	淡茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ	ケズリ	
	394	N-8	III	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	395	C-5	III上	茶褐色	○				〃	〃	ケズリ	
	396		II	淡茶褐色	○		○		〃	条痕文	ナデ	

縄文時代晩期土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	色 調	胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
					石英	長石	角閃石	その他				
第 53 図	397	G-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			良	ケズリ	ケズリ	
	398	G-4	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	399	G-5	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	400	H-2	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	401	G-5	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	402	J-3	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	403	H-4	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	条痕文	ナデ	
	404	H-7	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ケズリ	ナデ	
	405	G-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	406	G-5	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ミガキ・ケズリ	ナデ	
	407	G-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ケズリ	ナデ	
	408	I-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	409	H-4	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	410	E-7	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	411	I-4	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	412	D-5	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	413	G-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	414	G-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	415	I-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ケズリ	
	416	F-7	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃		ナデ	
	417	D-4	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ	
	418	M-6	Ⅳ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	419	I-3	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ケズリ	ナデ	
	420	D-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃		
	421	M-7	Ⅱ	淡茶褐色	○	○			〃	ナデ	ケズリ	
	422	J-3	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	423	H-5	Ⅲ	淡茶褐色	○	○			〃	ケズリ	ケズリ	
	424	I-1	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	ケズリ	
第 54 図	425	K-7	Ⅲ	茶褐色	○	○			〃	ケズリ	ナデ	
	426	H-7	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	427	H-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	428	H-5	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ナデ	
	429	H-7	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	430	I-4	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	条痕文	条痕	
	431	J-2	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ	ナデ	
	432	H-7	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	〃		
	433	D-7	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	434	F-5	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	条痕文	ナデ	
	435			茶褐色	○	○			〃	ケズリ	ナデ	
第 55 図	436			黒茶褐色	○				〃	ミガキ	ミガキ	外面スス付着
	437	H-5	Ⅲ	淡茶褐色	○	○			〃	〃	ミガキ	
	438	J-3	Ⅱ	黒茶褐色	○	○			〃	〃	ミガキ	
	439	H-6	Ⅱ	暗茶褐色	○				〃	〃	ミガキ	
	440	J-5	Ⅱ	暗茶褐色	○				〃	沈線文・ミガキ	ミガキ	
	441	G-5	Ⅱ	暗茶褐色	○				〃	ミガキ	ミガキ	
	442	G-5	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	〃	ミガキ	
	443	H-2	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	〃	ミガキ	
	444	H-7	Ⅱ	黒茶褐色		○			〃	〃	ミガキ	
	445	D-5	Ⅱ	暗茶褐色	○		○		〃	〃	ミガキ	
	446	H-5	Ⅱ	暗茶褐色	○				〃	〃	ミガキ	
	447	H-7	Ⅱ	茶褐色	○				〃	〃	ミガキ	外面丹塗
第 56 図	448			暗茶褐色	○	○			〃	ミガキ	ミガキ	
	449	H-7	Ⅱ	暗茶褐色	○				〃	〃	ミガキ	
	450	J-5	Ⅱ	暗茶褐色	○				〃	〃	ミガキ	
	451	L-6	Ⅱ	暗茶褐色	○	○	○		〃	〃	ミガキ	
	452	H-7	Ⅱ	暗茶褐色	○				〃	〃	ミガキ	
	453	H-5	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	ミガキ・刻目突帯	ミガキ	

石器（第57～67図）

石器石鏃・石匙・石錘・スクレイパー・石斧・磨石・叩石・石皿・軽石製品等が出土している。

石鏃（第57～59図）

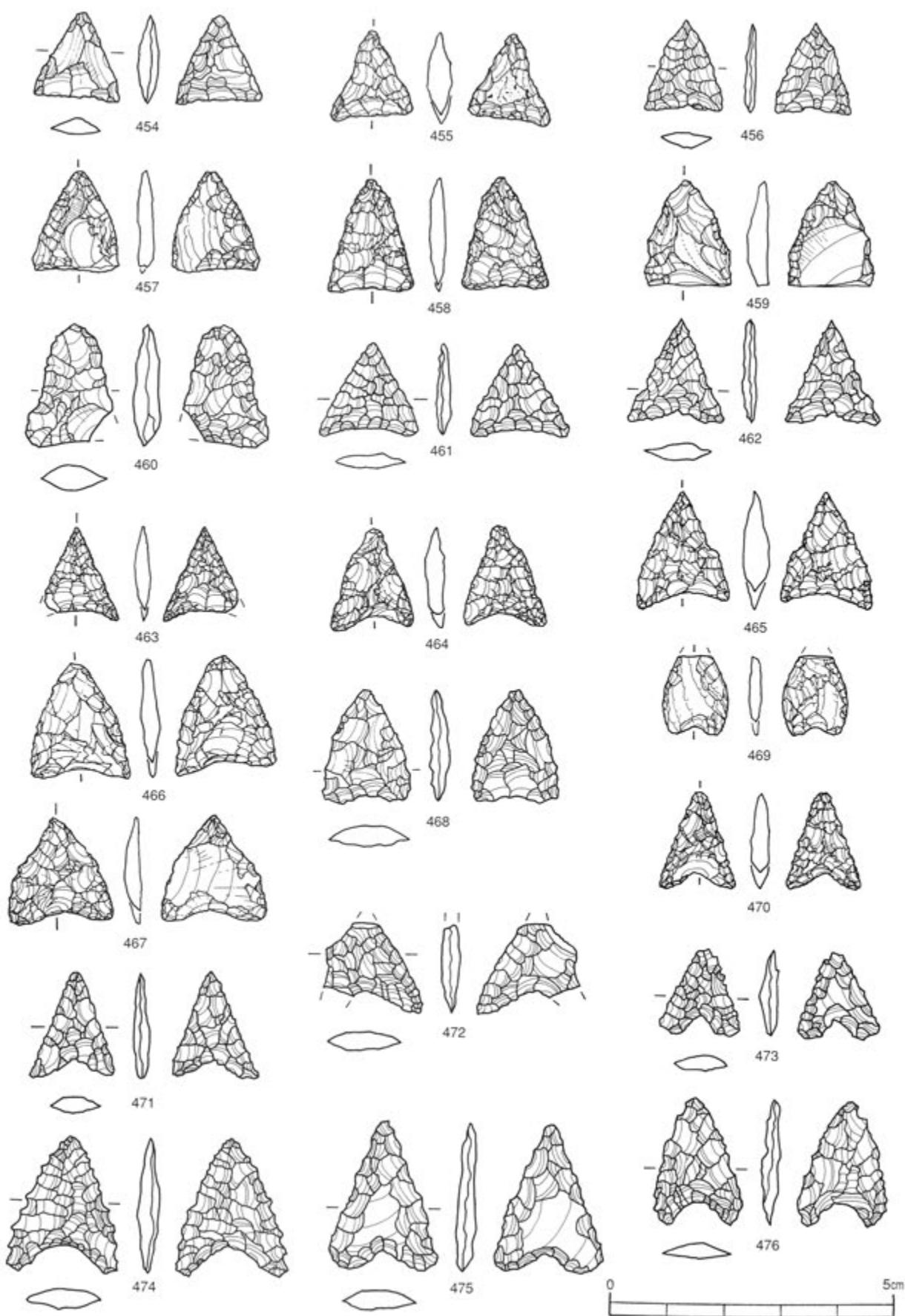
石鏃は55点出土している。素材としては、黒曜石・頁岩・安山岩・玉髄・チャート・鉄石英などが使われている。石鏃は形状・長さとの幅の比率（長幅比）・基

部の形態において分類した（第11図参照）。調整は入念な交互剥離により加工調整されている。一部主要剥離面を残し簡単な調整を加えたものもあるが、晩期特有の剥片鏃と思われるものはなかった。

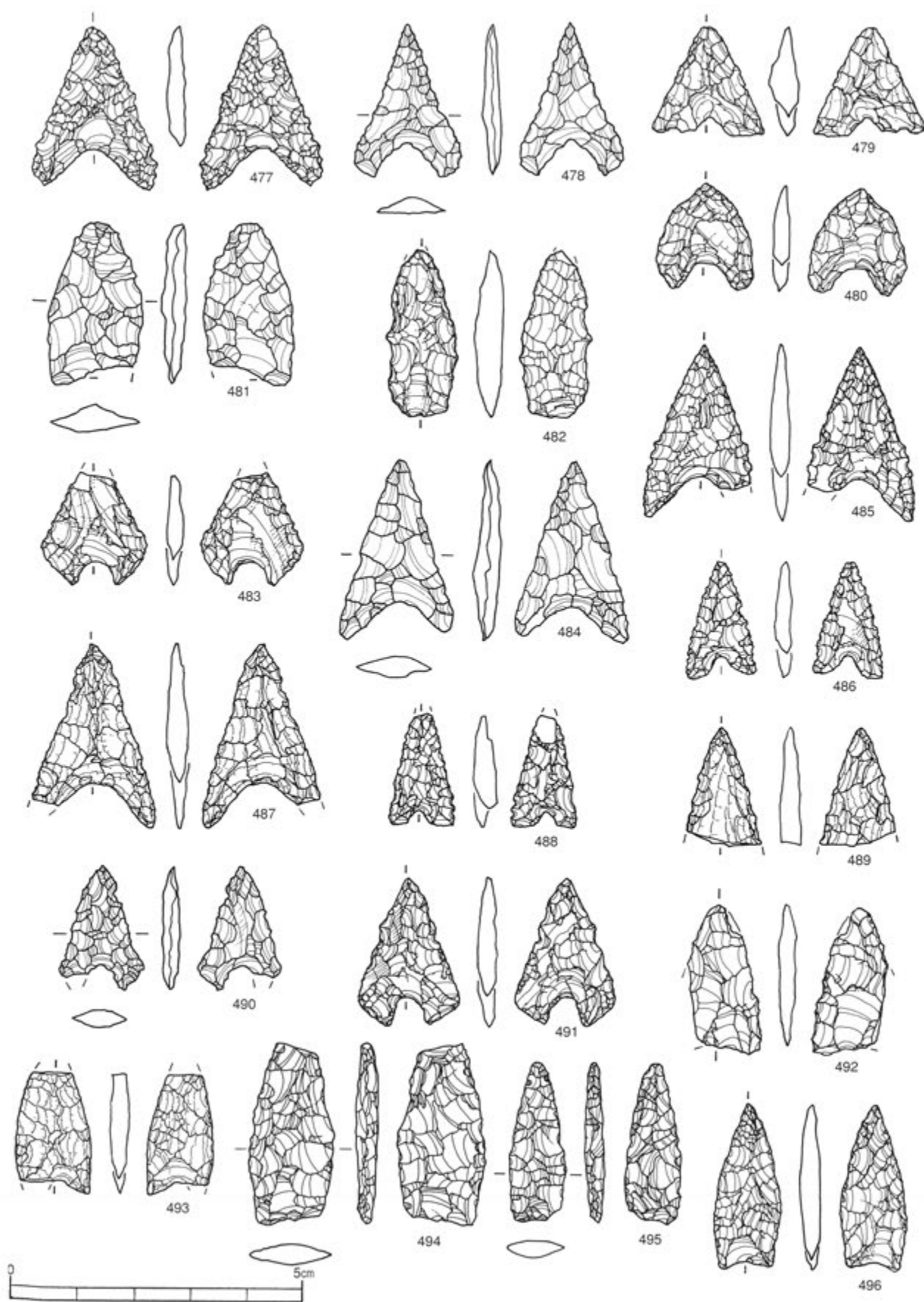
454～459はA— a — a 類。460～469はA— a — b 類であるが、460は尖頭部が丸く調整され鋭くないものである。470～478はA— a — c 類。479・480はA— a

石鏃観察表

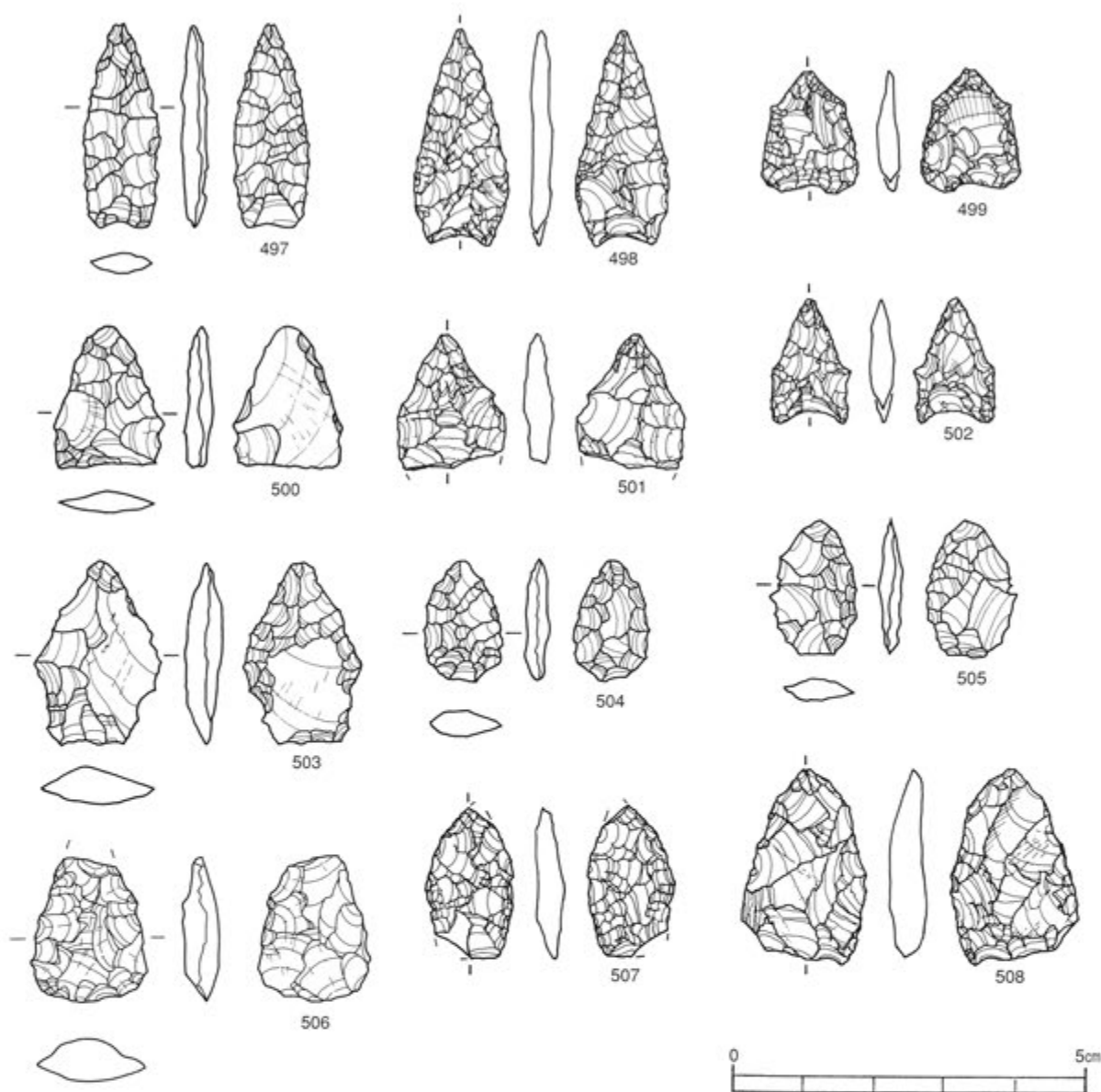
挿図 番号	遺物 番号	器 種	出土区	層位 遺構	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考
						cm	cm	cm	g	
第 57 図	454	石鏃	N— 4	Ⅲ	玉 ズ イ	1.6	1.5	0.4	0.54	
	455	石鏃	N— 6	Ⅳ	頁 岩	1.6	1.48	0.45	0.63	
	456	石鏃		Ⅰ	チャート	1.6	1.4	0.2	0.43	
	457	石鏃	H— 4	Ⅱ	黒 曜 石	1.9	1.6	0.3	0.1	
	458	石鏃	H— 3	Ⅱ	頁 岩	2.1	1.7	0.3	0.81	
	459	石鏃	D— 3	Ⅱ	頁 岩	1.15	1.5	0.4	1.03	
	460	石鏃	G— 7	Ⅱ	黒 曜 石	2.25	1.3	0.47	1.08	
	461	石鏃	M— 5	Ⅱ	黒 曜 石	1.65	1.75	0.25	0.48	
	462	石鏃	H— 2	Ⅲ	チャート	1.9	1.7	0.3	0.5	
	463	石鏃	N— 4	Ⅶ	頁 岩	1.5	1.3	0.25	0.39	
	464	石鏃	M— 6	Ⅲ	黒 曜 石	1.8	1.5	0.37	0.68	
	465	石鏃	K— 7	Ⅲ	黒 曜 石	2.2	1.6	0.45	1.01	
	466	石鏃	E— 7	Ⅱ	安 山 岩	2.2	1.8	0.3	0.88	
	467	石鏃	G— 5	Ⅲ	頁 岩	1.9	1.9	0.3	0.79	
	468	石鏃		Ⅱ	安 山 岩	2.05	1.55	0.35	0.86	
	469	石鏃	D— 5	Ⅱ	黒 曜 石	1.4	1.2	0.2	0.47	
	470	石鏃	H— 2	Ⅱ	黒 曜 石	1.7	1.4	0.3	0.42	
	471	石鏃	M— 6	Ⅱ	黒 曜 石	1.9	1.5	0.3	0.46	
	472	石鏃	H— 1	Ⅱ	黒 曜 石	1.55	1.8	0.3	0.64	
	473	石鏃	E— 7	Ⅱ	チャート	1.55	1.4	0.3	0.48	
第 58 図	474	石鏃	H— 4	Ⅱ	黒 曜 石	2.45	1.95	0.4	1.05	
	475	石鏃	I— 3	Ⅱ	頁 岩	2.6	1.9	0.35	1.26	
	476	石鏃		Ⅱ	赤 鉄 英	2.2	1.55	0.35	0.79	
	477	石鏃	H— 4	Ⅱ	黒 曜 石	3	2.2	0.45	1.23	
	478	石鏃	H— 5	Ⅲ	頁 岩	2.8	1.9	0.35	0.86	
	479	石鏃	D— 7	Ⅱ	安 山 岩	2	2	0.5	1.13	
	480	石鏃	H— 2	Ⅲ	頁 岩	1.9	1.7	0.3	0.82	
	481	石鏃	M— 7	Ⅲ	玉 ズ イ	2.9	1.65	0.4	1.74	
	482	石鏃	H— 1	Ⅱ	頁 岩	2.2	1.5	0.35	1.88	
	483	石鏃	H— 5	Ⅱ	頁 岩	2	1.9	0.3	1.04	
	484	石鏃	H— 7	Ⅱ	頁 岩	3.25	2	0.5	1.76	
	485	石鏃	C— 5	Ⅱ	頁 岩	3.2	1.9	0.35	1.47	
	486	石鏃	H— 2	Ⅱ	黒 曜 石	2.1	1.3	0.3	0.59	
	487	石鏃	D— 4	Ⅱ	頁 岩	3.4	2	0.4	1.38	
	488	石鏃	H— 2	Ⅱ	黒 曜 石	2	1.2	0.4	0.65	
	489	石鏃	H— 2	Ⅲ	安 山 岩	2.15	1.3	0.35	0.77	
	490	石鏃	D— 3	Ⅱ	黒 曜 石	3	2.3	0.5	0.72	
	491	石鏃	D— 5	Ⅱ	黒 曜 石	2.7	1.8	0.3	1.13	
第 59 図	492	石鏃	N— 4	Ⅶ	頁 岩	2.6	1.2	0.3	0.72	
	493	石鏃	D— 5	Ⅱ	安 山 岩	3.3	1.2	0.3	0.80	
	494	石鏃	E— 7	Ⅲ	安 山 岩	4.9	2.3	0.6	6.3	
	495	石鏃	E— 2	Ⅱ	玉 ズ イ	2.9	1	0.3	2.78	
	496	石鏃	E— 7	Ⅱ	玉 ズ イ	3	1.2	0.35	1.2	
	497	石鏃	H— 2	Ⅱ	玉 ズ イ	3	1.1	0.3	1.05	
	498	石鏃	H— 4	Ⅱ	鉄 石 英	3.1	1.35	0.3	1.18	
	499	石鏃	I— 1	Ⅱ	黒 曜 石	1.7	1.8		0.73	
	500	石鏃		Ⅱ	頁 岩	2.05	1.55	0.4	0.94	
	501	石鏃	E— 7	Ⅱ	玉 ズ イ	1.9	1.5	0.4	0.94	
	502	石鏃	L— 7	Ⅱ	頁 岩	1.75	1.15	0.35	0.68	
	503	石鏃		Ⅱ	頁 岩	2.6	1.8	0.55	1.99	
	504	石鏃	L— 7	Ⅱ	チャート	1.75	1.1	0.3	0.7	
	505	石鏃		Ⅱ	頁 岩	1.9	1.2	0.2	0.6	
	506	石鏃	L— 6	Ⅲ	鉄 石 英	2.15	1.6	0.6	1.77	
	507	石鏃	G— 7	Ⅱ	チャート	2.15	1.35	0.35	1.01	
	508	石鏃	H— 7	Ⅱ	頁 岩	2.7	1.75	0.55	2.47	



第57図 縄文時代晩期出土石器 1



第58図 縄文時代晩期出土石器 2



第59図 縄文時代晩期出土石器 3

—d 類。481・482はA—b—a 類であるが長幅比が大きくA—c—a 類に近いものである。

483～487はA—b—c 類、488～492はA—b—d 類としたものである。489・492は基部が欠損しているためこの類に入るかは定かではないものである。493～498はA—c—b 類である。499～503は五角形状のB 類である。499～502はB—a—b 類で、500は裏面に主要剥離が残された剥片鐵に近いものである。503はB—b—b 類である。504～508は丸形のC 類である。504～506・508はC—a—a 類、507はC—b—a 類である。506・507は尖頭部が欠損するものである。

石匙 (第60図)

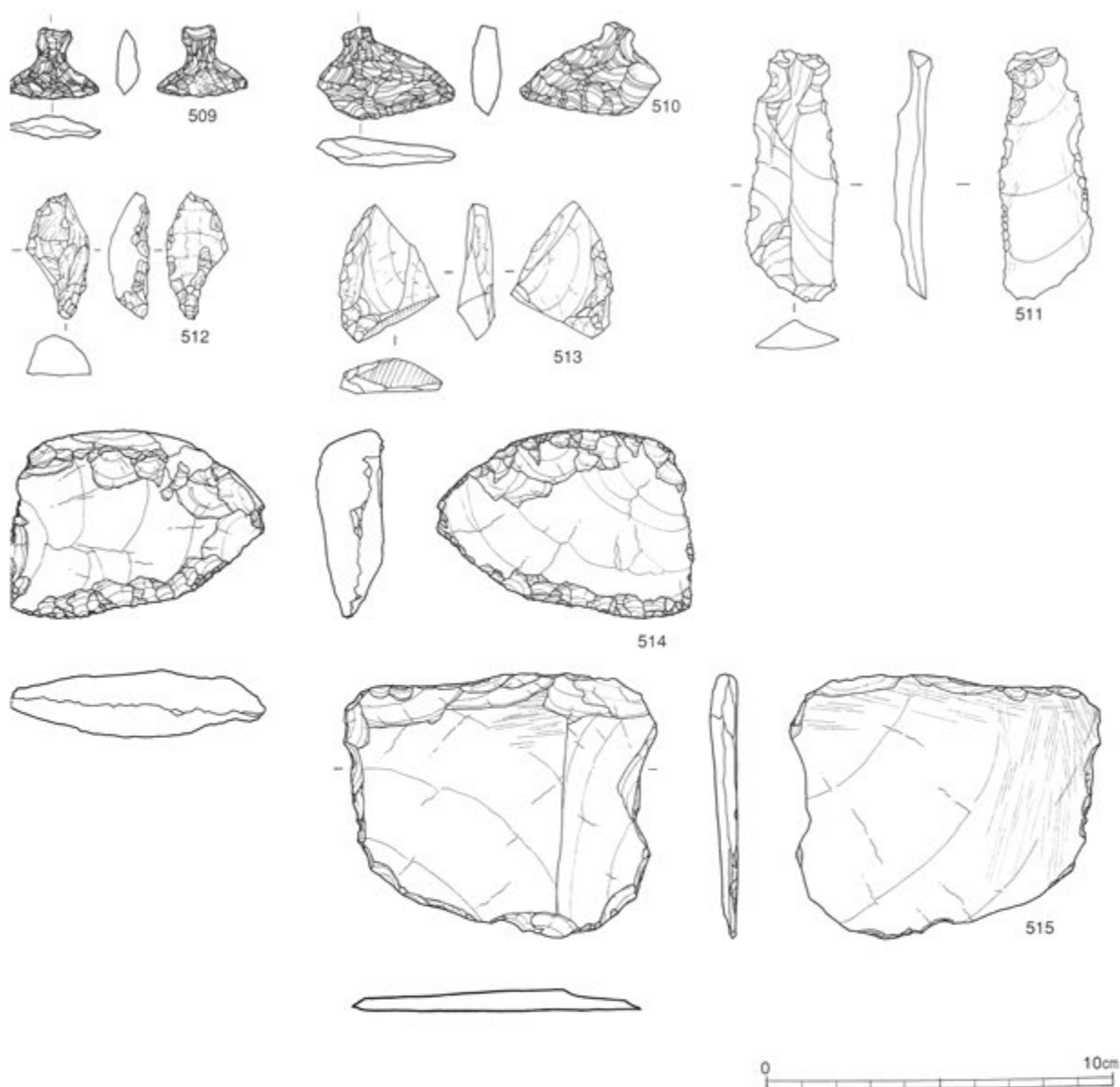
石匙は3点が出土している。509は小型の石匙で、素材は玉髓である。横型で全体に両面からの細かな交

互剥離が施される。つまみ部に浅い抉りが認められるものである。510も横型で素材は黒曜石である。刃部の一部とつまみ部を欠損している。全体に両面からの細かな交互剥離が施される。511は頁岩の縦長剥片を素材としたもので断面が三角形を呈する。

つまみ部は粗い剥離により簡単なつくりの抉りを出している。両側縁には使用によると思われる微細な剥離が認められる。

石錐 (第60図)

石錐は1点出土している。512はやや厚めのチャート剥片を素材とする石錐である。片面のみにノッチ状の加工を施し、錐部としての機能部を作り出し、先端部のみに整形加工の剥離を施すものである。



第60図 縄文時代晩期出土石器 4

スクレイパー (第60図)

スクレイパーとしたものは3点である。513は下面に節理面のあるやや扁平な頁岩の剥片を素材としたもので、片側側縁のみに押圧剥離による加工を施し、刃部を作出している。514は上端に自然面を残す鉄石英

の剥片を素材とし、下縁に両面より押圧剥離による加工が施され刃部を作出している。515は扁平な粘板岩を素材とし、側縁部から下縁部において片側のみに粗い剥離加工を施すものである。

スクレイパー観察表

挿図 番号	遺物 番号	器 種	出土区	層位 遺構	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考
						cm	cm	cm	g	
第 60 図	509	石匙	D-5	Ⅱ	玉 ズ イ	2.6	2.05	0.65	1.98	
	510	石匙	D-4	Ⅲ	黒 曜 石	3.9	2.7	0.8	7.11	
	511	石核	M-6	Ⅱ	チャート	7.4	2.6	0.8	14.73	
	512	石錐	L-8	Ⅱ	チャート	3.65	1.8	1.15	7.61	
	513	スクレイパー	D-5	Ⅱ	頁 岩	3.2	3	0.82	9.37	
	514	スクレイパー	L-2	Ⅲ	赤 石 岩	7.3	1.5	1.85	81.83	
	515	スクレイパー	J-3	Ⅱ	粘 板 岩	9	7.8	0.75	61	

石斧（第61～63図）

石斧は磨製石斧・局部磨製石斧・打製石斧があり破損品・未製品も含めて28点が出土している。516～520は磨製石斧，521は局部磨製石斧，516は頁岩を素材としたもので，刃部の幅が広いバチ形を呈するものである。側縁は細かな調整が施され，刃部は縦位及び斜位の研磨痕が明瞭である。517は頁岩を素材とし，刃部幅がわずかに広いものである。ほぼ全面に入念な研磨の痕跡が認められる。518は安山岩を素材としたもので刃部のみのものである。刃部に縦位の研磨痕が認められる。519は蛇文岩を素材とするもので刃部のみである。刃部に入念な研磨痕が認められる。520は刃部を欠損するもので頁岩を素材とする。全面に研磨痕が認められる。521は粘板岩を素材としたもので，516と同様バチ形を呈する。側縁・上縁は粗い剥離調整が施され，刃部の片面に縦位の研磨痕が見られるものである。522～541は打製石斧で，523・524・528～530の5点のみが完形品である。これらの打製石斧は基本的には扁平打製石斧と呼ばれるもので，その大半が有肩石斧である。522は基部・刃部共欠損するもので全体形状は不明である。523は縦長剥片を素材としたもので，明瞭な挟りを有しないものである。524・526～534は有肩石斧で，胴部が膨らみ，刃部は丸味を帯びるものと尖り気味のものがある。535は基部・胴部を欠損し刃部のみ残るものである。536は基部でわずかに挟りが認められる。537～541は胴部下位から刃部が残り，基部及び挟り部は欠損するものである。538はわずかに挟りが認められる。542・543は共に細長い柱状のホルンフェルス素材としたもので，石斧の未製品と思われる。542は下半分を欠損し，表面には粗い剥離加工が施されるもので，裏面は節理面から剥落している。543は表面・側縁・基部の一部に自然面を残す。裏面は大きく剥離された痕跡を残すものである。左側縁には擦痕と研磨面が観察され砥石としての機能も合わせ持っている。

礫器（第64図）

544～547はホルンフェルスを素材とした礫器である。自然面を多く残し礫の一部に粗い剥離を施したものである。544は上面に平坦面を持つ礫を素材とし，

両側縁から下縁にかけて粗い剥離を認める。545は下半が大きい礫を素材とし，下縁から片側側縁の一部にかけて粗い剥離が施される。546は大きい不定形の礫を素材とし，片側の側縁にのみ剥離が施される。547は縦長の礫を素材とし，下縁のみに剥離が施されるものである。

二次加工のある剥片（第64図）

548は不定形で厚めの剥片を素材とし，下縁の一部に二次加工の痕跡を認めるものである。

石錘（第65図）

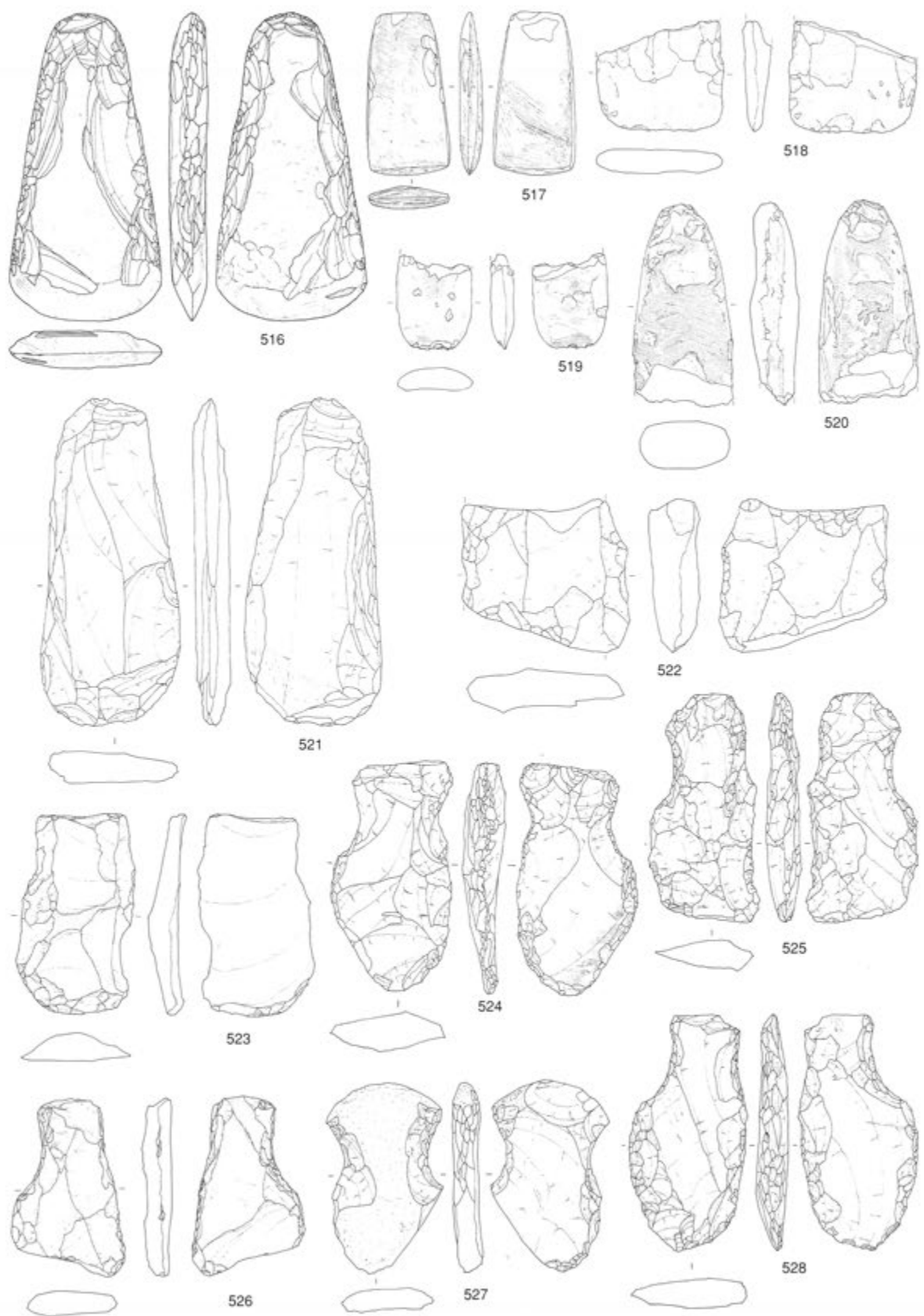
石錘は3点が出土している。549・550は両面に自然面を残す扁平な方形・楕円形の礫を素材とし，両側縁に両面からの粗い剥離による挟りを作出している。551は円形で扁平な磨石の再利用と考えられるものである。両側縁に剥離が施され挟りを作出するものであるが，下半部が欠損しているため挟りも明瞭ではない。

磨石・叩石・凹石（第65図）

円礫を中心とした石器で，磨石としてだけの機能のもの，叩石の機能を備えたもの，叩石・凹石の機能を備えたもの，叩石だけの機能のものがみられる。552・553は扁平な砂岩の円礫を素材とし，両面に磨痕が認められる。554・555・556は安山岩や砂岩を素材とする円礫で，両面は磨面で側縁に敲打痕が見られるものである。557・558は両面の磨面部に敲打痕及び凹みを認めるもので，側縁にも敲打痕が見られる。559は大きめの円礫を利用した磨石であるが，上面・下面が欠損しているものである。560は磨製石斧の破損品を再利用したものと思われるもので，両面・側面に研磨痕が認められる。下面に敲打によると思われる緻密な敲打痕が認められる。561は自然面を多く残す砂岩の棒状礫を素材とするもので，下面に敲打痕が見られるものである。

石皿（第66図）

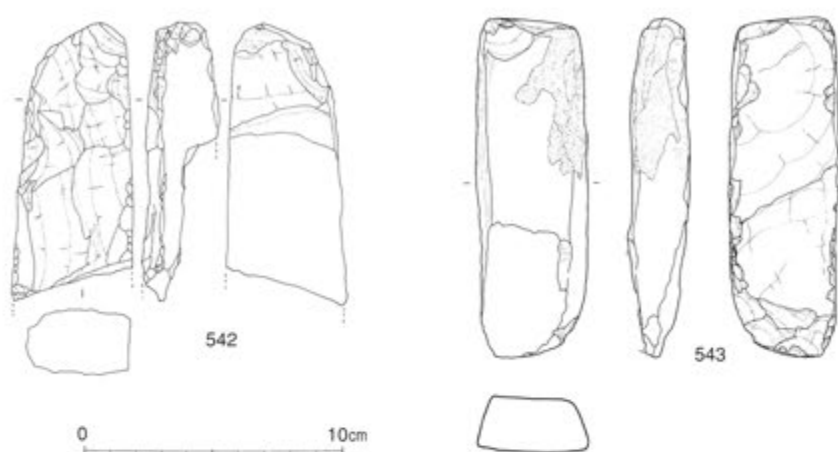
石皿は8点を図化した。砂岩・安山岩の厚めの礫を素材としたものである。いずれも破損品で全体形状を把握できるものはない。563は裏面の残存が少ないため判明しないが，他は両面共に作業面が認められる。565・567・569は片面，566は両面の作業面に敲打痕が認められるものである。



第61図 縄文時代晩期出土石器 5



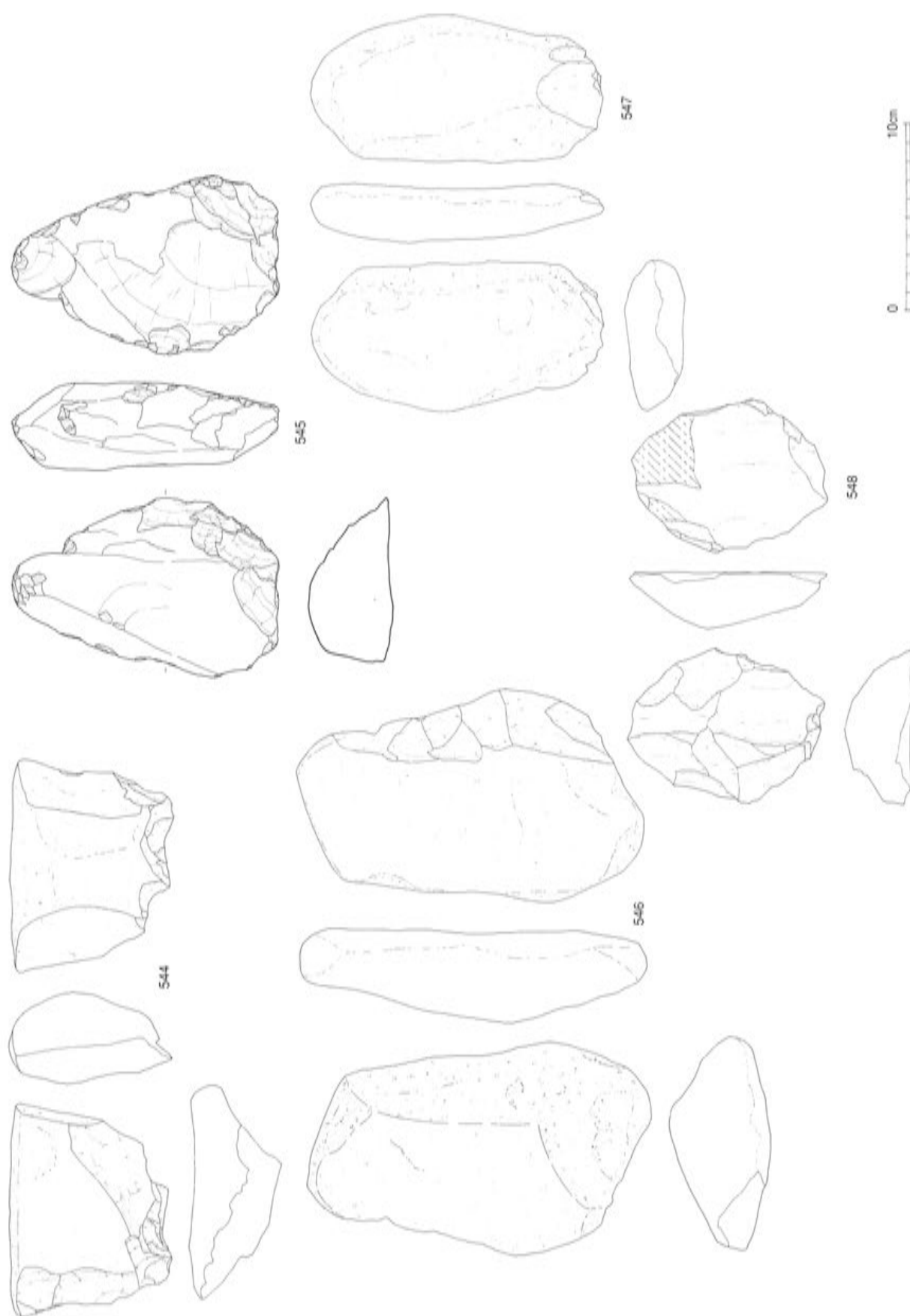
第62図 縄文時代晩期出土石器 6



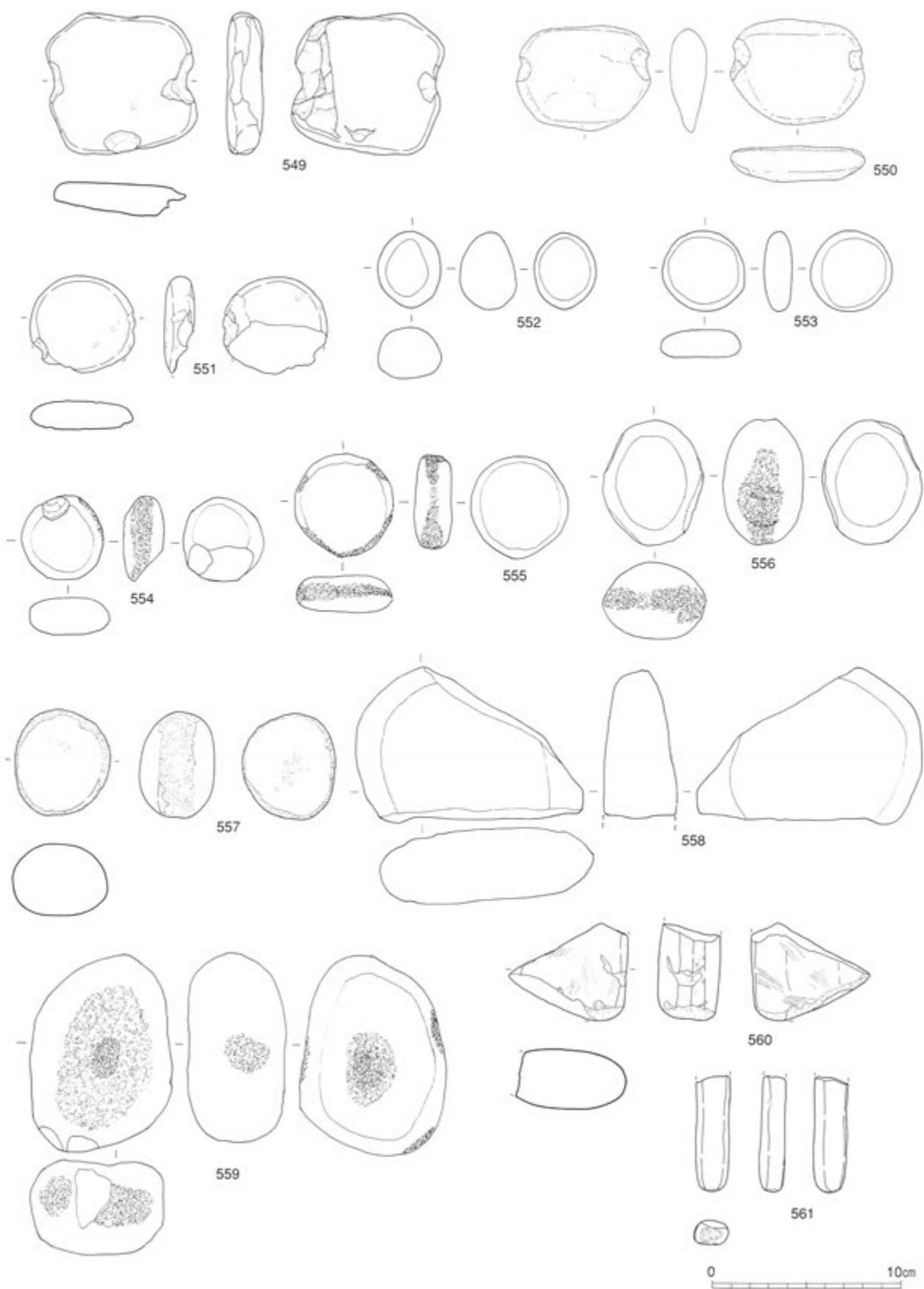
第63図 縄文時代晩期出土石器 7

石斧観察表

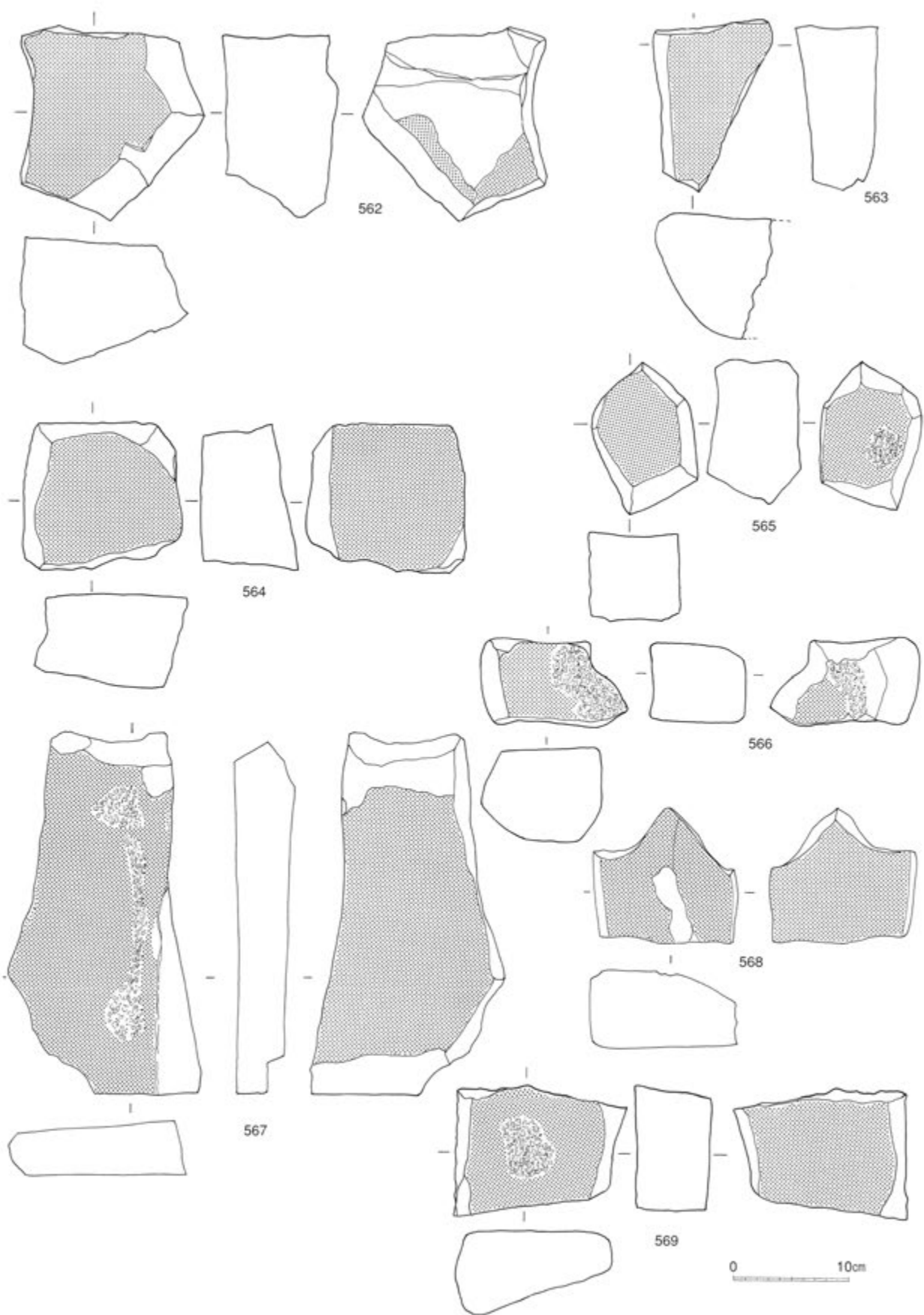
挿図 番号	遺物 番号	器 種	出土区	層位 遺構	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考
						cm	cm	cm	g	
第 61 図	516	磨製石斧	G-7	Ⅱ	頁 岩	16.2	8	1.95	367.0	
	517	磨製石斧		Ⅱ	頁 岩	8.7	4.4	1.23	71.46	
	518	磨製石斧	J-5	Ⅱ	安 山 岩	6.8	5.7	1.3	70.02	
	519	磨製石斧	H-5	Ⅱ	蛇 紋 岩	5	4.95	1.2	32.0	
	520	磨製石斧	H-5	Ⅱ	頁 岩	10.65	5.2	2.6	215.05	
	521	局部石斧	F-1	Ⅱ	粘 板 岩	17.4	7.35	1.75	289.65	
	522	磨製石斧		Ⅱ	頁 岩	9.65	8.05	2.8	256.52	
	523	磨製石斧	D-7	Ⅲ	頁 岩	10.75	6.05	1.4	115.68	
	524	磨製石斧	D-1	Ⅱ	頁 岩	12.15	6.65	1.95	167.32	
	525	磨製石斧		芋穴	頁 岩	12.05	5.9	1.7	127.29	
	526	磨製石斧	G-5	Ⅱ	頁 岩	9.65	5.95	1.45	93.78	
	527	磨製石斧	H-5	Ⅱ	頁 岩	10	6.15	1.35	109.85	
	528	磨製石斧		Ⅱ	頁 岩	12.65	6.25	1.55	142.89	
第 62 図	529	打製石斧	M-8	Ⅱ	頁 岩	13.9	7.25	2.0	199.61	
	530	打製石斧	D-5	Ⅱ	頁 岩	13.55	7.2	2.25	204.33	
	531	打製石斧		Ⅱ	頁 岩	9.05	8.1	1.5	134.39	
	532	打製石斧	H-5	Ⅱ	砂 岩	8.65	8.05	1.7	124.06	
	533	打製石斧		Ⅱ	頁 岩	7.65	6.5	1.8	102.16	
	534	打製石斧	J-7	Ⅱ	頁 岩	7.35	6.35	1.0	48.24	
	535	打製石斧	H-5	Ⅱ	頁 岩	5.6	4.45	1.15	35.52	
	536	打製石斧	I-4	Ⅱ	頁 岩	6.55	5.4	1.45	54.73	
	537	打製石斧	M-8	Ⅱ	頁 岩	11	6.7	2.35	286.08	
	538	打製石斧	G-5	Ⅱ	頁 岩	9.8	5.15	2.0	97.84	
	539	打製石斧	I-4	Ⅱ	頁 岩	6.25	3.3	1.45	30.32	
	540	打製石斧	H-5	Ⅱ	頁 岩	10.65	6.85	1.45	128.27	
	541	打製石斧		Ⅱ	安 山 岩	8.65	7.65	1.85	183.51	
第 63 図	542	石斧未製品	C-6	Ⅲ	頁 岩	11	4.65	2.65	138.67	
	543	石斧未製品	D-5	3号住居	頁 岩	13.55	4.35	2.3	226.67	



第64図 縄文時代晩期出土石器 8



第65図 縄文時代晩期出土石器 9

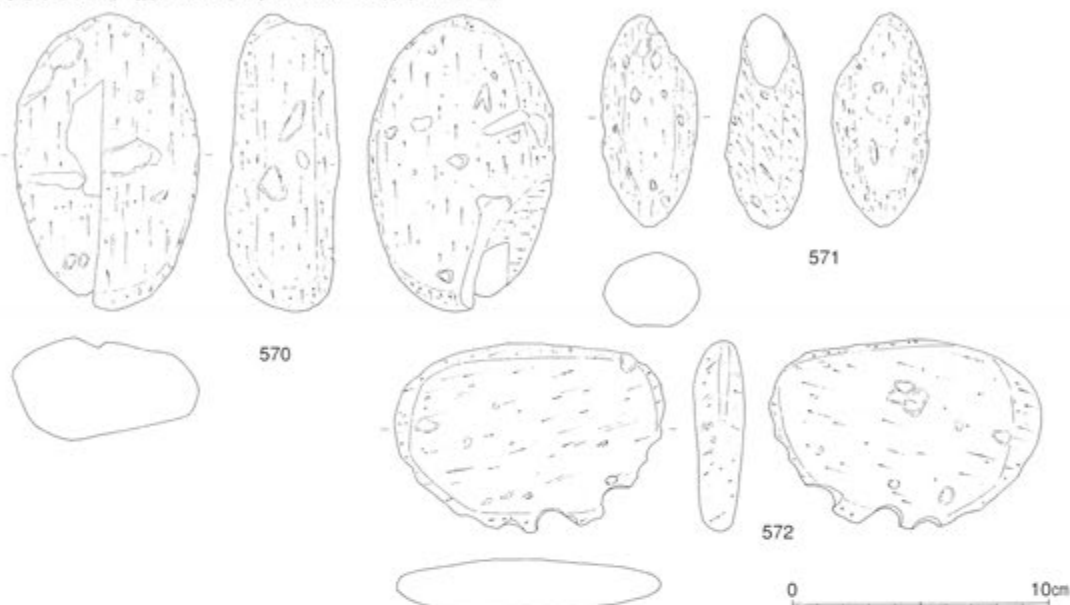


第66図 縄文時代晩期出土石器10

軽石製品（第67図）

軽石製品は3点が出土している。570は長さ11.8cm、幅6.75cm、厚さ4cmの楕円形で、全面が磨ってある。571は長さ8.35cm、幅3.75cm、厚さ2.8cmの棒状で、全

面を磨ってある。572は長さ10.4cm、幅7.3cm、厚さ2.3cmの扁平なもので、両面を平らに磨ってある。また、上縁には擦り込みによる半円の抉りが観察される。



第67図 縄文時代晩期出土石器11

礫器～軽石観察表

挿図 番号	遺物 番号	器 種	出土区	層位 遺構	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考
						cm	cm	cm	g	
第 64 図	544	礫器	H-3	Ⅱ	ホルンフェルス	11.4	8.5	4.9	515	
	545	礫器	L-1	Ⅱ	ホルンフェルス	14.1	9.35	4.8	672	
	546	礫器	H-2	Ⅲ	ホルンフェルス	18.05	11.2	5.8	1223	
	547	礫器		Ⅳ	ホルンフェルス	15.1	7.9	3.25	539	
	548	礫器	H-3	Ⅱ	ホルンフェルス	10.05	8.25	2.82	224	
第 65 図	549	石錘	J-3	Ⅱ	安山岩	7.75	7.7	1.95	176	
	550	石錘			砂岩	7.15	5.7	2.05	106	
	551	石錘		Ⅱ	安山岩	5.6	5.15	1.6	48	
	552	磨石	D-4	Ⅳ	砂岩	4	3.25	3.05	56	
	553	磨石		Ⅱ	砂岩	4.4	4.35	1.55	46	
	554	磨石	H-5	Ⅱ	砂岩	4.6	4.35	2.05	56	
	555	磨石	G-5	Ⅱ	安山岩	5.45	5.1	1.9	84	
	556	磨石	J-5	Ⅱ	砂岩	6.65	5.1	4.1	200	
	557	磨石	J-5	Ⅱ	砂岩	5.7	4.9	3.95	164	
	558	磨石			砂岩	11.75	8.55	4.1	478	
	559	磨石	G-7	Ⅱ	砂岩	10.95	7.7	5.35	655	
	560	磨石		Ⅱ	ホルンフェルス	6.2	5.3	3.3	147	
第 66 図	561	叩石	E-7	Ⅱ	砂岩	6.2	1.9	1.35	25	
	562	石皿	J-5	Ⅲ	砂岩	16.85	16.4	10.25	4000	
	563	石皿	F-2	Ⅱ	砂岩	16.5	10.3	10.9	1900	
	564	石皿			砂岩	13.5	13.45	8.7	2500	
	565	石皿	L-4	Ⅵ	砂岩	12.5	9.5	8.3	1400	
	566	石皿	L-4	Ⅴ	砂岩	13.3	8	7.9	1200	
	567	石皿			安山岩	33.3	15.9	5.3	4000	
	568	石皿			砂岩	12.6	11.85	7	1600	
第 67 図	569	石皿	L-4	Ⅴ	安山岩	15.7	11.8	7.75	2000	
	570	軽石	H-5	Ⅱ	軽石	11.8	6.75	4	63.46	
	571	軽石	G-5	Ⅱ	軽石	8.35	3.75	2.8	24.4	
	572	軽石	H-3	Ⅱ	軽石	10.4	7.3	2.3	43.17	

7 弥生時代の調査

弥生時代の遺物はⅡ層中より出土するもので、遺跡の南側に集中している。しかしながら遺物の出土量は多くはない。

(1) 遺構

遺構は検出されなかった。

(2) 遺物 (第68～70図)

遺物は土器・石器が出土しているが多くはない。

土器 (第68・69図)

573～611は甕形土器である。口縁部の外反の状況により弥生中期前半から後期まで細分される。573～579は全体的に小振りである。口縁部は短く、逆L字状に外反するが、やや垂れ下り気味である。口唇部はわずかに凹みを有する。580～600は口縁部が長くなるもの、580はわずかに湾曲して外反し口唇部は凹みを有する。581・586は口縁部が上方へ湾曲して外反し、内面には突起が認められるものである。582は復元口縁部径22.5cmを測るもので口縁部は逆L字状に外反する。胴部はやや丸味をおび、三角形貼付突帯を3条巡らす。583～594は口縁部が逆L字状に外反するものである。595～600は口縁部がくの字状に外反するものである。597は復元口縁部径24.0cmを測る。胴部はやや直線的で口縁部はくの字状に外反する。口縁内面はわずかに突起が認められる。601～605は三角形貼付突帯を巡ら

すものである。603は2条、その他は3条巡らす。607～610は底部。いずれも充実した脚台である。611は口縁部がくの字状に外反するがその度合いがゆるくなっている。612～635は壺形土器である。612は復元口縁部径17.0cmで、口縁部直下に2条の三角形貼付突帯を巡らす。613は短く外反する口縁部で頸部から口縁部へかけて暗文風のヘラミガキが認められる。

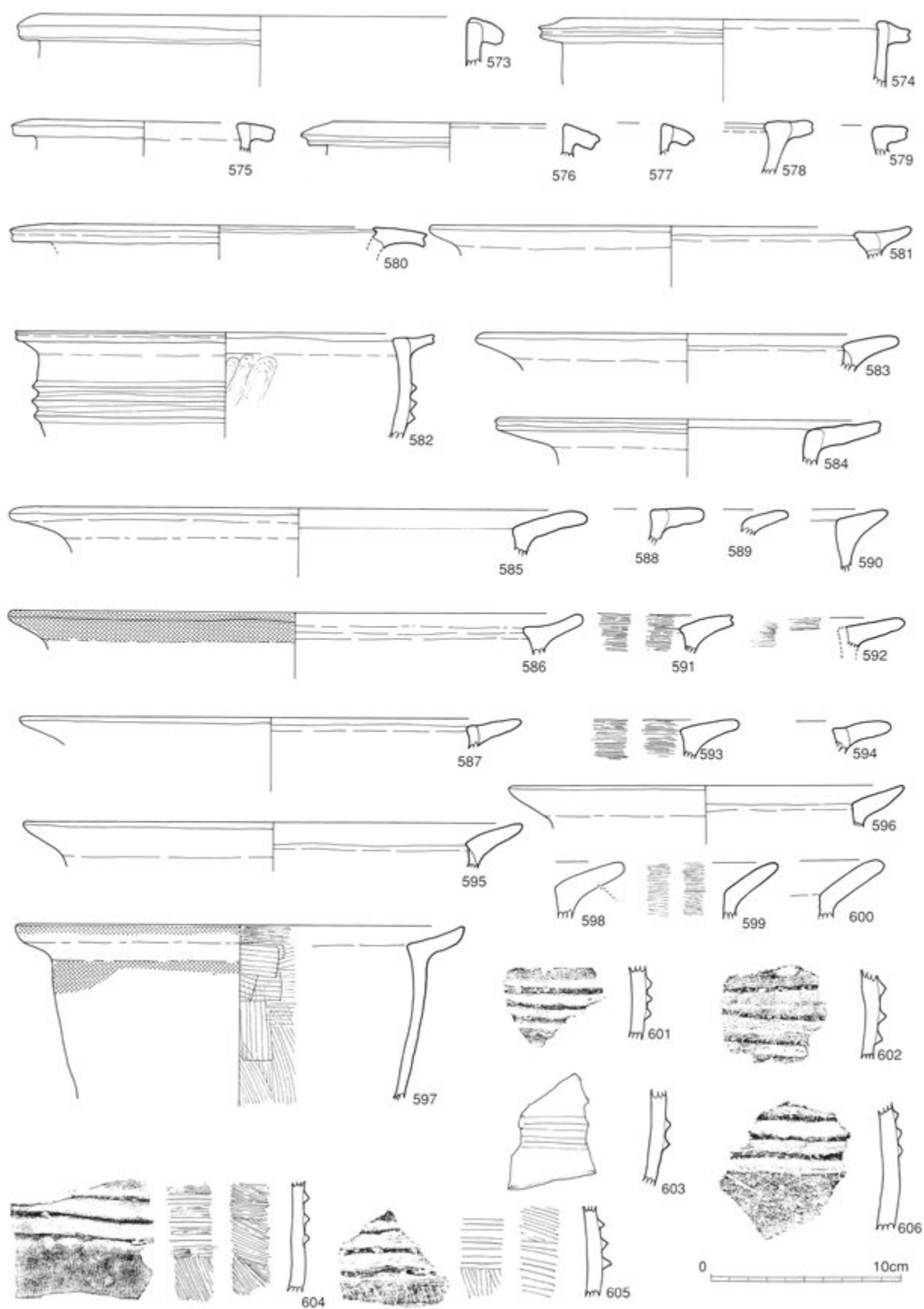
614は直行気味の口縁部で復元口縁部径11.0cmを測る。口縁部直下に刻目突帯、頸部に三角形貼付突帯を巡らす。615も短く外反する口縁部である。618～624は胴部、胴部最大径の位置よりやや上位に三角形貼付突帯を3条巡らす。625は刻目突帯を巡らす。626は頸部にヘラによる細かな刻目突帯を2条巡らす。628～635は底部である。いずれもしっかりした平底である。

石器 (第70図)

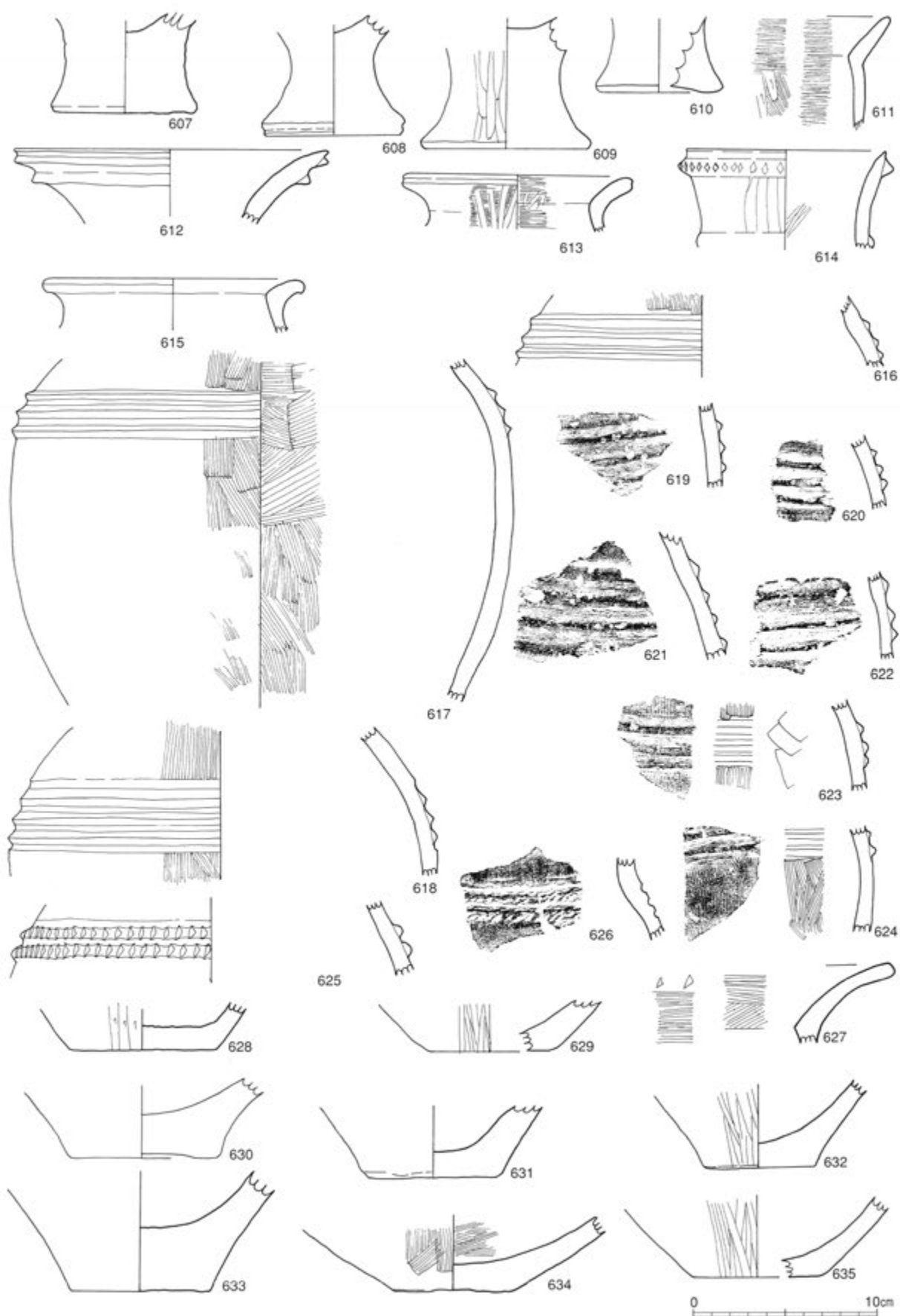
石器は磨製石鏃・磨製石剣の5点が出土している。636～639は磨製石鏃である。いずれも頁岩を素材とするものであるが、637は赤色を呈する頁岩である。636・639は先端部を欠損するもので、637・638は基部を欠損するものである。4点共全面に研磨の痕跡が顕著に認められる。640は頁岩を素材とする磨製石剣である。基部と先端部を欠損しているため全体形状・長さは判明しないものである。厚さは0.65cmで、断面は菱形を呈する。

弥生時代土器観察表

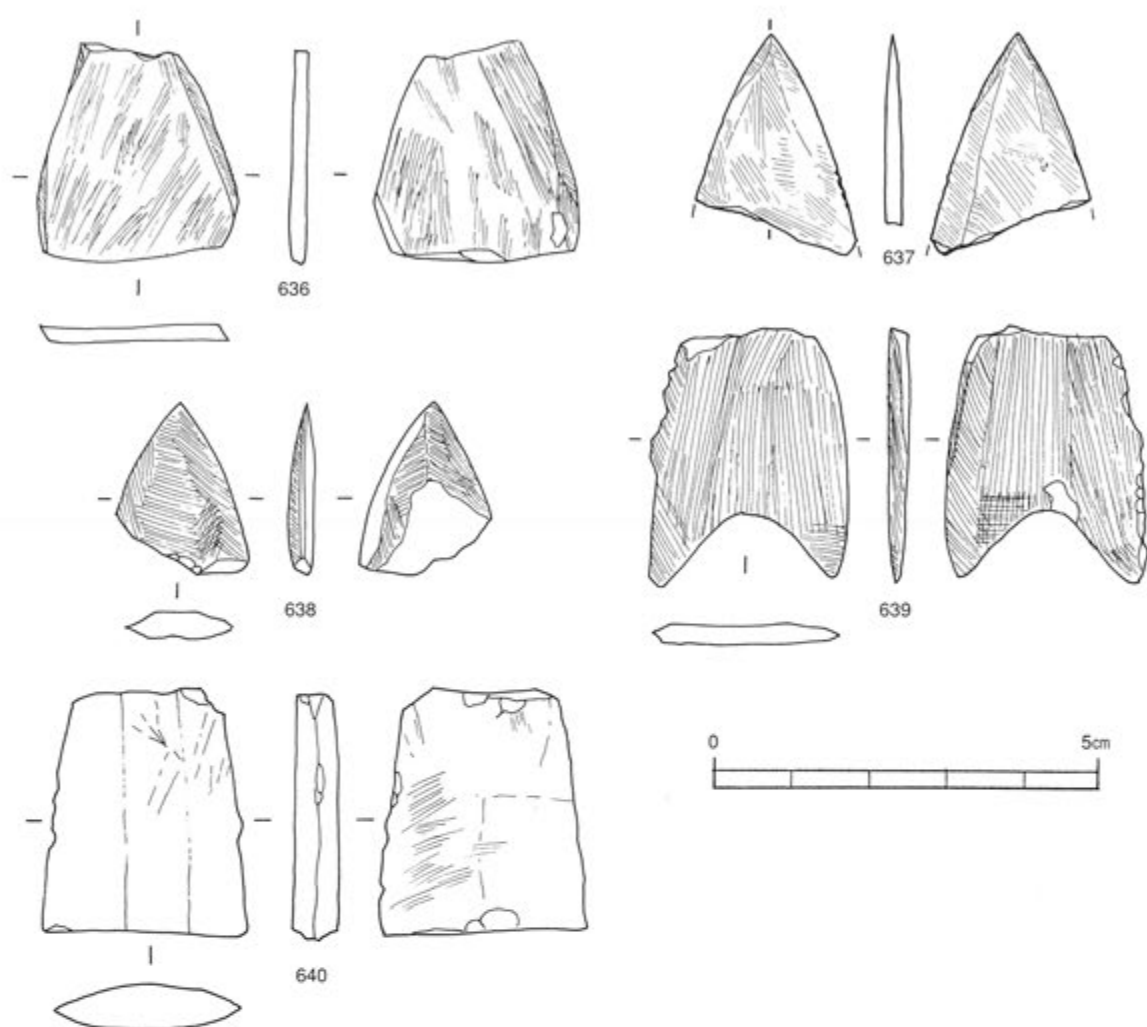
挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	色 調	胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
					石英	長石	角閃石	その他				
第 68 図	573		Ⅱ	茶褐色	○	○			良	ナデ	ナデ	
	574	L-8	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	575			暗茶褐色	○				〃	〃	ナデ	
	576	M-8	Ⅱ	茶褐色	○		○		〃	〃	ナデ	
	577	M-8	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	578			茶褐色	○				〃	〃	ナデ	
	579			茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	580		I	茶褐色	○	○			〃	ミガキ	ナデ	
	581	M-8	Ⅱ	淡茶褐色	○				〃	ナデ	ナデ	
	582	M-7	Ⅱ	暗茶褐色	○	○		金雲母	〃	ナデ・三角突帯	ナデ	
	583		Ⅱ	茶褐色	○	○		金雲母	〃	ナデ	ナデ	
	584	F-4	Ⅱ	茶褐色	○	○		金雲母	〃	〃	ナデ	
	585		Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	586		Ⅱ	黒茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	587		Ⅱ	茶褐色	○	○		金雲母	〃	〃	ナデ	
	588		Ⅱ	茶褐色	○	○		金雲母	〃	〃	ナデ	
	589	H-4	Ⅱ	茶褐色	○	○		金雲母	〃	〃	ナデ	
	590		Ⅱ	茶褐色	○	○		金雲母	〃	〃	ナデ	
	591	I-4	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	592	H-4	Ⅱ	茶褐色	○	○		金雲母	〃	〃	ナデ	
	593	H-4	Ⅱ	茶褐色	○	○		金雲母	〃	〃	ナデ	
	594			茶褐色	○	○		金雲母	〃	〃	ナデ	
	595	D-7	Ⅱ	黒茶褐色	○			金雲母	〃	〃	ナデ	
	596	H-5	Ⅱ	黒茶褐色	○			金雲母	〃	〃	ナデ	
	597	M-8	Ⅱ	暗茶褐色	○	○	○		〃	〃	ハケ目	外面スス付着
	598	I-5	Ⅱ	黒茶褐色	○	○		金雲母	〃	〃	ナデ	
	599	H-7	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	600	H-4	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	601	D-5	Ⅱ	暗茶褐色	○	○		金雲母	〃	ナデ・三角突帯	ナデ	
	602	I-4	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	603	L-7	Ⅱ	茶褐色	○		○	金雲母	〃	〃	ナデ	
	604	D-4	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	605	H-7	Ⅱ	黒茶褐色	○	○			〃	ナデ・ハケ目	ナデ	
	606	I-5	Ⅱ	淡茶褐色	○				〃	ナデ・三角突帯	ナデ	
第 69 図	607	H-7	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ		
	608	L-7	Ⅱ	茶褐色	○	○		金雲母	〃	ナデ		
	609	E-7	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ		
	610	G-7	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ナデ		
	611	D-5	Ⅱ	黒茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	612	I-4	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ナデ・突帯	ナデ	
	613	H-4	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ナデ・暗文風ミガキ	ナデ	
	614	D-7	Ⅱ	黒茶褐色	○	○			〃	ミガキ・刻目突帯	ナデ	
	615	I-4	Ⅱ	茶褐色	○			金雲母	〃	ナデ	ナデ	
	616	H-6	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ナデ・ハケ目・三角突帯	ナデ	
	617	H-3	Ⅱ	茶褐色	○				〃	〃	ナデ・ハケ目	
	618	D-1	Ⅱ	淡茶褐色	○	○	○		〃	ナデ・三角突帯	ナデ	
	619	D-5	Ⅱ	茶褐色	○				〃	ナデ・ハケ目・三角突帯	ナデ	
	620	L-7	Ⅱ	茶褐色	○	○		金雲母	〃	ナデ・三角突帯	ナデ	
	621	L-7	Ⅱ	茶褐色	○	○		金雲母	〃	〃	ナデ	
	622	I-3	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	623			淡茶褐色	○				〃	ナデ・ハケ目・三角突帯	ケズリ	
	624	H-3	Ⅱ	茶褐色	○		○		〃	ナデ・ハケ目・三角突帯	ナデ	
	625	N-5	Ⅶ	暗茶褐色	○	○			〃	ナデ・刻目突帯	ナデ	
	626	D-7	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	ミガキ・刻目突帯	ナデ	
	627	M-8	Ⅱ	淡茶褐色	○				〃	ナデ・刻目	ナデ	
	628	H-7	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ	ナデ	
	629	H-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ミガキ	ナデ	
	630	H-7	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ケズリ	ナデ	
	631	H-6	Ⅱ	黒茶褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ	
	632	H-2	Ⅱ	茶褐色	○	○		金雲母	〃	ミガキ	ナデ	
	633	L-7	Ⅱ	茶褐色	○	○		金雲母	〃	ナデ	ナデ	
	634	H-5	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ハケ目・ケズリ	
	635	D-3	Ⅱ	暗茶褐色	○				〃	ミガキ	ナデ	



第68図 弥生時代出土土器 1



第69図 弥生時代出土土器 2



第70図 弥生時代出土石器 1

挿図 番号	遺物 番号	器 種	出土区	層位 遺構	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考
						cm	cm	cm	g	
第 70 図	636	磨製石鏃	M-5	Ⅱ	頁 岩	2.9	2.55	0.3	3.42	
	637	磨製石鏃	L-7	Ⅱ	赤色頁岩	2.45	2.15	0.22	1.23	
	638	磨製石鏃	E-7	Ⅱ	頁 岩	2.35	1.5	0.3	1.11	
	639	磨製石鏃	H-4	Ⅱ	頁 岩	3.3	2.6	1.22	2.71	
	640	磨製石剣		Ⅱ	頁 岩	3.1	2.65	0.65	8.23	

古墳時代の遺物はⅡ層中から出土し、遺構はⅢ層上面において検出されるものである。遺構は北側に集中している。

遺構は土器溜り1基、竪穴住居跡7基、土坑9基が検出された。



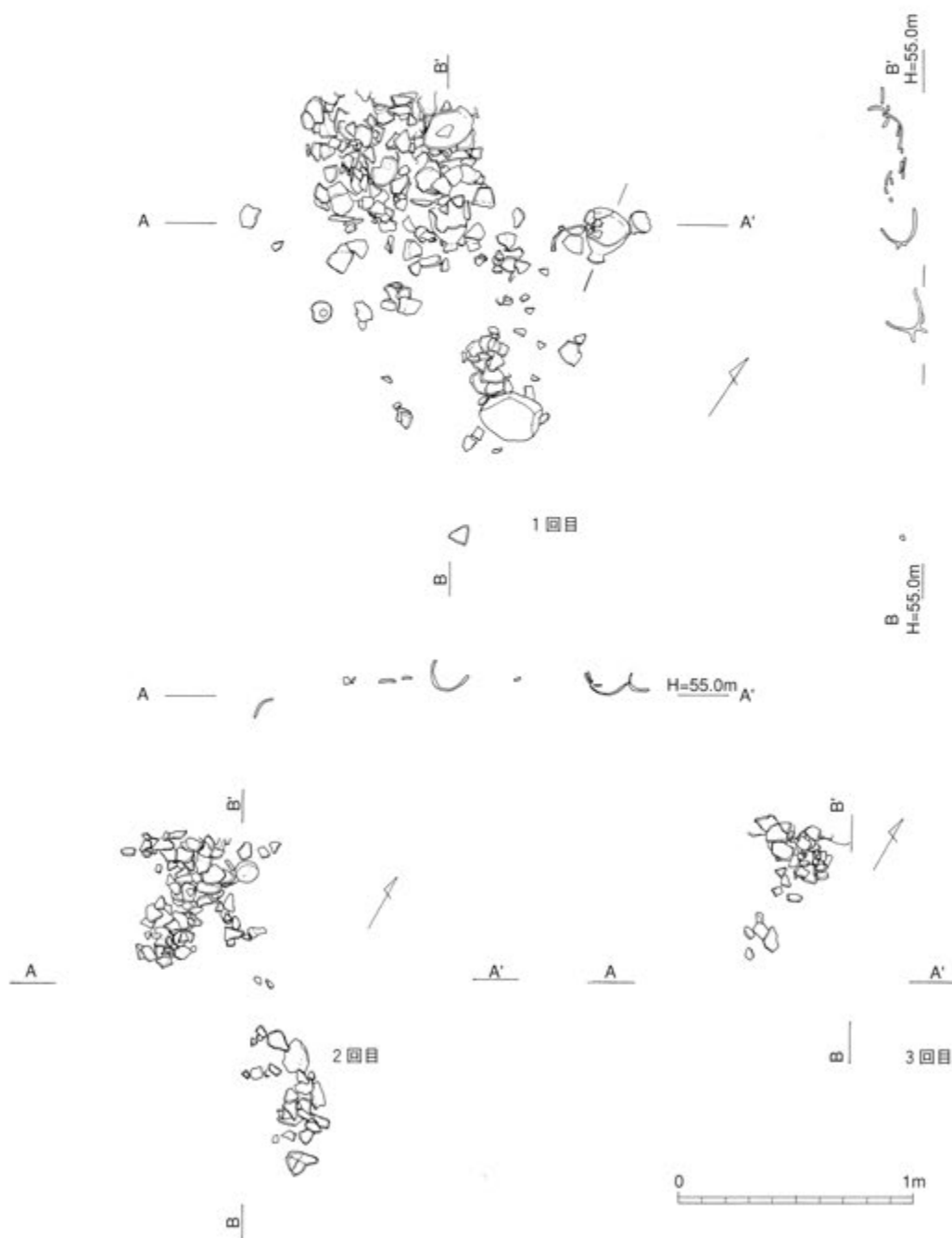
① 土器溜り (第72~78図)

土器溜りはF-4区Ⅱ層中において検出されたもので、東西1.5m、南北1.2m(北側は未調査のため実際はもっと広いものと思われる)の範囲に完形土器および大型破片が集中している。641~679は甕形土器である。641~647は完形および完形に復元できるものである。口縁部はくの字状に外反するが、概してなだらかで内面の稜線は明瞭ではない。

底部は中空の脚台で、いずれも頸部のくびれ部から

口縁部へかけてハケ目によるカキ上げ技法が見られる。また、カキ上げのハケ目をナデで消すものもある。

641は口縁部径24.3cm、器高31.1cm。642は口縁部径24cm、器高28.9cm。643は口縁部径20cm、器高24.8cm。644は口縁部径22.5cm、器高25cm。645は口縁部径17.4cm、器高18.8cmで、脚台がやや低いものである。646は口縁部径18.8cm、器高21.8cm。647は口縁部径18.7cm、器高20cmを測る。



第72図 土器溜り

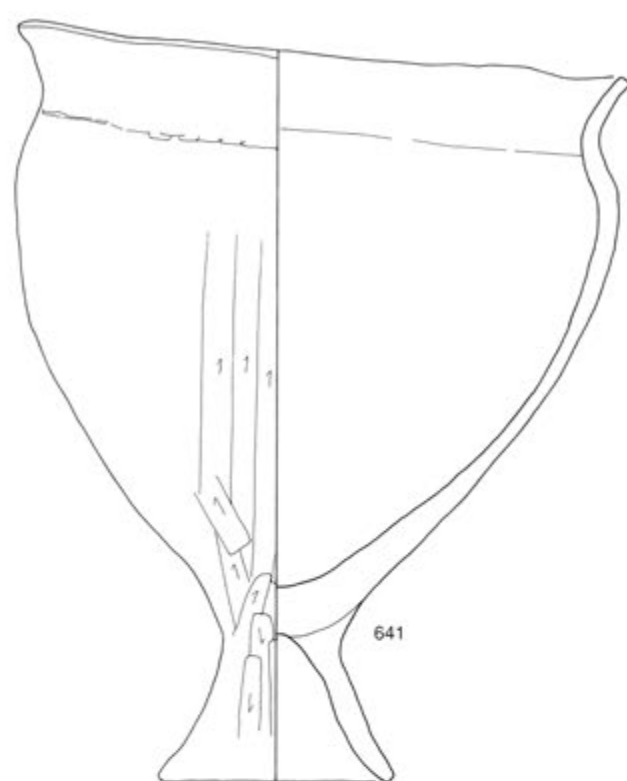
648～670は底部を欠損するもので前述の完形土器とほぼ同様の形状を示す。656・657・668は口縁部の外反の度合いが弱いものである。670も緩やかに外反する口縁部で頸部に刻目突帯を巡らす。671～678は胴部から底部にかけての部位。底部は中空の脚台である。679は頸部に幅広の突帯を巡らす。

680・681は丸底の甕形土器である。680は復元口縁部径10cmを測る。短く外反する口縁部から胴部は丸みを帯びるものである。器外面はハケ目調整、内面には指頭圧痕の痕跡が認められる。681は丸底の底部から胴部はあまり膨らまず頸部でややしまり、口縁部はゆるやかに外反する。682～684は脚台付きの鉢形土器である。682は口縁部径19.4cm、器高15.6cmを測る。裾の広がる脚台からゆるやかに湾曲しながら立ち上がり、

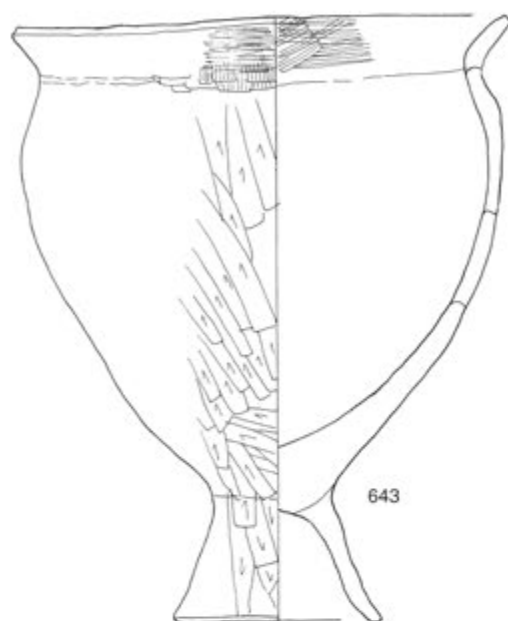
口縁部は逆L字に近く外反する。683・684はほぼ同様の形状であるが、683のほうがやや深い。直線的に立ちあがった胴部からそのまま直行する口縁部へと続くものである。685は平底の鉢形土器で口縁部径10.3cm、器高5.8cmを測る。口縁部はやや内弯する。686は大型の鉢形土器で口縁部径32cmを測る。胴部はやや膨らみ口縁部はわずかに内弯する。

687～693は壺形土器である。687は小型の壺形土器である。688は胴部が球形状に膨らむ。689は3条の突帯、690は3条の刻目突帯を巡らす。691～693は底部から胴部である。底部は丸底であるが、693はわずかに平底である。土器溜り出土の遺物についてみると、金峰町中津野遺跡出土の中津野式土器に酷似しているものである。

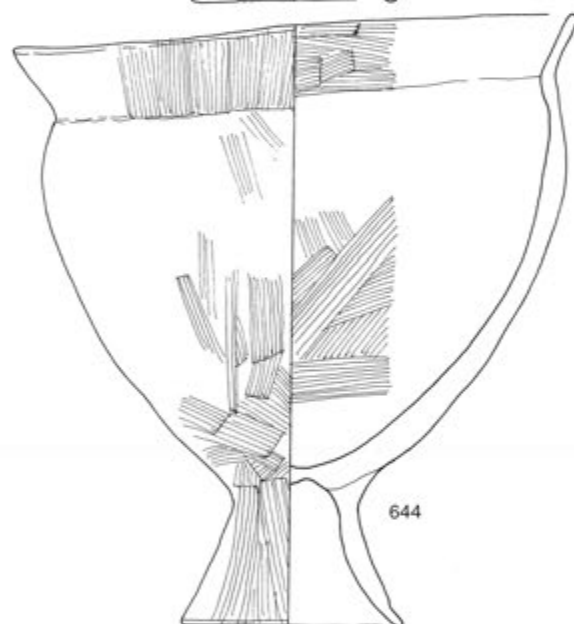
挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	色 調	胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
					石英	長石	角閃石	その他				
第 73 図	641			茶褐色	○	○	○		良	ケズリ	ナデ	
	642			茶褐色	○		○		〃	ケズリ・ハケ目	ナデ	カキ上げ
	643			茶褐色	○		○		〃	〃	ナデ・ハケ目	カキ上げ
	644			茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ハケ目	カキ上げ
	645			茶褐色	○	○	○		〃	ナデ・ハケ目	ナデ	カキ上げ
第 74 図	646			茶褐色	○	○	○		〃	ナデ・ハケ目	ナデ	カキ上げ
	647			茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ・ハケ目	ケズリ・ナデ	カキ上げ
	648			茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ナデ・ハケ目	カキ上げ
	649			茶褐色	○	○	○		〃	〃	ハケ目	カキ上げ
	650	E-1	II	茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ・ハケ目	ナデ・ハケ目	カキ上げ
	651			茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ナデ	カキ上げ
第 75 図	652			茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ・ハケ目	ハケ目	カキ上げ
	653			茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ナデ	カキ上げ
	654			茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ・ハケ目	ナデ	
	655			茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ナデ	カキ上げ
	656			茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	657			茶褐色	○	○	○		〃	ナデ・ハケ目	ナデ	カキ上げ
	658			茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ・ハケ目	ナデ	
	659	H-5	II	茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ケズリ・ナデ	カキ上げ
	660			茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ナデ	カキ上げ
第 76 図	661			茶褐色	○	○	○		〃	ナデ・ハケ目	ナデ	カキ上げ
	662			茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ・ハケ目	ナデ	カキ上げ
	663			茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ナデ	カキ上げ
	664			暗茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	665			茶褐色	○	○	○		〃	ナデ・ハケ目	ナデ	カキ上げ
	666	H-5	II	暗茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	カキ上げ
	667			黒茶褐色	○	○			〃	ケズリ・ハケ目	ナデ	カキ上げ
	668	H-7	II	暗茶褐色	○	○			〃	ケズリ	ケズリ	カキ上げ
	669	H-7	II	黒茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ハケ目	
	670			暗茶褐色	○	○	○		〃	刻目突帯・ハケ目	ハケ目	
	671			茶褐色	○	○	○		〃	ナデ・指頭圧痕	ナデ	
	672	F-1	II	茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ	ケズリ	
	673			茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	674			茶褐色	○	○			〃	ケズリ	ナデ	
第 77 図	675			茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	676			茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ナデ	
	677	H-7	II	茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ナデ	
	678			茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ	ナデ	
	679			暗茶褐色	○	○			〃	ナデ・突帯	ナデ	
	680			茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ハケ目・指頭圧痕	
	681			茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	



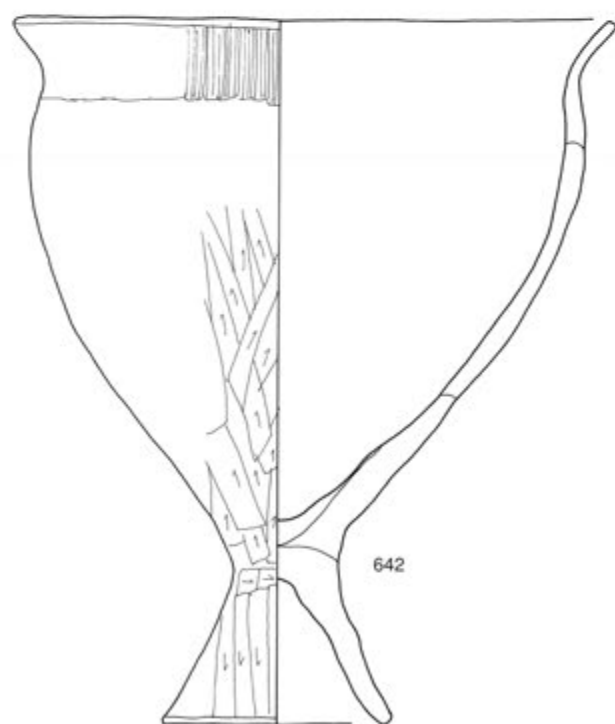
641



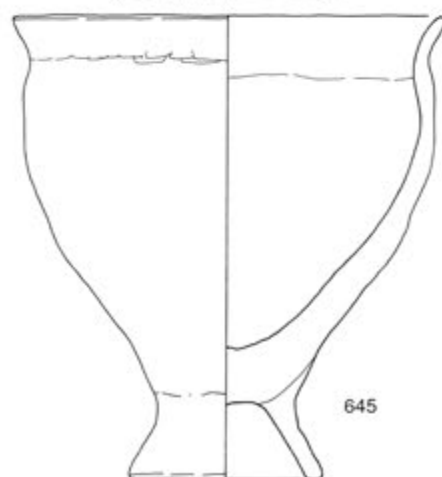
643



644



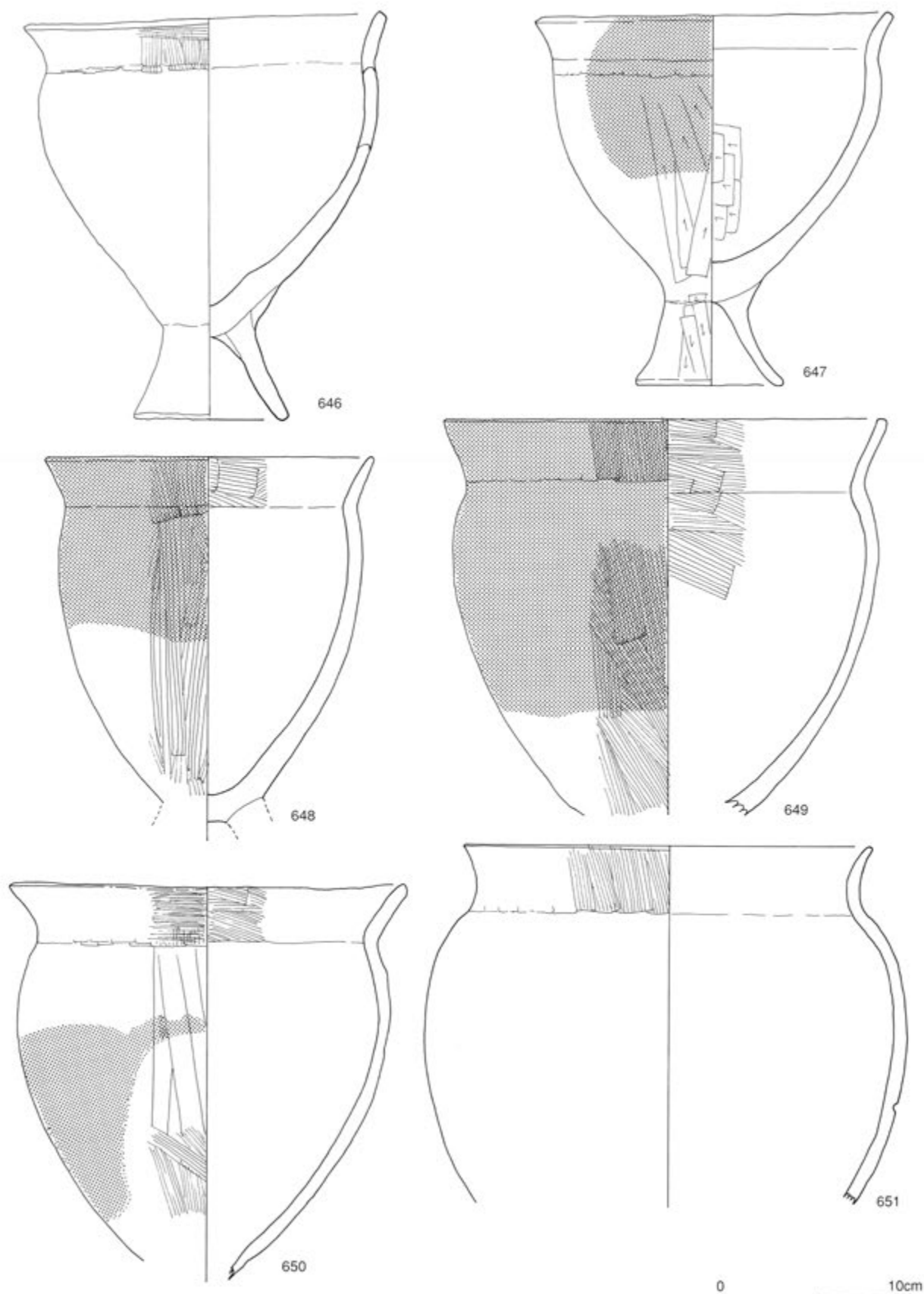
642



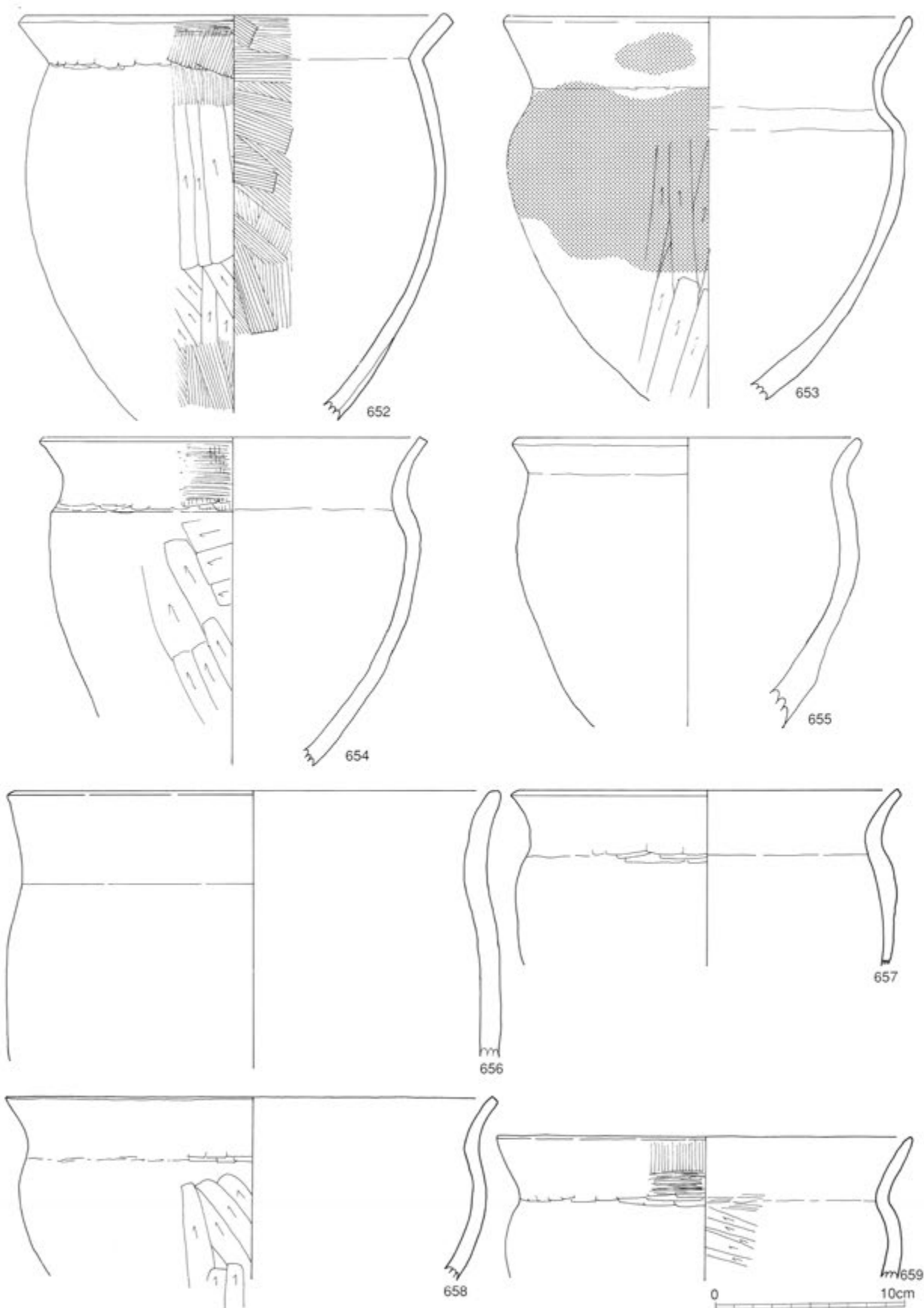
645

0 10cm

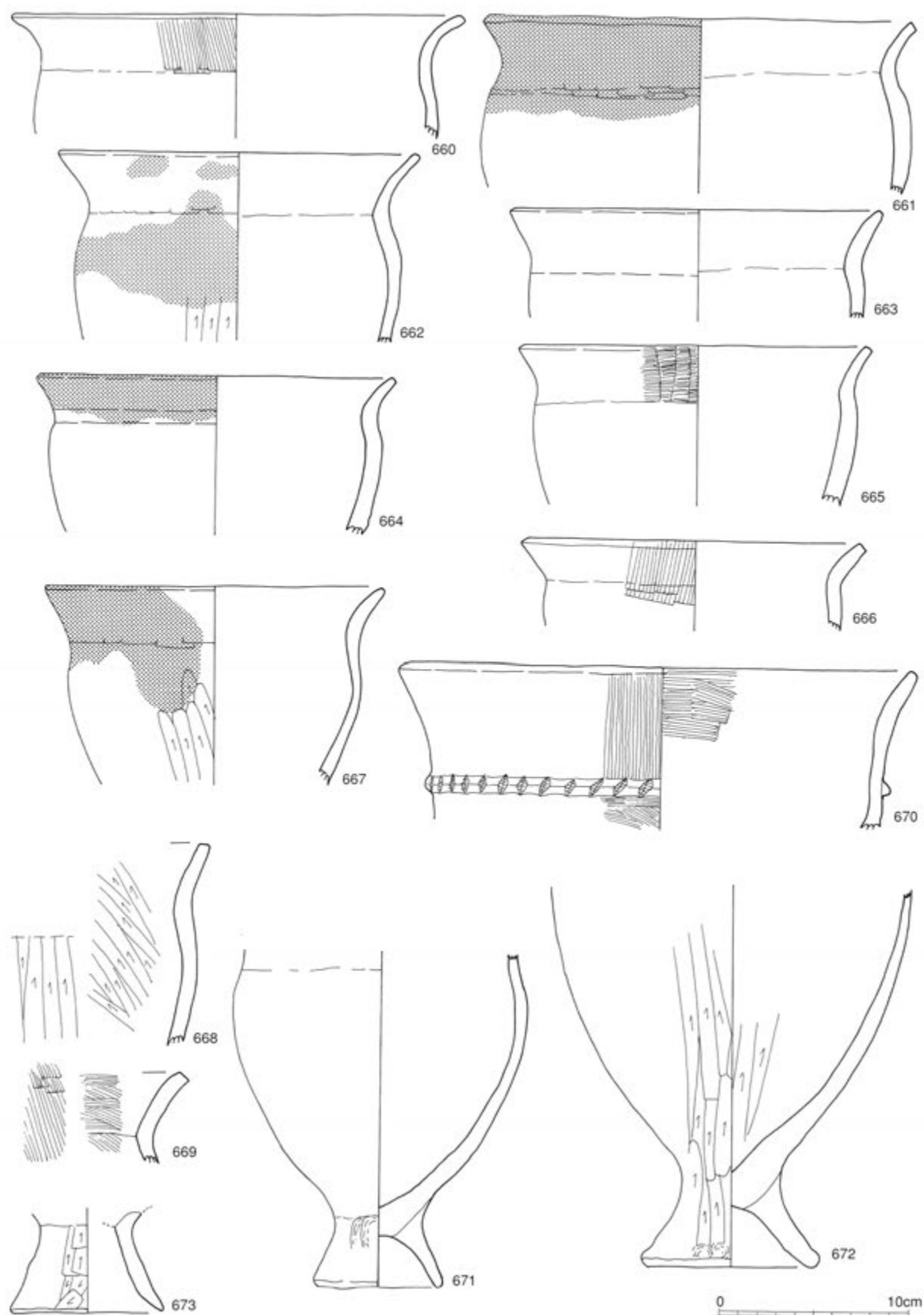
第73図 土器溜り出土土器 1



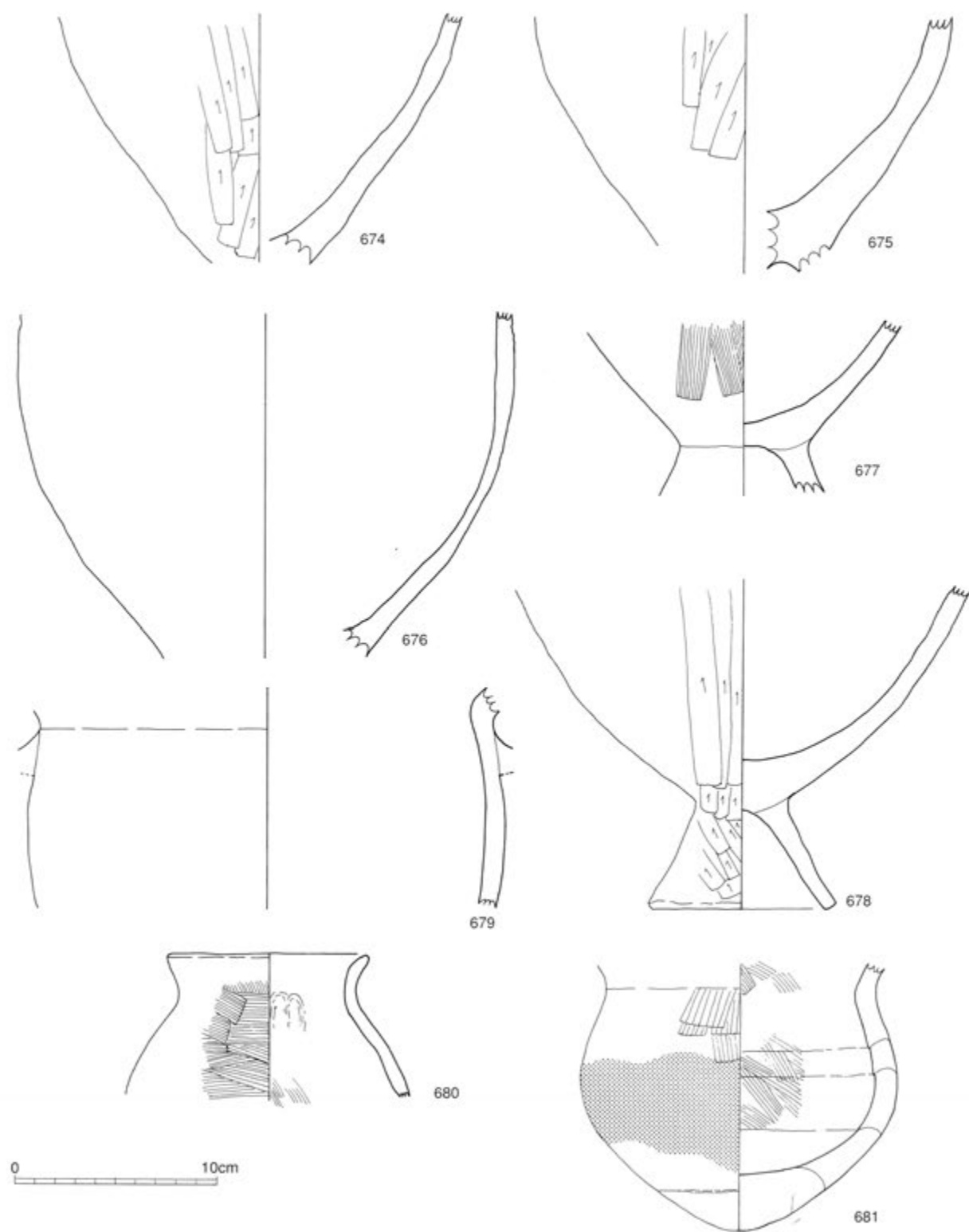
第74図 土器溜り出土土器 2



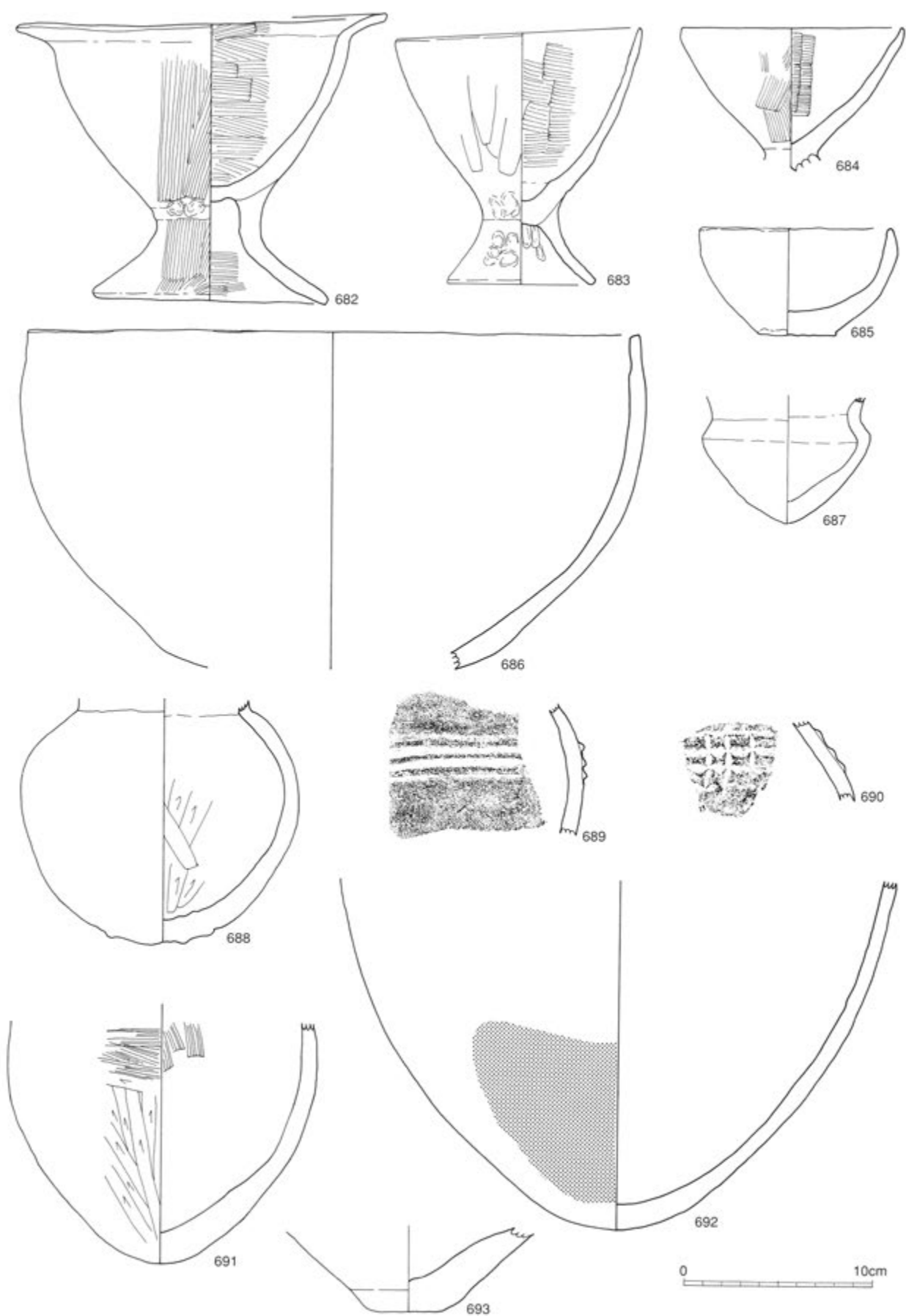
第75図 土器溜り出土土器 3



第76図 土器溜り出土土器 4



第77図 土器溜り出土土器 5



第78図 土器溜り出土土器 6

土器溜り出土土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	色 調	胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
					石英	長石	角閃石	その他				
第 78 図	682			茶褐色	○	○	○		良	ハケ目	ハケ目	
	683			茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ・指頭圧痕	ハケ目・ケズリ	
	684			茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ハケ目	
	685			茶褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ	
	686			茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	687	M-6	Ⅳ	暗茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	688	F-1	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ケズリ	
	689			茶褐色	○	○			〃	ナデ・突帯	ナデ	
	690	H-7	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	刻目突帯	ナデ	
	691			茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ・ハケ目	ナデ・ハケ目	
	692			茶褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ	
	693			茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	

② 竪穴住居跡

竪穴住居跡は遺跡の北側を中心に7基が検出された。

1号住居跡（第79・80図）

1号住居跡はB-5区において検出された。1辺約3.5mの略方形プランである。深さは上層部が削平されているため33cmと浅い。東壁沿いに幅1.3m、長さ2m、深さ13cmの浅い掘込みがある。柱穴はほぼ中央に1個ある他は検出されなかった。住居跡内の遺物は多くはないが、器種は豊富である。694～700は脚台を有する甕形土器。694は外反する口縁部。695～698は突帯・刻目突帯を巡らす胴部である。699・700は中空の脚台である。701は丸底の甕形土器である。口縁部径17.2cm、器高18cmを測る。平底に近い丸底から胴部は膨らみ、口縁部はしまった頸部からくの字状に外反するものである。器外面はハケ目調整、内面の胴部はヘラケズリ調整である。

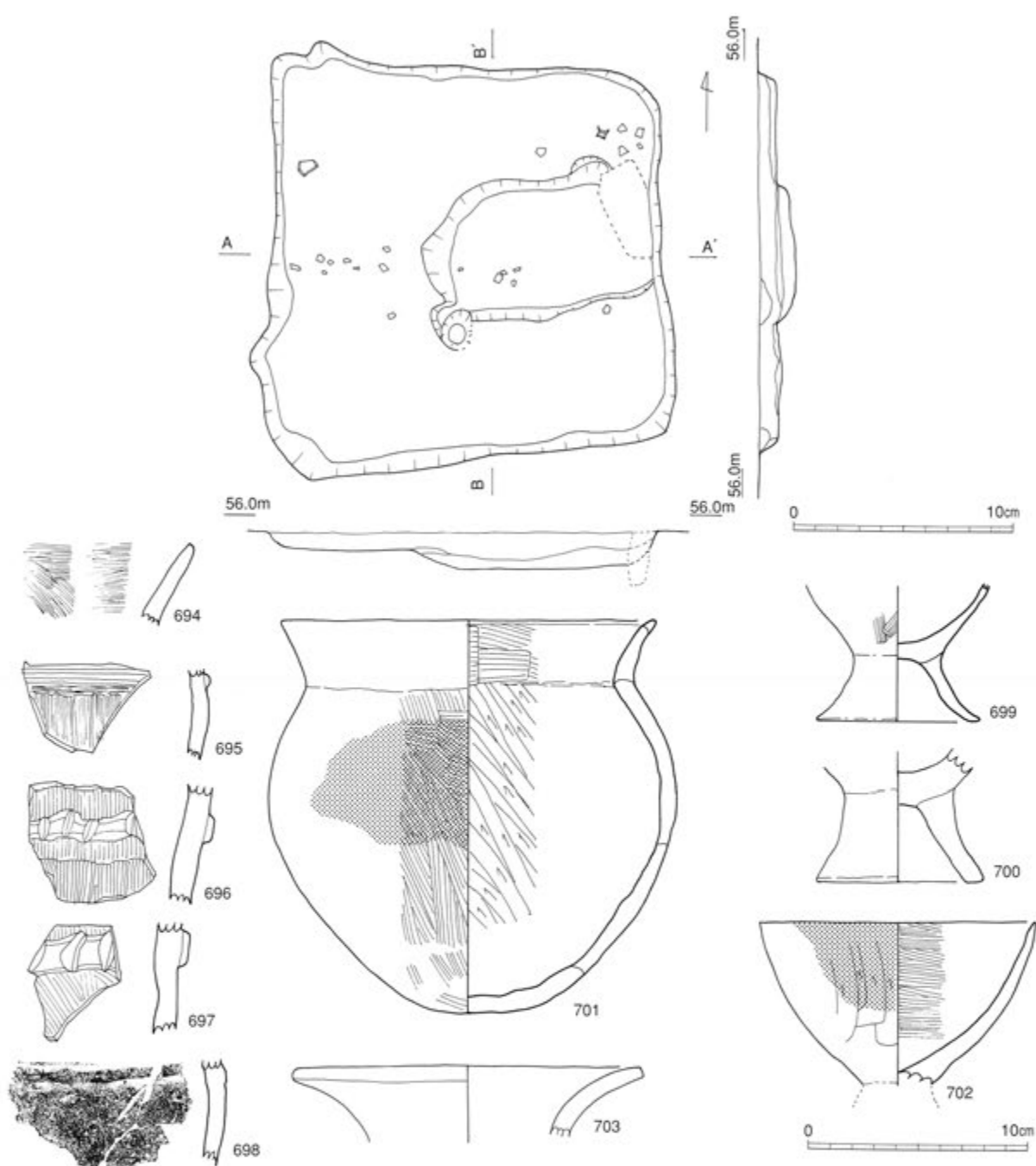
702は口縁部径12.5cmを測る脚付の鉢形土器である。703～705は壺形土器。706は手捏ね土器状の壺形土器である。口縁部径5cmを測る。707は口縁部径6.8cm、器高8.2cmを測る小型の壺形土器である。球形に膨らんだ胴部から頸部はしまり、口縁部は短く外反する。

708は丹塗りの埴土土器。鋭角に張った胴部から内傾して口縁部へ至るものである。器外面は丁寧なヘラ

ミガキ調整が施される。709・710は丹塗りの高坏。709は口縁部径19.6cmを測るもので、坏部の接合部分に明瞭な段が認められる。器内外面とも丁寧なヘラミガキ調整である。710は裾部がなだらかに開く脚部である。

2号住居跡（第81・82図）

2号住居跡はE・F-2・3区において検出された。1辺5.4mの略方形プランである。深さは上層部が削平されているため25cmと浅い。中央部に長さ3.5m、幅1.5mと長さ1.5m、幅1.2mの土坑が切り合った状態で検出されている。また、東側に突出部分も認められる。柱穴と思われる遺構は検出されなかった。住居跡内からの遺物は少ないが珍しいもので鉄斧が出土している。711～713は甕形土器である。711は口縁部径16.4cmを測り、口縁部がくの字状に近く外反する。頸部から口縁部へのハケによるカキ上げが認められる。713は中空の脚台である。714～718は壺形土器。714は胴部最大径の位置に2条の突帯を巡らす。715・716も胴部に突帯を巡らすものである。717は頸部が細いものである。719は丹塗りの高坏。坏部の接合部分の段は不明瞭である。720はジョッキ形を呈する土器の底部と思われる。721は鉄斧である。長さ10.2cm、幅3.5cm、厚さ1cmを測る短冊の形をしたもので刃部は両刃である。また、袋部の無い形態である。



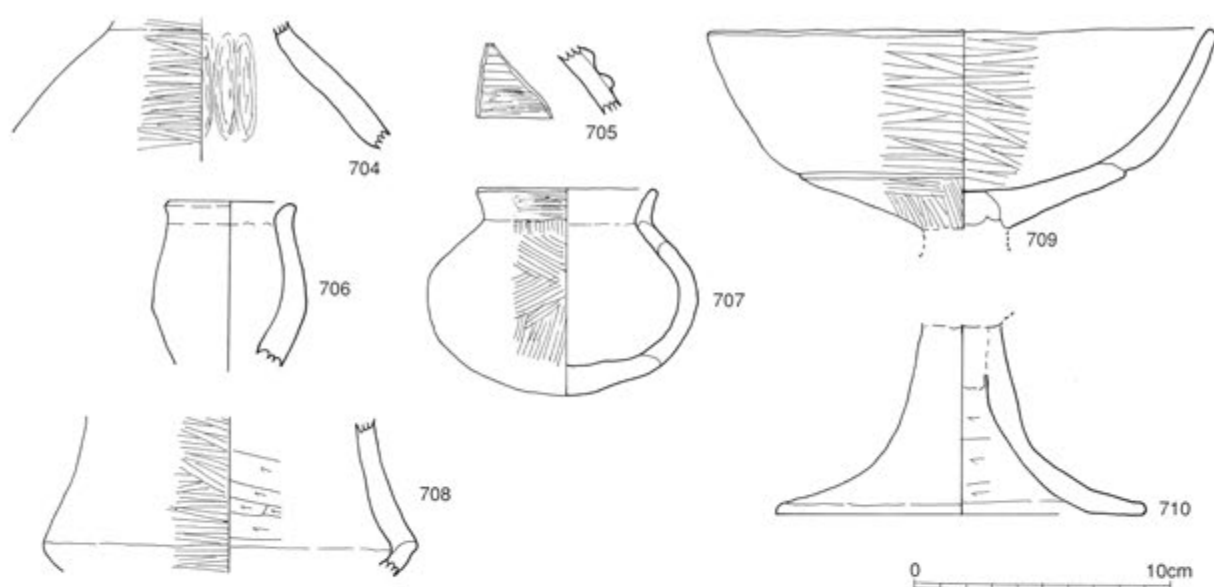
第79図 1号住居跡及び1号住居跡出土遺物1

3号住居跡 (第83~88図)

3号住居跡はE-1区において検出されたもので、長辺4.8m、短辺3.8mの長方形プランである。深さは35cmで、住居跡内からは多くの土器片が出土した。柱穴と思われるものは6個検出されているがビット1とビット6の2本の柱穴が中心になるものではないかと思われる。

722~741は甕形土器。722はほぼ直行する口縁部で口縁部径26.5cmを測る。胴部にはすれ違いの刻目突帯を巡らす。723は口縁部径25.2cmを測り、口縁部は直

行気味であるが端部でわずかに外反し、胴部には刻目突帯を巡らす。725は丸底甕形土器と思われる。726は口縁部が外反する。727~736は胴部に刻目突帯を巡らすものである。737・741は中空の脚台である。742は口縁部がわずかに内湾する鉢形土器で、口縁部径13.4cm、器高8cmを測る。743~745は上げ底気味の底部を持つ鉢形土器である。743は口縁部径12cm、器高8cmを測り、上げ底の底部から直線的に外反するものである。



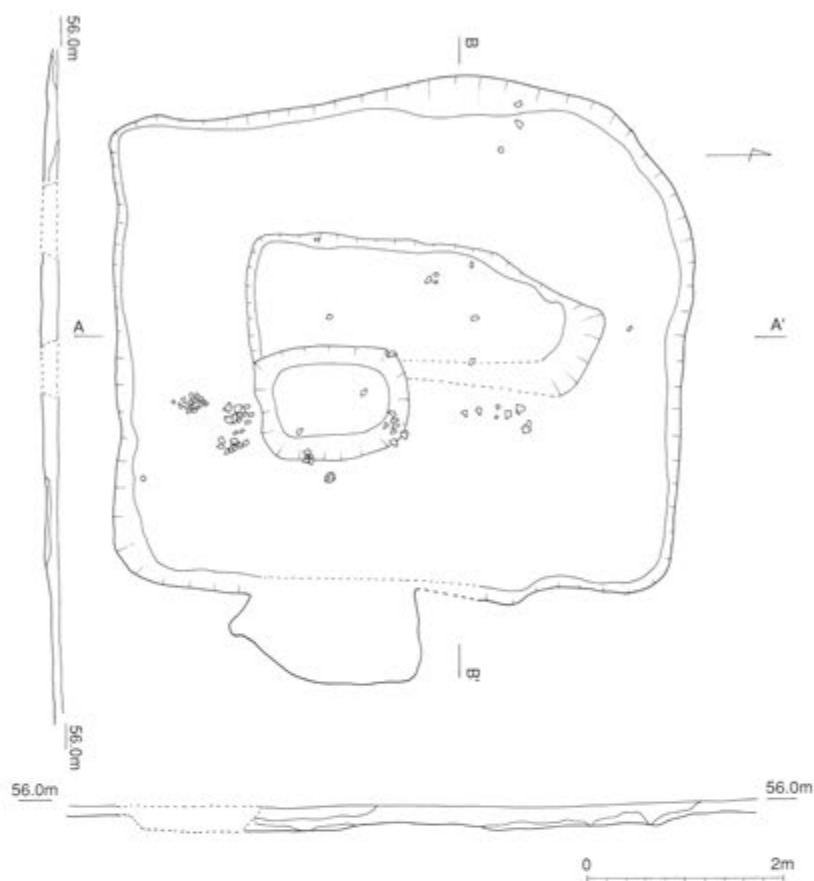
第80図 1号住居跡出土遺物2

744は口縁部径12cmを測るものである。746～761は壺形土器である。746は口縁部径16.4cmを測る。747～750は頸部から肩部にかけてのものである。751～756は胴部に刻目突帯を巡らすものである。757～761は底部で丸底・平底である。762～765は埴型土器である。762は口縁部径12cmを測るものである。763は胴部最大径の部位が鋭角的に張るものである。764は平底の底部から胴部は球形状を呈するものであるが、内底面に布と思われる繊維痕が認められる。布を棒状道具に装

着して押圧調整を施したと思われる。765は平底の底部。766～775は高坏。766～773は坏部で、766・768・771・772は内外面共に丹塗りであるが、769・770・773は外面のみ丹塗りである。771は口縁部端部の内外面にススが付着しており、蓋としての再利用が考えられるものである。774・775は脚部でいずれも外面は丹塗りである。775は内面にも丹が点々と付着している。776は壺の形をした小型の土製品であるが用途は不明である。

1号住居跡出土観察表

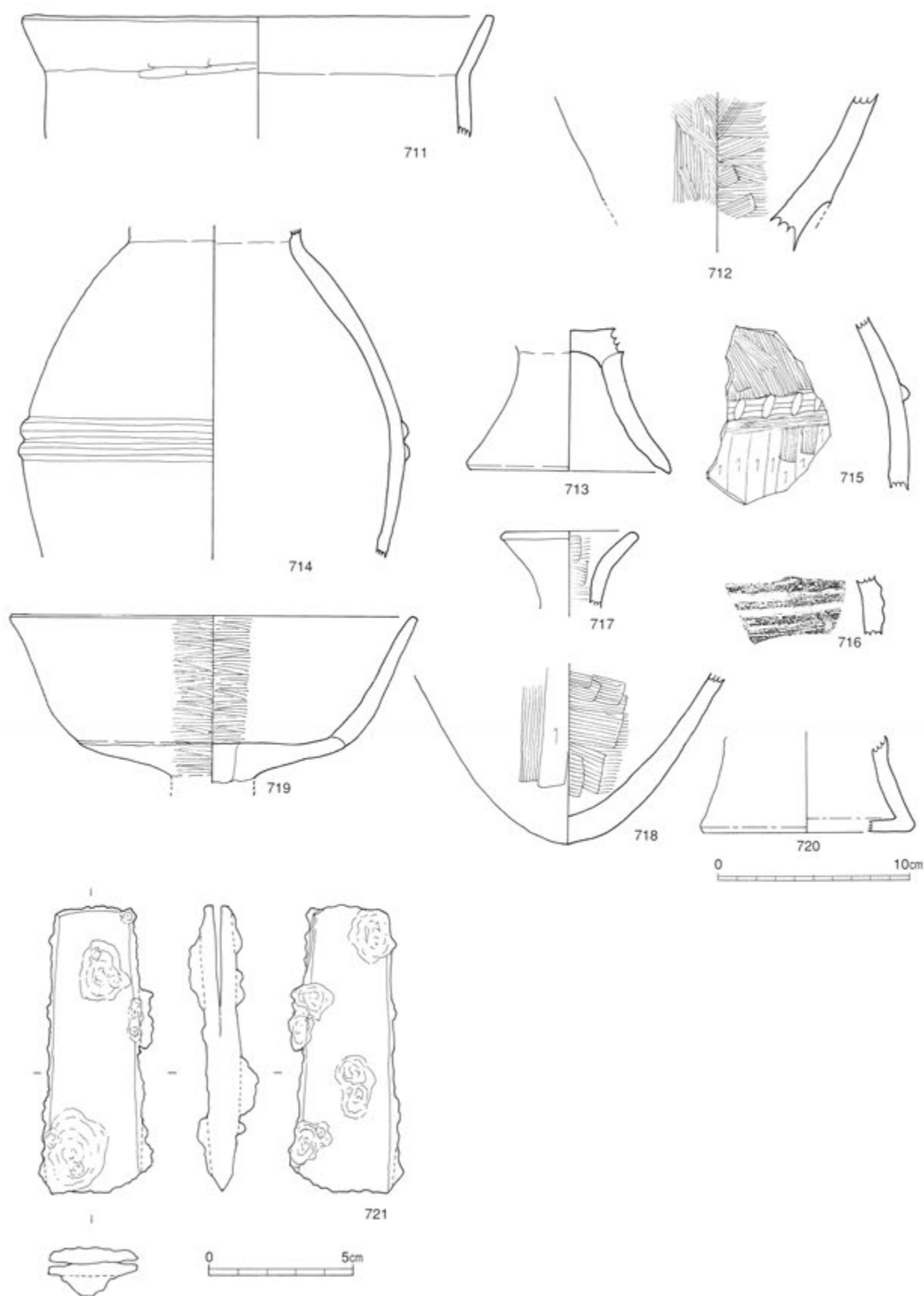
挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	色 調	胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
					石英	長石	角閃石	その他				
第 79 図	694	1号住居		黒茶褐色	○	○	○		良	1号住居・ナデ	ナデ	
	695	1号住居		茶褐色	○	○			〃	突帯・ハケ目	ナデ	
	696	1号住居		茶褐色	○	○	○		〃	刻目突帯・ハケ目	ナデ	
	697	1号住居		茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	698	1号住居		茶褐色	○	○			〃	突帯・ハケ目	ナデ	
	699	1号住居		茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ナデ	
	700	1号住居		茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	701	1号住居		茶褐色	○	○			〃	〃	ハケ目・ケズリ	
	702	1号住居		黒茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ	ハケ目	
	703	1号住居		淡茶褐色	○	○			〃	ナデ		
第 80 図	704	1号住居		茶褐色	○	○	○		〃	ミガキ	ナデ・シボリ	丹塗り
	705	1号住居		茶褐色	○				〃	ナデ・突帯	ナデ	
	706	1号住居		暗茶褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ	
	707	1号住居		茶褐色	○	○			〃	ハケ目・ナデ	ナデ	丹塗り
	708	1号住居		茶褐色	○		○		〃	ミガキ	ケズリ・ナデ	丹塗り
	709	1号住居		茶褐色	○		○		〃	〃	ミガキ	
	710	1号住居		茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ケズリ・ナデ	丹塗り



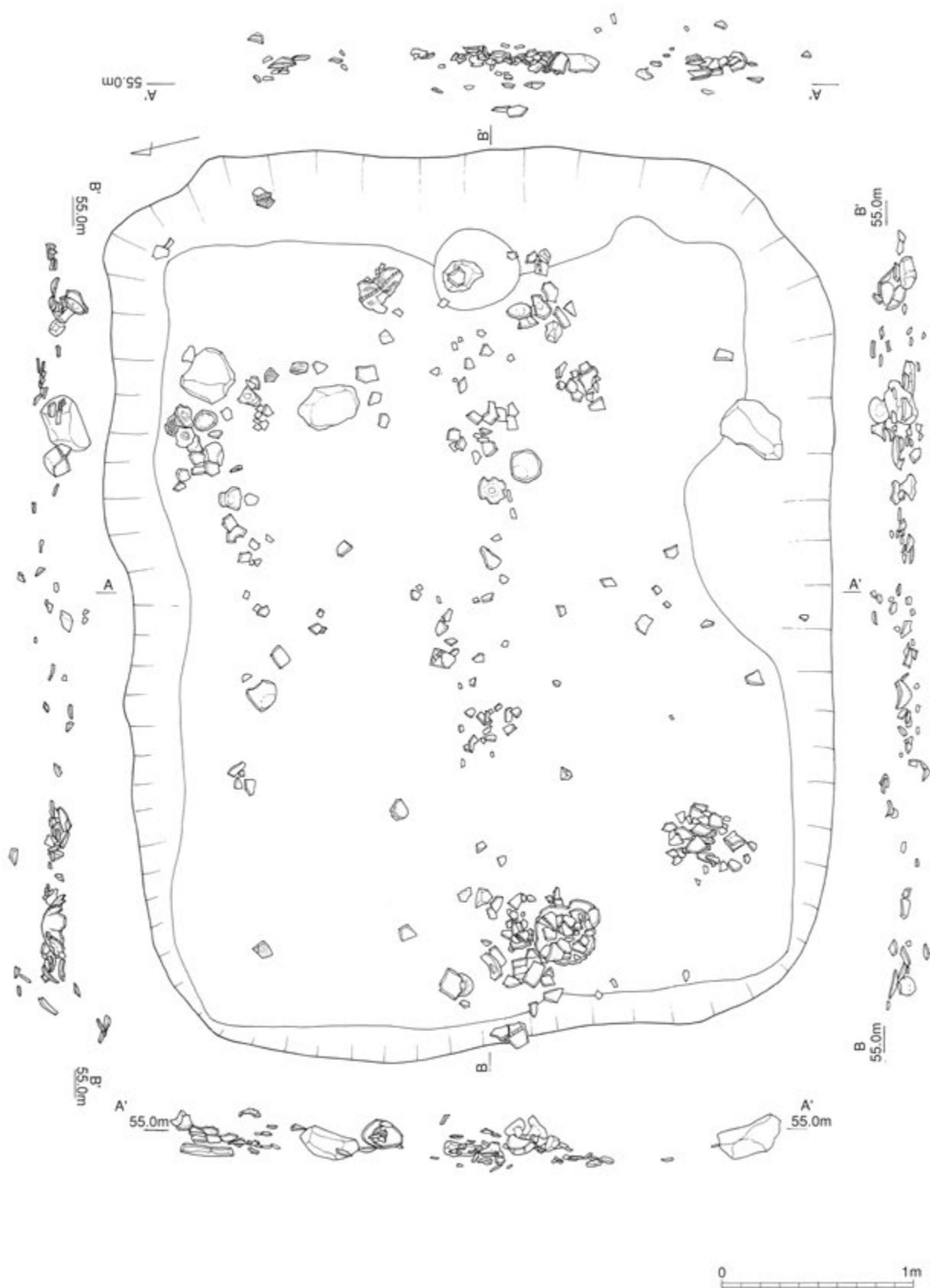
第81図 2号住居跡

2・3号住居跡出土観察表

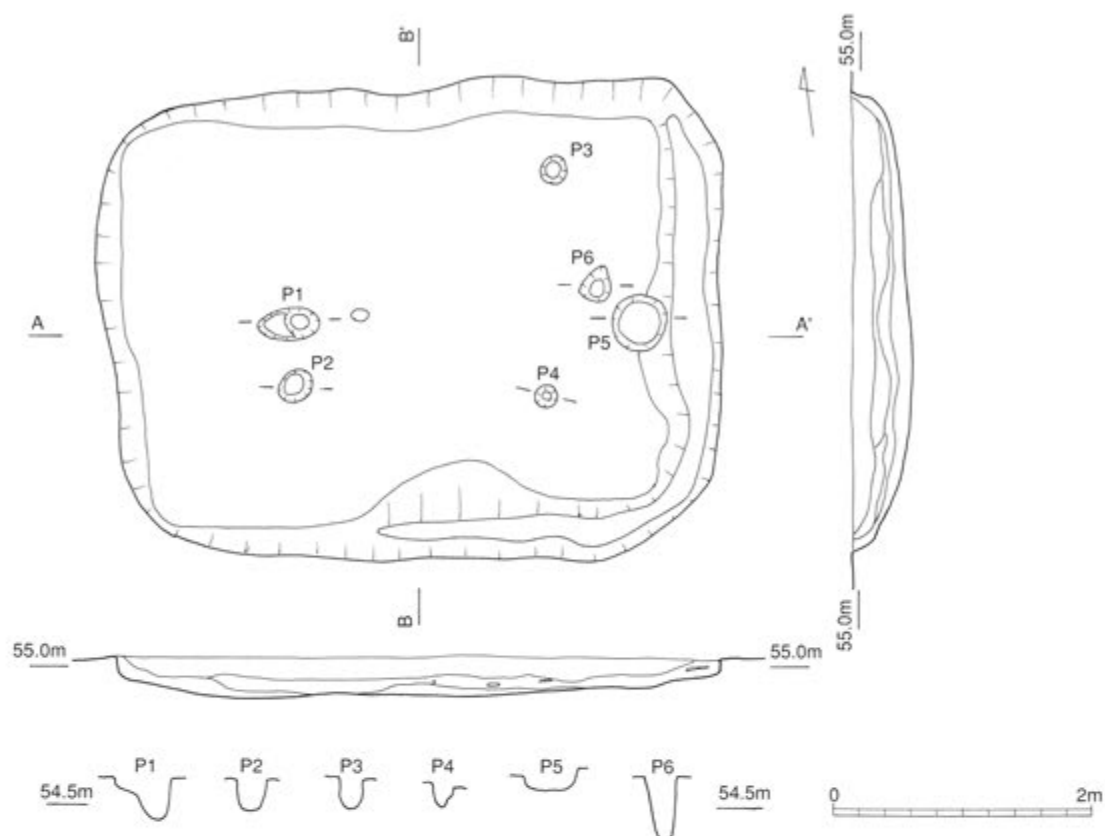
挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	色 調	胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
					石英	長石	角閃石	その他				
第82図	711	2号住居		暗茶褐色	○	○	○		良	ナデ	ナデ	カキ上げ
	712	2号住居		淡茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ハケ目	
	713	2号住居		茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ナデ	
	714	2号住居		淡茶褐色	○	○			〃	ナデ・突帯	ナデ	
	715	2号住居		淡茶褐色	○	○	○		〃	刻目突帯・ハケ目・ケズリ	ナデ	
	716	2号住居		茶褐色	○	○			〃	ナデ・突帯	ナデ	
	717	2号住居		淡茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ハケ目	
	718	2号住居		茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ・ハケ目	ハケ目	
	719	2号住居		赤色	○		○		〃	ミガキ	ミガキ	
	720	2号住居		暗茶褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ	
第85図	722	3号住居		茶褐色	○	○			〃	刻目突帯・ハケ目	ナデ・ハケ目	
	723	3号住居		茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
	724	3号住居		暗茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ナデ	
	725	3号住居		茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	726	3号住居		茶褐色	○	○			〃	ケズリ・ナデ	ナデ	
	727	3号住居		茶褐色	○	○			〃	刻目突帯・ハケ目	ナデ	
	728	3号住居		黒茶褐色	○	○			〃	〃	ハケ目	
	729	3号住居		暗茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	730	3号住居		暗茶褐色	○	○			〃	刻目突帯・ナデ	ナデ	
	731	3号住居		茶褐色	○	○			〃	刻目突帯・ハケ目	ナデ	
	732	3号住居		黒茶褐色	○				〃	刻目突帯・ナデ	ハケ目	
	733	3号住居		淡茶褐色	○	○			〃	刻目突帯・ハケ目	ナデ	
	734	3号住居		暗茶褐色	○	○	○		〃	刻目突帯・ナデ	ナデ	
	735	3号住居		黒茶褐色	○	○			〃	〃	ハケ目	



第82図 2号住居跡出土遺物



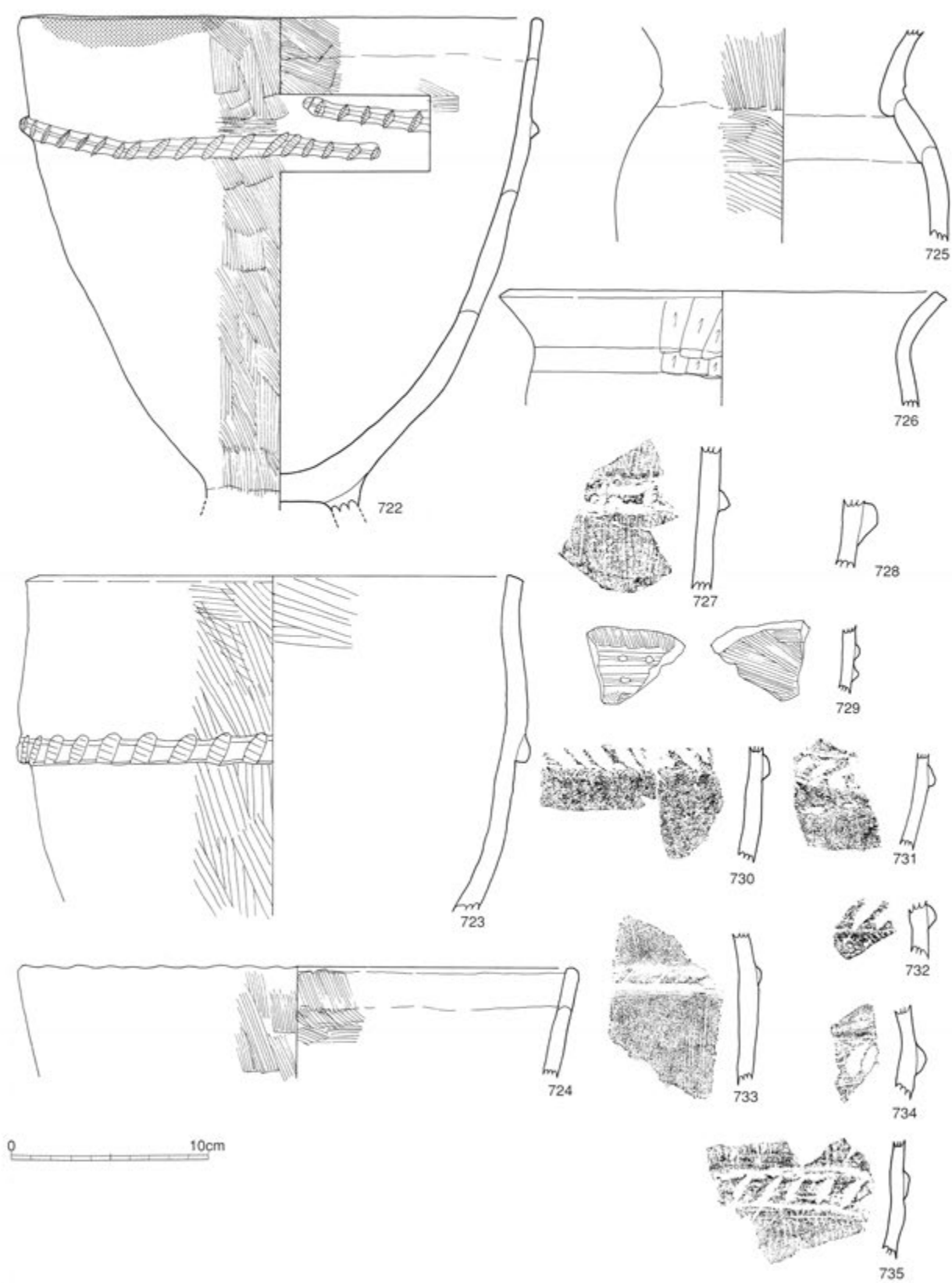
第83図 3号住居跡遺物出土状況



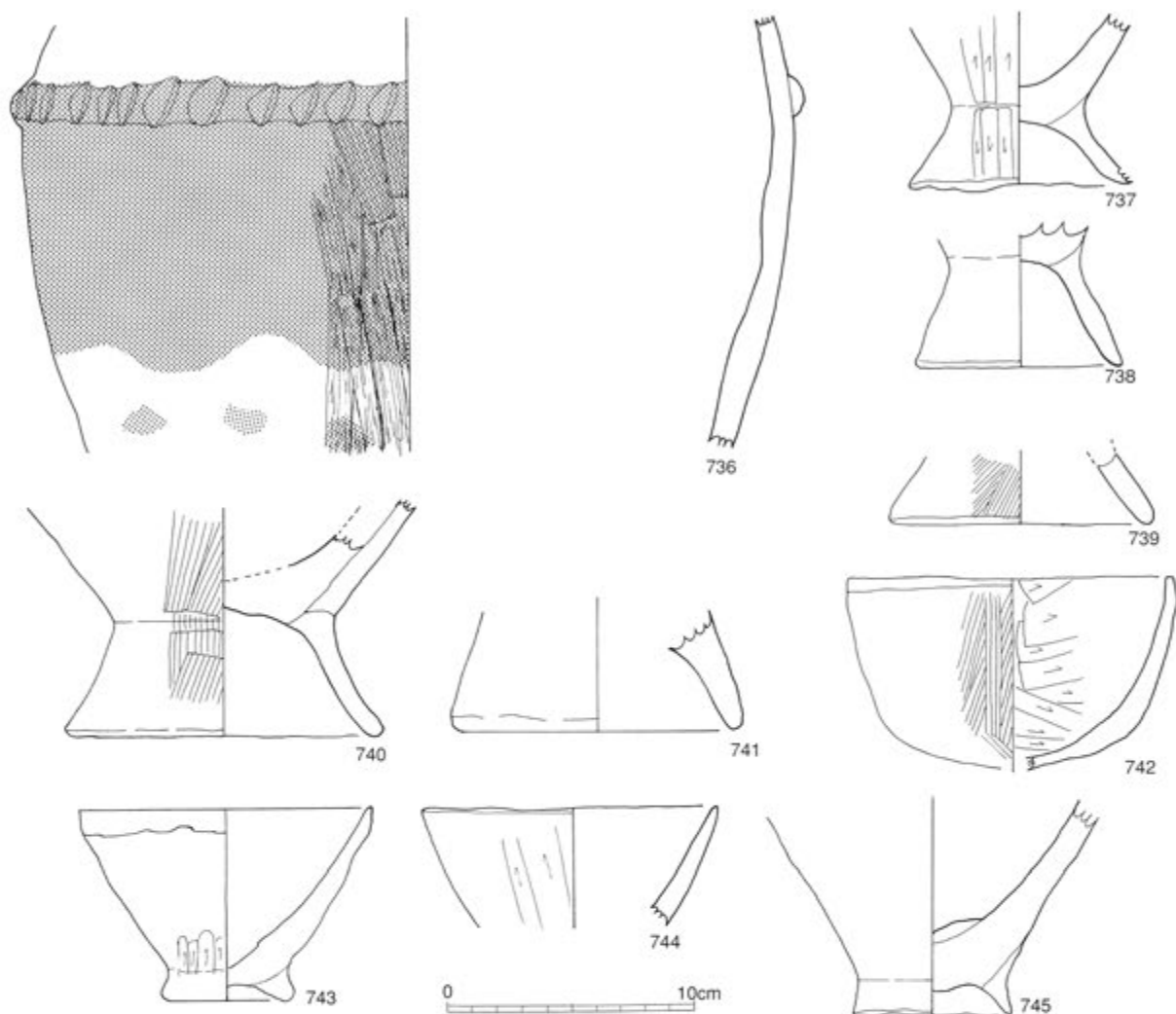
第84図 3号住居跡

3号住居跡出土観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	色 調	胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
					石英	長石	角閃石	その他				
第86図	736	3号住居		黒茶褐色	○	○			良	刻目突帯・ハケ目	ケズリ・ナデ	
	737	3号住居		茶褐色	○	○			〃	ケズリ	ケズリ・ナデ	
	738	3号住居		茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ナデ	
	739	3号住居		淡茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ナデ	
	740	3号住居		茶褐色	○	○			〃	〃		
	741	3号住居		茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ・ナデ	ナデ	
	742	3号住居		茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ケズリ	
	743	3号住居		茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ・ナデ	ナデ	
	744	3号住居		茶褐色	○	○			〃	ケズリ・ナデ	ナデ	
	745	3号住居		茶褐色	○	○			〃	ハケ目・ナデ	ナデ	
第87図	746	3号住居		淡茶褐色	○	○			〃	〃	ハケ目	
	747	3号住居		茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ナデ	
	748	3号住居		茶褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ	
	749	3号住居		茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ナデ	
	750	3号住居		茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ケズリ	
	751	3号住居		茶褐色	○	○	○		〃	刻目突帯・ハケ目	ハケ目・ケズリ	
	752	3号住居		茶褐色	○	○	○		〃	刻目突帯・ナデ	ナデ	
	753	3号住居		茶褐色	○				〃	三角突帯		
	754	3号住居		茶褐色	○	○	○		〃	格子目刻突帯・ナデ	ナデ	
	755	3号住居		淡茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	756	3号住居		茶褐色	○	○			〃	突帯・ハケ目	ハケ目	
	757	3号住居		茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ナデ	
	758	3号住居		茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目・ケズリ	ケズリ	
	759	3号住居		茶褐色	○	○			〃	ハケ目・ナデ	ケズリ	
	760	3号住居		茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ	ケズリ	
	761	3号住居		黒茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ナデ	



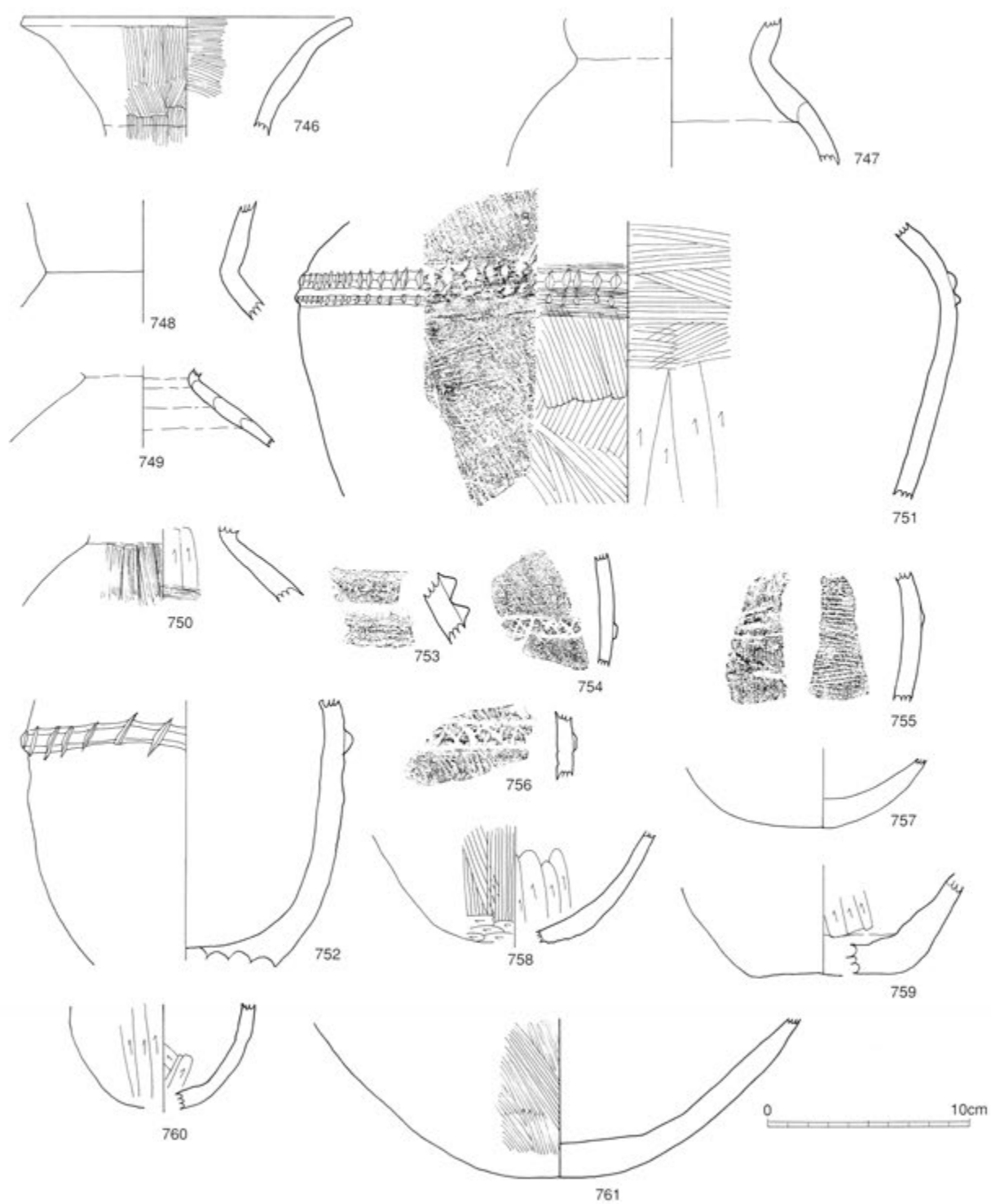
第85図 3号住居跡出土遺物1



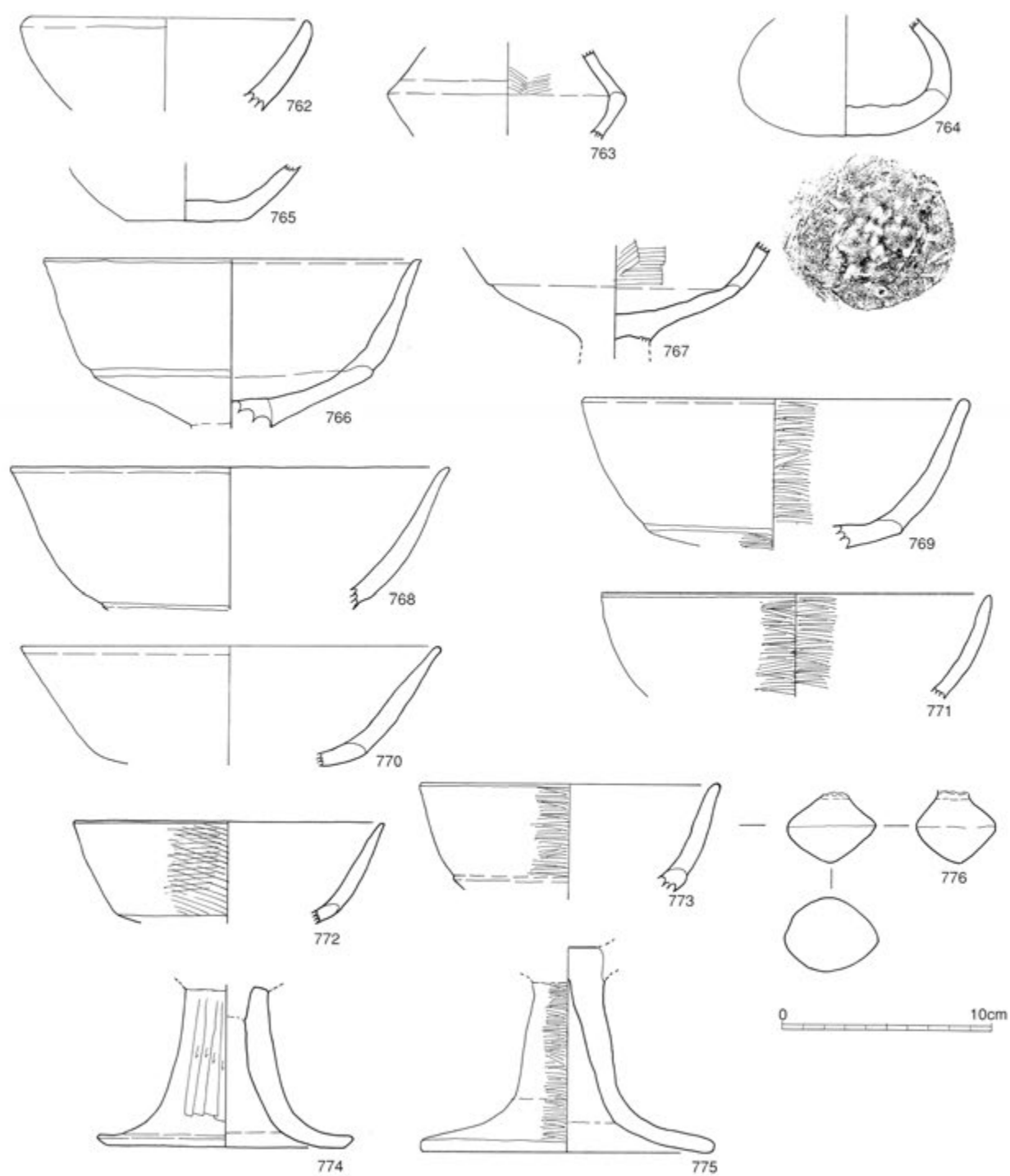
第86図 3号住居跡出土遺物2

3号住居跡出土観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	色 調	胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
					石英	長石	角閃石	その他				
第 88 図	762	3号住居		茶褐色	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	763	3号住居		茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ナデ	
	764	3号住居		茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ハケ目	内底面に横線痕
	765	3号住居		茶褐色	○				〃	ナデ	ナデ	
	766	3号住居		赤色	○	○	○		〃	ミガキ後ナデ	ミガキ後ナデ	丹塗り
	767	3号住居		赤色	○	○	○		〃	〃	ナデ・ハケ目	丹塗り
	768	3号住居		赤色	○	○	○		〃	〃	ミガキ後ナデ	丹塗り
	769	3号住居		赤色	○	○	○		〃	〃	ミガキ	丹塗り
	770	3号住居		赤色	○	○	○		〃	〃	ナデ	丹塗り
	771	3号住居		赤色	○				〃	ミガキ	ミガキ	丹塗り
	772	3号住居		赤色	○	○	○		〃	ハケ目	ナデ	丹塗り
	773	3号住居		赤色	○	○	○		〃	ミガキ	ナデ	丹塗り
	774	3号住居		赤色	○		○		〃	ケズリ・ナデ	ケズリ・ナデ	丹塗り
	775	3号住居		赤色	○				〃	ミガキ	ケズリ・ナデ	丹塗り
	776	3号住居		赤色	○	○			〃	ナデ		



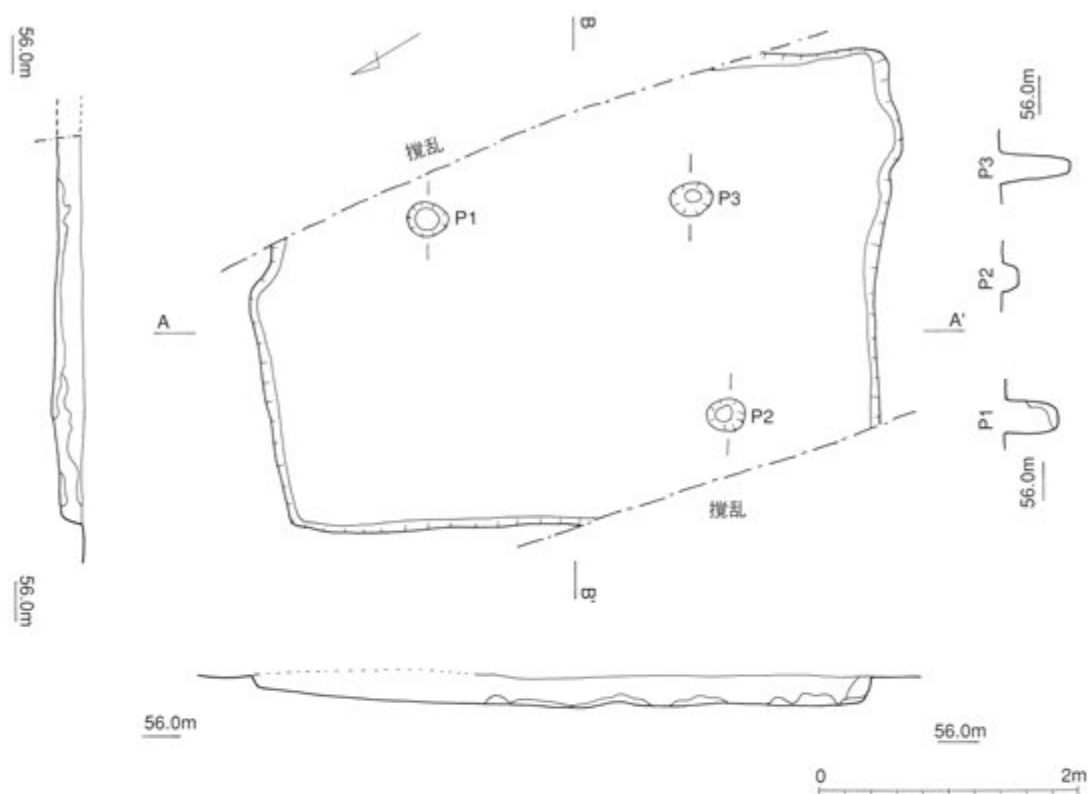
第87図 3号住居跡出土遺物3



第88図 3号住居跡出土遺物4



第89図 4号住居跡遺物出土状況

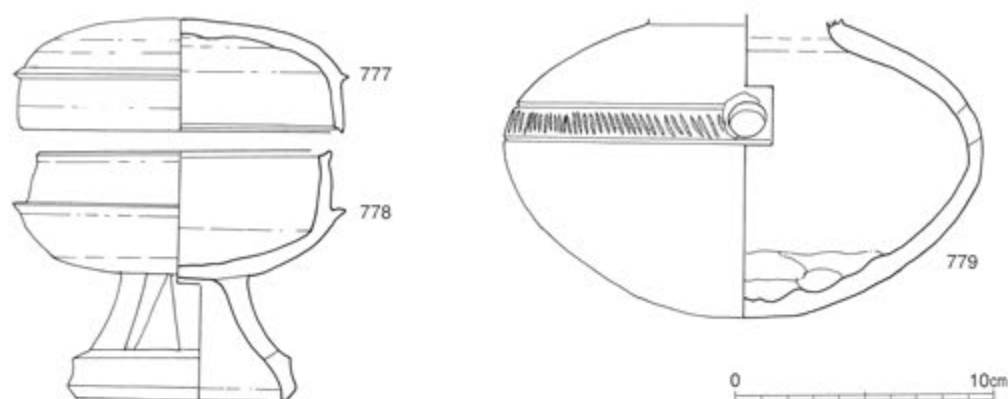


第90図 4号住居跡

4号住居跡（第89～98図）

4号住居跡はF-1区において検出された。東隅および西隅は近年の攪乱により削られており全体の形状は把握できないが残存部から類推すると長辺が4.8m、短辺3.6mの長方形プランで、深さは30cmである。3個の柱穴が検出されているが、ピット2は浅いものである。住居の北から南へかけて完形土器や大破片が住居内廃棄ではないかと思える状況で出土している。遺物の中には甕形土器・壺形土器・高坏などの完形土器に混入して須恵器の高坏・蓋坏・甕が見られる。777～779は須恵器である。777は蓋坏である。口縁部径12.5cm、器高4.4cm、稜径12.8cmを測る。口縁部は垂直よりやや外反気味に下り、端部は凹面を呈する。天井部は比較的高く回転ヘラケズリでやや平らに仕上げ、天井部と口縁部の境に鋭い稜をなすものである。778

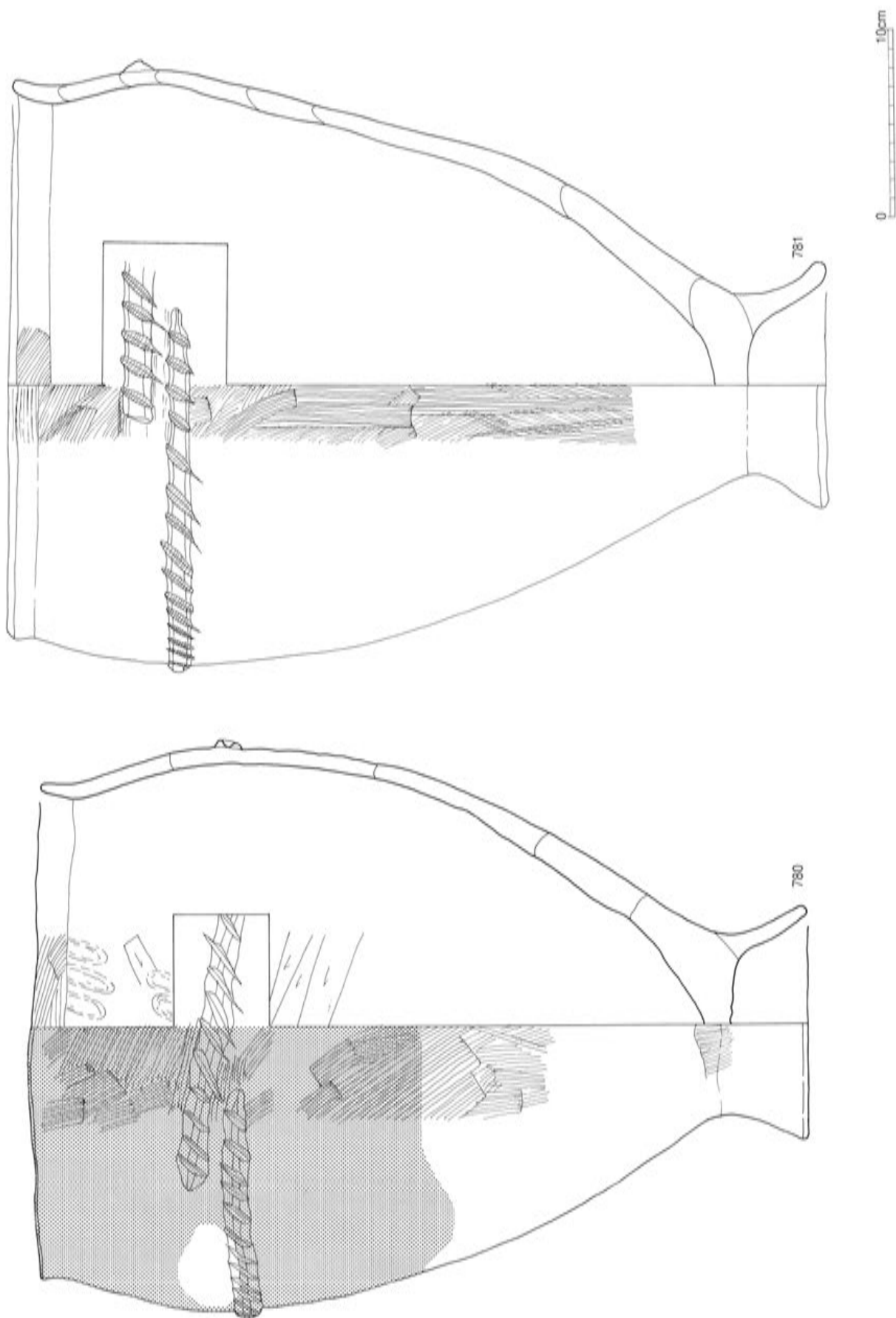
は高坏である。口縁部径11.4cm、器高9.8cm、受部径12.9cmを測る。口縁部はわずかに内傾し立ち上がり、端部で短く外反して端部は内傾する浅い凹面を呈し、底部は丸みを帯びて深い。受部は水平方向で短く鋭い。脚部は外方へ張り出し、端部近くで2本の鈍い凸線を成し短く内湾し、端部は鋭い。また、脚部には台形の透かしを3方向に有するものである。779は口縁部を欠損する甕である。頸部径7.5cm、体部最大径18.4cmを測る。肩部は頸部から下外方へ張り出し円形透かし（径7.4cm）を付した後、最大径を有し内湾気味に底部へ至る。体部最大径の位置とその上位にそれぞれ1条の沈線が巡り、その間にクシ目による刺突文が施される。円孔は刺突文および上位の沈線文を切って穿っている。底部内面には棒状の工具で押しつけた痕が認められる。



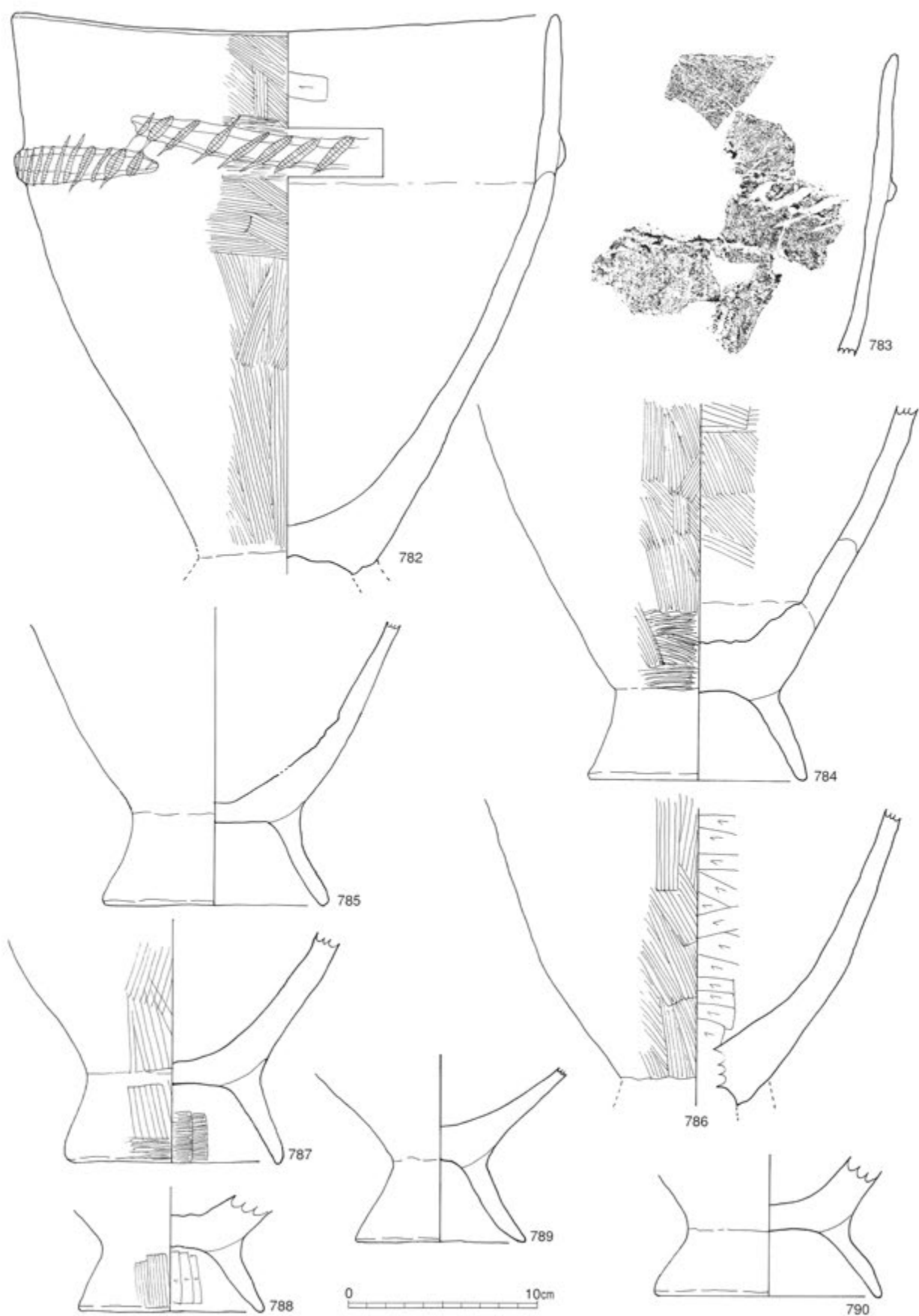
第91図 4号住居跡出土遺物1

780～790は脚台を有する変形土器。780は口縁部径26.4cm、器高40.6cmを測る。あまり深くない中空の脚台から立ち上がった胴部は丸みを帯びて膨らみ、口縁部へむかって内湾する。さらに内傾した口縁部は短く外反し、内面には稜線が認められる。また、胴部の上位最大径の位置にすれ違いの刻目突帯を巡らす。器外面はハケ目調整、内面はハケ目・ヘラケズリと指頭圧痕が見られる。781は口縁部径30cm、器高42.5cmを測る。深くない中空の脚台から立ち上がり、胴部はあまり膨らまない。口縁部は内傾した後で短く外反し、内面には稜線が認められる。胴部上位にはすれ違いの刻目突帯を巡らす。器外面はハケ目調整、内面は口縁部がハケ目・胴部はナデ調整である。782・783は口縁部が直行し、胴部上位にすれ違いの刻目突帯を巡らすものである。782は底部を欠損するが、口縁部径28.8cmを測るものである。785～790は中空の脚台である。789以外は深くなくどっしりした底部である。791～797は丸底の変形土器である。791・792は胴部が球形状に膨らみ口縁部はくの字状に外反する。791は口縁部径15.8cm、器高21.2cm、792は口縁部径15.8cm、器高21.2cmを測る。793・794は胴部が張らないものである。793は口縁部径13cm、器高20.4cm、794は口縁部径10.9cm、器高15.1cmを測る。795は底部が欠損するが丸底になるものと思われる。口縁部径16.6cmで球形状の胴部から頸部でしまり、口縁部は外反するものである。器内面はヘラケズリが施される。796・797は口縁部で

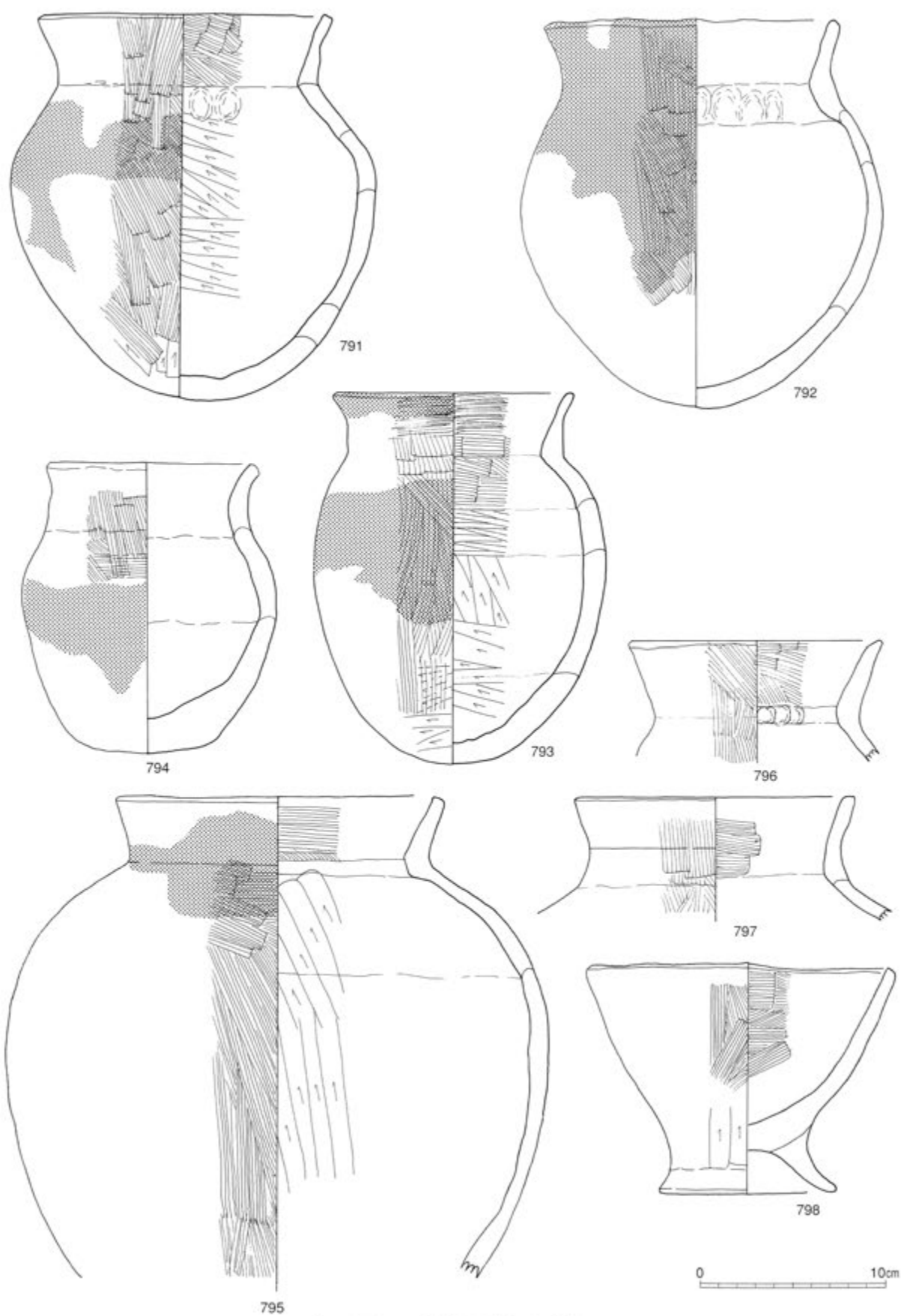
ある。798は脚台付きの鉢形土器である。口縁部径15.8cm、器高11.9cmを測るもので、器外面はヘラケズリとハケ目、内面はハケ目調整である。799～809は壺形土器。799は口縁部径11.8cm、胴部径34.3cm、器高47.4cmと大型の壺である。尖底に近い丸底から胴部は長胴気味でありあまり膨らまない。頸部はぐっとしまり、口縁部は直行するものである。胴部上位に幅広の突帯(条痕状の沈線を有する)、頸部に刻目突帯を巡らす。800～802は底部が平底に近い丸底で胴部は長胴で、口縁部は外反する。胴部上位にすれ違いの刻目突帯を巡らすものである(802はすれ違いの部分が欠損しているものと思われる)。804は球形状の胴部で、突帯を有しないものである。808・809は底部である。808は平底である。810～812は坏である。810は口縁部径12.5cm、器高5.5cm、811は口縁部径13.1cm、器高4.9cmを測るもので、いずれも平底の底部から外方へ立ち上がる。813～816は埴型土器。813は口縁部径9.2cm、器高14cm、814は口縁部径11.2cm、器高13.3cmを測る。813・814共に口縁部は内湾気味に外反する。813・816は平底で胴部は球形状を呈する。814は胴部最大径の部分が張り稜線を有する。815は胴部が鋭角的に張り、上位は反り気味に立ち上がるものである。口縁部は欠損しているため不明であるが814と同様と思われる。810・813～815は丹塗りで、810・813・814は口縁内面も丹塗りである。



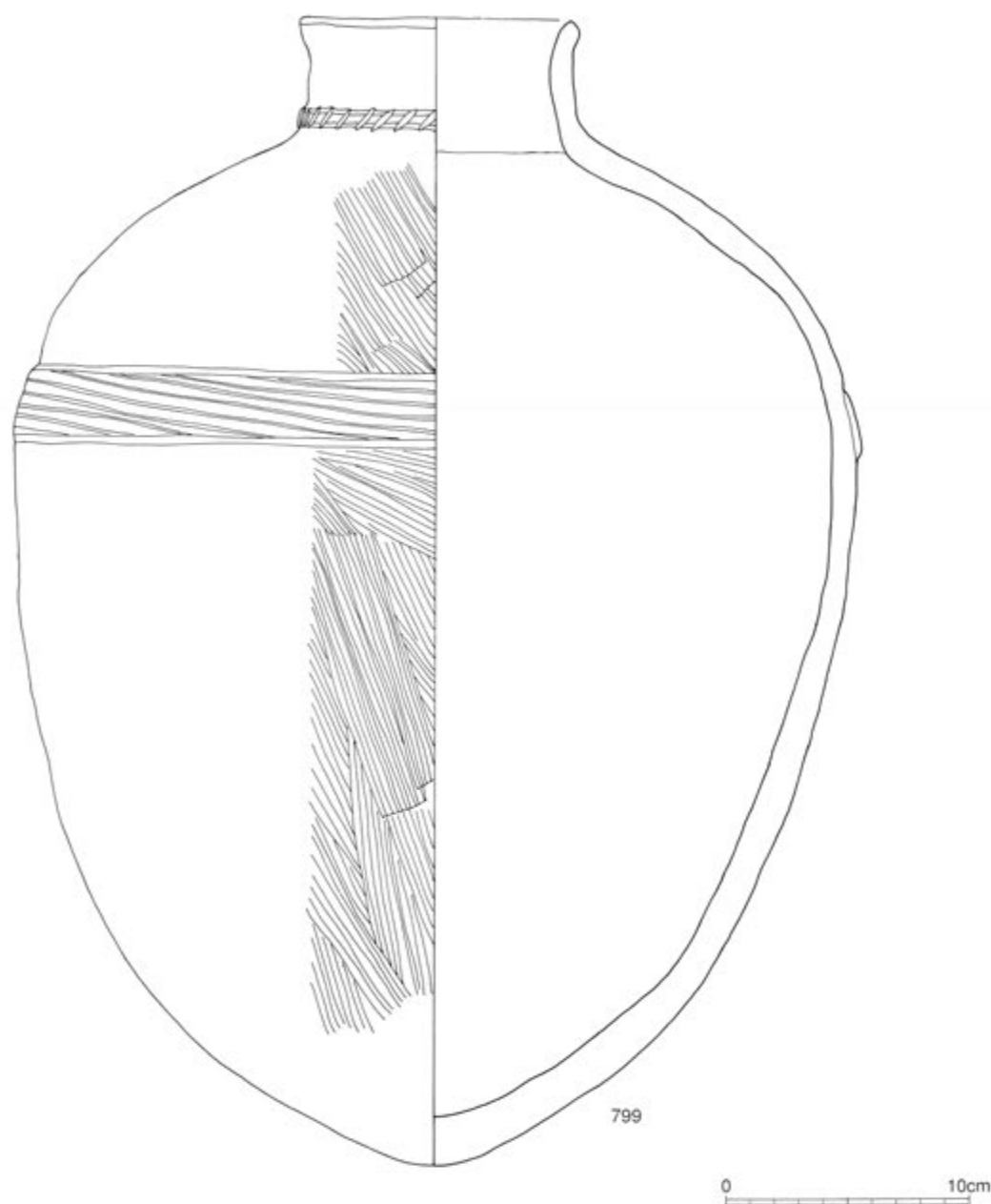
第92図 4号住居跡出土遺物2



第93図 4号住居跡出土遺物3



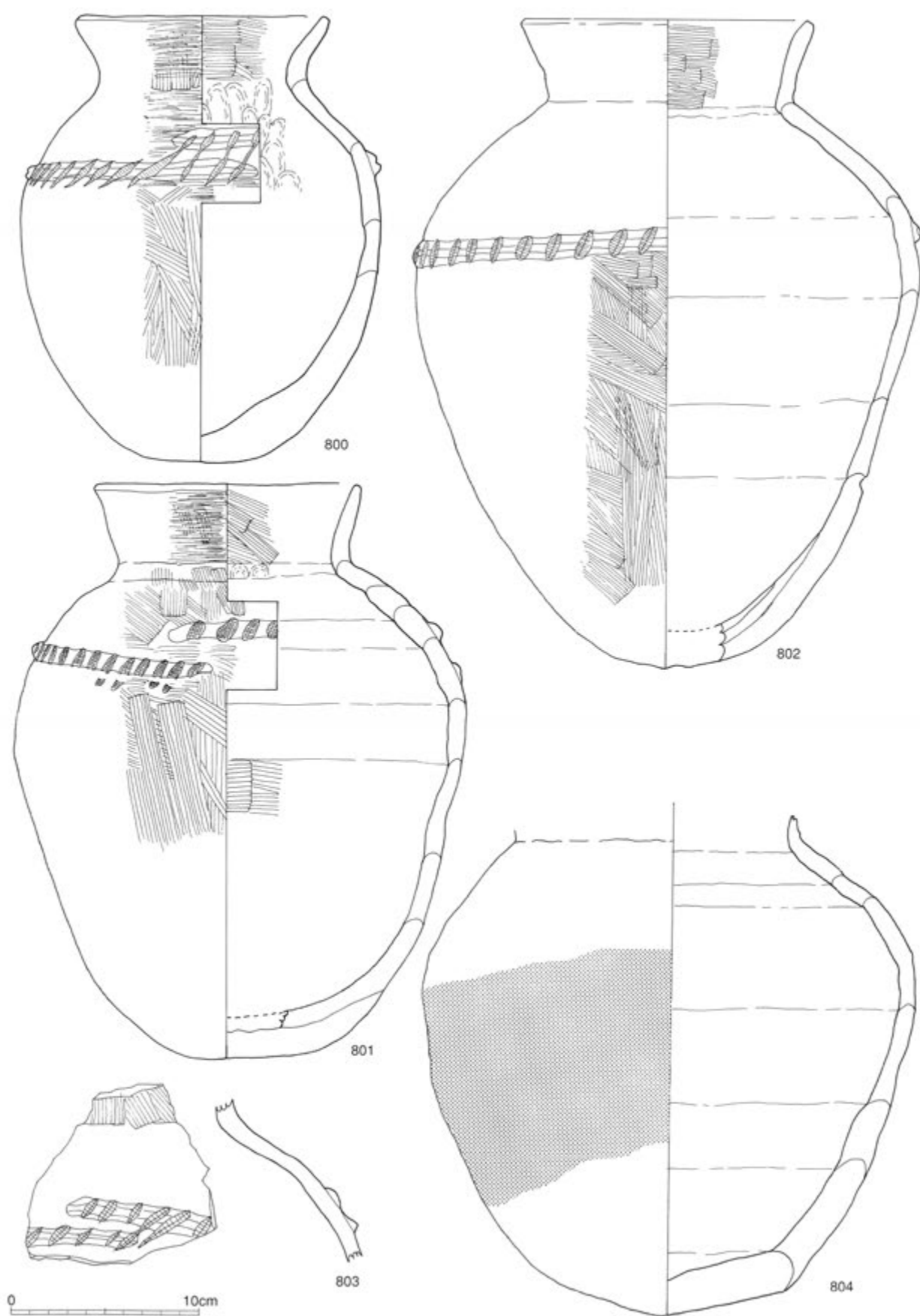
第94図 4号住居跡出土遺物4



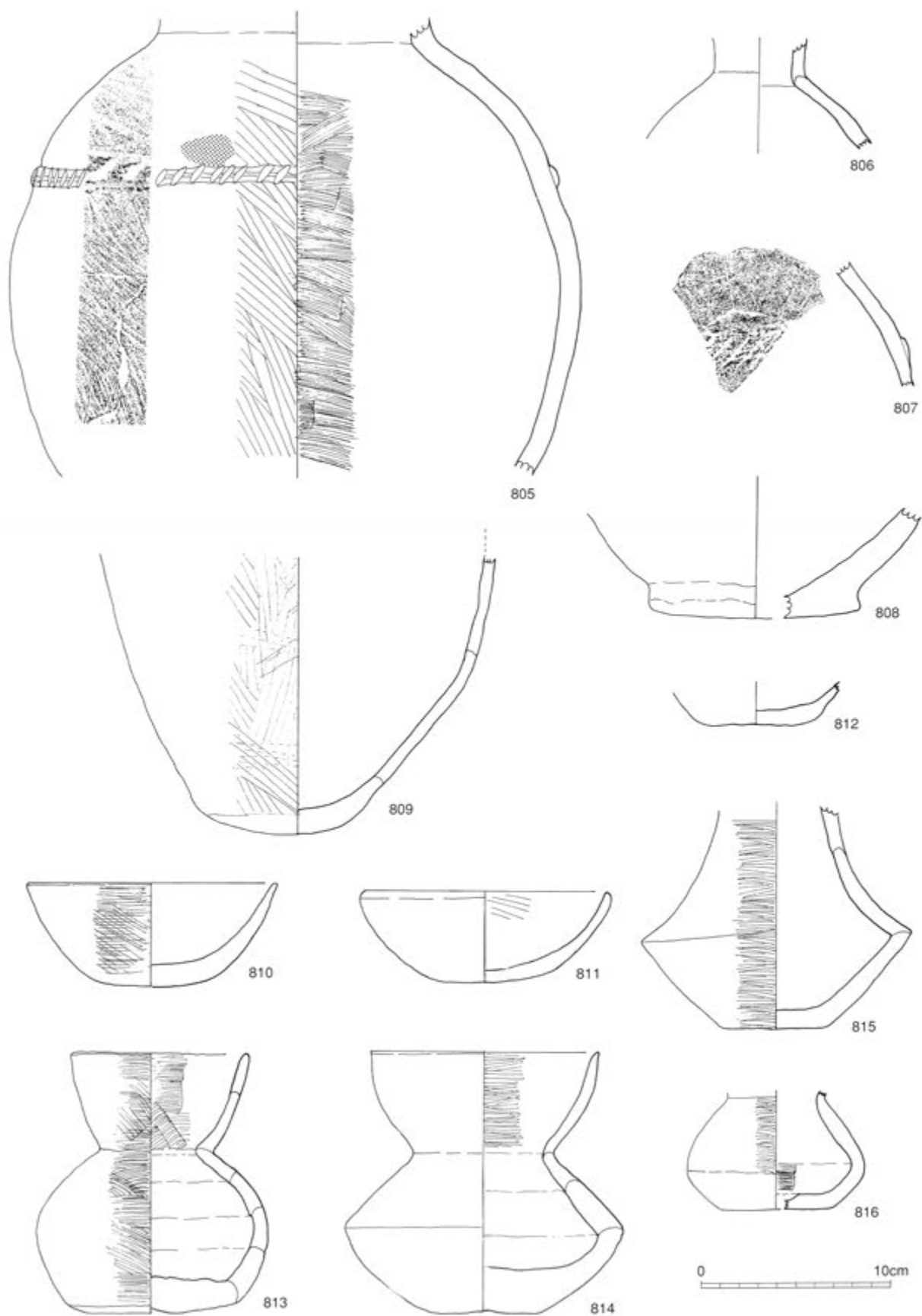
第95図 4号住居跡出土遺物5

817～832は高坏。脚部はゆるやかで裾部で大きく広がるもので、坏部は下位が水平に近く外反し、接合部分から上方へ立ち上がるものである。接合部分には明瞭な段が認められる。817は口縁部径19.9cm，器高16.1cm，818は口縁部径21.8cm，器高17.1cm，819は口縁部径15.8cm，器高14.8cm，820は口縁部径16.6cm，器高

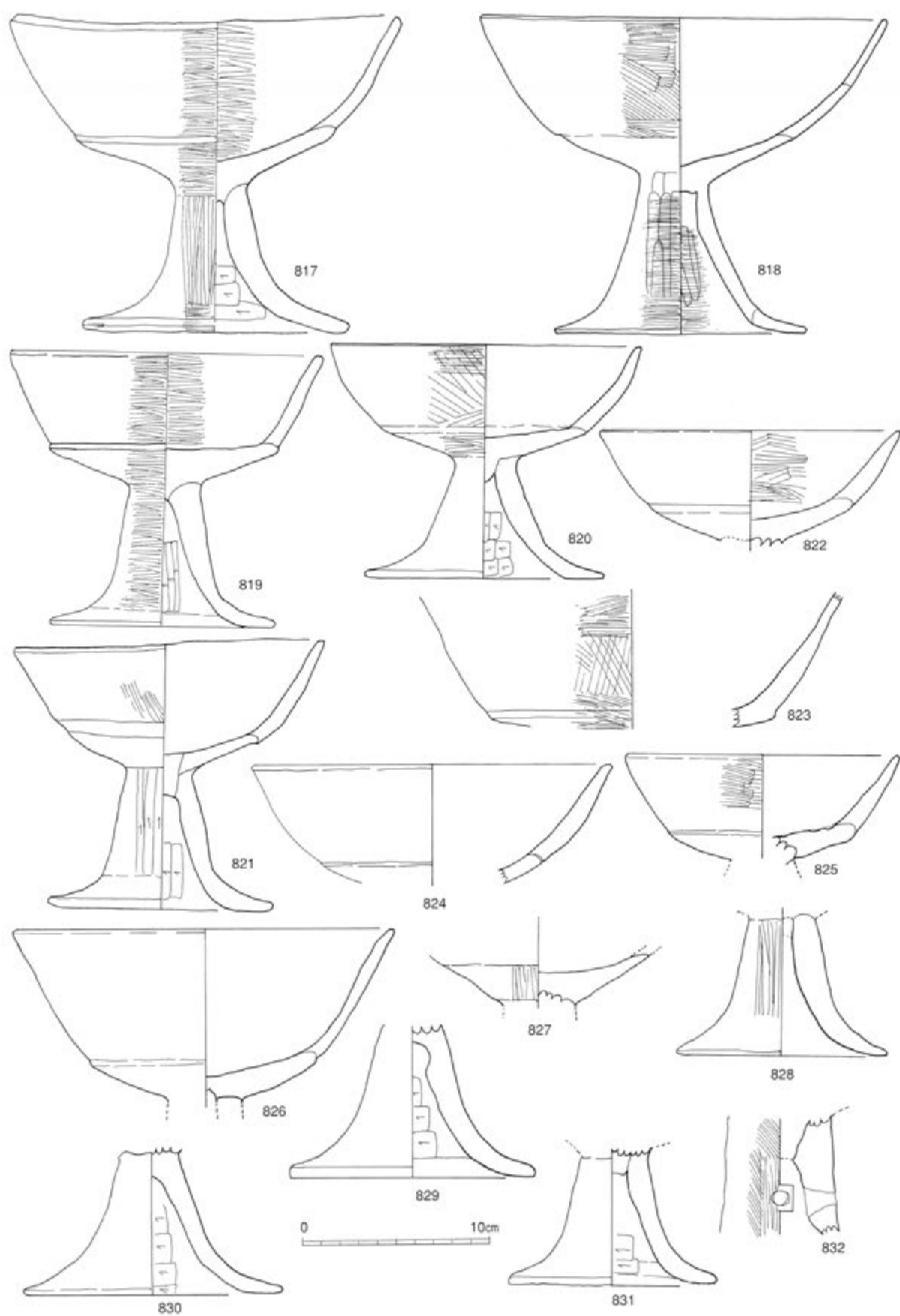
12.5cm，821は口縁部径16.5cm，器高14.5cmを測る。832は脚柱部分に穿孔を有するものである。818～820・822・823・825～832は丹塗りである。



第96図 4号住居跡出土遺物6



第97図 4号住居跡出土遺物7



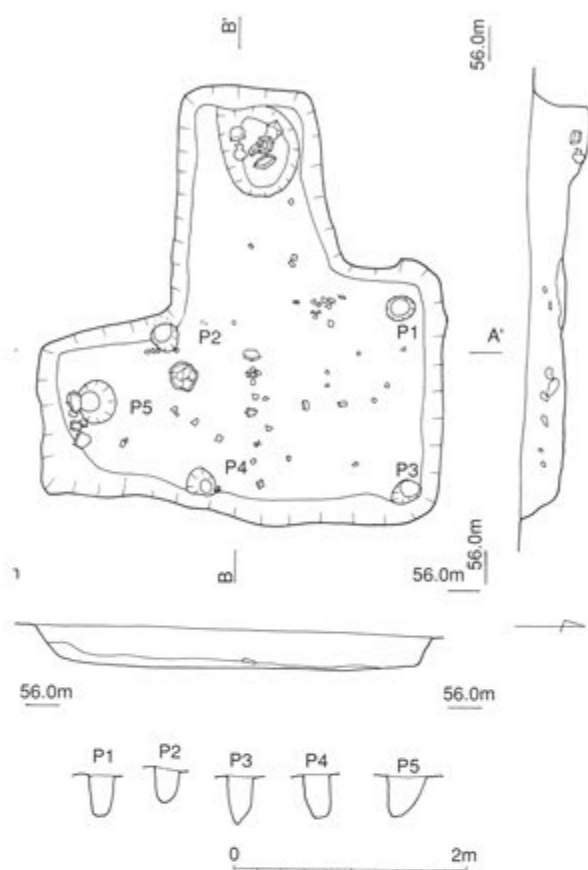
第98図 4号住居跡出土遺物8

4号住居跡出土土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	色 調	胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
					石英	長石	角閃石	その他				
第 91 図	777	4号住居		青灰色	○	○			堅緻	回転ヘラ切・ナデ	ナデ	
	778	4号住居		青灰色	○	○			堅緻	〃	ナデ	
	779	4号住居		青灰色	○	○			堅緻	櫛状施文具刺突文	棒状工具押圧	穿孔有
第 92 図	780	4号住居		黒茶褐色	○	○			良	刻目突帯・ハケ目	ハケ目・ケズリ・指頭圧痕	
	781	4号住居		茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ・ハケ目	
第 93 図	782	4号住居		茶褐色	○	○	○		〃	刻目突帯・ハケ目	ケズリ・ナデ	
	783	4号住居		茶褐色	○	○			〃	刻目突帯・ナデ	ナデ	
	784	4号住居		茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ハケ目	
	785	4号住居		茶褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ	
	786	4号住居		茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ケズリ	
	787	4号住居		茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ナデ・ハケ目	
	788	4号住居		茶褐色	○	○			〃	〃	ケズリ	
	789	4号住居		淡茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ナデ	
	790	4号住居		茶褐色	○	○			〃	〃	〃	
第 94 図	791	4号住居		淡茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ハケ目・ケズリ・指頭圧痕	
	792	4号住居		茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ナデ	
	793	4号住居		茶褐色	○	○			〃	ハケ目・ケズリ	ハケ目・ケズリ	
	794	4号住居		茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ナデ	
	795	4号住居		茶褐色	○	○			〃	〃	ハケ目・ケズリ	
	796	4号住居		黒茶褐色	○	○			〃	〃	ハケ目・指頭圧痕	
	797	4号住居		茶褐色	○	○	○		〃	〃	ハケ目	
	798	4号住居		茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目・ケズリ	ハケ目	
第95図	799	4号住居		茶褐色	○	○	○		〃	刻目突帯・ハケ目	ナデ	
第 96 図	800	4号住居		茶褐色	○	○	○		〃	〃	ハケ目・指頭圧痕	
	801	4号住居		茶褐色	○	○	○		〃	〃	ハケ目・指頭圧痕	
	802	4号住居		茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ・ハケ目	
	803	4号住居		茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	804	4号住居		茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ナデ	
第 97 図	805	4号住居		赤色	○	○	○		〃	刻目突帯・ハケ目	ハケ目	
	806	4号住居		赤色	○	○	○		〃	ナデ	ナデ	
	807	4号住居		暗茶褐色	○	○			〃	刻目突帯・ナデ	ナデ	
	808	4号住居		茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ナデ	
	809	4号住居		茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ナデ	
	810	4号住居		茶褐色	○	○			〃			
	811	4号住居		赤色	○	○			〃			
	812	4号住居		暗茶褐色	○	○			〃			
	813	4号住居		赤色	○	○			〃			
	814	4号住居		赤色	○	○			〃			
	815	4号住居		赤色	○	○	○		〃			
	816	4号住居		淡茶褐色	○				〃			
第 98 図	817	4号住居		赤色	○	○			〃	ミガキ	ミガキ・ケズリ	丹塗り
	818	4号住居		赤色	○	○	○		〃	ハケ目・ミガキ後	ケズリ後ナデ	丹塗り
	819	4号住居		赤色	○	○			〃	ミガキ	ミガキ・ケズリ	丹塗り
	820	4号住居		茶褐色	○	○	○		〃	ミガキ・ハケ目	ケズリ・ナデ	丹塗り
	821	4号住居		茶褐色	○	○			〃	ケズリ・ナデ	ケズリ・ナデ	丹塗り
	822	4号住居		赤色	○	○			〃	ミガキ後ナデ	ミガキ後ハケ目	丹塗り
	823	4号住居		赤色	○	○			〃	ミガキ・ハケ目	ナデ	丹塗り
	824	4号住居		茶褐色	○	○	○		〃	ミガキ後ナデ	ミガキ後ナデ	丹塗り
	825	4号住居		赤色	○	○	○		〃	ミガキ後ハケ目	ミガキ後ナデ	丹塗り
	826	4号住居		赤色	○	○			〃	ミガキ後ナデ	ハケ目・ケズリ	丹塗り
	827	4号住居		茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ミガキ後ナデ	丹塗り
	828	4号住居		赤色	○	○	○		〃	ミガキ	ケズリ・ナデ	丹塗り
	829	4号住居		赤色	○	○			〃	ミガキ	ケズリ・ナデ	丹塗り
	830	4号住居		赤色	○	○			〃	ミガキ後ナデ	ケズリ・ナデ	丹塗り
	831	4号住居		赤色	○	○			〃	〃	ケズリ・ナデ	丹塗り
	832	4号住居		淡茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ケズリ	穿孔有

5号住居跡（第99・100図）

5号住居跡はG-1・2区において検出された。住居跡のプランは凸形と特殊である。東辺3.5m、南辺1.5m・2.2m、西辺1m・1m・0.9m、北辺1.6m・2.3mと変形である。深さは35cm。西側突出部分に長さ0.75m、幅0.65m、深さ15mの土坑がある。土坑内には口縁部を欠損するが、ほぼ完形の小型壺が入っている。柱穴は5個有るが、Na2～Na5の4本柱が主柱穴と思われる。住居跡内の遺物は多くはない。833～836は甕形土器。833は口縁部径16cmを測るもので、口縁部がくの字状に外反する。頸部から口縁部へかけてはハケ目によるカキ上げの痕跡が認められるが、カキ上げの後ナデによりハケ目が消えている。834～836は中空の脚台である。837～842は壺形土器。838は小型の壺形土器で口縁部を欠損するのみである。球形状に膨らんだ胴部から頸部はしまり、口縁部は直線的に外反する。器外面はヘラミガキ調整である。840は胴部で胴部上位に突帯を巡らす。841・842は底部である。



第99図 5号住居跡

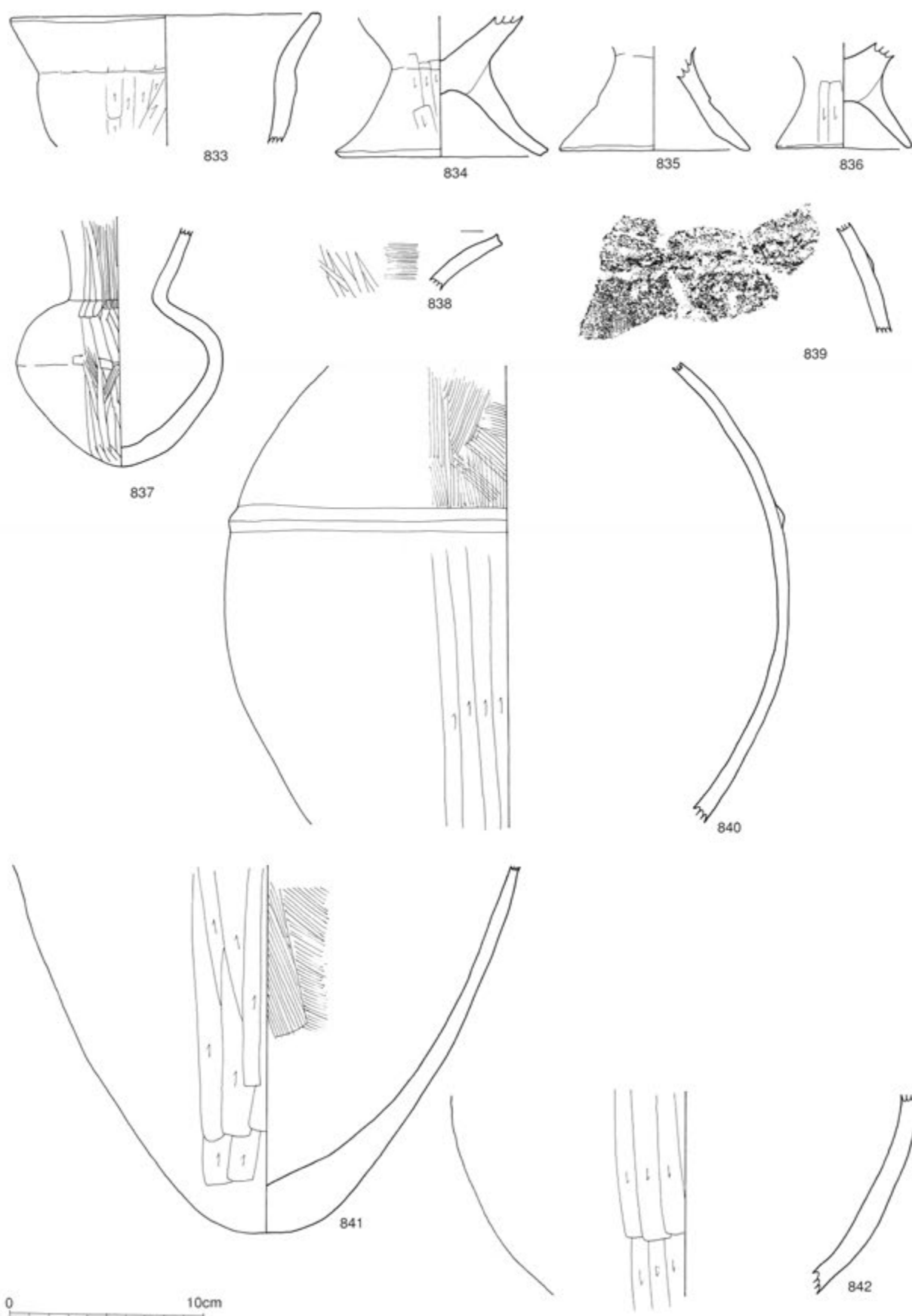
6号住居跡（第101～103図）

6号住居跡はF-2区において検出された。長辺5.2m、短辺4.3mの長方形プランで、深さ50cmである。住居内の遺物は多くない。843～855は甕形土器。口縁部はくの字状に外反するもので内面に稜線が認められるもの（843・845・846・849）と稜線の認められないものがある。頸部から口縁部へかけてハケ目によるカキ上げが施されるもの及びカキ上げ後にナデで消されるものがある。852は破片であるが、大型の土器と思われる。胴部に突帯を巡らす。853～855は中空の脚台である。856～859は壺形土器。856は胴部に刻目突帯を巡らす。857は口縁部径9.7cm、器高20.4cmを測る。底部は丸底で、胴部はあまり膨らまないものである。

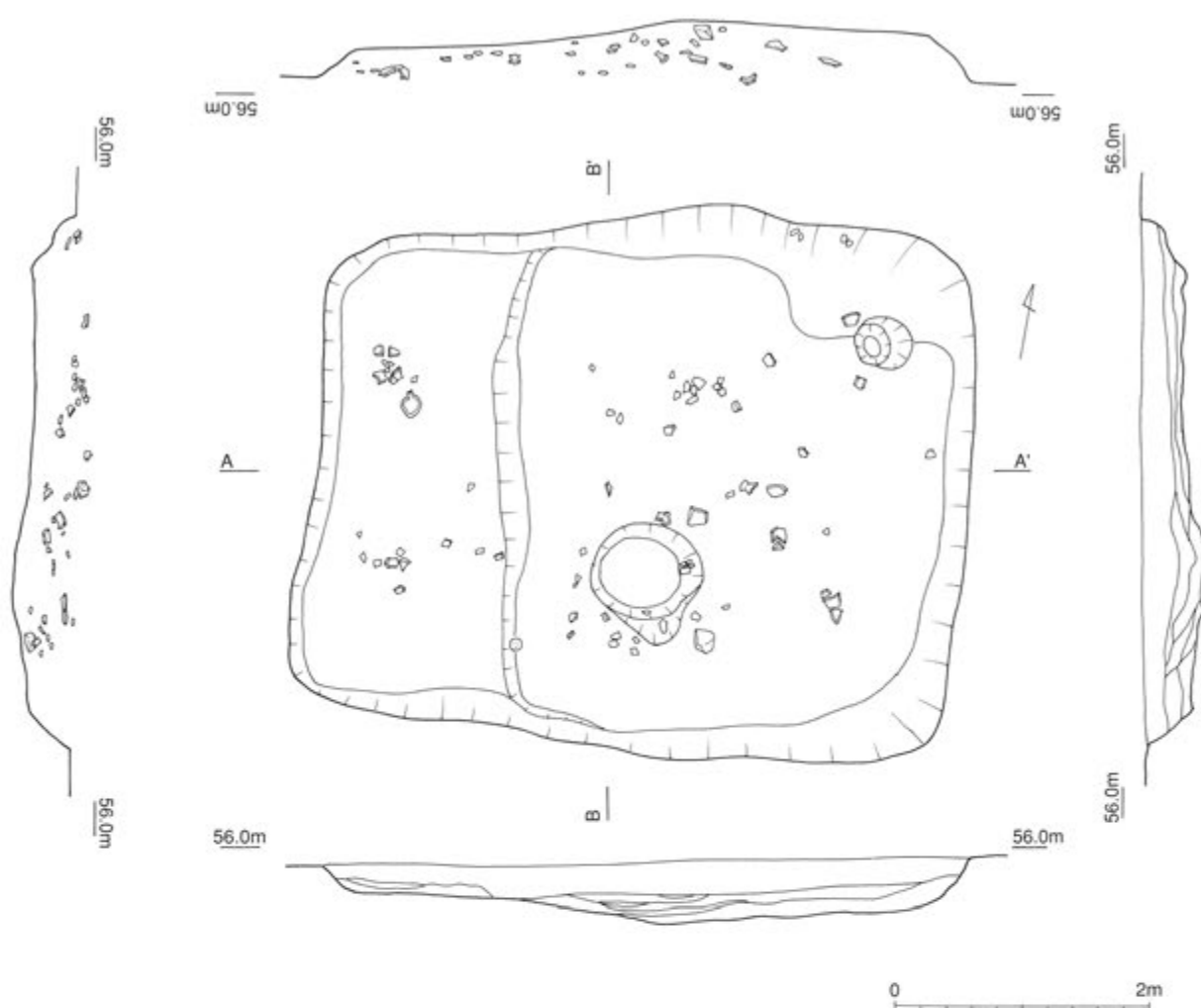
頸部のくびれはなだらかで、口縁部はわずかに外反する。くびれ部の内面は指頭圧痕が認められる。858は大型の壺で器内外面共にハケ目調整である。859は胴部に刻目突帯を巡らすものである。

5号住居跡出土土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	色 調	胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
					石英	長石	角閃石	その他				
第 100 図	833	5号住居		茶褐色	○	○	○		良	ケズリ	ナデ	カキ上げ
	834	5号住居		茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	835	5号住居		茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	836	5号住居		茶褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ	
	837	5号住居		淡茶褐色	○		○		〃	ハケ目・ミガキ	ナデ	5号完形品
	838	5号住居		淡茶褐色	○				〃	ミガキ	ナデ	
	839	5号住居		茶褐色	○	○			〃	ナデ・突帯	ナデ	
	840	5号住居		淡茶褐色	○	○			〃	突帯・ケズリ・ハケ目	ナデ	
	841	5号住居		茶褐色	○	○			〃	ケズリ	ハケ目	
	842	5号住居		茶褐色	○	○			〃	ケズリ	ナデ	



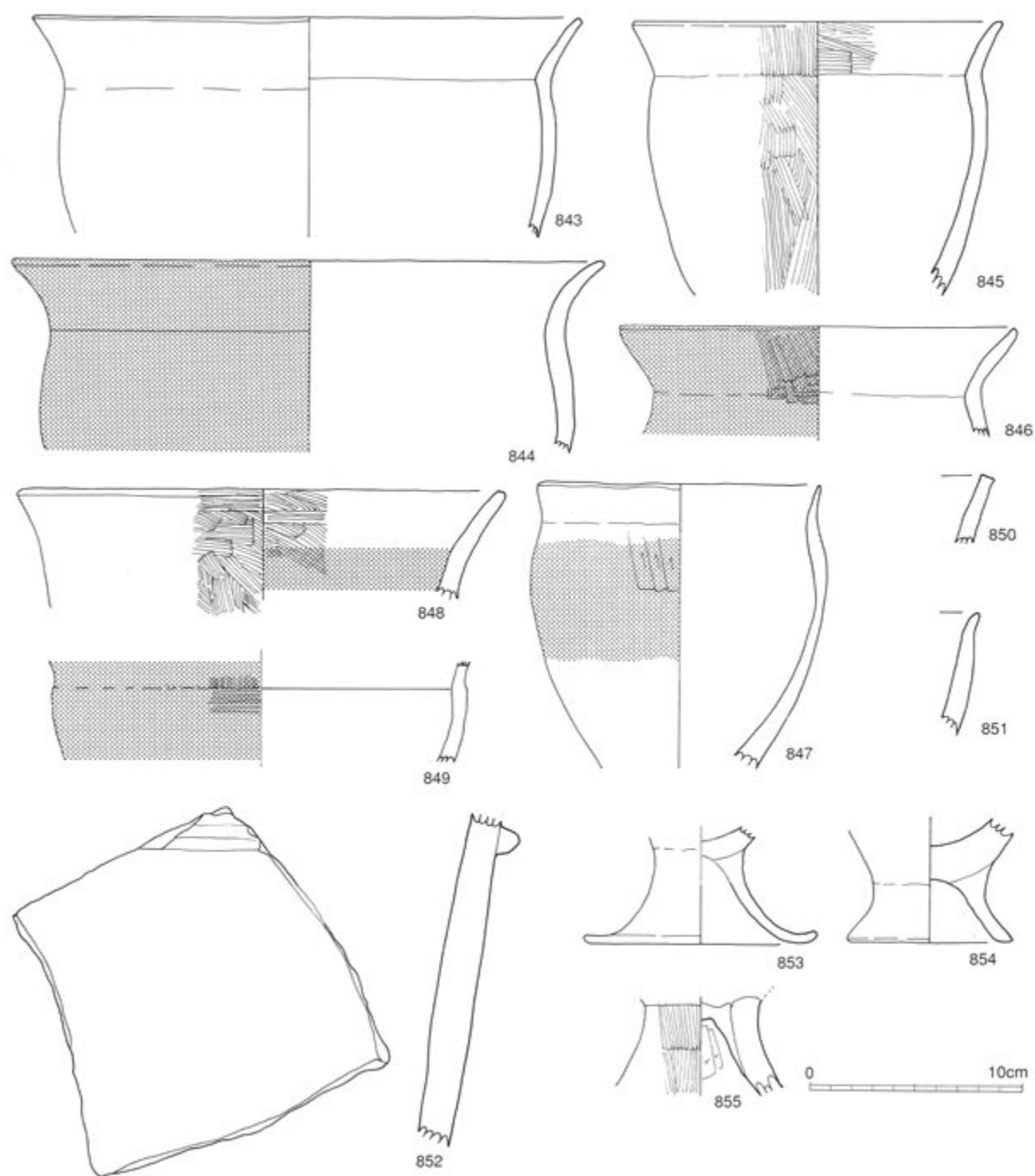
第100図 5号住居跡出土遺物



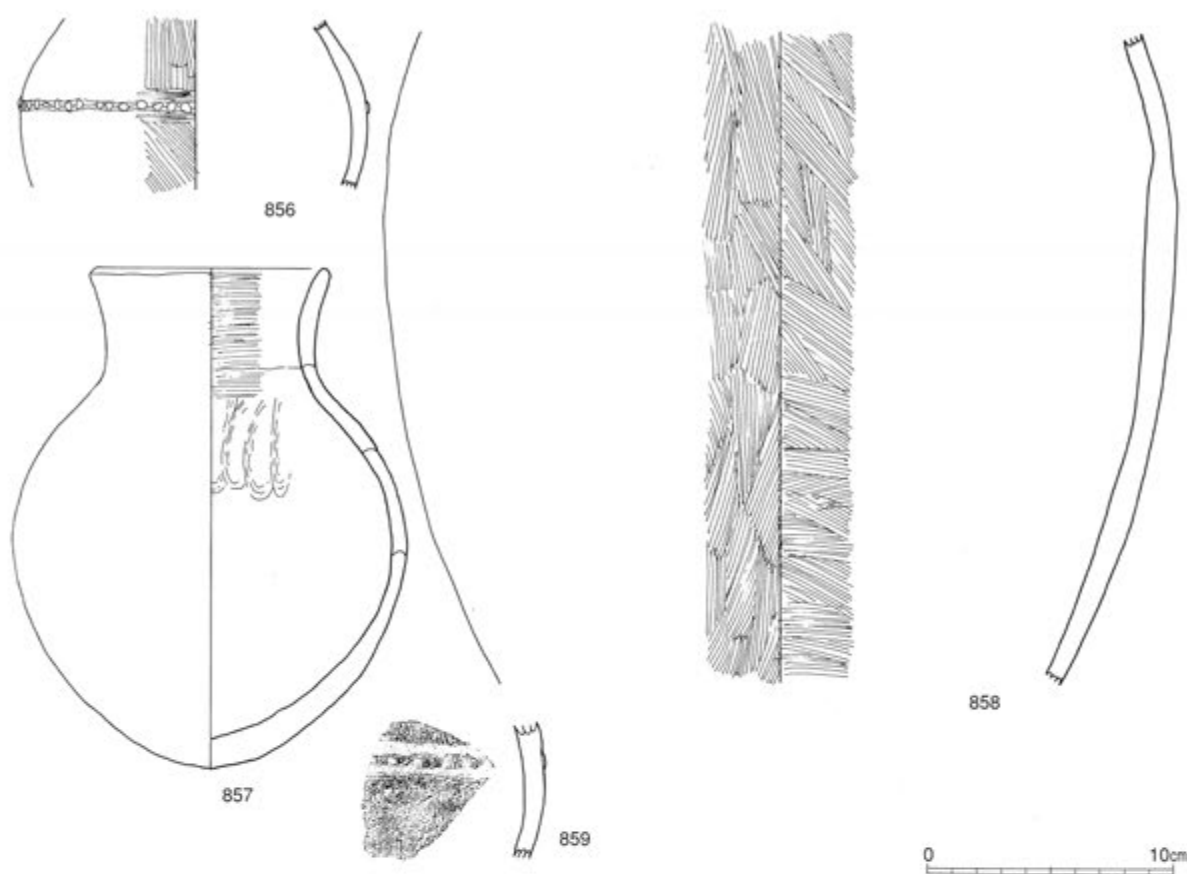
第101図 6号住居跡

6号住居跡出土土器観察表

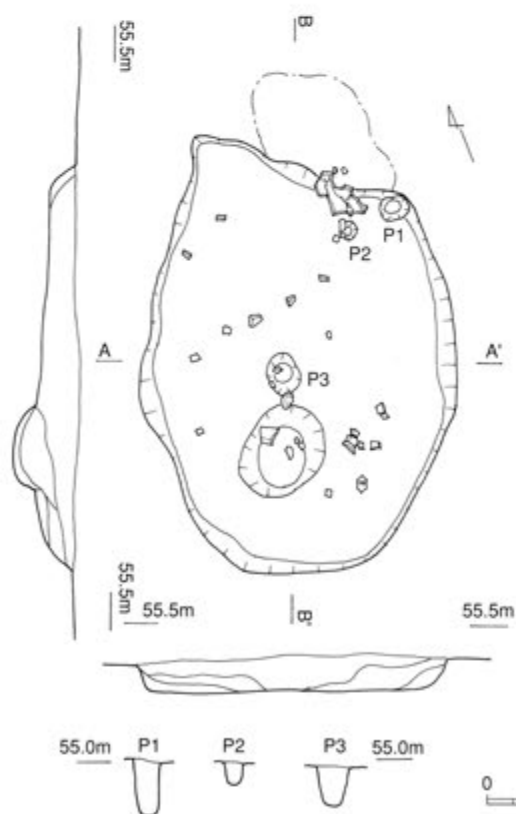
挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	色 調	胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
					石英	長石	角閃石	その他				
第 102 図	843	6号住居		暗茶褐色	○	○			良	ナデ	ナデ	
	844	6号住居		茶褐色	○	○			〃	〃	ケズリ・ナデ	
	845	6号住居		茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ナデ・ハケ目	
	846	6号住居		黒茶褐色	○				〃	〃	ナデ	
	847	6号住居		茶褐色	○				〃	ケズリ・ナデ	ナデ	
	848	6号住居		茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ハケ目	
	849	6号住居		黒茶褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ	カキ上げ
	850	6号住居		暗茶褐色	○				〃	〃	ナデ	
	851	6号住居		黒茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	852	6号住居		茶褐色	○	○			〃	ナデ・突帯	ナデ	
	853	6号住居		淡茶褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ	
	854	6号住居		茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	855	6号住居		茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ケズリ・ナデ	
第 103 図	856	6号住居		茶褐色	○	○			〃	刻目突帯・ハケ目	ナデ	
	857	6号住居		淡茶褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ・指頭圧痕	
	858	6号住居		茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ハケ目	
	859	6号住居		茶褐色	○	○			〃	刻目突帯・ハケ目	ナデ	



第102図 6号住居跡出土遺物1



第103図 6号住居跡出土遺物2



第104図 7号住居跡

7号住居跡（第104図）

7号住居跡はF-3区において検出された。当初は大型の土坑として調査を進めていたが、床面と思われる硬化面が検出されたため住居跡としたものである。長辺3.2m、短辺2.5mの楕円形プランである南側に径60cm、深さ20cmの土坑がある。遺物は少なく図化できるものもなかった。

③ 土坑（第105～108図）

土坑は9基が検出された。（調査段階では11基を数えたが、2基については土坑ではないことが判明した。ただし、土坑の番号は調査中の番号を使うこととした）1～4号土坑は上層が削平されているため検出面からの深さが浅いものである。9号土坑は、南北に長い9mの不整形の土坑であるが、南側は長さ1.8m、幅1mの落ち込みがある。時期差による切り合いかどうかは不明である。ただ、土坑内の土器についてみると時期差がありそうである。遺物は蓋型土器・甕形土器・壺形土器・鉢形土器・高杯等豊富である。10号土坑からは甕形土器・丸底甕形土器等が出土している。11号土坑は径85cmの円形で深さは1.1mと深く柱穴状である。土坑内には口縁部を一部欠損した甕形土器と完形の鉢形土器が重ねて埋めてある。遺物は1号・9号・10号・11号から出土している。860～864は1号土坑内出土である。860は口縁部径33cmを測る。胴部はわずかに張り、口縁部はくの字状に外反する。口縁部内面はなだらかで稜線は明瞭ではない。頸部に刻目突帯を巡らす。861・862は甕形土器の底部と胴部である。

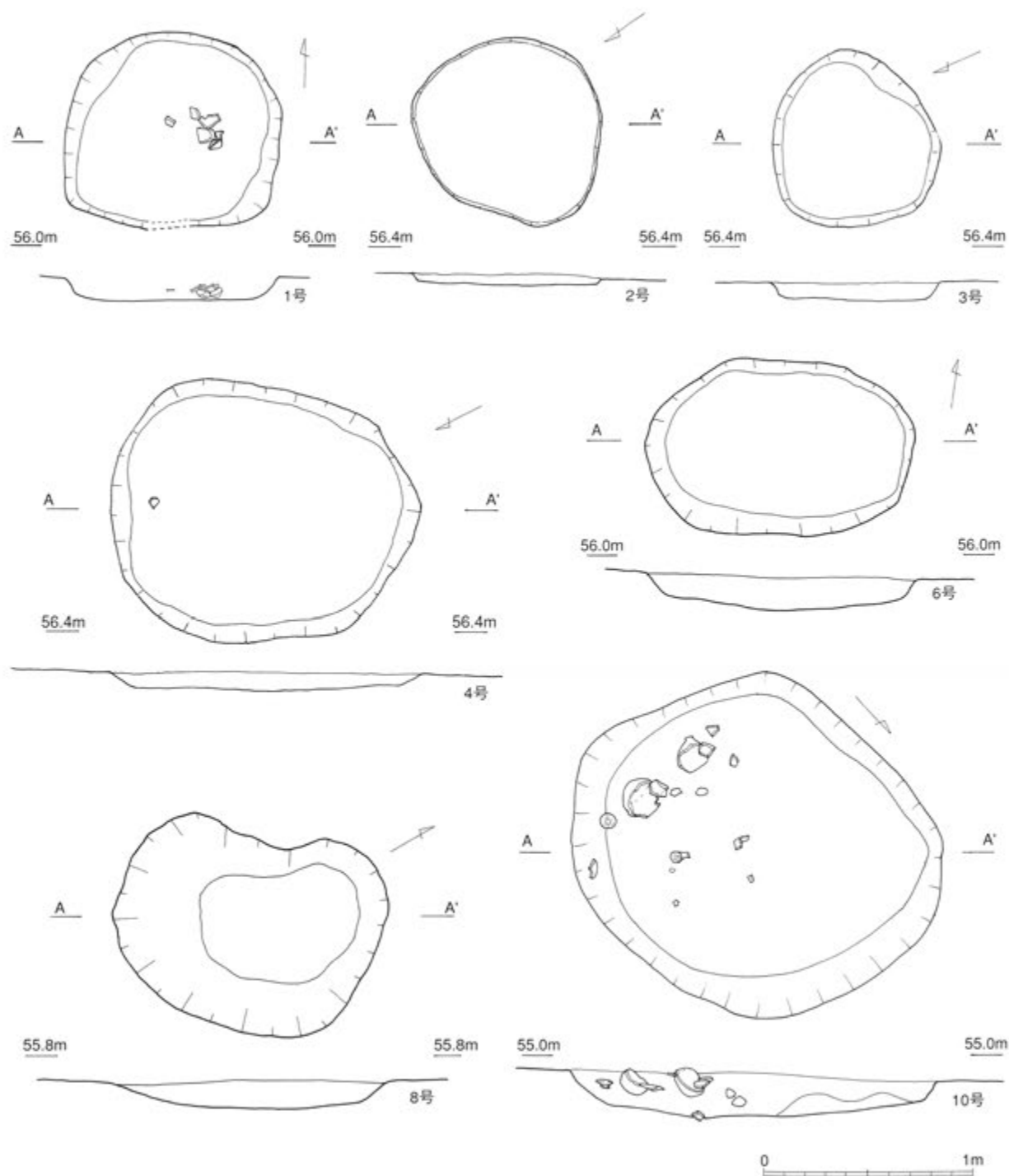
862は胴部に2条の突帯を巡らす。863・864は壺形土器。863は胴部に2条の突帯を巡らす。864は肩部から頸部にかけてのものである。しまった頸部から口縁部は直行気味に外反する。865～873は9号土坑内出土である。865は蓋形土器で、口縁部径37cmを測る。口縁部は大きく反り気味に外反し、天井部はヘラケズリ

により整形され薄くなっている。

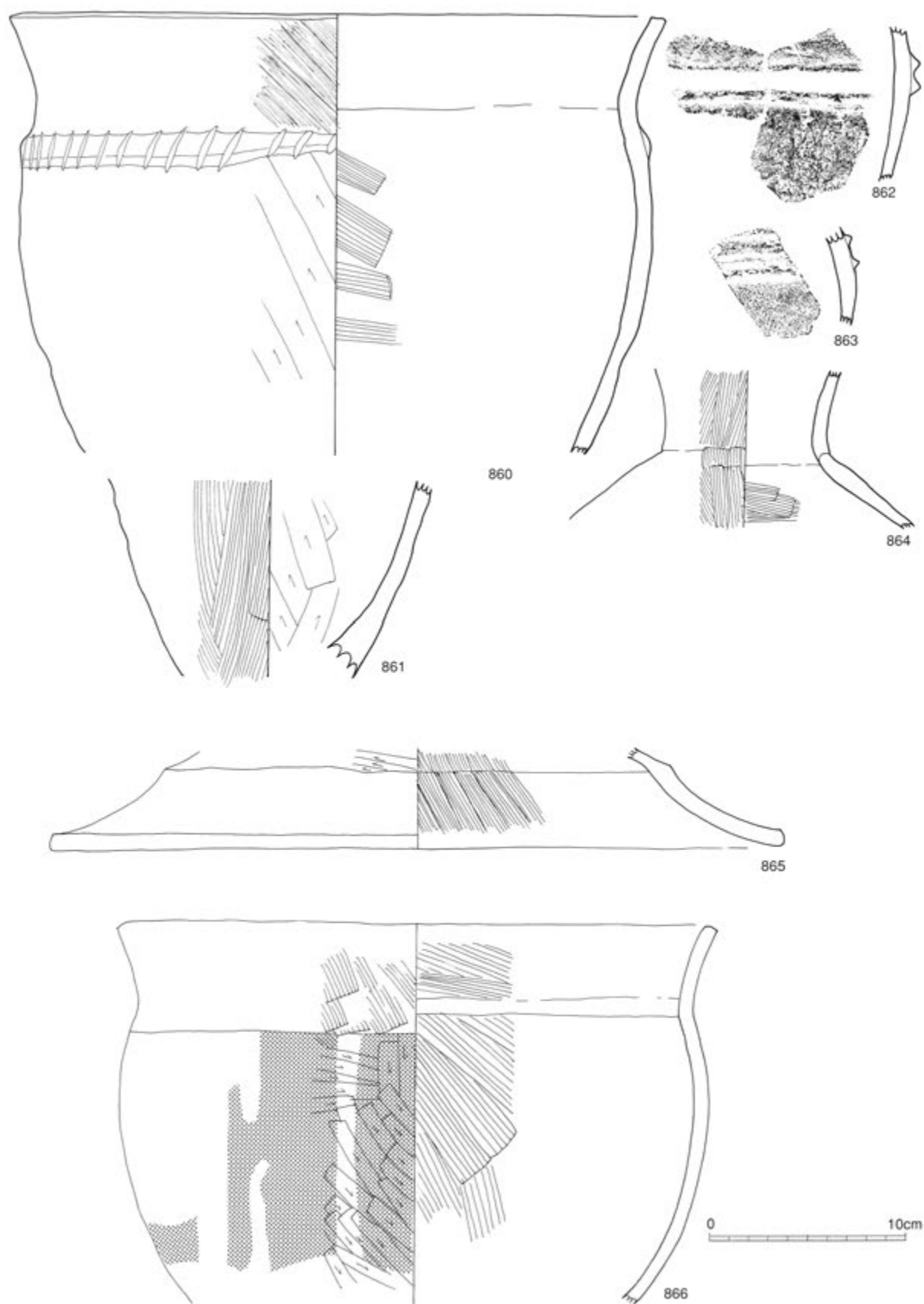
866～867は甕形土器。866は口縁部径30.4cm。あまり張らない胴部から口縁部は緩やかに外反する。内面もなだらかで稜線も明瞭ではない。867は口縁部径25cm。口縁部は外反し、内面には稜線が認められない。頸部には刻目突帯を巡らす。868・869は壺形土器である。869は大きく外反する口縁部で口縁部径18.2cmを測る。870は鉢形土器。871は小型の鉢形土器。口縁部径8.1cm、器高6.4cmを測る。尖底の底部から直線的に立ち上がるものである。872は穿孔を有する高杯の脚部である。873～877は10号土坑内出土で、873～876は甕形土器。873は口縁部径17.2cmを測る。口縁部は短くくの字状に外反する。877は丸底甕形土器。口縁部径16.4cm、器高16.1cmを測る。丸底の底部から外反し、胴部上位が張るものでくびれた頸部から口縁部はくの字状に外反し、口縁部内面には稜線が認められる。878・879は11号土坑内出土で、口縁部を一部欠損した甕形土器と完形の鉢形土器が重ねて埋めてあったものである。878は中空の脚台付きの甕形土器。口縁部径16.8cm、器高23cmを測るものである。胴部はあまり張らず口縁部はくの字状に外反し、口縁部内面は稜線が認められる。頸部から口縁部へかけてハケ目によるカキ上げ技法が認められる。879は口縁部径15.9cm、器高10.2cmを測る鉢形土器。器外面はヘラケズリ、内面はハケ目調整が施され、内底面には指頭圧痕が見られる。

土坑一覧表

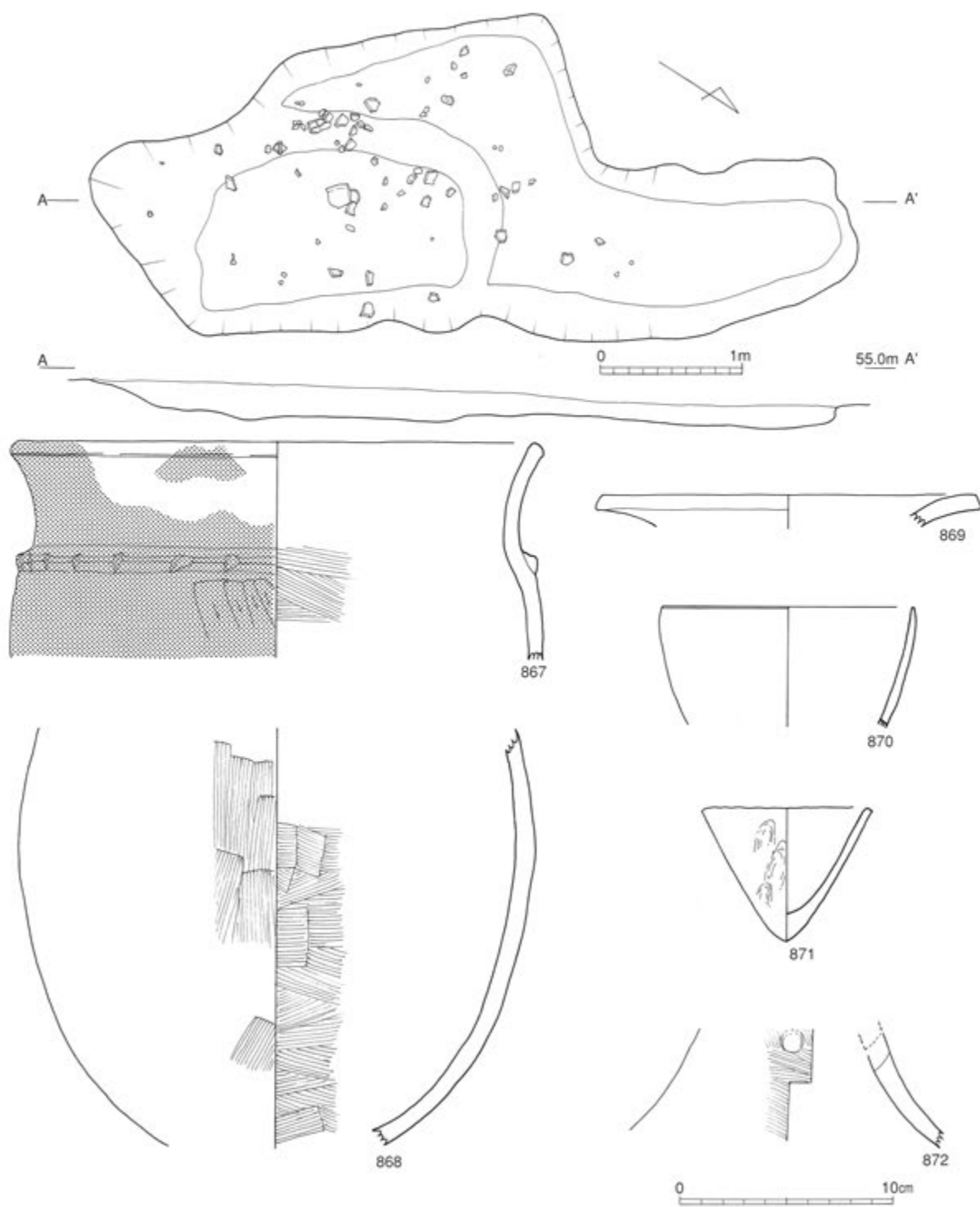
番号	検出区	検出面	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
1	E—2	Ⅲ層	略方形	113	93		甕・壺	
2	H—2	Ⅲ層	略円形	92	88	5		
3	H—2	Ⅲ層	不整形	80	80	10		
4	H—2	Ⅲ層	楕円形	150	129	10		
5		欠番						
6	G—1	Ⅲ層	楕円形	130	84	16		
7		欠番						
8	G—1	Ⅲ層	不整形	133	97	14		
9	H—1～3	Ⅲ層	不整形	530	210	27	蓋・甕・壺・鉢・高杯	2時期有り
10	D—5	Ⅲ層	略円形	170	153	23	甕・丸底甕	
11	E—1	Ⅲ層	円形	82	72	112	甕・鉢	



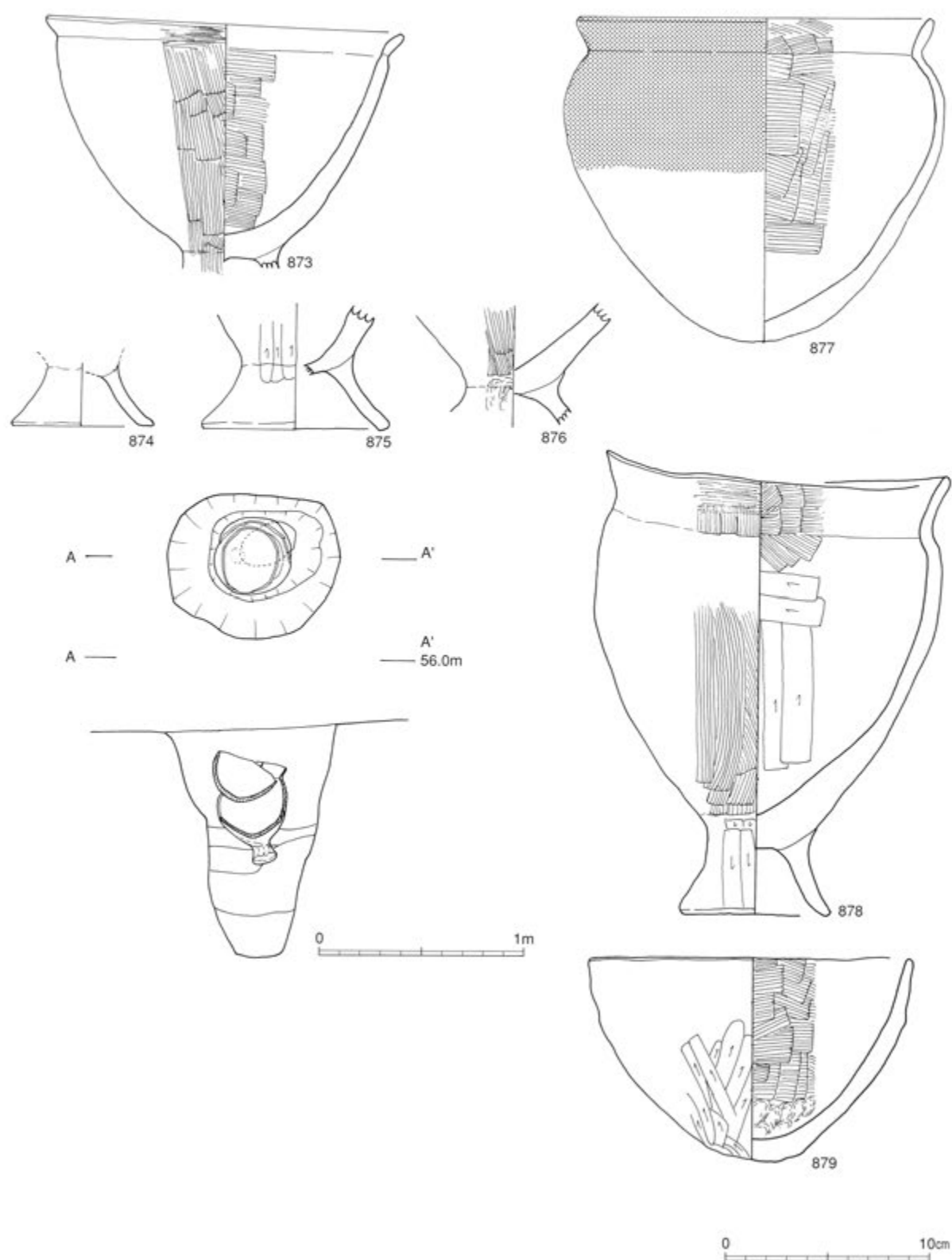
第105図 1～8号・10号土坑



第106図 土坑内出土遺物



第107図 9号土坑・9号土坑内出土遺物



第108图 11号土坑·土坑内出土遺物

土坑内出土土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	色 調	胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
					石英	長石	角閃石	その他				
第 106 図	860	1号土坑		茶褐色	○	○	○		良	刻目突帯・ハケ目・ケズリ	ハケ目	
	861	1号土坑		暗茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ケズリ	
	862	1号土坑		淡茶褐色	○	○			〃	突帯・ハケ目	ナデ	
	863	1号土坑		茶褐色	○	○			〃	刻目突帯・ハケ目	ナデ	
	864	1号土坑		淡茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ナデ・ハケ目	
	865	9号土坑	Ⅱ	赤色	○	○	○		〃	ケズリ・ナデ	ハケ目	
	866	9号土坑		暗茶褐色	○	○			〃	ハケ目・ケズリ	ハケ目	
第 107 図	867	9号土坑		黒茶褐色	○	○			〃	刻目突帯・ハケ目	ハケ目・指頭圧痕	
	868	9号土坑		茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ハケ目	
	869	9号土坑		茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ナデ	
	870	9号土坑		茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	871	9号土坑	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	指頭圧痕	ナデ	
	872	9号土坑	Ⅱ	淡茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ナデ	穿孔有
第 108 図	873	10号土坑		茶褐色	○	○			〃	ケズリ	ナデ	
	874	10号土坑		暗茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	875	10号土坑		茶褐色	○	○			〃	〃	ハケ目	
	876	10号土坑		茶褐色	○	○			〃	ハケ目・指頭圧痕	ナデ	
	877	10号土坑		茶褐色	○	○			〃	ナデ	ハケ目	
	878	11号土坑		茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目・ケズリ	ハケ目・ケズリ	
	879	11号土坑		茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ	ハケ目・指頭圧痕	

(2) 遺物 (第109～120図)

古墳時代の遺物は、遺構内出土の遺物の他にも多くの土器が出土している。

土器 (第109～119図)

土器は蓋型土器・甕形土器・丸底甕形土器・壺形土器・埴型土器・高坏・手捏ね土器等豊富な器種が出土している。880～885は蓋型土器である。880は口縁部径40cmと大型の蓋である。口縁部は下方へ外反して広がる。881は口縁部径21.2cmで口縁部は直線的に広がる。882・883はいずれも口縁部径30cmを測り、口縁部が下方へ外反して広がる。884は口縁部径20.4cm、885は口縁部径21.4cmを測るもので器高の高いものである。888～979は甕形土器である。口縁部の形態がくの字状に外反するもの、わずかに外反もしくは直行するもの、内湾するものと3類に分類できる。886～919は口縁部がくの字状もしくはくの字に近く外反するもので、口縁内面には稜線を有するものがほとんどである。また、頸部から口縁部へかけてハケ目によるカキ上げが施されるもの、カキ上げ後ナデ調整が施されるものがある。口縁部径をみると886は36.1cm、887は31.4cmと大きく、888～894は25cm～29cm、895～913は21cm～24cm、914は19.8cm、915は17.2cm、916・917は13cm～15cmと大小あり、用途によって使い分けていたのではないかと推測される。この形態のものは、土器溜り出

土の土器と同タイプである。器外面がヘラケズリであるものが多く、器壁がざらついてひび割れ状である特徴を持つ。また、口縁部内外面に指頭圧痕の見られるものもある(915・917)。920～925はこれらに伴う底部と思われる。926・927は口縁部がくの字状に外反し頸部に刻目突帯をめぐらすものである。口縁部径は926が31.6cm、927が29.4cmである。928～935は口縁部が直行もしくはわずかに外反するものである。内面に稜線は認められず、頸部に刻目突帯・三角突帯をめぐらす。936～941は口縁部が内湾するものである。頸部に刻目突帯をめぐらす。942～979は甕形土器の底部で中空の脚台である。980・981は脚付の鉢形土器。981は口縁部径13.2cm、器高10cmを測る。中空の脚台から直線的に大きく外反するものである。982・983は底部を欠損するが丸底の甕形土器である。球形状の胴部から口縁部は直行気味に外反するものである。

982は口縁部径12.9cm、頸部径12.6cm。983は口縁部径11.9cm、頸部径11.3cmを測る。984～1028は壺形土器。984～1004は口縁部である。1005～1007は胴部。球形状の胴部で最大径より上位に3条・2条・1条の刻目突帯をめぐらす。1008～1028は底部である。1008～1012は平底。1013～1017は丸底に近い平底、1018～1027は丸底である。1029は丸底の鉢形土器。口縁部径7.5cm、器高7.05cmを測るものである。丸底の底部から

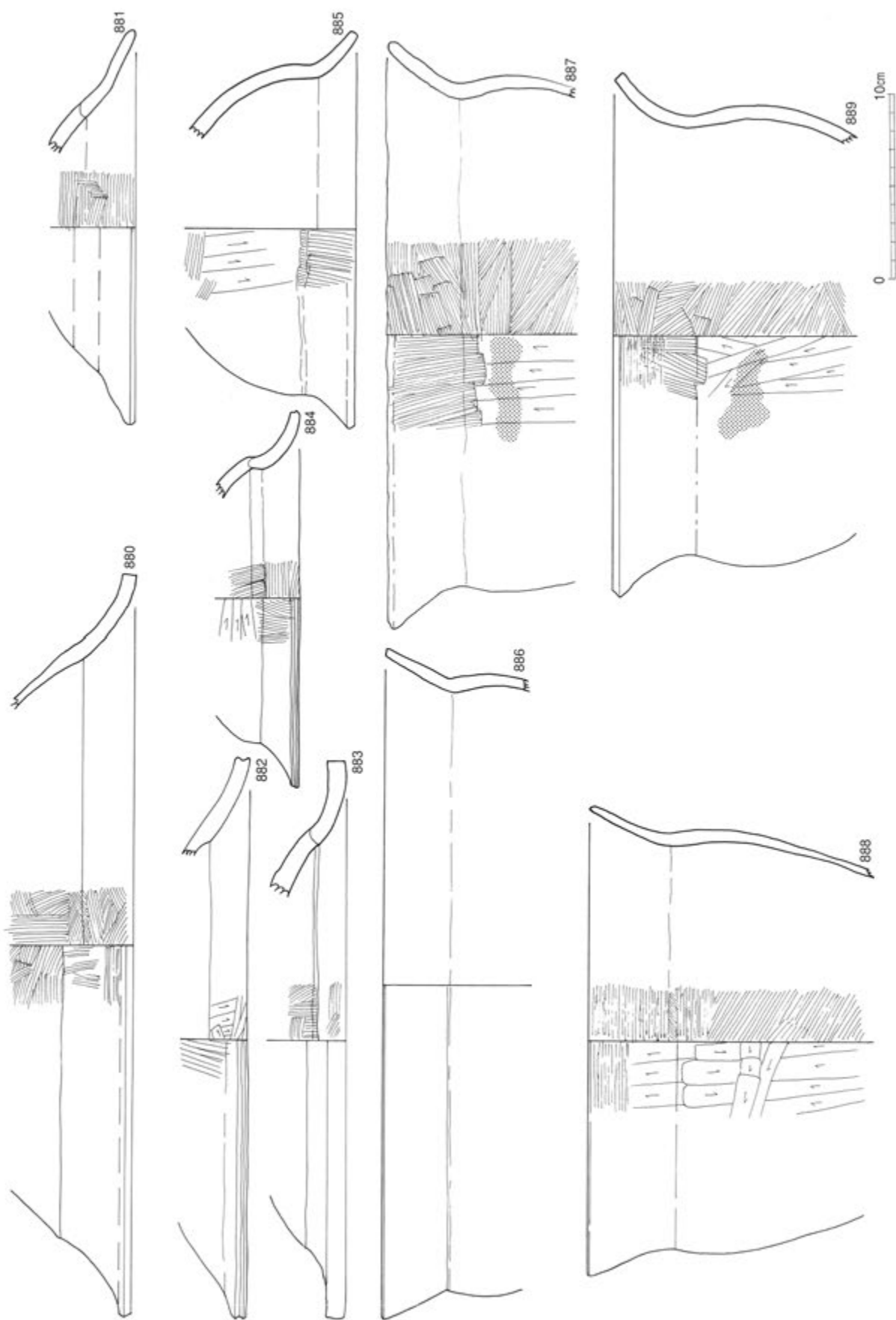
胴部は丸みを帯び、内傾した口縁部は端部で直行する。器内外面共にヘラケズリである。

1030～1032は埴型土器。1030の底部は尖底で体部は小さく、くびれもわずかである。くびれ部から口縁部へと外反して立ち上がるものである。1031は平底である。1032は口縁部を欠損するもので、胴部が球形状に膨らむものである。1033は平底の底部であるが、全体形状の把握できないものである。1034は口縁部径12.6cmを測る。脚付きの鉢形土器（埴に近い）である。1035～1045は高坏。1035は口縁部径28cmを測る大型の高坏

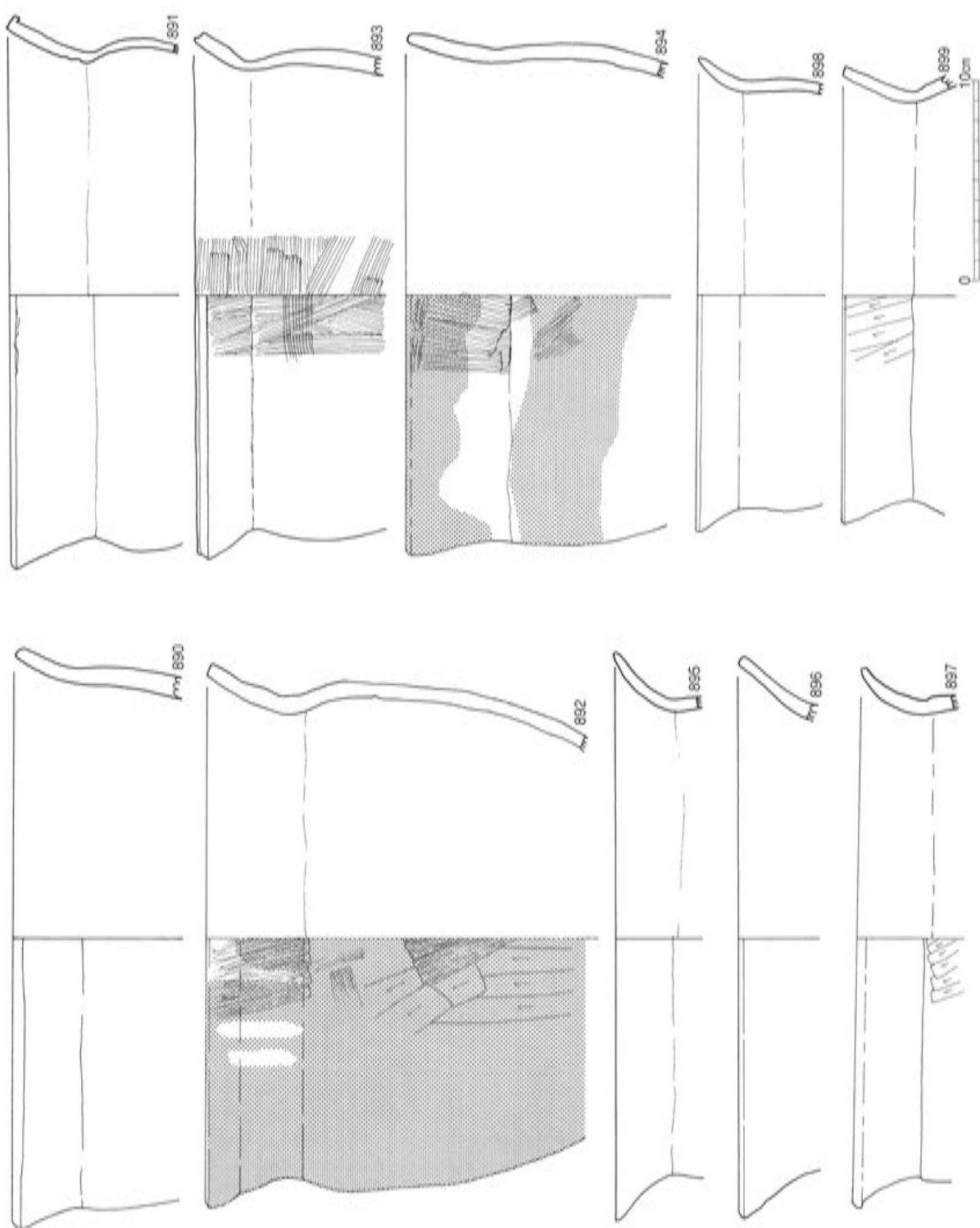
の坏部である。屈曲部から反り気味に外反する口縁部である。1037～1045は脚部。1037～1042は脚柱部がなだらかに裾部へと広がるものである。1043は脚柱部が筒状を呈し、屈曲して裾部へと広がるものである。1044・1045は脚があまり広がらず、円孔を有するものである。1046～1052は手捏ね土器であるが器形の判別できるものは、1046の小型鉢だけである。1046は口縁部径6.6cm、器高4.05cmを測るもので、指頭圧痕が明瞭である。1052は脚付きの鉢と思われる。

古墳時代土器観察表

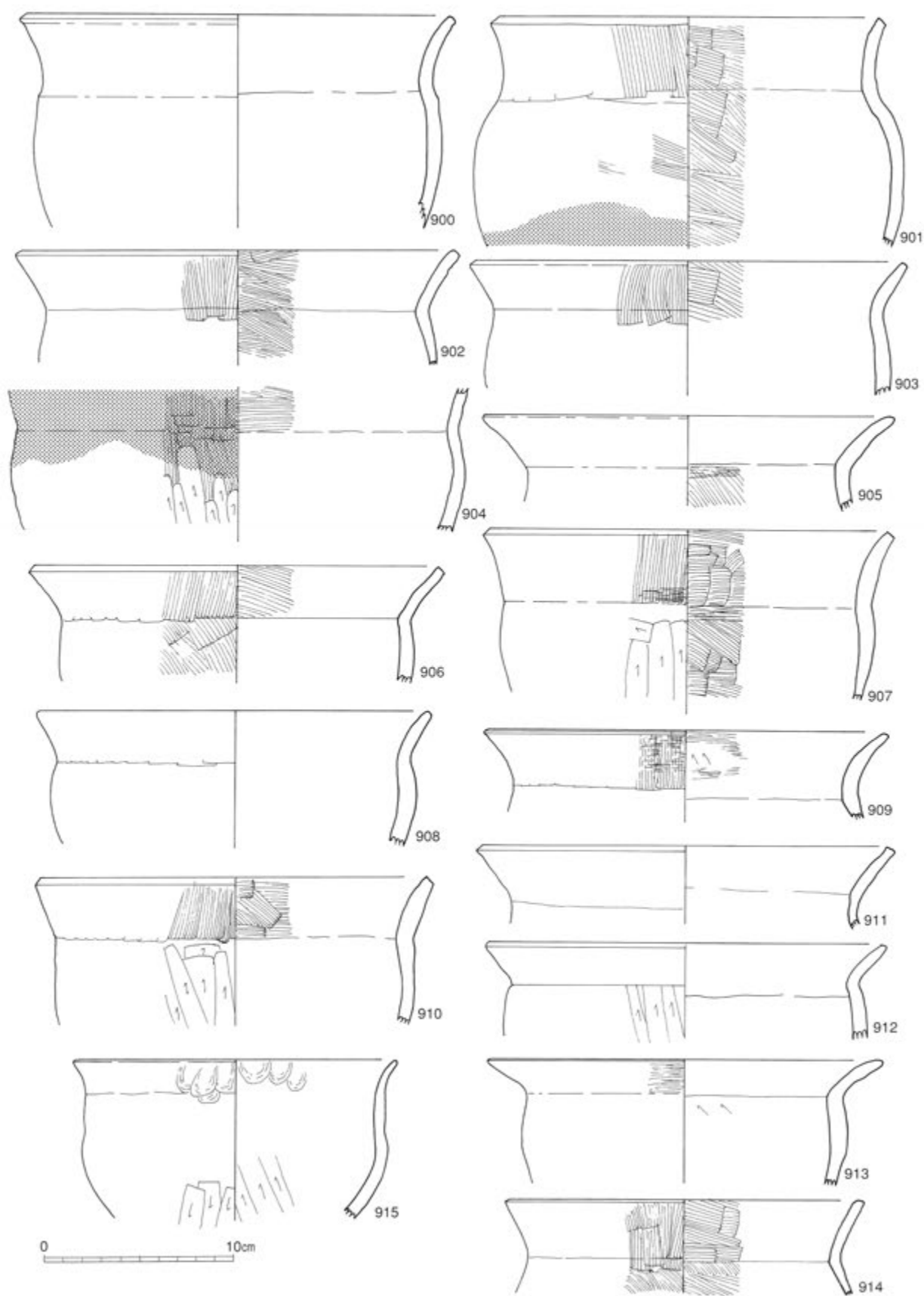
挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	色 調	胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
					石英	長石	角閃石	その他				
第 109 図	880		I	暗茶褐色	○	○			良	ハケ目	ハケ目	
	881	H-5	II	茶褐色	○		○		〃	ナデ	ハケ目	
	882	H-6	II	淡茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ケズリ・ナデ	
	883	D-4	II	暗茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ハケ目	
	884	G-1	II	黒茶褐色	○	○			〃	ハケ目・ケズリ	ハケ目	
	885	H-5	II	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	886	H-5	II	茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ナデ	
	887	H-4	II	暗茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目・ケズリ	ハケ目	カキ上げ
	888	H-5	II	茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ・ナデ	ハケ目	カキ上げ
第 110 図	889			茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目・ケズリ	ハケ目	
	890	H-5	II	茶褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ	カキ上げ
	891	H-5	II	淡茶褐色	○	○			〃	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	
	892	I-3	II	黒茶褐色	○	○			〃	ハケ目・ケズリ	ナデ	カキ上げ
	893	G-5	II	茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ハケ目	カキ上げ
	894		II	黒茶褐色	○	○			〃	ハケ目・ケズリ	ナデ	カキ上げ
	895		II	黒茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ナデ	カキ上げ
	896	H-5	II	暗茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ハケ目・ナデ	カキ上げ
	897	H-5	II	茶褐色	○	○	○		〃	ナデ・ケズリ	ナデ	カキ上げ
	898	H-5	II	茶褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ	カキ上げ
第 111 図	899	F-4	II	茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ	ナデ	
	900	H-5	II	茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ナデ	カキ上げ
	901	H-5	II	茶褐色	○	○			〃	ハケ目・ナデ	ハケ目	カキ上げ
	902	H-5	II	茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ハケ目	カキ上げ
	903	I-4	II	茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	カキ上げ
	904	G-5	II	茶褐色	○	○			〃	ハケ目・ケズリ	ハケ目・ナデ	カキ上げ
	905	H-7	II	暗茶褐色	○	○			〃	ナデ	ハケ目・ナデ	カキ上げ
	906		II	暗茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ハケ目・ナデ	
	907	F-4	II	茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目・ケズリ	ハケ目	カキ上げ
	908	H-5	II	淡茶褐色	○	○			〃	ナデ・ケズリ	ナデ	カキ上げ
	909	H-5	II	茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ケズリ・ナデ	
	910	F-4	II	茶褐色	○	○			〃	ハケ目・ケズリ	ナデ	カキ上げ
	911	H-5	II	茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ナデ	カキ上げ
	912			茶褐色	○	○			〃	ナデ・ケズリ	ナデ	
	913	H-5	II	茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目・ナデ	ケズリ・ナデ	カキ上げ
	914	H-5	II	茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ハケ目	
	915			茶褐色	○	○			〃	ケズリ・指頭圧痕	ケズリ・指頭圧痕	カキ上げ



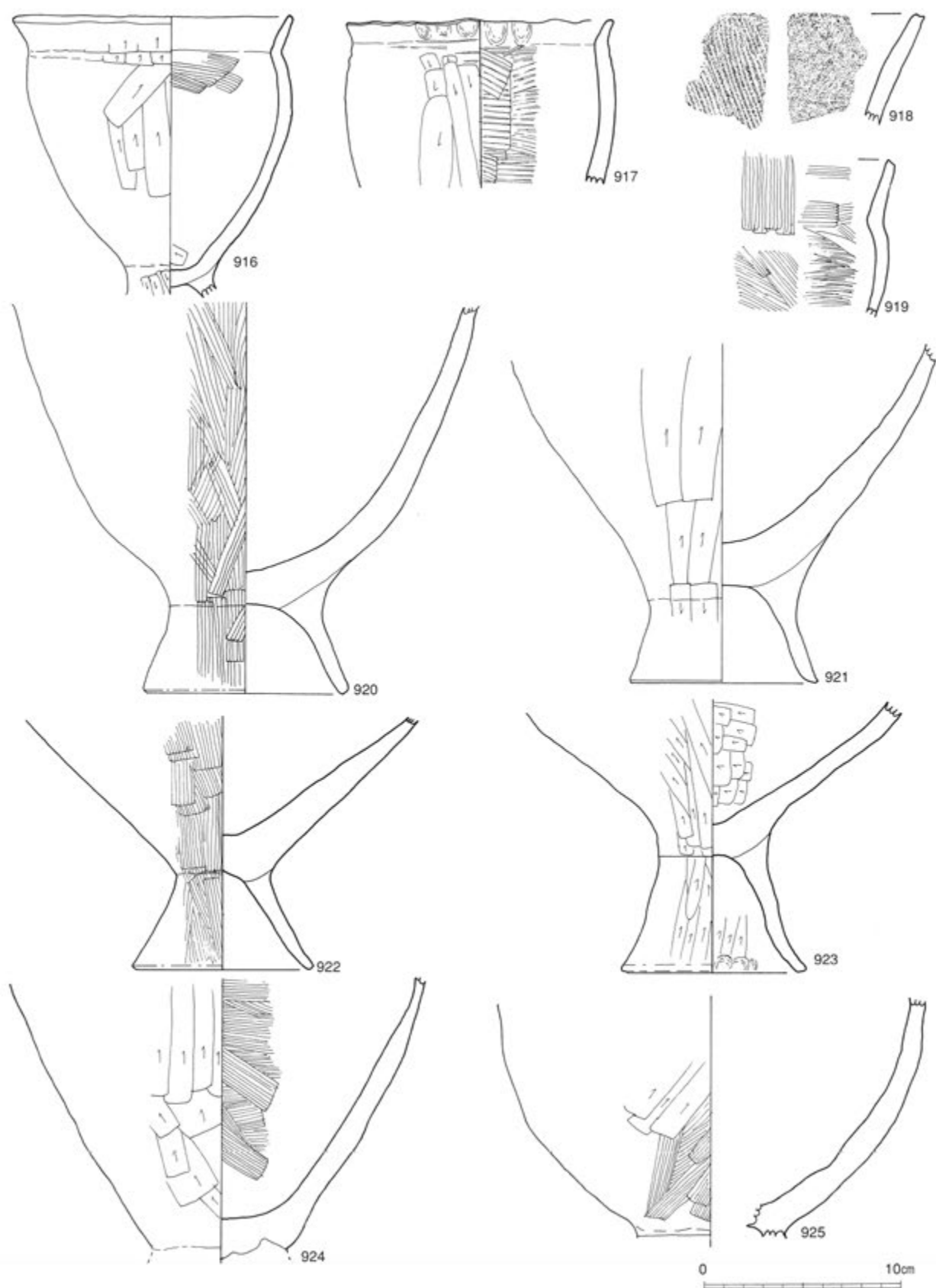
第109図 古墳時代出土土器 1



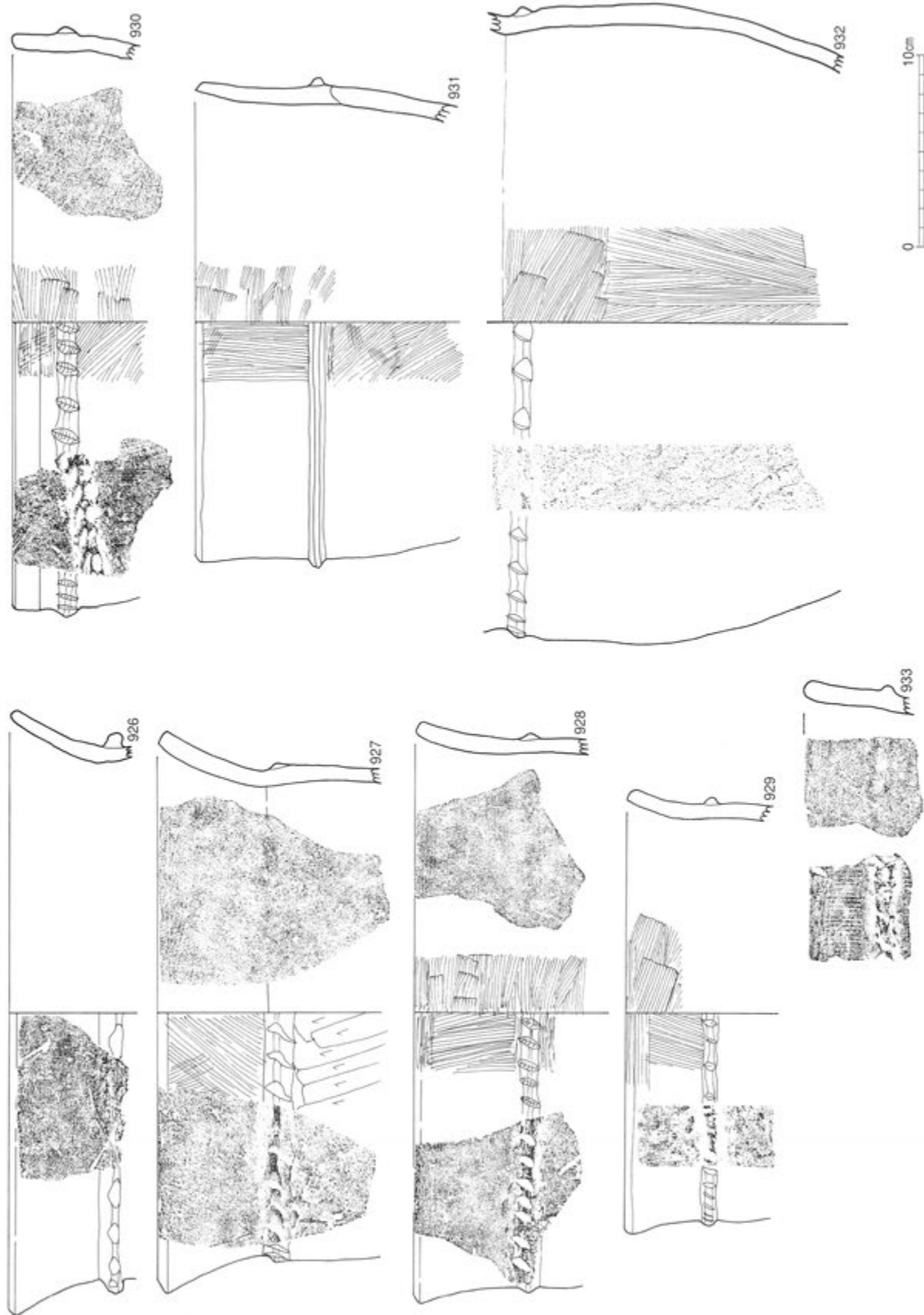
第110図 古墳時代出土土器 2



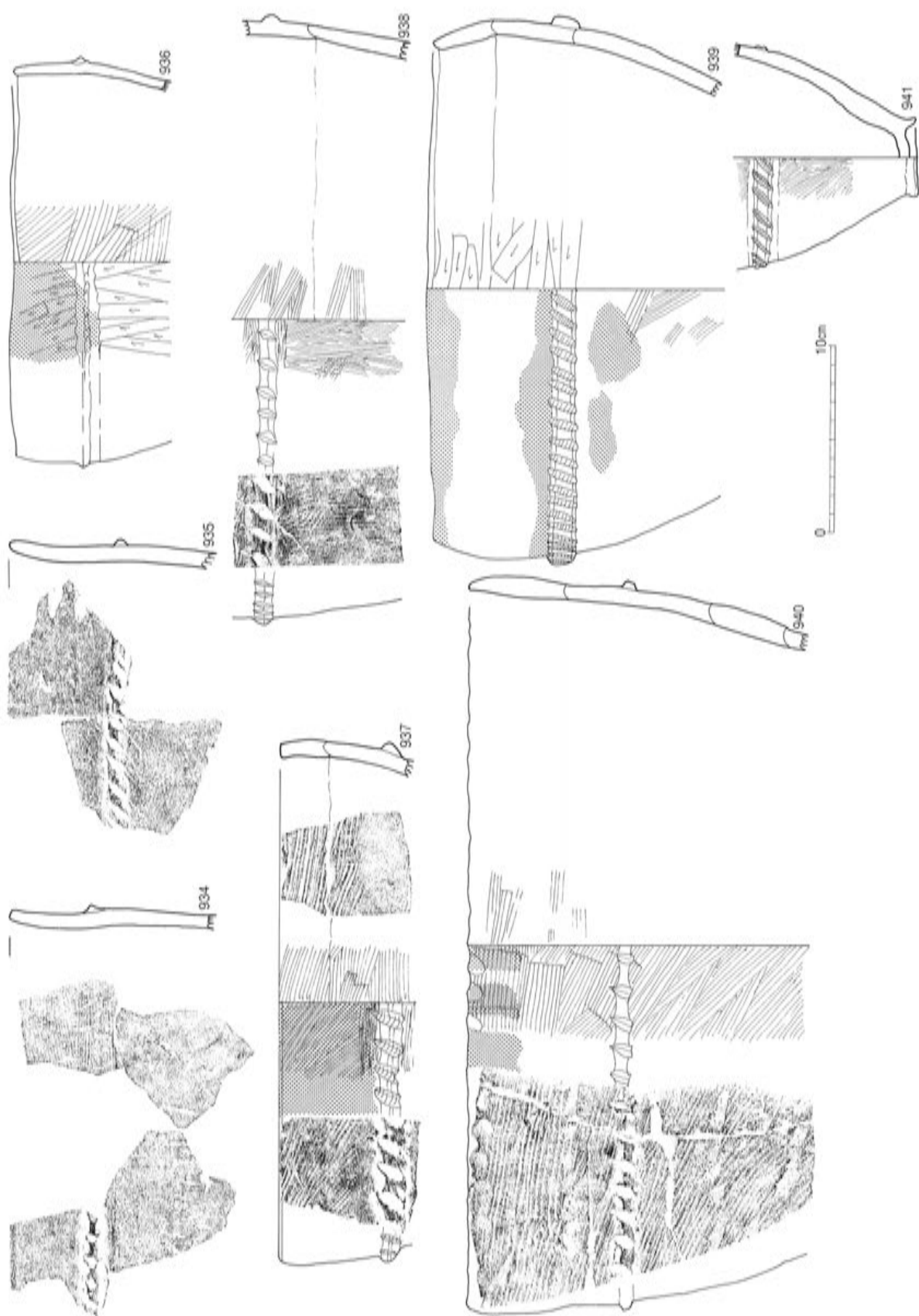
第111図 古墳時代出土土器 3



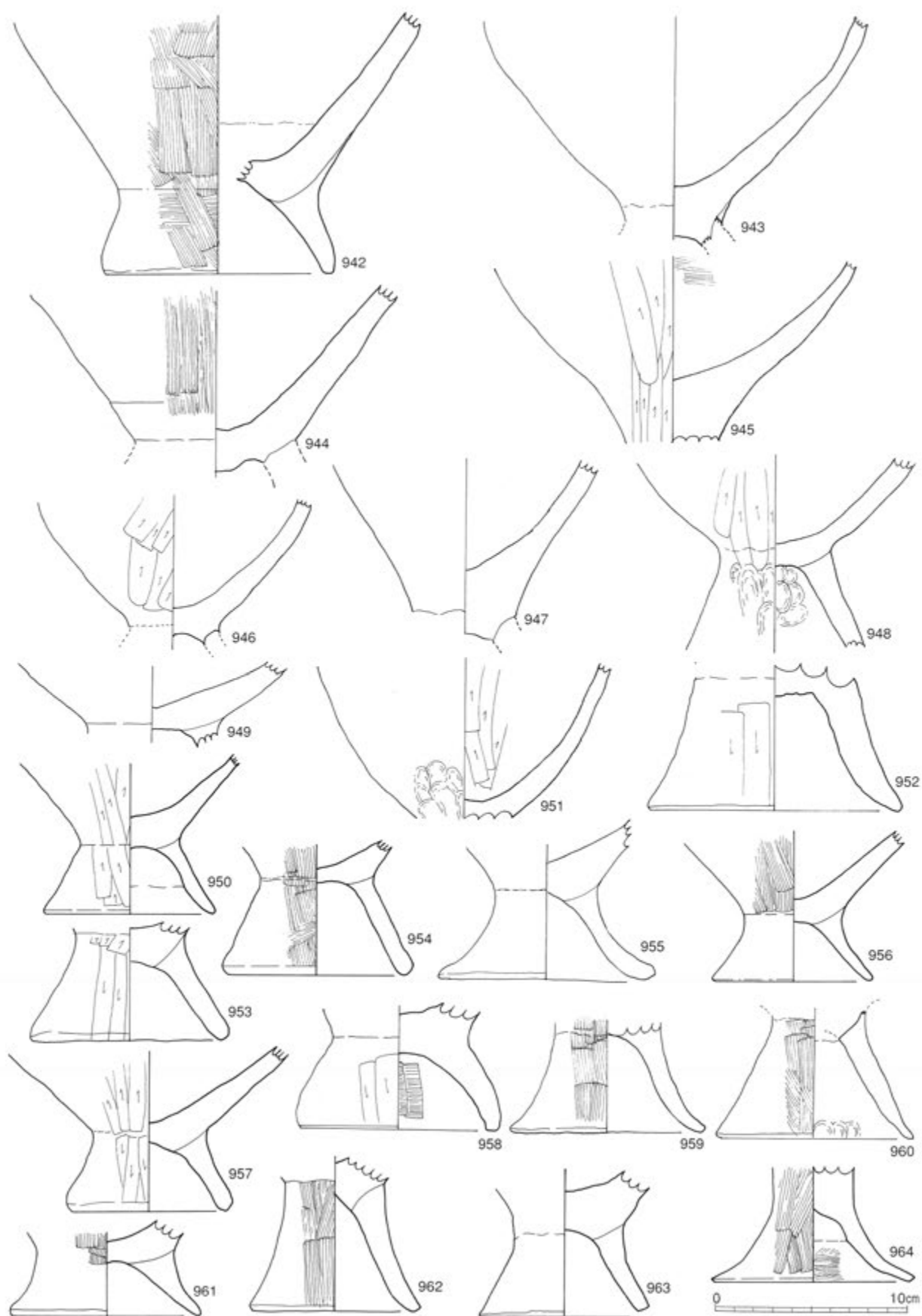
第112図 古墳時代出土土器 4



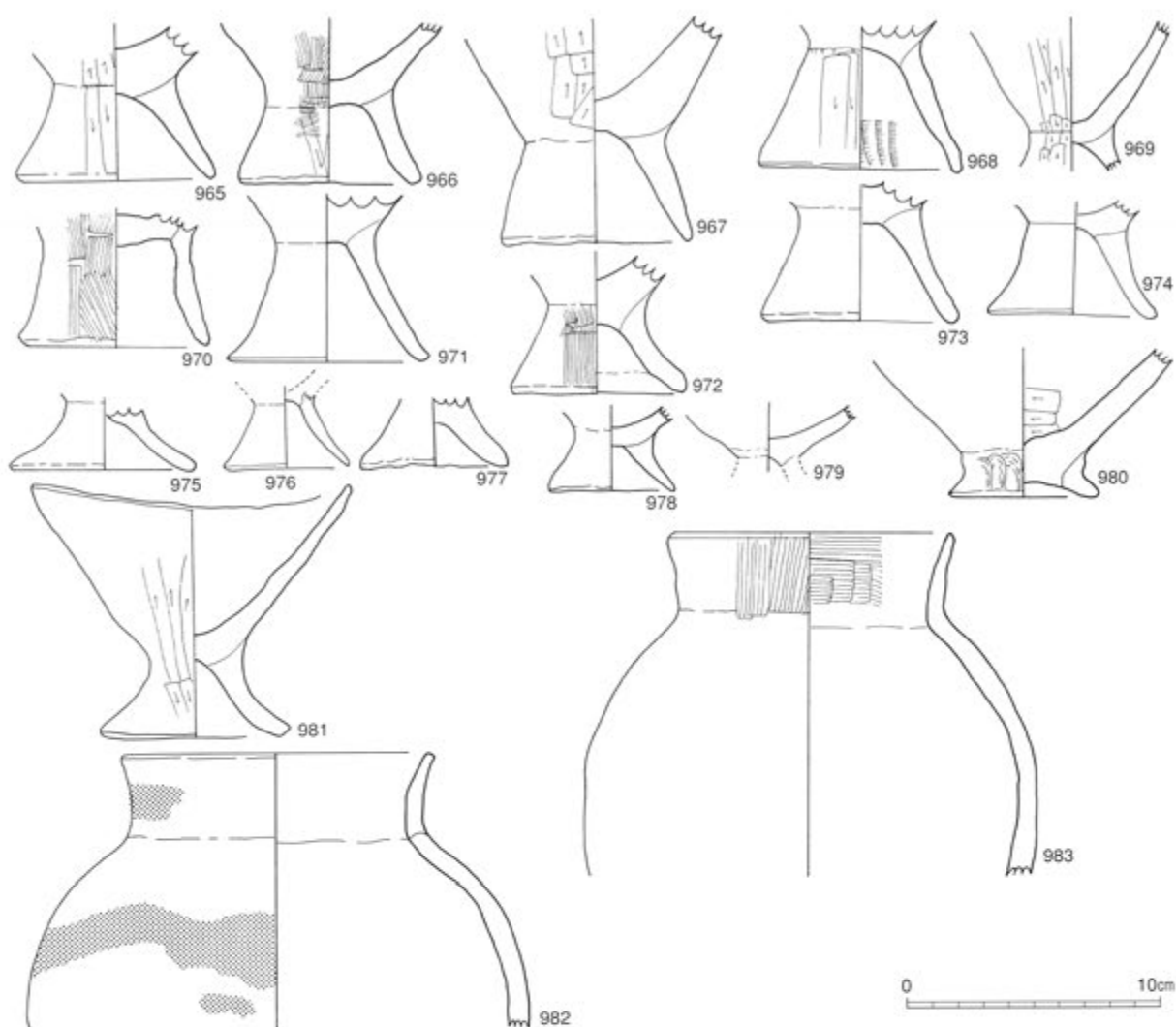
第113図 古墳時代出土土器 5



第114図 古墳時代出土土器 6



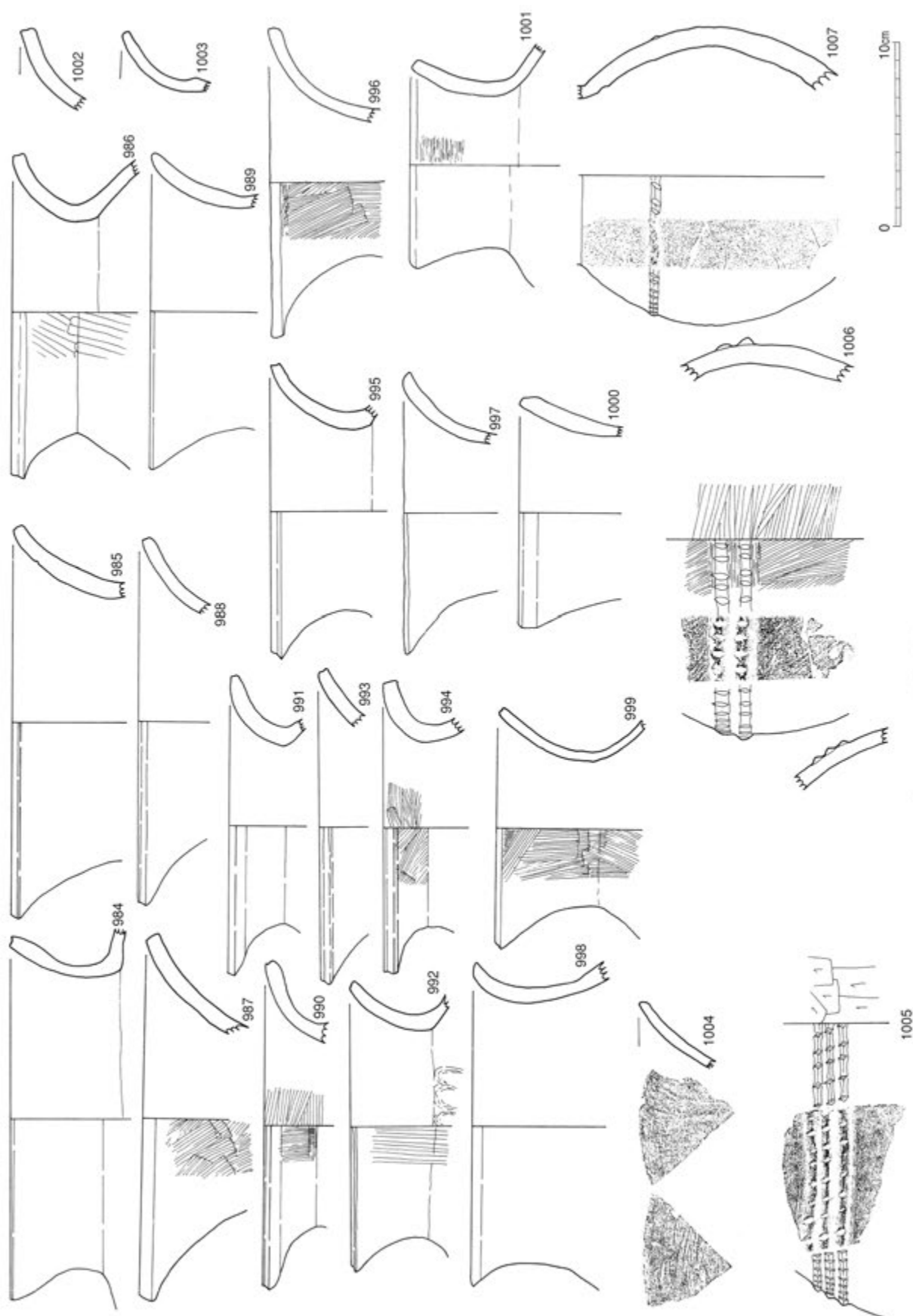
第115図 古墳時代出土土器 7



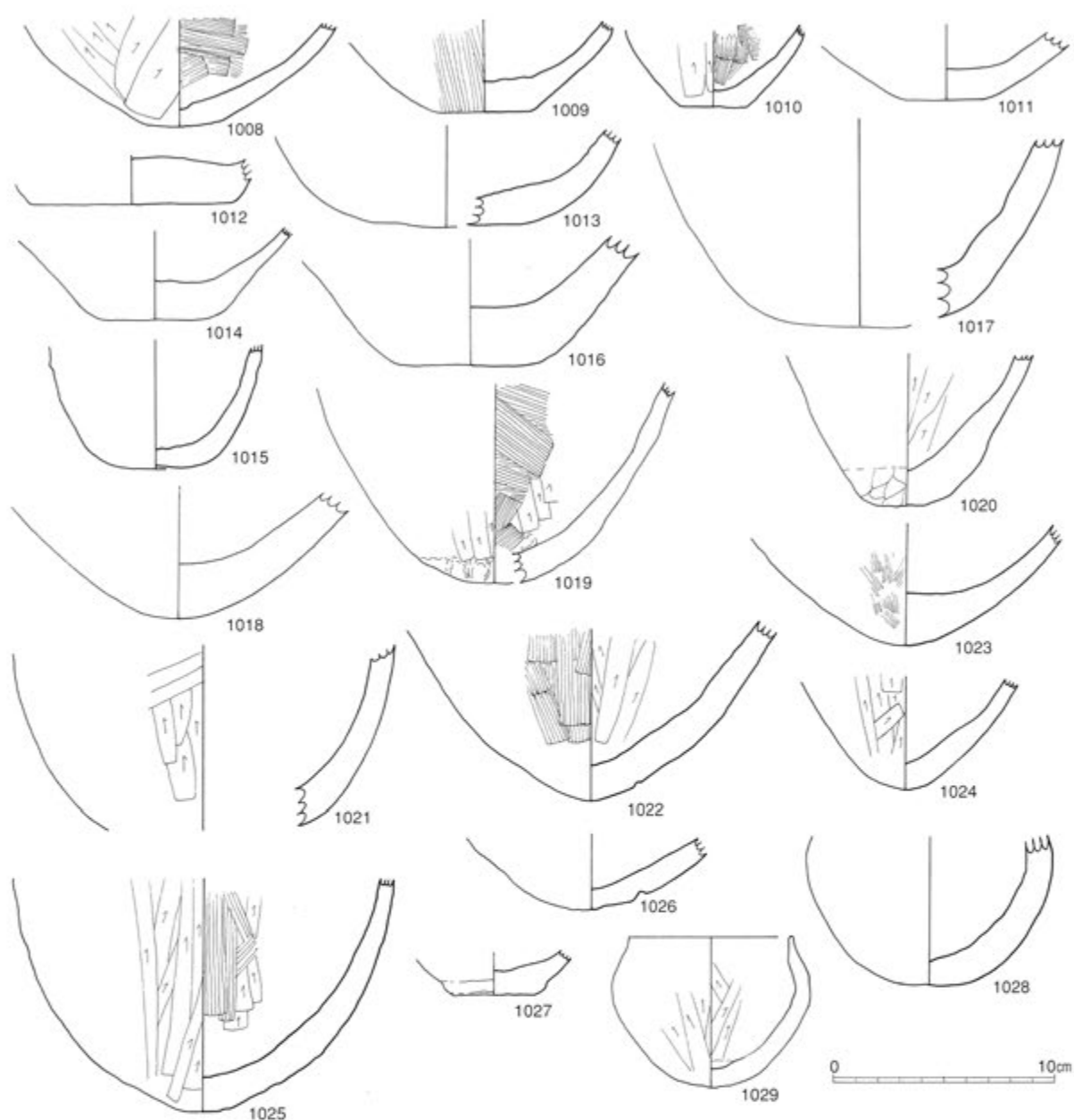
第116図 古墳時代出土土器 8

古墳時代土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	色 調	胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
					石英	長石	角閃石	その他				
第 112 図	916	F-3	Ⅱ	茶褐色	○	○			良	ナデ・ケズリ	ハケ目・ナデ	
	917	H-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ケズリ・指頭圧痕	ハケ目・指頭圧痕	
	918	H-7	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ナデ	カキ上げ
	919	I-4	Ⅱ	黒茶褐色	○	○			〃	〃	ハケ目	
	920	G-7	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	921	G-7	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ	ナデ	
	922	H-5	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ナデ	
	923	H-5	Ⅱ	淡茶褐色	○	○			〃	ケズリ	ケズリ	
	924	H-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ハケ目	
	925	I-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ハケ目・ケズリ	ナデ	
第 113 図	926	F-7	Ⅱ	淡茶褐色	○	○			〃	刻目突帯・ナデ	ナデ	
	927		Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	刻目突帯・ハケ目・ケズリ	ナデ	
	928	H-6	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	刻目突帯・ハケ目	ハケ目・ナデ	
	929	H-6	Ⅱ	黒茶褐色	○	○			〃	〃	ハケ目	
	930	N-7	Ⅷ	黒茶褐色	○	○			〃	〃	ハケ目	
	931	G-7	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	突帯・ハケ目	ハケ目・ナデ	
	932			暗茶褐色	○	○			〃	刻目突帯・ケズリ	ハケ目	
	933	E-7	Ⅱ	黒茶褐色	○	○			〃	刻目突帯・ハケ目	ナデ	



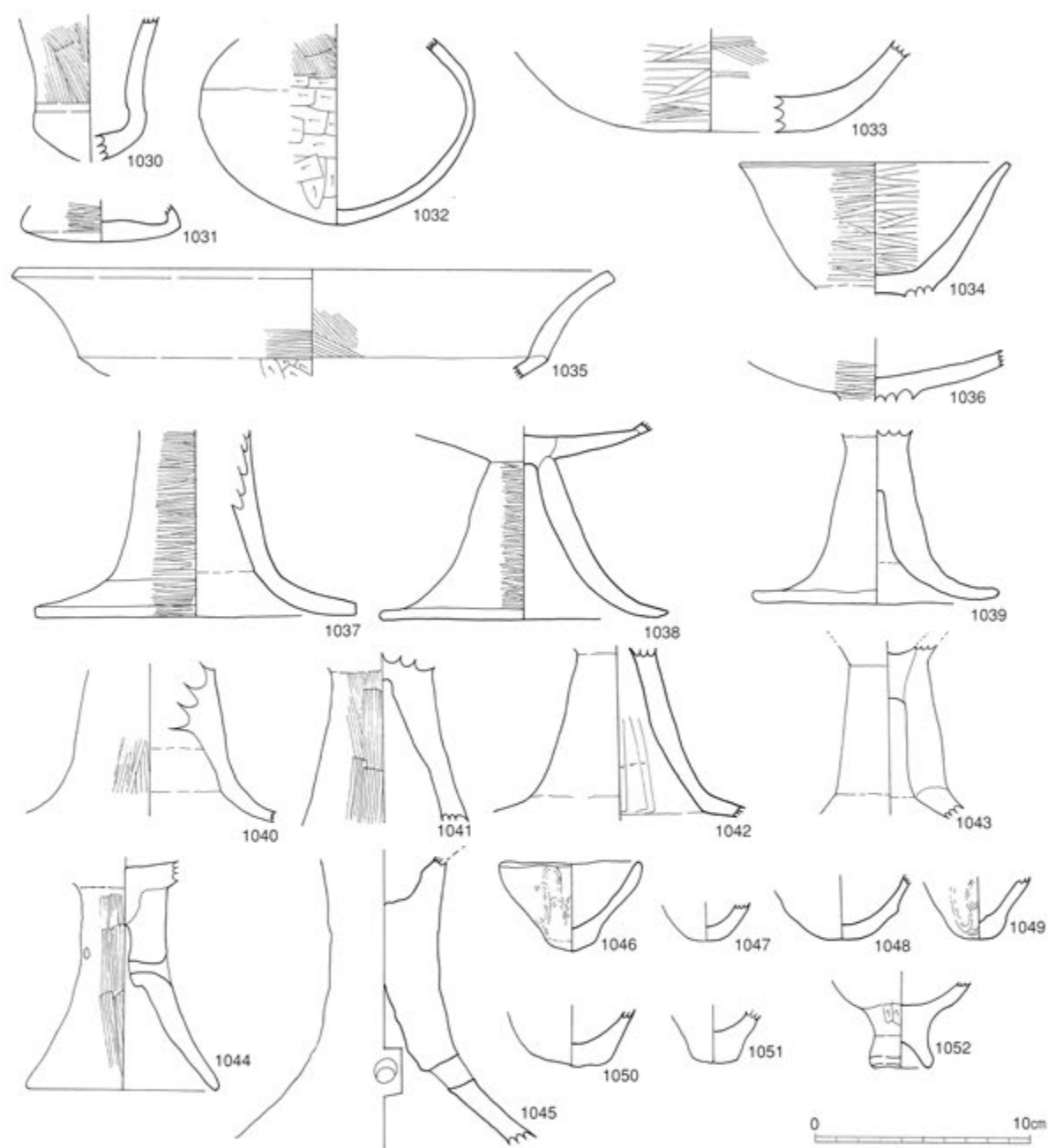
第117図 古墳時代出土土器 9



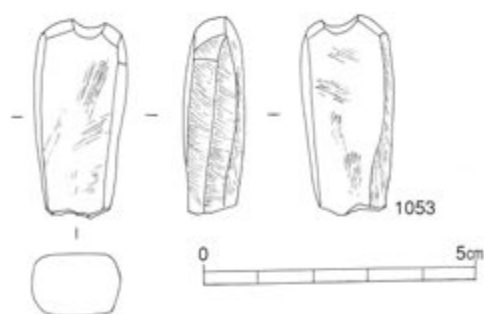
第118図 古墳時代出土土器10

古墳時代土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	色 調	胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
					石英	長石	角閃石	その他				
第 114 図	934	H-6	Ⅱ	黒茶褐色	○	○			良	刻目突帯・ハケ目	ハケ目・ナデ	
	935			茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	936	C-4	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	刻目突帯・ケズリ	ハケ目	
	937	G-5	Ⅱ	黒茶褐色	○	○	○		〃	刻目突帯・ハケ目	ハケ目・ナデ	
	938	C-4	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ハケ目	
	939	N-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	刻目突帯・ハケ目	ヘラケズリ	
	940		Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ヘラケズリ	
	941	I-4	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
第 115 図	942	H-7	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ナデ	
	943	I-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ	



第119図 古墳時代出土土器11



第120図 古墳時代出土石器

石器 (第120図)

1053は現存長3.3cm、幅1.7cm、厚さ1.1cmを測る砂岩製の石器である。全面に丁寧な擦痕が観察され、砥石の可能性が高いものである。ただ、上端に挟りがあり、石錘としての二次使用も考えられるが、下端が欠損しているため用途については不明である。

また、時期についても、Ⅱ層出土のため弥生時代以降と考えられるが砥石としての用途からみると鉄器が対象と思われ、古墳時代の石器として考えたい。

古墳時代土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	色 調	胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
					石英	長石	角閃石	その他				
第 115 図	944			茶褐色	○	○	○		良	ハケ目	ナデ	
	945	H-5	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ	ハケ目・ナデ	
	946	H-5	Ⅱ	淡茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	947	I-4	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	948	D-4	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ・指頭圧痕	ナデ・指頭圧痕	
	949	H-7	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ナデ	
	950	E-2	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ	ナデ	
	951	D-5	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ナデ・指頭圧痕	ケズリ	
	952	N-5	Ⅶ	暗茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ	ナデ	
	953	H-7	Ⅱ	淡茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	954	M-10	Ⅲ	茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ナデ	
	955	J-7	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ナデ・ケズリ	ナデ	
	956	D-5	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ナデ	
	957	M-7	Ⅳ	茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ	ナデ	
	958	M-8	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	ハケ目	
	959	G-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ナデ	
	960	H-5	Ⅱ	淡茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	961			茶褐色	○	○			〃	ハケ目・ナデ	ナデ	
第 116 図	962	H-5	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ナデ	
	963	H-5	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ナデ・指頭圧痕	ナデ	
	964	I-4	Ⅱ	淡茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ハケ目・ナデ	
	965	I-5	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ	ナデ	
	966	F-1	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ハケ目・ケズリ	ナデ	
	967	H-5	Ⅲ	茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ	ナデ	
	968			茶褐色	○	○	○		〃	〃	ハケ目・ナデ	
	969	F-3	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	970	L-7	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ハケ目	
	971	H-5	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	972	H-5	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	973	H-5	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目・ナデ	ナデ	
	974	D-5	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ケズリ・ナデ	
	975	G-7	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ	
	976	G-1	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	977	G-7	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	978	H-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ナデ・ケズリ	ケズリ・ナデ	
	979	H-5	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ナデ	
第 117 図	980	M-8	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ナデ・指頭圧痕	ケズリ・ナデ	
	981	H-3	Ⅱ	暗茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ	ナデ	
	982		Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ハケ目の後ナデ	ナデ	
	983	H-5	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	
	984	H-7	Ⅱ	淡茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ナデ	
	985	I-5	Ⅱ	淡茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ナデ	
	986	H-7	Ⅱ	淡茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ナデ	
	987	H-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ハケ目・ナデ	ナデ	
	988	G-1	Ⅱ	淡茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ナデ	
	989	H-5	Ⅱ	淡茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ナデ	
	990	H-7	Ⅱ	淡茶褐色	○	○			〃	〃	ハケ目	
	991	G-7	Ⅱ	淡茶褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ	
	992	G-7	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ナデ・指頭圧痕	
	993	GH-6	Ⅱ	淡茶褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ	
	994	H-2	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ハケ目	
	995	G-7	Ⅱ	淡茶褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ	
	996	I-5	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ナデ	
	997	H-6	Ⅱ	淡茶褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ	
	998	N-4	Ⅶ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	999	I-2	Ⅱ	暗茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ナデ	
	1000	G-5	Ⅲ	茶褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ	
	1001	D-4	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	1002	D-7	Ⅳ	淡茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ハケ目	
	1003	H-4	Ⅱ	淡茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	1004	H-2	Ⅱ	淡茶褐色	○	○			〃	ケズリ	ケズリ	
	1005	H-6	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	刻目突帯・ナデ	ナデ	

古墳時代土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	色 調	胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
					石英	長石	角閃石	その他				
第 117 図	1006	C-4	Ⅱ	茶褐色	○	○			良	刻目突帯・ハケ目	ハケ目	
	1007	M-8	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	刻目突帯・ナデ	ナデ	
第 118 図	1008	D-4	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ケズリ	ハケ目	
	1009	G-7	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ナデ	
	1010	H-5	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	ケズリ	ハケ目	
	1011	D-7	Ⅱ	黒茶褐色	○	○			〃	〃	ケズリ	
	1012	L-8	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ	
	1013	G-3	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	1014	D-4	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	1015	H-4	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	1016	H-6	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ナデ・ケズリ	ナデ	
	1017	H-7	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ナデ・ケズリ	ナデ	
	1018	芋穴	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ハケ目・ナデ	ナデ	
	1019	F-1	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ケズリ	ハケ目	
	1020	D-4	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ナデ・ケズリ	ケズリ・ナデ	
	1021	G-5	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ナデ	ナデ	
	1022	H-5	Ⅱ	暗茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ケズリ	
	1023	H-7	Ⅱ	淡茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目・ナデ	ナデ	
	1024		Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目・ケズリ	ケズリ・ナデ	
	1025	H-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ケズリ	ケズリ・ハケ目	
	1026	GH-6	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	1027	GH-6	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ	
	1028	M-8	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	
	1029	D-5	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ケズリ	ケズリ	
第 119 図	1030		Ⅱ	黒茶褐色	○	○			〃	ハケ目・ナデ	ナデ	
	1031	H-6	Ⅱ	茶褐色	○	○	○		〃	ミガキ	ナデ	
	1032		Ⅱ	淡茶褐色	○	○			〃	ハケ目・ケズリ	ナデ	
	1033	H-7	Ⅱ	赤褐色	○	○			〃	ミガキ	ハケ目	丹塗り
	1034	J-7	Ⅱ	赤褐色	○				〃	〃	ミガキ	丹塗り
	1035	GH	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ハケ目・ナデ	ハケ目	
	1036	C-4	Ⅱ	赤褐色	○				〃	ミガキ	ミガキ後ナデ	丹塗り
	1037	C-4	Ⅱ	赤褐色	○	○			〃	〃	ケズリ・ナデ	丹塗り
	1038	F-4	Ⅱ	赤褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	丹塗り
	1039	C-4	Ⅱ	茶褐色	○				〃	ナデ	ケズリ・ナデ	
	1040	H-7	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	〃	ケズリ・ナデ	
	1041	G-1	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ハケ目	ケズリ	
	1042		Ⅱ	赤褐色	○				〃	ミガキ後ナデ	ケズリ	丹塗り
	1043	H-7	Ⅱ	赤褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ	
	1044	H-4	Ⅱ	赤褐色	○	○	○		〃	ハケ目	ナデ	穿孔有り
	1045	H-5	Ⅱ	淡茶褐色	○	○	○		〃	ハケ目・ケズリ	ケズリ・ハケ目	穿孔有り
	1046	H-5	Ⅲ	茶褐色	○	○			〃	指頭圧痕	ナデ	手捏ね
	1047	M-8	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ	手捏ね
	1048		Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	〃	ナデ	手捏ね
	1049	H-5	Ⅲ	茶褐色	○	○			〃	指頭圧痕	ナデ	手捏ね
	1050	E-7	Ⅱ	茶褐色	○	○			〃	ケズリ	ナデ	手捏ね
	1051	E-7	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	ナデ	ナデ	手捏ね
	1052	H-5	Ⅱ	暗茶褐色	○	○			〃	ケズリ	ナデ	手捏ね

古代土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	色 調	胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
					石英	長石	角閃石	その他				
第 121 図	1054	F-1	Ⅱ	淡茶褐色	○				良	ナデ	ナデ	スス付着
	1055			茶褐色	○	○	○		〃	〃	ナデ	
	1056	I-5	Ⅱ	淡茶褐色	○				〃	〃	ナデ	
	1057	I-2	Ⅱ	淡茶褐色					〃	〃	ナデ	スス付着
	1058			黒茶褐色					〃	回転ヘラ切り	ナデ	
	1059	E-3	Ⅱ	灰色					堅緻	ナデ	ナデ	
	1060			青灰色					堅緻	格子目叩き	同心円叩き	
	1061	D-4	Ⅱ	青灰色					堅緻	〃	同心円叩き	
	1062			茶褐色					堅緻	〃	同心円・平行叩き	
	1063			青灰色					堅緻	〃	同心円・平行叩き	
	1064			灰色					堅緻	〃	同心円・平行叩き	

9 古代の調査

古代はⅡ層中より遺物が若干出土したのみである。

(1) 遺構

古代の遺構は検出されなかった。

(2) 遺物 (第121図)

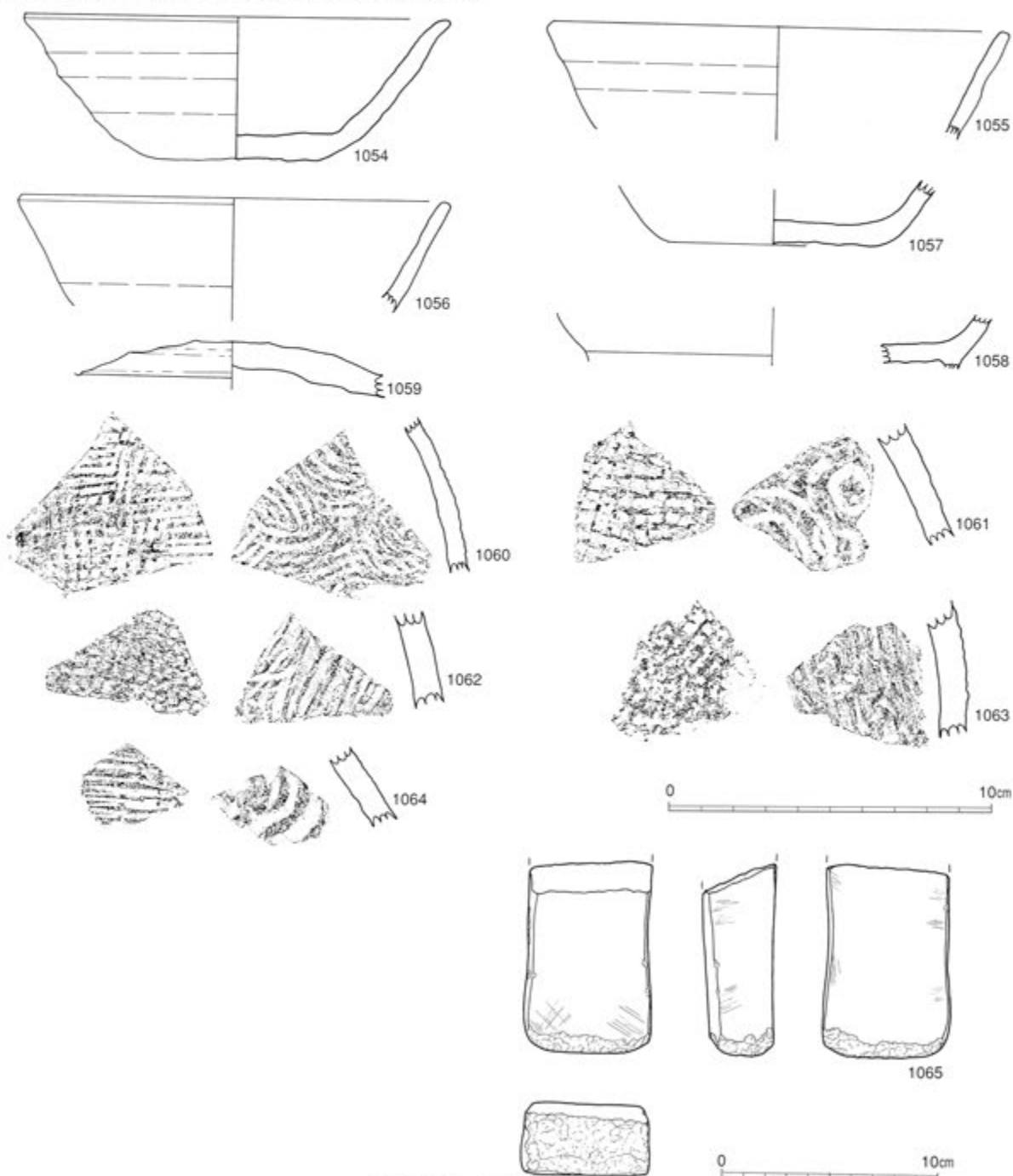
遺物は土師器4点、須恵器7点、砥石1点が出土したのみである。

1054～1057は土師器の坏である。1054は口縁部径13.2cm、器高2.5cmを測るものである。外方へ直線的に立ち上がり、口縁部端部近くでわずかに外反する。1055は口縁部径14.4cm、1056は口縁部径13.4cmを測る。

1058～1064は須恵器。1058は高台を有する坏である。1059は蓋坏で回転ヘラ切りが明瞭に残る天井部である。1060～1064は甕。いずれも外面は格子目タタキで、内面は同心円タタキ (1060・1061・1064) と平行タタキ (1062・1063) が認められる。

1065は砂岩製の砥石である。幅3.8cmであるが、欠損しているため全長はあきらかではない。表裏・両側面の4面が作業面で細かな擦痕が観察される。

また、下面には敲打痕が明瞭に残り、叩き石としての機能も考えられるものである。



第121図 古代出土遺物 1

10 中世の調査（第122図）

中世では遺物は少なく、図化できるものはなかったが、遺構は掘立柱建物跡、溝状遺構が検出されている。

（1）遺構（掘立柱建物跡）（第123～131図）

D区でまとまって4棟（5・7～9号）、H区で東西に幅広く5棟（1～4・6号）、全体で9棟の掘立柱建物跡が検出された。3号は一部が調査区外に延びるため全体の把握はできなかった。また、1号・3号・6号・8号・9号は建物規模は1間×3間であるが、棟部の1間が2間分の距離があるため2間×3間と同様としてとらえることにした。なお、文中の数値はすべて平均値で小数第1位を四捨五入して表している。

1号掘立柱建物跡（第123図）

H－4区で検出された。建物規模は2間×3間（約429cm×約650cm）で主軸は南北方向で西側に庇をもつ。建物の棟部の柱穴径は約26cm、深さは約44cmを測り、庇部分の柱穴径は約19cm、深さは約28cmを測るがいずれも一定ではない。

2号掘立柱建物跡（第124図）

H－3区で検出された。建物規模は1間×1間（約125cm×約228cm）で主軸は東西方向である。柱穴径は約19.5cm、深さは約34cmを測るが一定ではない。

3号掘立柱建物跡（第125図）

H－1区で検出されたが、調査区外に広がるものである。建物規模は2間×3間（約440cm×約632cm）と思われ主軸は東西方向で南側に庇をもつ。建物の棟部の柱穴径は約24cm、深さは約48cmを測り、庇部分の柱穴径は約14cm、深さは約21cmを測るがいずれも一定ではない。柱穴の埋土は柔らかい黒色土が主体で、アカホヤが点在しているものもあった。

4号掘立柱建物跡（第126図）

H－2区（一部H－3区）で検出された。建物規模は2間×3間（約408cm×約653cm）で主軸は東西方向である。南側に庇をもつ。建物の棟部の柱穴径は約27cm、深さは約36cmを測り、庇部分の柱穴径は約16cm、深さは約11cmを測るがいずれも一定ではない。

5号掘立柱建物跡（第127図）

D－5区で検出された。建物規模は2間×3間（約

362cm×約617cm）で西側の柱穴がないことから西側が入り口だった可能性もある。主軸は東西方向で4面の庇をもつ。建物の棟部の柱穴径は約35cm、深さは約29cmを測り、庇部分の柱穴径は約27cm、深さは約22cmを測るが一定ではない。

6号掘立柱建物跡（第128図）

H－5区で検出された。建物規模は2間×3間（約438cm×約687cm）で主軸はほぼ南北方向である。柱穴径は約26cm、深さは約44cmを測るが一定ではない。

7号掘立柱建物跡（第129図）

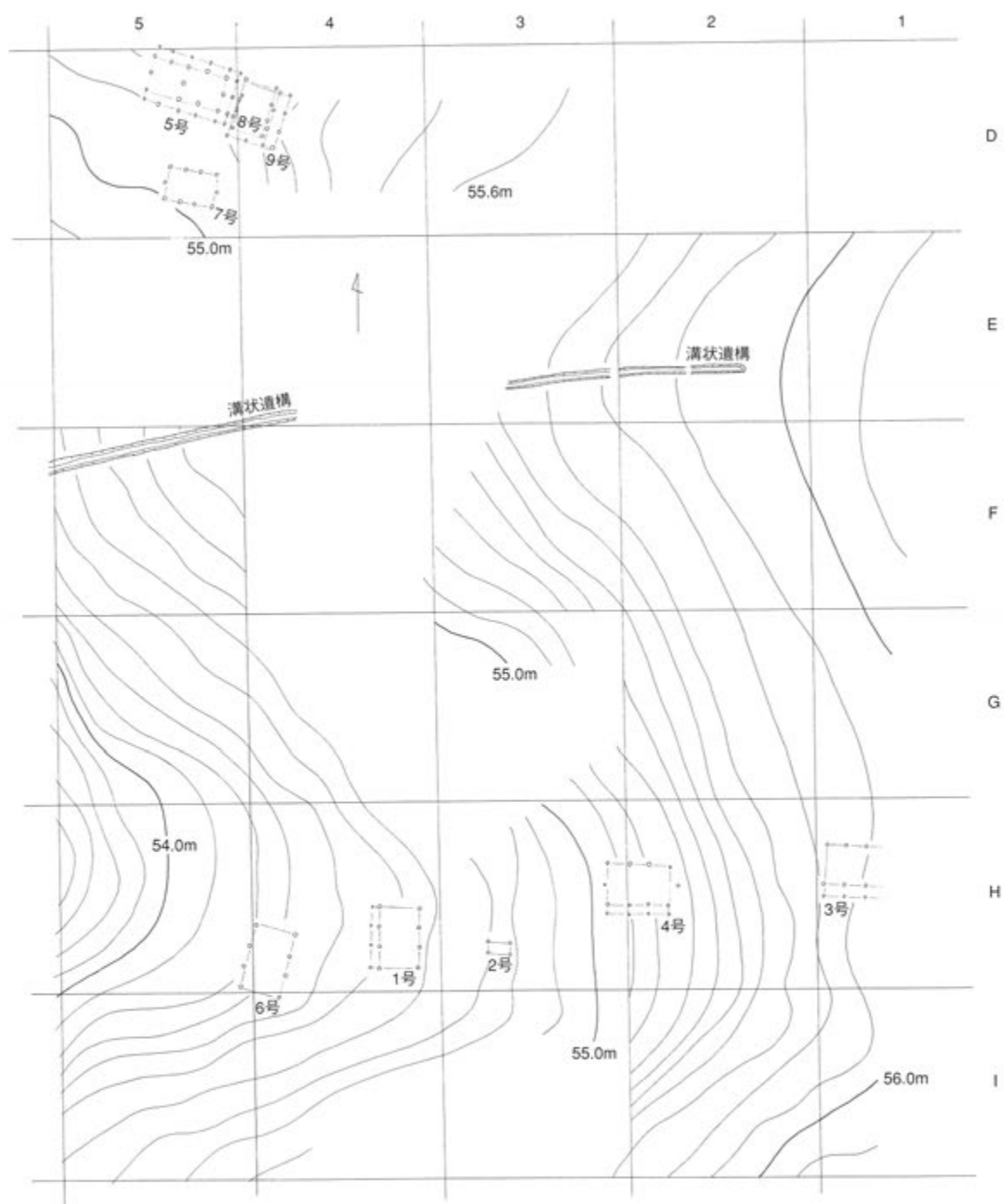
D－5区で検出された。建物規模は2間×3間（約347cm×約506cm）で主軸はほぼ東西方向である。柱穴径は約30cm、深さは約35cmを測るが一定ではない。

8号掘立柱建物跡（第130図）

H－4～5区で検出された。建物規模は2間×3間（約335cm×約529cm）で主軸は南北方向である。9号掘立柱建物跡とほぼ重なるように検出された。柱穴が9号掘立柱建物跡の柱穴によって切られているので9号掘立柱建物跡に先行する建物である。柱穴径は約30cm、深さは約38cmを測るが一定ではない。柱穴の埋土は黒褐色の弱い粘質土が主体で、他層の土や薩摩パミスが混在しているものもあった。

9号掘立柱建物跡（第131図）

H－4～5区で検出された。建物規模は2間×3間（約393cm×約595cm）で主軸は南北方向である。東側に庇をもつ。8号掘立柱建物跡とほぼ重なるように検出されたが8号掘立柱建物跡より庇の分だけ大きく、柱穴の切り合いから時期も新しいことがうかがえる。建物の棟部の柱穴径は約32cm、深さは約51cmを測り、庇部分の柱穴径は約26cm、深さは約54cmを測るがいずれも一定ではない。柱穴の埋土は8号掘立柱建物跡とほぼ同様であった。

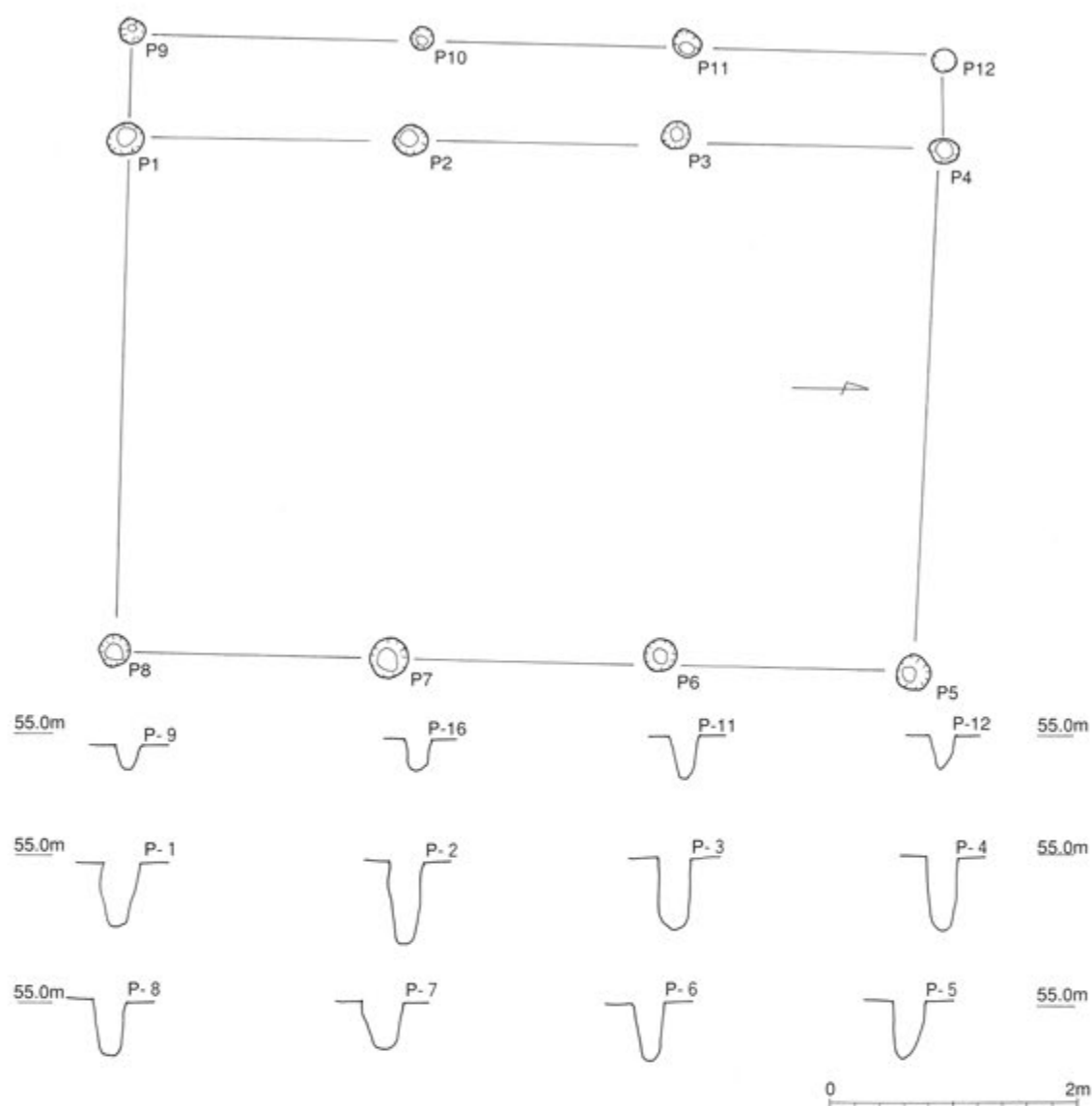


第122図 中世遺構配置図（掘立柱建物跡1～9号、溝状遺構）

溝状遺構（第132図）

溝状遺構はF-5区・E-4区及びE-2・3区の2か所において検出されたものであるが、本来は1条の溝と思われる。ほぼ東西方向に向かい中間の未調査部分を含めて約70mを検出した。また、調査区外へも延びるものと思われる。幅100cm、深さ15cmの浅い溝

である。ただ、上面が削平を受けているため実際はもっと深いと思われる。掘立柱建物跡の群が1～4・6号と5・7～9号とに分かれているが、溝はその間を横切る形で存在しており、なんらかの関連があるものと思われる。

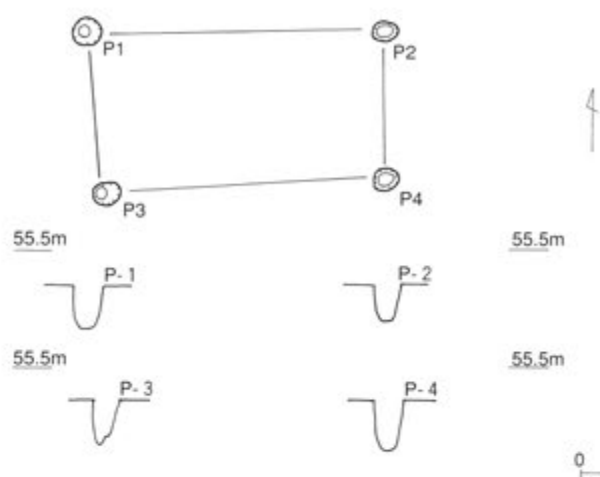


第123図 1号掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡柱穴計測表・柱穴芯芯間距離計測表

	柱穴番号	径 (cm)	深さ (cm)
棟 部	1	27.0	54.0
	2	27.0	66.0
	3	22.5	57.0
	4	24.0	60.0
	5	27.0	48.0
	6	24.0	45.0
	7	36.0	39.0
	8	24.0	45.0
庇部分	9	18.0	21.0
	10	18.0	27.0
	11	21.0	36.0
	12	19.5	27.0

	柱穴芯芯間	距離 (cm)
棟 部	1 ~ 2	228.0
	2 ~ 3	214.5
	3 ~ 4	217.5
	1 ~ 4	660.0
	5 ~ 6	201.0
	6 ~ 7	219.0
	7 ~ 8	219.0
	5 ~ 8	639.0
	1 ~ 8	424.5
	4 ~ 5	433.5
庇部分	9 ~ 10	231.0
	10 ~ 11	213.0
	11 ~ 12	210.0
	9 ~ 12	654.0



2号掘立柱建物跡柱穴計測表・
柱穴芯芯間距離計測表

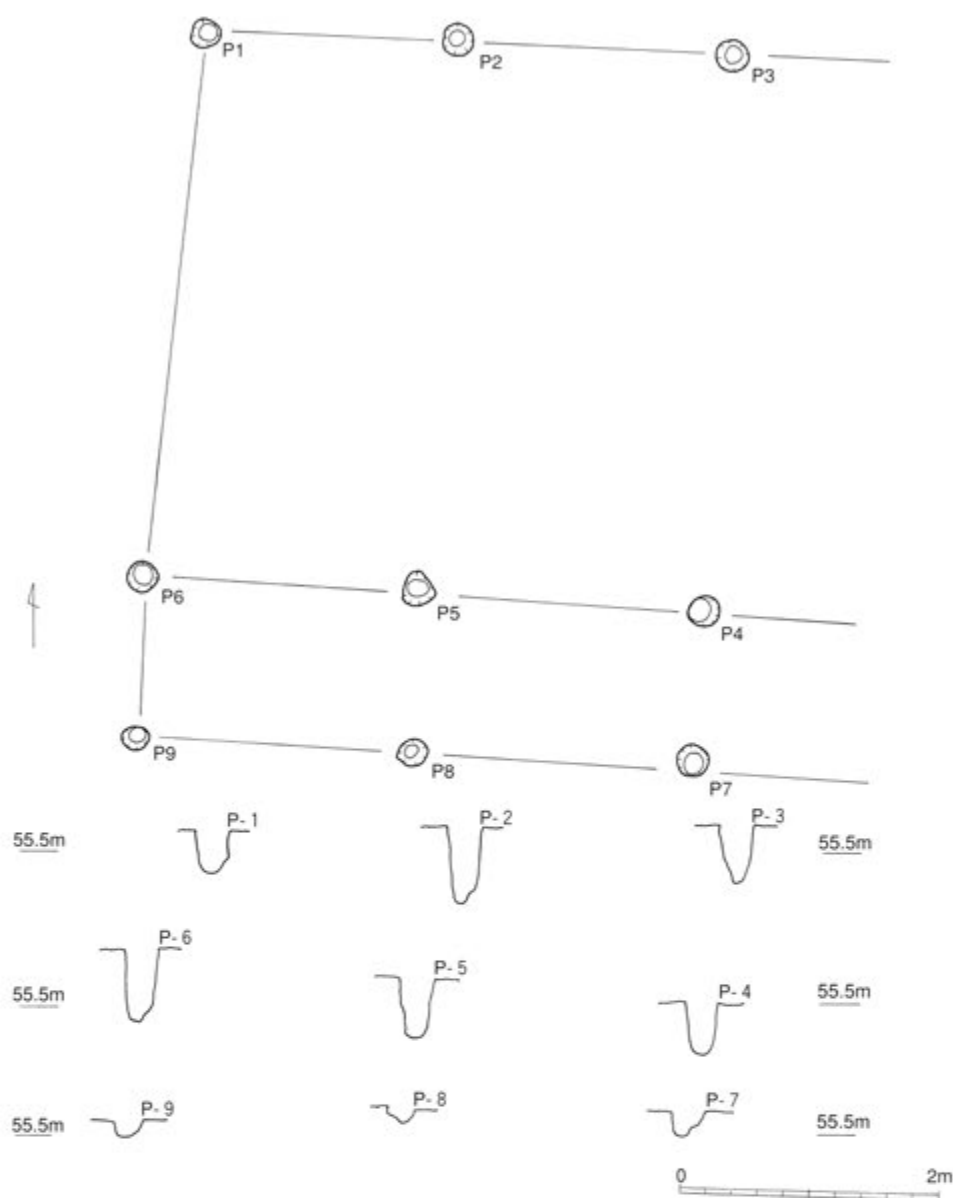
柱穴番号	径 (cm)	深さ (cm)
1	21.0	33.0
2	18.0	19.5
3	18.0	39.0
4	21.0	33.0
柱穴芯芯間		距離 (cm)
1 ~ 2		234.0
2 ~ 3		120.0
3 ~ 4		222.0
1 ~ 4		129.0

第124図 2号掘立柱建物跡

5号掘立柱建物跡柱穴計測表・柱穴芯芯間距離計測表

	柱穴番号	径 (cm)	深さ (cm)
棟 部	1	36.0	42.0
	2	33.0	37.5
	3	45.0	42.0
	4	55.5	33.0
	5	27.0	30.0
	6	33.0	36.0
	7	21.0	30.0
	8	42.0	27.0
	9	24.0	30.0
	10	42.0	37.5
庇部分	11	24.0	21.0
	12	22.5	24.0
	13	21.0	15.0
	14	30.0	12.0
	15	33.0	16.5
	16	36.0	30.0
	17	30.0	36.0
	18	24.0	24.0
	19	24.0	24.0
	20	24.0	10.5
	21	30.0	15.0
	22	29.0	19.5
	23	27.0	15.0
	24	27.0	21.0
	25	24.0	24.0
	26	27.0	27.0
	27	21.0	27.0
	28	24.0	21.0

	柱穴芯芯間	距離 (cm)
棟 部	1 ~ 2	195.0
	2 ~ 3	202.5
	3 ~ 4	219.0
	1 ~ 4	616.5
	6 ~ 7	213.0
	7 ~ 8	213.0
	8 ~ 9	192.0
	6 ~ 9	618.0
	2 ~ 10	180.0
	10 ~ 8	187.0
庇部分	4 ~ 5	178.5
	5 ~ 6	183.0
	4 ~ 6	361.5
	11 ~ 12	156.0
	12 ~ 13	213.0
	13 ~ 14	204.0
	14 ~ 15	213.0
	15 ~ 16	127.5
	11 ~ 16	913.5
	16 ~ 17	99.0
	17 ~ 18	184.5
	18 ~ 19	187.5
	19 ~ 20	105.0
	16 ~ 20	576.0
	20 ~ 21	103.5
	21 ~ 22	216.0
	22 ~ 23	192.0
	23 ~ 24	220.5
	24 ~ 25	159.0
	20 ~ 25	891.0
	25 ~ 26	102.0
	26 ~ 27	202.5
	27 ~ 28	187.0
	28 ~ 11	108.0
	25 ~ 11	601.5

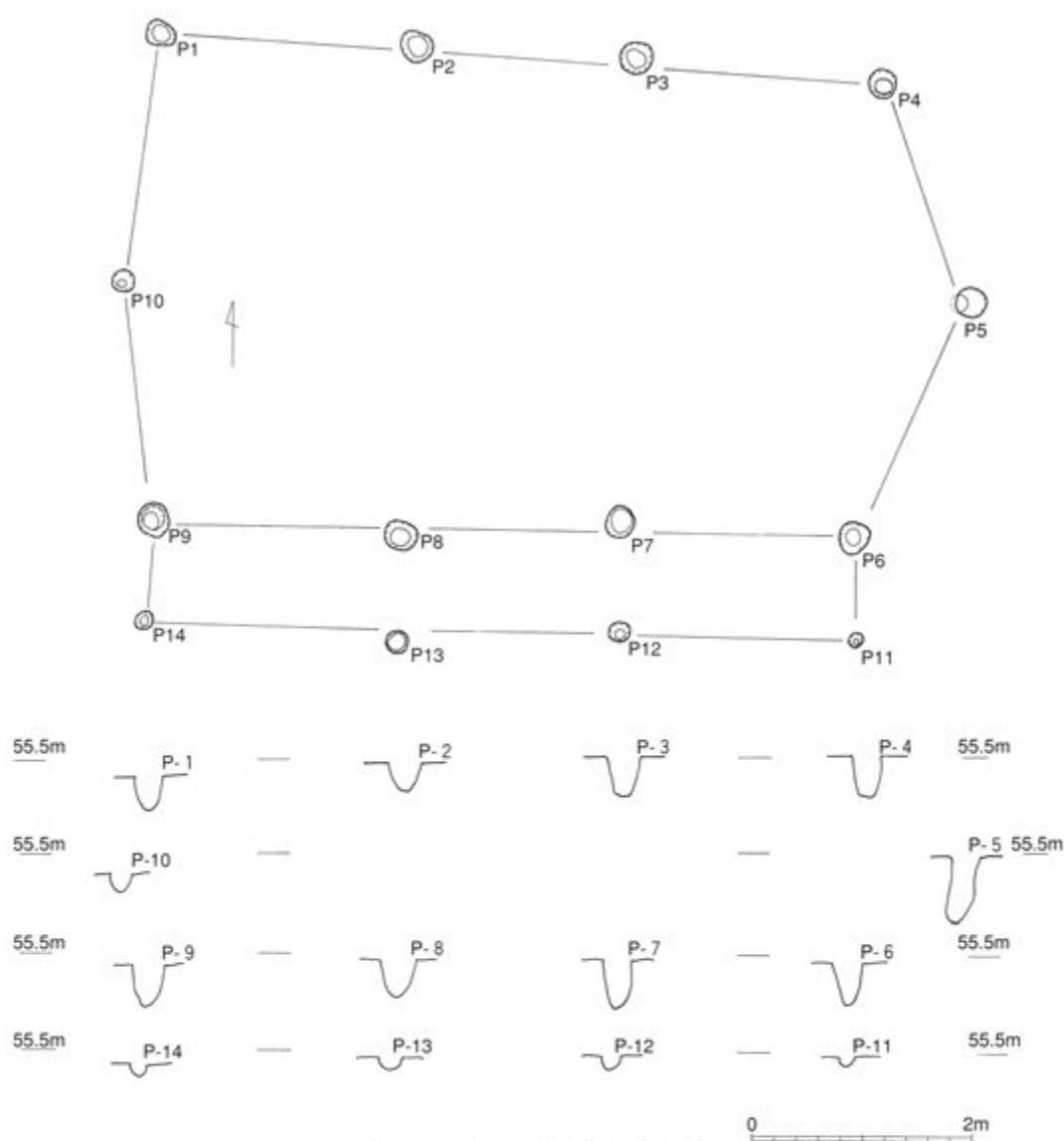


第125図 3号掘立柱建物跡

3号掘立柱建物跡柱穴計測表・柱穴芯芯間距離計測表

	柱穴番号	径 (cm)	深さ (cm)
棟 部	1	24.0	33.0
	2	24.0	63.0
	3	25.5	46.5
	4	24.0	39.0
	5	24.0	45.0
	6	24.0	60.0
底部分	7	24.0	18.0
	8	21.0	12.0
	9	21.0	12.0

	柱穴芯芯間	距離 (cm)
棟 部	1 ~ 2	192.0
	2 ~ 3	217.5
	1 ~ 3	409.5
	4 ~ 5	220.5
	5 ~ 6	213.0
	4 ~ 6	433.5
	1 ~ 6	435.0
	3 ~ 4	444.0
底部分	7 ~ 8	220.5
	8 ~ 9	211.5
	7 ~ 9	432.0

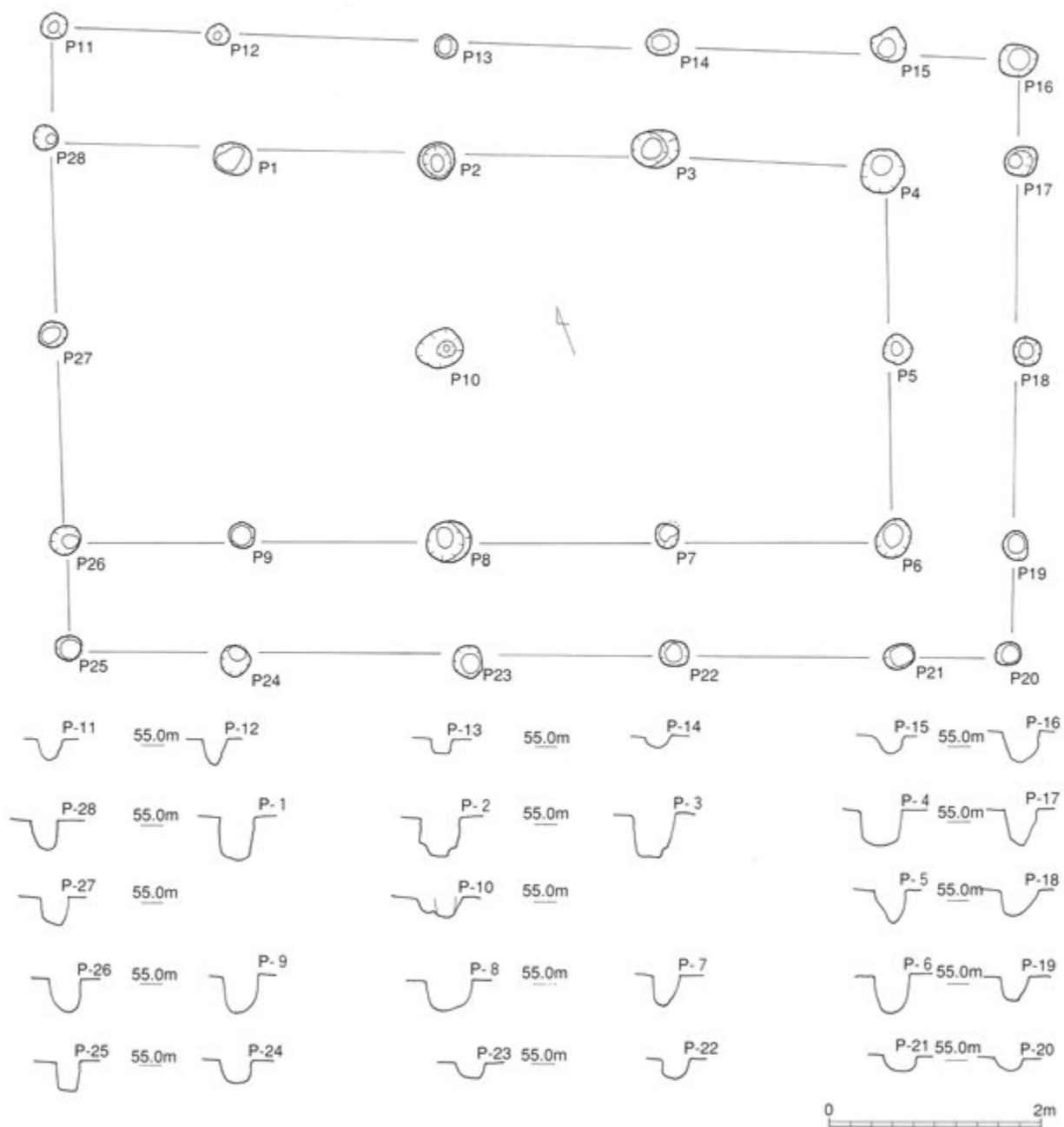


第126図 4号掘立柱建物跡

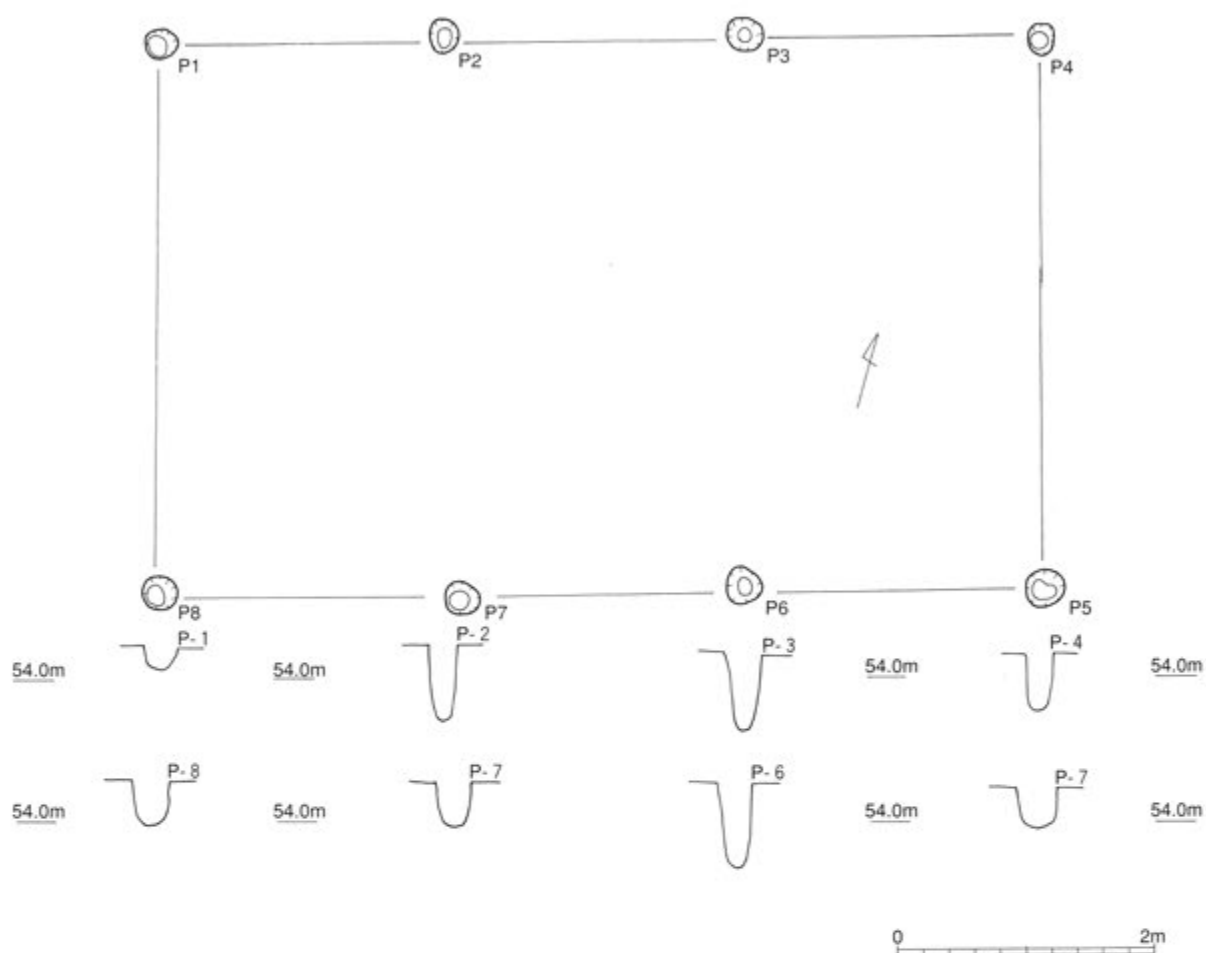
4号掘立柱建物跡柱穴計測表・柱穴芯芯間距離計測表

	柱穴番号	径 (cm)	深さ (cm)
棟 部	1	27.0	30.0
	2	30.0	24.0
	3	30.0	36.0
	4	24.0	37.5
	5	27.0	60.0
	6	24.0	39.0
	7	27.0	45.0
	8	30.0	36.0
	9	30.0	39.0
	10	21.0	15.0
底部分	11	12.0	9.0
	12	18.0	12.0
	13	19.5	12.0
	14	15.0	12.0

	柱穴芯芯間	距離 (cm)
棟 部	1 ~ 2	234.0
	2 ~ 3	198.0
	3 ~ 4	225.0
	1 ~ 4	657.0
	6 ~ 7	211.5
	7 ~ 8	201.0
	8 ~ 9	228.0
	6 ~ 9	640.5
	1 ~ 10	237.0
	10 ~ 9	237.0
	1 ~ 9	454.5
	4 ~ 5	214.5
	5 ~ 6	240.0
	4 ~ 6	421.5
底部分	11 ~ 12	216.0
	12 ~ 13	202.5
	13 ~ 14	231.0
	11 ~ 14	649.5



第127图 5号掘立柱建物跡

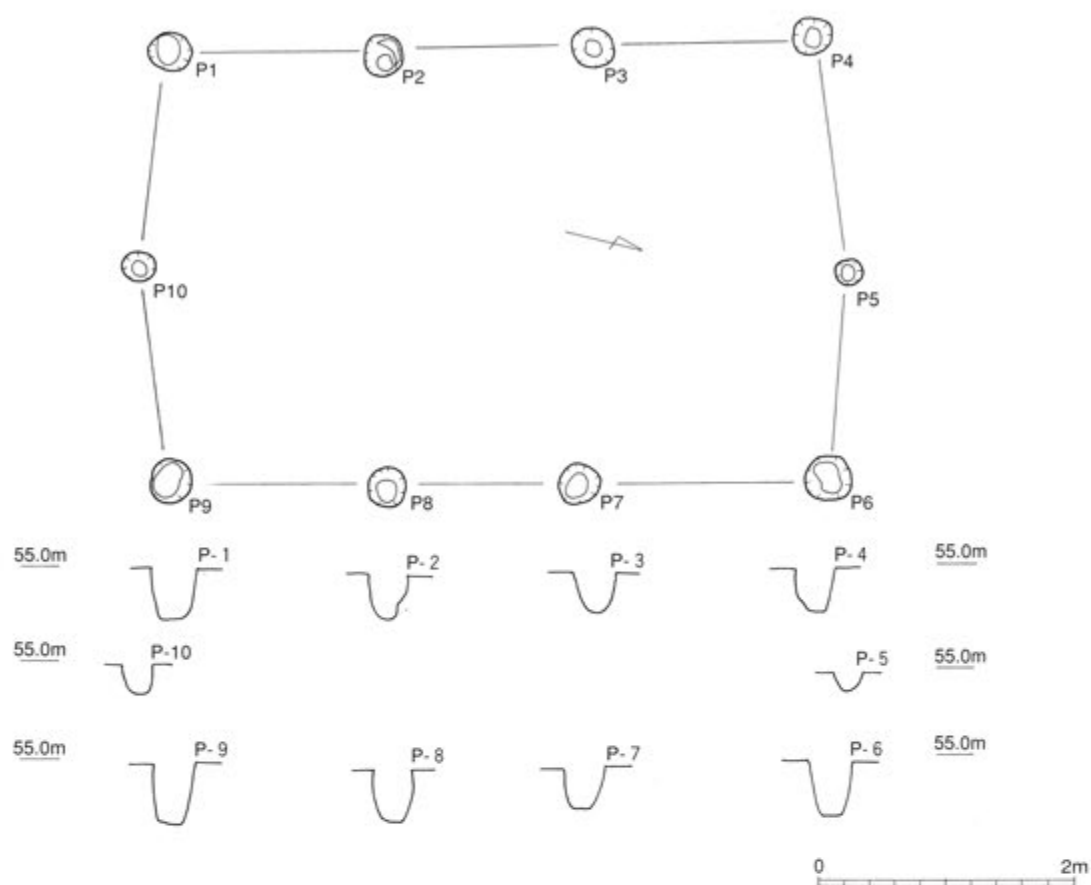


第128図 6号掘立住建物跡

6号掘立柱建物跡柱穴計測表・柱穴芯芯間距離計測表

柱穴番号	径 (cm)	深さ (cm)
1	24.0	18.0
2	21.0	60.0
3	30.0	63.0
4	21.0	45.0
5	30.0	31.5
6	27.0	66.0
7	27.0	36.0
8	27.0	33.0

柱穴芯芯間	距離 (cm)
1-2	222.0
2-3	234.0
3-4	228.0
1-4	684.0
5-6	232.5
6-7	222.0
7-8	235.5
5-8	690.0
1-8	438.0
4-5	438.0

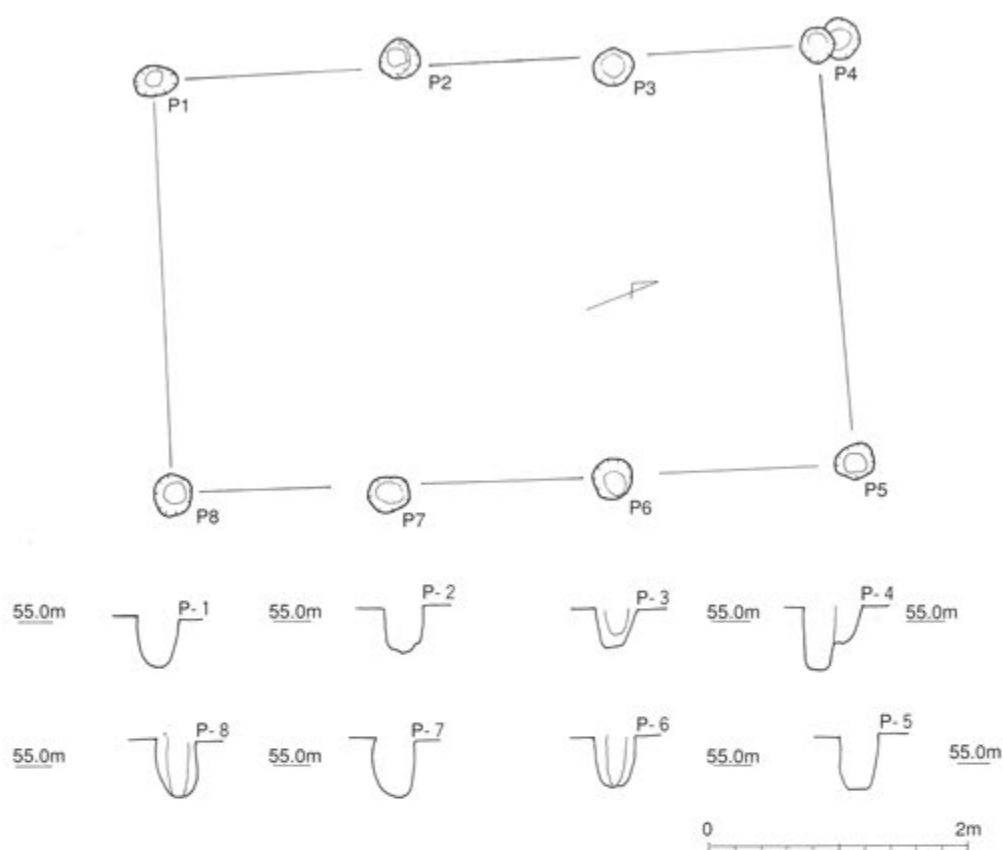


第129図 7号掘立柱建物跡

7号掘立柱建物跡柱穴計測表・柱穴芯芯間距離計測表

柱穴番号	径 (cm)	深さ (cm)
1	33.0	40.5
2	30.0	36.0
3	33.0	30.0
4	30.0	33.0
5	21.0	13.5
6	36.0	43.5
7	33.0	33.0
8	30.0	39.0
9	30.0	45.0
10	24.0	24.0

柱穴芯芯間	距離 (cm)
1-2	169.5
2-3	160.5
3-4	169.5
1-4	499.5
6-7	195.0
7-8	147.0
8-9	171.0
6-9	513.0
1-10	174.0
10-9	171.0
1-9	343.5
4-5	189.0
5-6	162.0
4-6	349.5

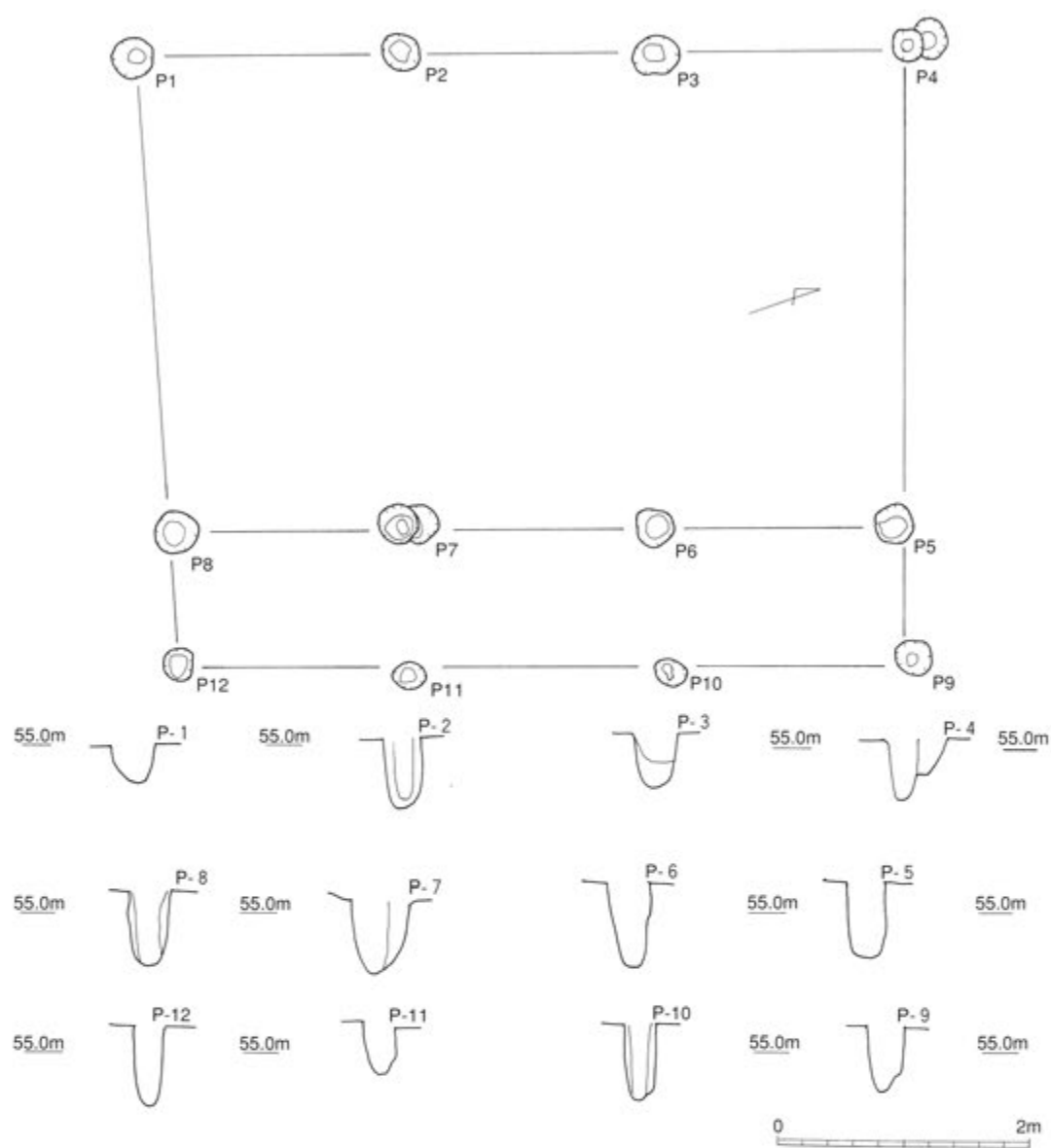


第130図 8号掘立柱建物跡

8号掘立柱建物跡柱穴計測表・柱穴芯芯間距離計測表

柱穴番号	径 (cm)	深さ (cm)
1	33.0	36.0
2	36.0	30.0
3	30.0	31.5
4	27.0	27.0
5	30.0	42.0
6	30.0	39.0
7	30.0	48.0
8	30.0	45.0

柱穴芯芯間	距離 (cm)
1-2	187.5
2-3	166.5
3-4	175.5
1-4	529.5
5-6	186.0
6-7	175.5
7-8	166.5
5-8	528.0
1-8	330.0
4-5	339.0

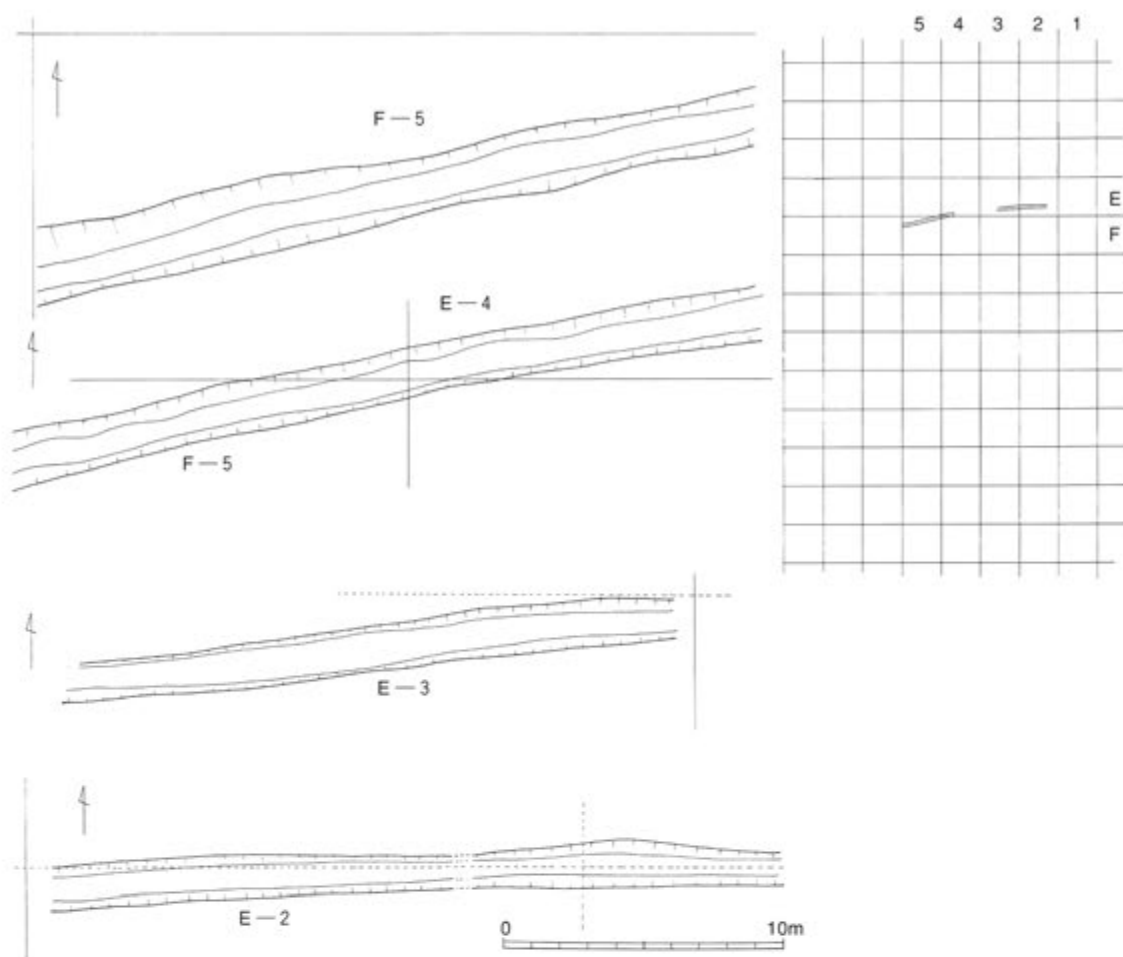


第131図 9号掘立柱建物跡

9号掘立柱建物跡柱穴計測表・柱穴芯芯間距離計測表

	柱穴番号	径 (cm)	深さ (cm)
棟 部	1	33.0	30.0
	2	27.0	55.5
	3	36.0	42.0
	4	24.0	48.0
	5	28.5	60.0
	6	28.5	67.3
	7	45.0	58.5
	8	36.0	61.5
底部分	9	28.5	52.5
	10	25.5	63.0
	11	24.0	36.0
	12	24.0	64.5

	柱穴芯芯間	距離 (cm)
棟 部	1-2	210.0
	2-3	202.5
	3-4	201.0
	1-4	613.5
	5-6	189.0
	6-7	204.0
	7-8	183.0
	5-8	576.0
	1-8	390.0
	4-5	396.0
底部分	9-10	195.0
	10-11	208.5
	11-12	183.0
	9-12	586.5



第132図 中世溝状遺構配置図

第3節 小結

小中原遺跡においては、旧石器時代から中世までの長期間にわたる人々の営みが続いていたことが瞭かになった。

縄文時代の土器は早期から晩期まで14類に分類された。Ⅰ類～Ⅶ類までは早期、Ⅷ類～Ⅺ類は前期、Ⅻ・Ⅼ類は後期、Ⅽ類は晩期である。Ⅰa類土器は前平式土器である。Ⅰb類は器形、貝殻条痕等はⅠa類とほぼ同様であるが、胴部の貝殻条痕の上から沈線文を施すものである。Ⅰc類は加栗山遺跡を標識遺跡とする加栗山式とされるものである。Ⅰb類は前平式と加栗山式¹⁾の中間に位置するものではないかと思われるものである。加世田市志風頭遺跡を標識遺跡として志風頭式とする意見²⁾があるが、松元町前原遺跡においてこのタイプの土器が数多く出土しており今後の類例資料の増加と研究が待たれる。

また、角筒土器は2重施文を主とするものでⅠb・

c類に伴うものではないかと考えられる。Ⅱ類土器は吉田式土器。Ⅲ類土器は石坂式土器。Ⅳ類土器は桑ノ丸式土器。Ⅴ類土器は押型文土器。Ⅵ類土器は右京西タイプ。Ⅶ類土器は平栴式土器。Ⅷ類土器は塞ノ神式土器。Ⅸ類土器は深浦式土器。Ⅹ類土器は轟式土器。Ⅺ類土器は形式が不明のものである。Ⅻ類土器は指宿式土器。317は色調がピンク色を呈し堅緻な焼成という特徴をもち、指宿地域で出土するものと近似している。当地域と指宿地域の関連が窺える資料である。Ⅼ類土器は市来式土器。Ⅽ類土器は縄文晩期の土器である。近年の研究においては、これまで晩期前半に比定されていた土器を後期とする傾向もあるが、ここでは従来の編年観によることとする。Ⅽ類土器は粗製深鉢形土器と精製浅鉢形土器があるが、共にa類・b類に細分される。Ⅽa類は上加世田式土器、Ⅽb類は入佐式土器に比定されるものと思われる。

弥生時代は、中期の土器が散布状況で出土し、量も

多くはない。中期前葉の入来式土器・後半の山之口式土器等が主である。581・586・597は熊本県を中心に分布する黒髪式土器と思われる。また、磨製石鏃と鹿児島県では希少な磨製石剣の破片(640)も出土している。

古墳時代は、住居跡7基、土器溜り1か所、土坑9基が検出され、土器も多く出土する。土器溜りは甕形土器が大半で脚付鉢形土器・壺形土器等が集中して出土しているものである。甕形土器の特徴は口縁部がくの字状に外反し、頸部のくびれ部から口縁部へのハケ目によるカキ上げ技法が見られる点、口縁部内面の稜線が明瞭でなくなだらかなものが多い点、器壁がざらついて、ひび割れのような状況を呈する点等が上げられる。これらの特徴から、金峰町中津野遺跡を標識遺跡とする中津野式土器に比定されるものである。中津野式土器は南九州における弥生時代終末から古墳時代の土器様式である成川式土器に包括されていたものであるが、近年の研究による成川式の細分が進み、中津野式を弥生時代後期の松木蘭式に後続する弥生時代終末とする³⁾見解が主流を占めているようである。しかしながら、中村直子氏が弥生時代終末として捉えている中津野式においても細分が可能ではないかと考えられる。結論から述べると、中津野式とされている土器群が弥生時代終末のものと古墳時代初頭のものとに区分されると考えられる。甕形土器で見ると口縁部がくの字状に外反し、内面に明瞭な稜線が認められるもので安国寺式土器を伴うこともある一群は弥生時代の範疇と考えられるが、口縁部の外反が弱くなり内面の稜線も明瞭でなくなだらかなものは古墳時代の範疇に入るものではないかと考えられる。後者は中津野遺跡出土の土器群に代表されるもので、器種も増加する傾向にある。本遺跡の土器溜り出土の土器群も後者に入るもので古墳時代初頭に位置付けたい。

住居跡は、7基が検出されている。その中で特筆されるのは4号住居跡である。住居跡内からは大量の土器が出土し完形土器も多かった。その中には坏蓋、高坏、甕の須恵器3点が見られる。これらの須恵器は須恵Ⅰ式の範疇に入るもので5世紀前半頃の時期が考えられるものである。また、須恵器の生産地は大阪府堺市にある陶邑古窯跡群が有力であるが、近年各地で初期須恵器の生産地が発見され一概に陶邑と決めかねる状況になっている。愛媛県市場南組古窯跡群⁶⁾等も視野に入れながら検討をする必要がある。しかしながら、4号住居跡内の一括土器における成川式の年代観がつかめたことは今後の成川式土器の研究に大いに役立つものと思われる。4号住居跡出土の甕形土器は胴部上位の最大径の位置にすれ違い突帯を巡らし、口縁部は内弯し、端部で短く外反する特徴をもつものと、

口縁部が直行するものがあるが、中村直子氏の編年によると辻堂原式⁵⁾に近いものである。つまり辻堂原式の年代が5世紀前半に位置付けられるものと考えられる。また、成川式特有の上げ底の脚台を有しない丸底の甕形土器が多い点も特筆されるものである。

本遺跡の竪穴住居跡群についてみると、2号・5号・6号住居跡の甕形土器は口縁部が外反し、内面に稜線を有するもので中村の編年による東原式¹⁾に近いものである。このことから、2号・5号・6号が先行し、1号・3号・4号住居跡が後出するものと思われる。7号については、出土土器が小破片であり時期判定ができないものである。

中世においては、溝状遺構と掘立柱建物跡9棟が検出されているが、伴う遺物が少ないために時期判定は困難である。ただ、農業開発総合センター遺跡群内には同様の掘立柱建物跡群があり、それらとの関連性から中世に位置づけられるものである。今後整理作業が進むことにより古里遺跡・馬塚松遺跡・諏訪牟田遺跡・諏訪脇遺跡・宗円堀遺跡・市堀遺跡等の中世集落との関連があきらかになるものと思われる。

註

- 1) 前迫亮一 1993「倉園B遺跡の再検討」『南九州縄文通信』No.7 南九州縄文研究会
- 2) 上杉彰紀 2000「調整方法から見た縄文早期貝殻文土器」『南九州縄文通信』No.14 南九州縄文研究会
- 3) 平成3年～8年鹿児島県教育委員会で調査、現在鹿児島県立埋蔵文化財センターにおいて整理作業中
- 4) 清田純一 1998「縄文後・晩期考」『肥後考古』第11号 肥後考古学会
- 5) 中村直子 1993「中津野式土器に表れる地域色」『鹿児島考古』第27号 鹿児島県考古学会
- 6) 三吉秀充 2002「伊予出土の陶質土器と市場南組窯系須恵器をめぐって」『第2回愛媛大学考古学研究室公開シンポジウム発表資料』愛媛大学考古学研究室

第Ⅷ章 馬廻遺跡

第1節 調査の概要

1 遺跡の立地及び調査概要

馬廻遺跡は吹上町入来に所在する。平成10年度に確認調査、平成12年9月に本調査を実施した。

遺跡は吹上町と金峰町の境界に近い所にある。南側の小高い丘（標高65m）から北側へ緩やかに延びる標高約50mの平坦面に立地する。遺跡の西側・南側・北側の三方は比高差20～35mの谷が入り込んでいる。また、北側には急傾斜地を挟んで標高約70mの台地が広がっている。この台地に窪見ノ上遺跡が存在する。

調査は一辺20mのグリッドを設けて実施した。層位は、Ⅰ層からⅩ層まで基本的な土層であるが、丘陵の南側の大半は表土の下がすぐにⅪ層の岩盤（熔結凝入岩）で遺物包含層は削除されている状況であった。遺物は縄文時代早期の石坂式土器・桑ノ丸式土器・押型文土器等が出土している。

2 遺構

遺構は検出されなかった。

3 遺物

遺物は縄文時代早期・前期・晩期、弥生時代中期、古墳時代と幅が広い時期のものが出土しているが、遺物の量は少ない。大半が縄文時代早期の遺物で、弥生時代・古墳時代のものは1点ずつである。

（1）縄文時代

土器（第6図～第7図）

縄文時代早期では、石坂式土器、下剥峯式土器、桑ノ丸式土器、押型文土器が見られる。

1は石坂式土器のほぼ完形土器である。口縁部径27.5cmを測るものである。平底の底部から直線的に立ち上がり、口縁部には穿孔を持つ1対の突起を有する。口縁部には貝殻腹縁による刺突文を綾杉状に施し、やや丸みを帯びた口唇部にはキザミ目が見られる。胴部には綾杉文様を意識した貝殻条痕文が施されるがやや乱れている。

2は桑ノ丸式土器である。復元口縁部径26.8cm、復元底部径14.4cm、器高28cmを測る。

分厚い平底から直線的に立ち上がった胴部が口縁部近くでわずかに内弯するものである。口唇部は平坦ではないがやや内傾する。外面にはクシ状の施文具で羽状の沈線文を描いてある。施文具は3本のクシを手で束ねた状態で、クシ歯状の規則性はない。現況で8段の施文帯がある。口縁部下位には焼成前の貫通しない穴が認められる。

3～9は押型文土器である。いずれも楕円押型文を施すもので3～5は口縁内面にも押型文が施される。

10～12は貝殻腹縁による刺突文を施す下剥峯式土器である。いずれも小破片で全体形状はつかめないが横位の刺突文を疎に施すものである。

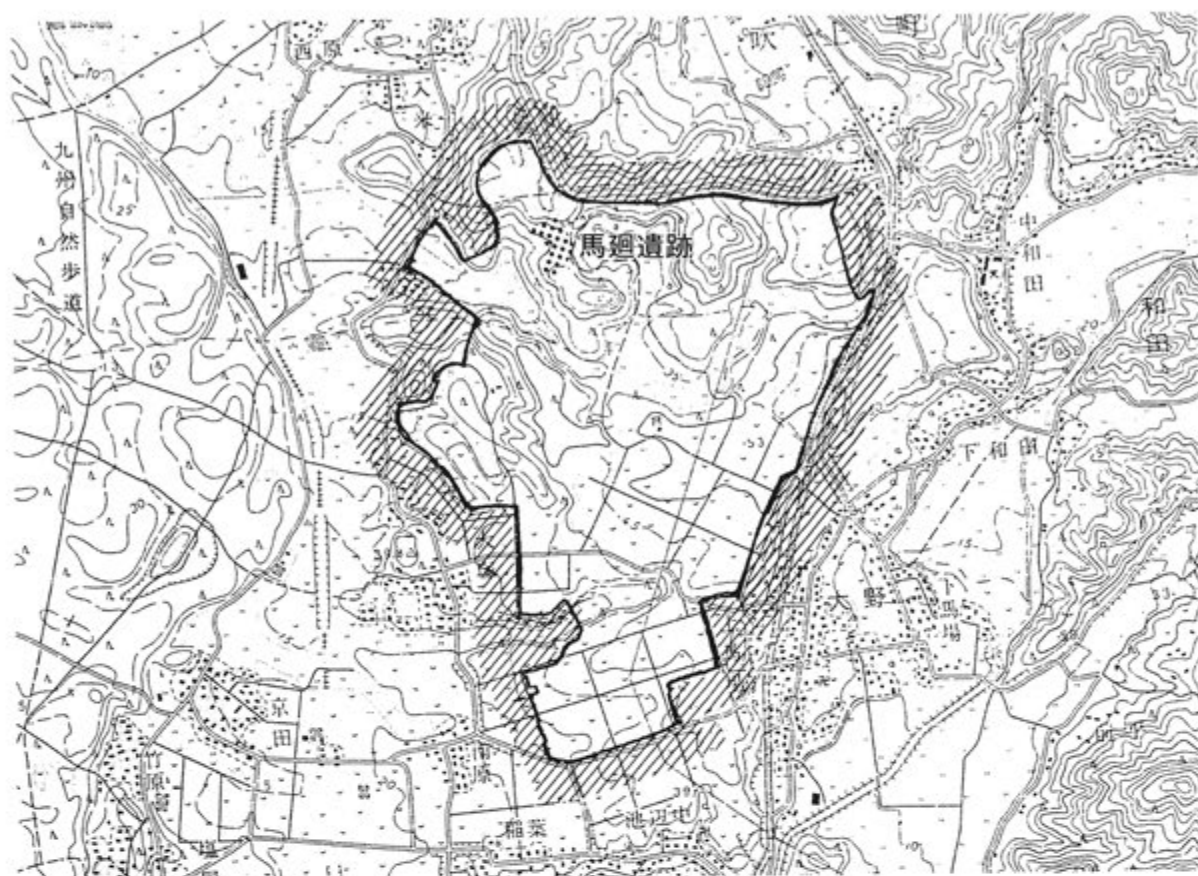
18～22は縄文時代晩期の深鉢形土器である。18は直行する口縁部である。19・20は胴部でやや屈曲するものである。20・21は器外面に条痕が認められる。22は研磨されたものであるが、「まり」の可能性もある。

石器（第8図）

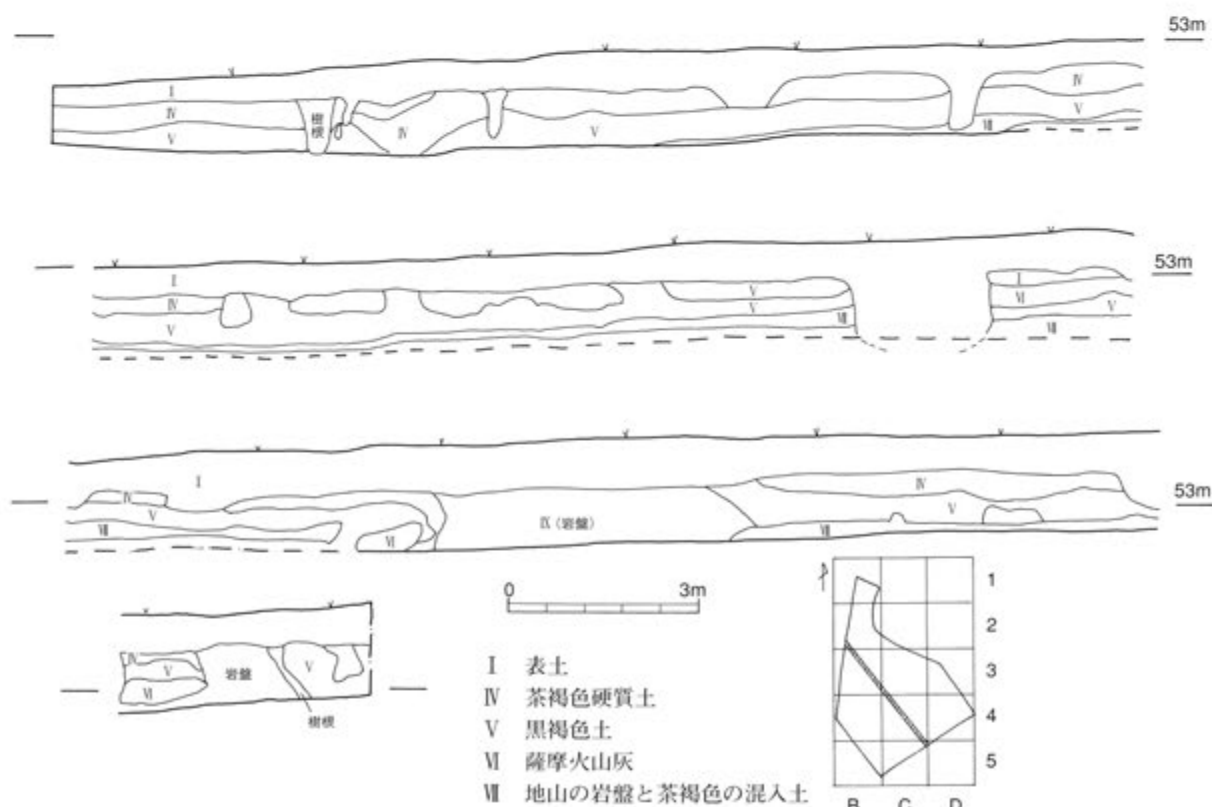
石器は3点が出土している。24は打製石斧の基部で一部に自然面を残す。25・26は磨石である。25は両面を作業面としているが、片面には擦痕が明瞭に認められる。また、側縁には敲打痕が見られる。26も両面を作業面とし、片面・側縁に敲打痕が見られる。

（2）弥生時代（第7図）

弥生時代の遺物は1点だけである。23は復元口縁部径20.6cmを測る甕形土器である。口縁部は逆L字状に外反するもので、内面が鋤先状に突出する。弥生時代中期のものと思われる。



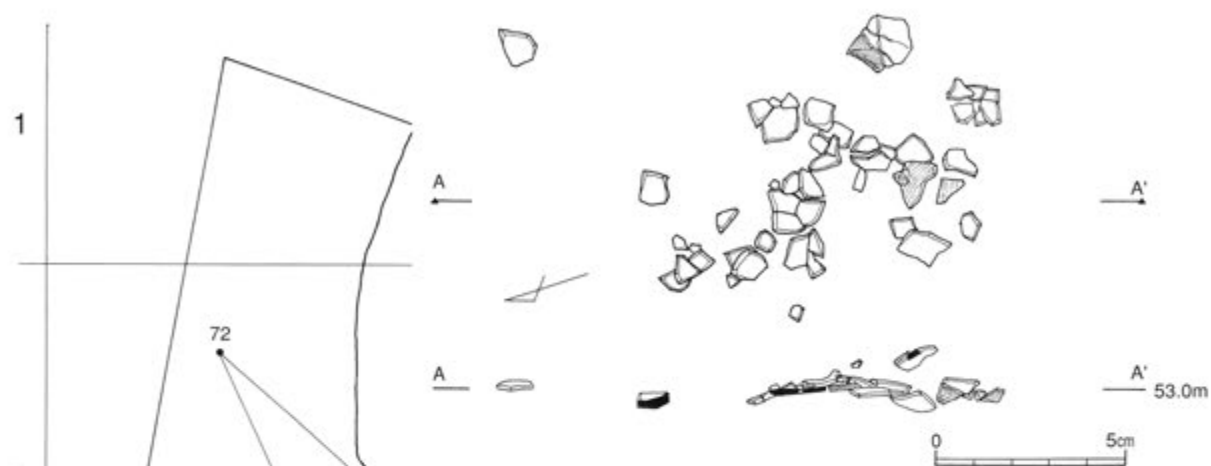
第1図 馬廻遺跡位置図 (1/25,000)



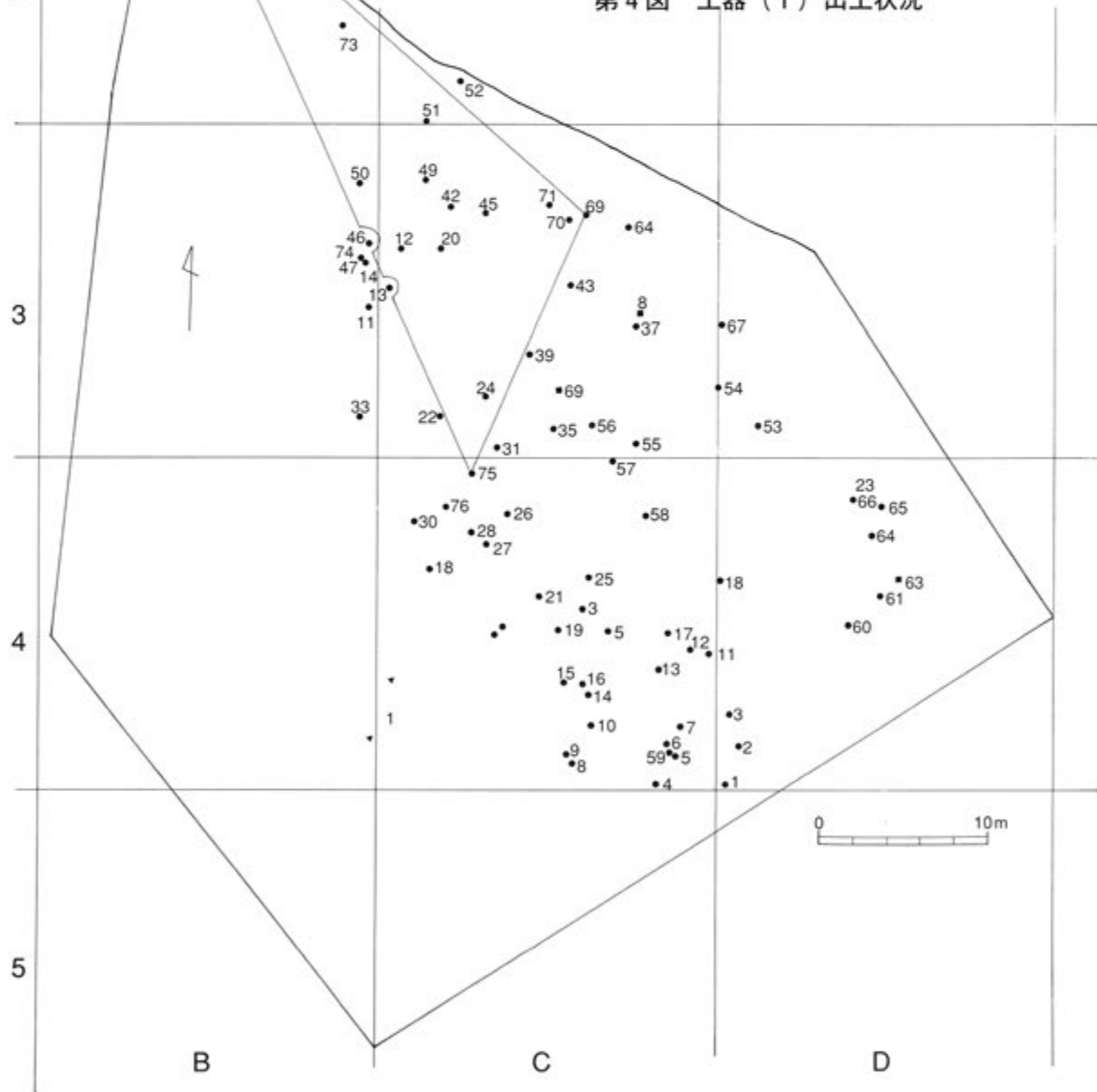
第2図 土層図



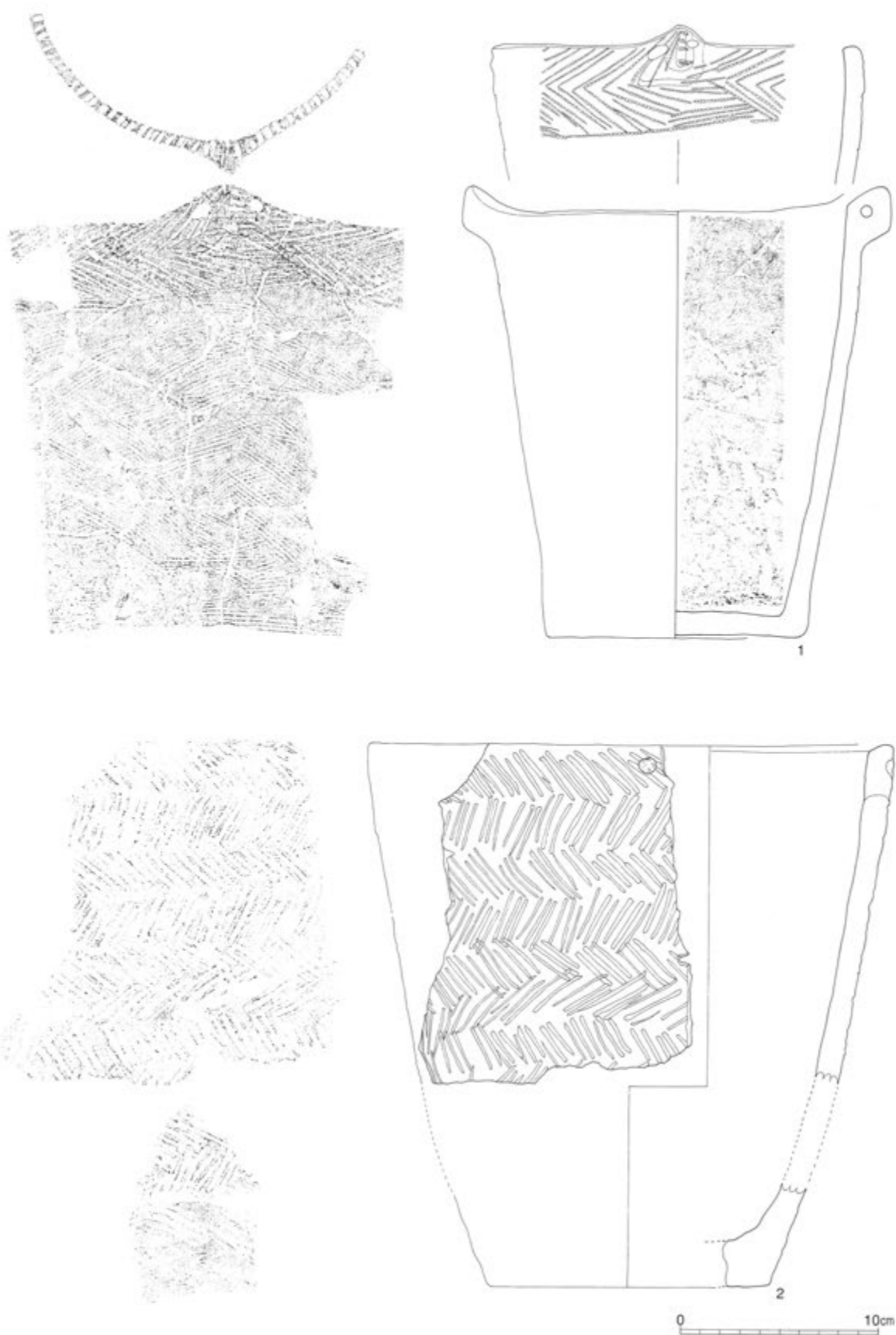
第3図 周辺地形図及びグリッド図



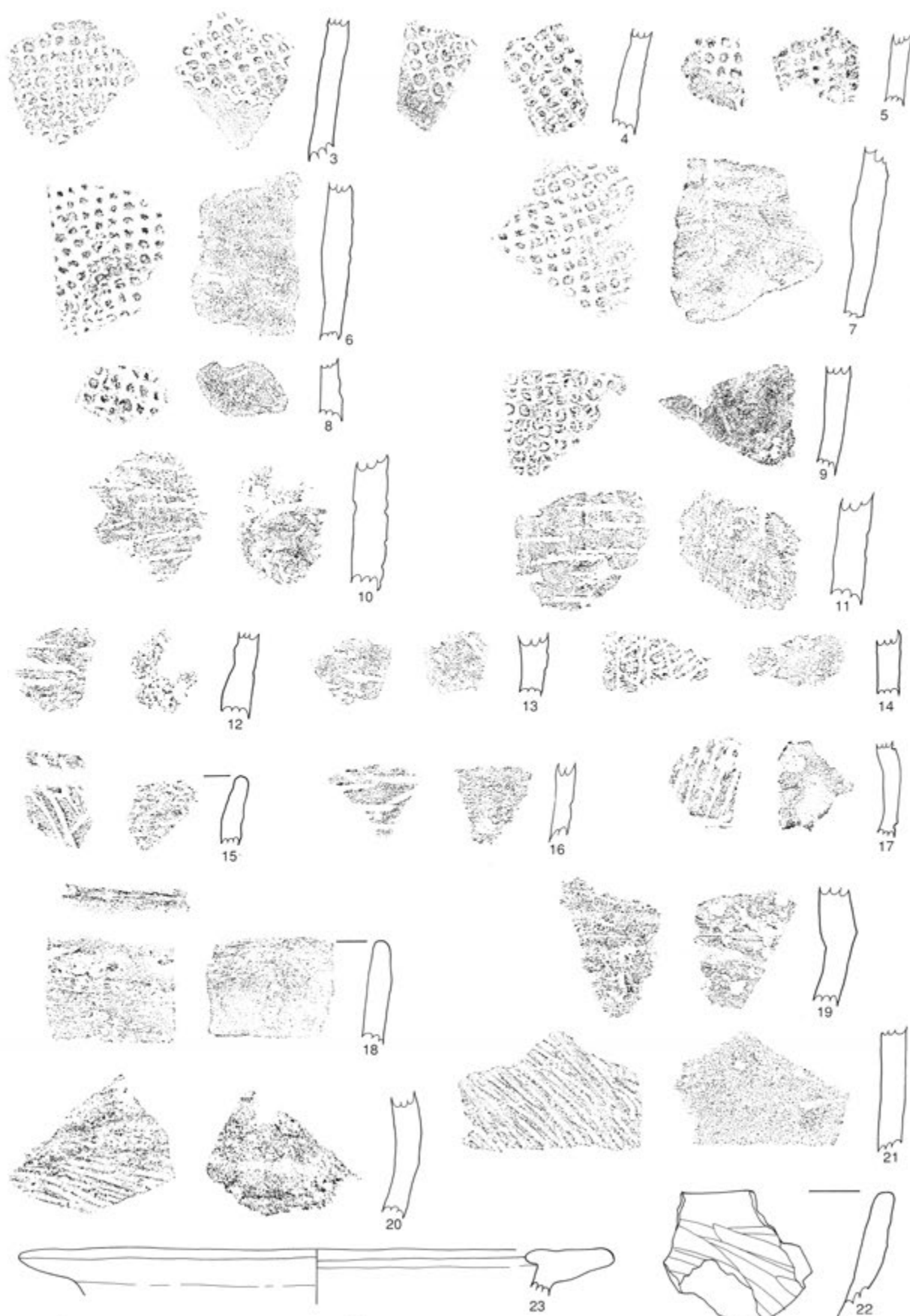
第4図 土器(1)出土状況



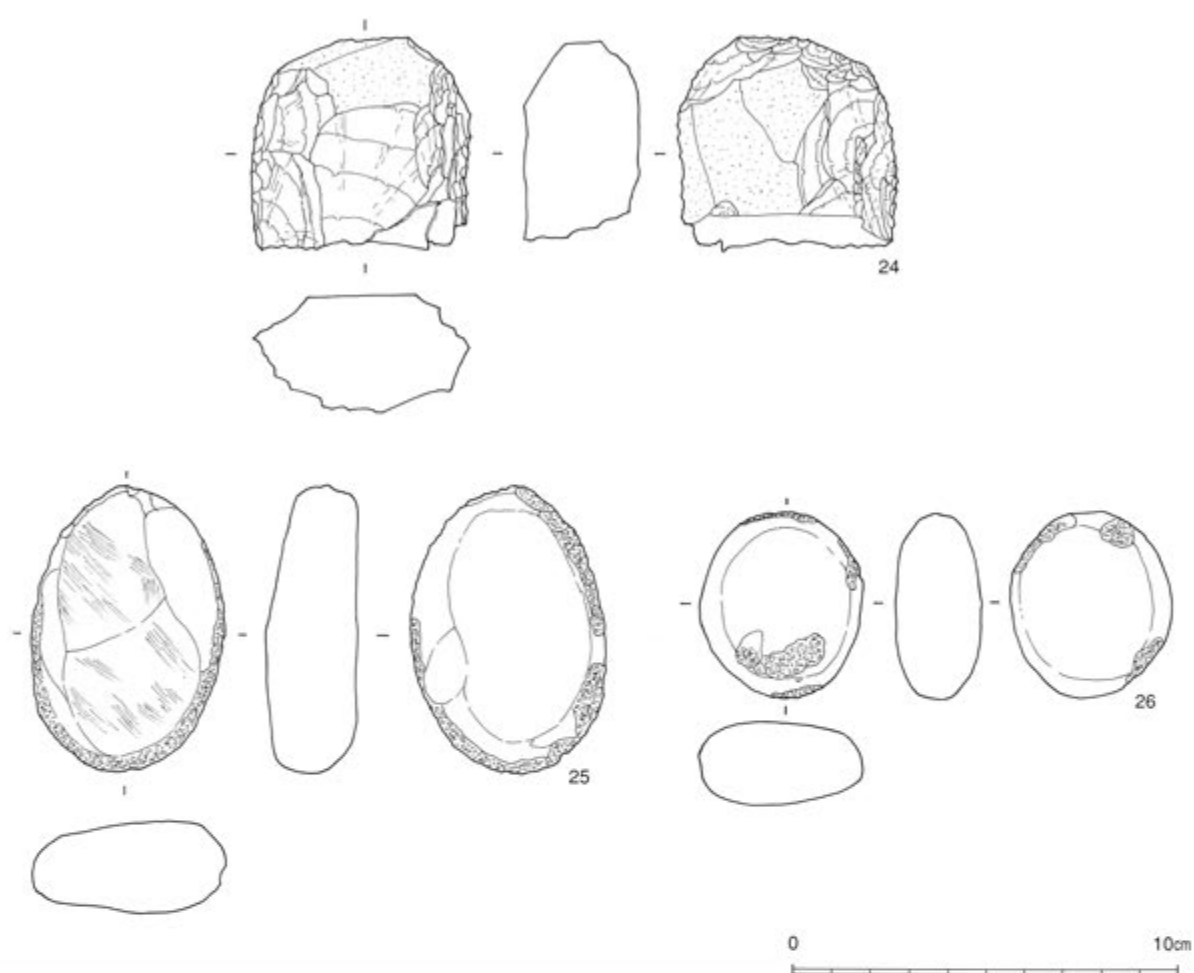
第5図 遺物出土状況



第6図 出土遺物 1



第7図 出土遺物2



第8図 出土遺物3

4 小結

馬廻遺跡はⅪ層の岩盤が露出している部分もあり、遺跡の残存は良好ではなかった。そのため遺物の出土する範囲も狭く量も少なかった。しかしながら完形になる石坂式土器やほぼ完形の桑ノ丸式土器などが出土しており、貴重な資料を得ることができた。

第Ⅸ章 三反牟田遺跡

第1節 調査概要

1 遺跡の立地及び調査概要

三反牟田遺跡は吹上町入来に所在する。平成10年度に確認調査を実施した。

遺跡は町道笠岡・今田線沿いにあり、北側の標高約70mの丘陵の裾部から幅約30mの平坦面があり、その平坦面から南側へ急傾斜し谷部（標高約30m）へと続く地形で、その平坦面に遺跡は立地している。

調査は2m×17mの南北に長いトレンチを設定して実施した。層位はⅠ層・耕作土、Ⅲa層・暗茶褐色土、Ⅲb層・黄褐色土、Ⅳ層・茶褐色土、Ⅴ層・黒褐色土、Ⅵ層・黄色火山灰（薩摩）、Ⅶ層・茶褐色粘質土、Ⅷ層・凝灰岩礫混じりの灰色粘質土に分層される。遺物包含層はⅢ層・Ⅳ層である。遺物の層位的な把握はできなかったが、縄文時代早期の前平式土器の小破片1点と縄文時代晩期・古墳時代の遺物が出土している。この遺跡の特徴的な点はチャートや頁岩の剥片が多いこと及びそれらの石材で作られた石鏃が13点も出土していることである。

2 遺構

遺構は検出されなかったが、遺物の出土状況等から石器（石鏃）製作跡ではないかと考えられる。

3 遺物（第3・4図）

トレンチ調査ではあるが出土遺物は多かった。しかしながら、チャート・玉髄などの剥片が多く図化できるものは少なかった。

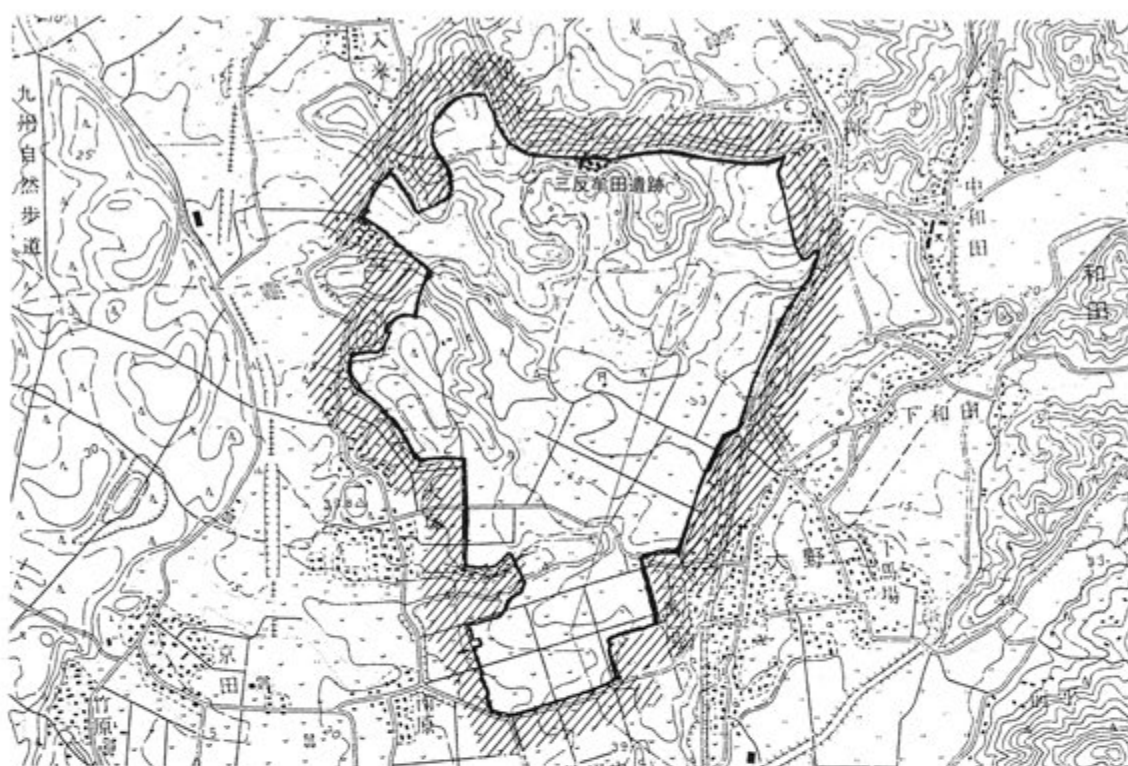
1は前平式土器で縄文早期である。2は黒色研磨の施された浅鉢で縄文時代晩期である。内外面にきめの細かいヘラミガキが施される。3～5は古墳時代の土器で、3は甕形土器の口縁部、内外面共にナデ整形が施される。4は中空の脚台を有する甕形土器の底部である。内外面共にナデ整形であるが、外面の一部に指頭押圧の痕跡も認められる。5は壺形土器の口縁部、復元口縁部径14.3cmを測る。ややしまった頸部から口縁部はわずかに外反するものである。内外面共にナデ整形が施される。6は磨石片である。全面に使用による磨痕が見られる。また、一部剥脱している。7～19は石鏃である。石材はチャート・玉髄とトレンチ内から出土している剥片と同じである。7・8は凹基式であるが挟りは浅いものである。7は肩部が張り5角形状を呈する。9～14は二等辺三角形鏃である。9は平基式、10は浅い凹基式、11～14は基部が欠損しているものである。15～17は肩部が膨らみ5角形状に近い形態である。基部はいずれも平基式に近いものである。18・19は基部が斜めになり片側縁に突起を有する特異

な形態を呈するものである。

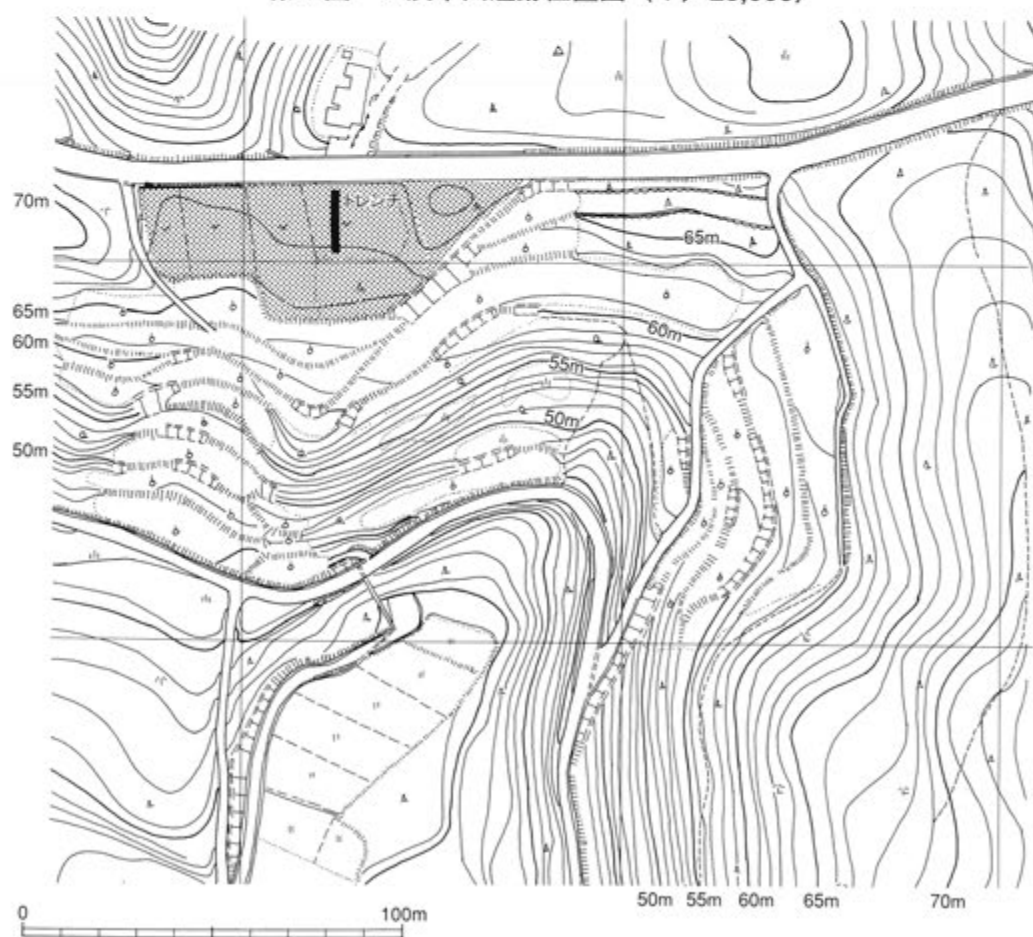
4 小結

三反牟田遺跡は、面積2,100㎡と狭い所であるが、縄文時代の石器（石鏃）製作跡ではないかと思われる状況が見られた。しかしながらトレンチ1か所だけの調査で全容は明らかにすることはできなかった。

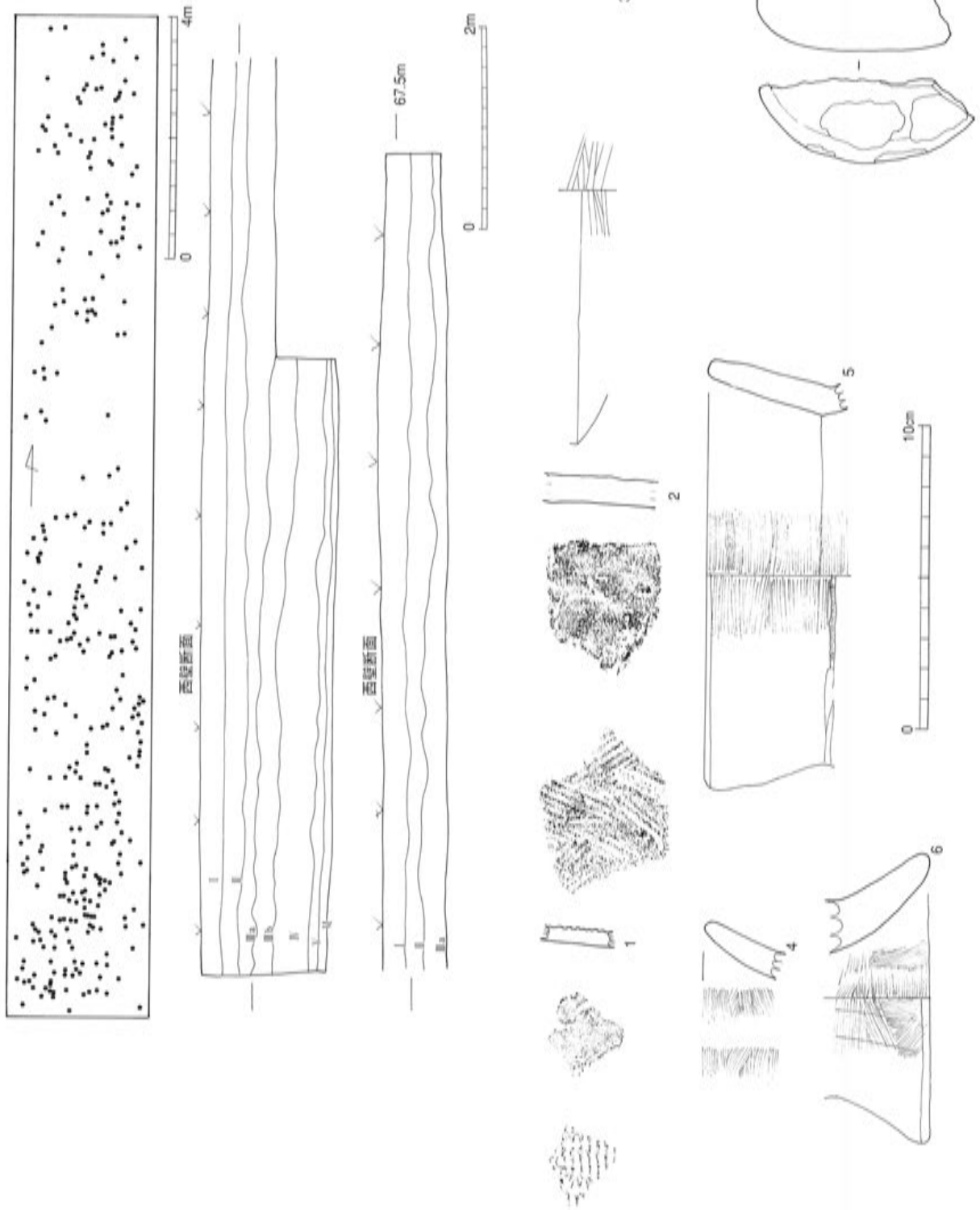
また、整備事業でも遺跡に影響が及ばないようにして周回道路が建設されたため、現状で保存されることになった。



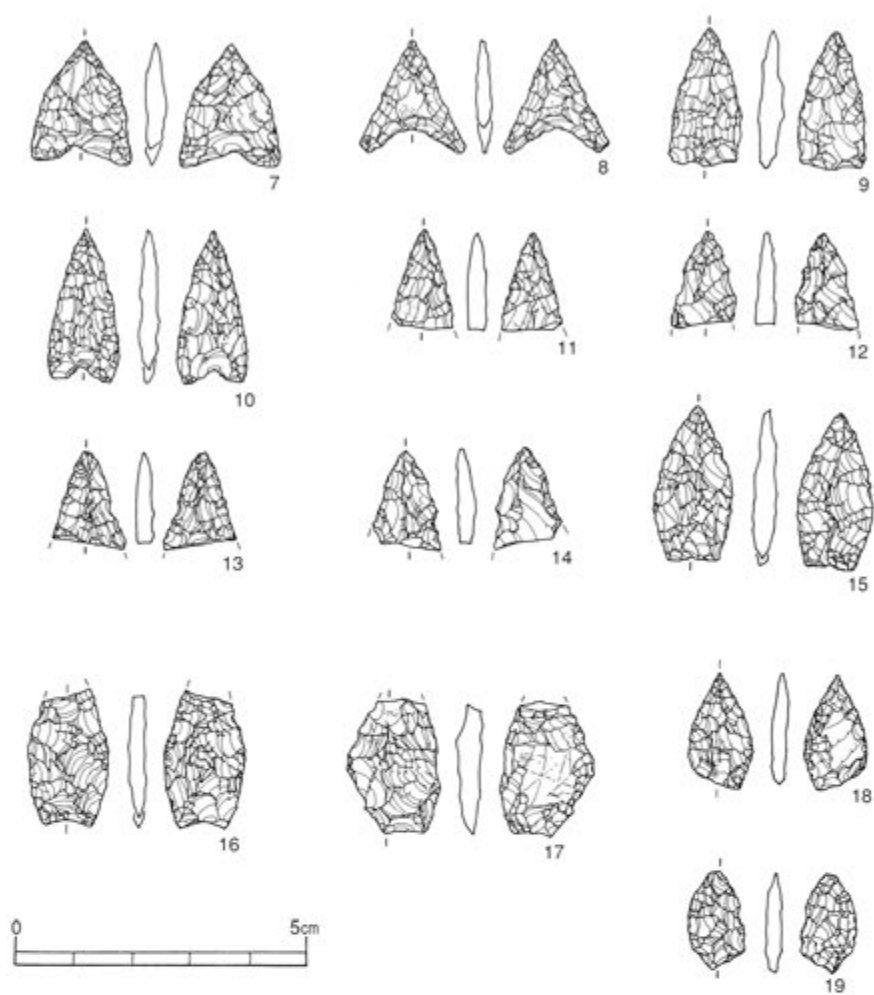
第1図 三反牟田遺跡位置図 (1/25,000)



第2図 周辺地形図及びトレンチ配置図



第3図 遺物出土状況・土層図及び出土遺物 1



第4図 出土遺物（石鏃）

鹿児島県立埋蔵文化財文化センター発掘調査報告書（83）

農業開発総合センター建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

農業開発総合センター遺跡群Ⅰ

第2分冊

（吹上小中原遺跡・馬廻遺跡・三反牟田遺跡）

発行日 平成17年3月25日

発 行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4461

鹿児島県国分市上之段1175-1
TEL（0995）48-5811

印刷所 株式会社 秀巧社印刷
〒890-0072

鹿児島県鹿児島市新栄町25-7
TEL（099）257-3300

